

くさか、くさし
くさかりがま(草刈鎌) 園草(草)を刈(刈)に用ゆる鎌(鎌)

くさし、くさな 腐
くさし(臭) (接尾) 或る語の下に附加えて容子(容子)の少しく表(表)はれてる意を示す語、假令はカビ臭し、古臭しなど、

くさの、くさび 梗
くさの(草實) 園草(草)に生ずる果實(果實)を、假令は葎(葎)の類、

くさの、くさび 梗

くさひ、くさみ 鞘、囀
くさひ(草火) 園枯れ草の焼ける火、

くさむら(藪) 園草の生へ茂(茂)つてる處
くさむすび(草結) 園不案内(不案内)の山路(山路)などを歩む時、其の道知(道知)を

くさり(鎖) 園又た鎖の字を書す、金属(金属)にて、環(環)を作り、其れを数多く、互ひに繋ぎ合せし物、

くし 櫛、髮、奇、鬘、串

(くぐし)

くし(櫛)鬘毛髮をかかして、垢(カ)を去り且つ毛を揃へるに用ゆる具にて、重にツグの木を用ゆ、又たゴムをも盛んに其材料に供(カ)す、形は種々あれども、悉く細かき齒(カ)の澤山(カ)に列べるもの、

くし、くしが

神に神の威力(カ)を借るべく祈る時に唱ふる九つの文字の事にて、即ち臨、兵、闘、者、皆、陣、列、在、前、の九字を云ふ、くし(鬘使)鬘道(カ)まはして使ふ。きびしく使(カ)ふコト、

くしが、くしは 挫、梳

くしが(串梳)鬘(カ)の皮を剝(カ)て、串に刺(カ)て干(カ)し固(カ)めた物の稱、くし(愚者)鬘(カ)愚(カ)人に同じ、くじく(挫)鬘(カ)折(カ)つてまげる、ゆがめる(勢)をそぎ取られる、

くしひ、くしや 鬘、奇、

せる、細長き刷毛(カ)のコトにて、櫛に附着(カ)せる髮垢(カ)を取り去る器具、くし(鬘)鬘(カ)鬘(カ)不思議なるコト。あやしきコトを云ふ、

くしや、くしん 袂、劍、銀

(カ)むね、五色より成り立つ、併(カ)し雌(カ)は此れに反して形小さく、尾亦た短(カ)かくして、美(カ)くしき模様なし、其の美しき凡ての羽毛には、大毒(カ)を含有(カ)す云ふ、

くしん、くすか 棹、葛、屈

くす(棹)鬘(カ)の樹に同じ、其餘を見よ、くす(葛)鬘豆に類する蔓草(カ)の名、山野に多く自生すれども、亦た人の作るコト多し、葉は圓(カ)くして、其尖(カ)はさざがり、花は小さく赤紫色(カ)を呈す、其の根より葛の粉を製す(カ)葛(カ)の粉の略語、

(くぐす)

くす(具)鬘(カ)さとのふてる(カ)そなはつて(カ)用意する、くす(具)鬘(カ)そなはらす、さのふる(カ)そるへる(カ)さもなひ伴(カ)て行く、即ち供(カ)にめしつれる、

くすき、くすれ

くすき(葛粉) 葛粉に砂糖を加え、水にて練(き)り、板(び)の如く延(の)して、蒸(じ)して固(か)めた物を、細くうごんの如くに切りたる物。
くすこ(葛粉) 葛の根に、含(つ)める汁(じ)を絞(しぼ)りて、其の水分を蒸發(じょうぱく)させて製したる、白色の粉にて、種々の食品を製すに用ひらるるもの。
くすし(醫師) 醫師者(しや)の科ト。
くすろ(葛粉) 葛粉(こ)を煉(り)りて、素麵の如くにして、干(か)したるもの。
くすたま(薬玉) 固現今は用ひれども、昔時は好んで用ひたりし、香料入の室内装飾品(しやうじ)の一、即ち頃合(ころあ)の袋に種々の香氣(けい)の高き香料を入れ、之を心(こ)とし、其の周囲(しゅうい)に種々の造花(ぞうか)を付け、其の下に五色の糸を長く垂(た)げたる物にて、室内に吊(か)けし置く。
くすぬ(葛布) 葛織物の名、葛の莖(かき)をばたきて、苧(ぞ)を爲したる物にて、織りたる布(ぬ)葛布の條を見よ。
くすぬ(窃取) 他動人の物をぬすみさる。こまかして我が物とす。

くすれ、くすや 備

くすねり(葛煉) 一種の食品、葛の粉に砂糖(さとう)を加へ、水にて練り固(か)めた物。
くすぬの(磁物) 磁物(じぶつ)したる物、盗(ぬす)み取りたる物。
くすばか(葛袴) 固くす布を用ひて、仕立(しだて)たる袴。
くすひき(葛引) 固紙の名、上等の紙に葛を引きて、巾(ぬ)を四五分ほどにして、長く爲したるもの、女の結(むす)ひたる髪(かみ)に掛るもの。
くすふ(葛布) 葛の莖(かき)を叩きて、其の縦(たて)の線(せん)のみを採(と)りて、織りたる織物、質(しつ)強くして、能く水をばちく、遠州掛川の産なりと云ふ。
くすふ(燻) 固くすはりつゝある物(ぶつ)がこけてある。
くすぼる(燻) 他動物がこけてる物(ぶつ)が燃(も)すに焼けてある。
くすまんじ(葛饅頭) 葛餅(かきもち)の中へ、餡(あん)を入れるもの。
くすむ(實直) 固實直(じつぢき)に見ゆる飾(かざり)のなき(な)く(く)置(お)し立せぬ衣服(いふく)などの色合(いろあ)ひ、華美ならぬ。
くすもち(葛餅) 固葛煉(かき)に同じ。
くすや(葛家) 固草にて茸(たけのこ)たる家根の

くすゆ、くすり 薬

くすゆ(葛湯) 固葛の粉に砂糖を加へ、熱湯(ねつとう)にて解(と)けて、ドロドロなしたる飲物(いんぶつ)。
くすり(薬) 固病氣負傷(びやうきおひやう)等を、瘡(かさ)す爲めに、飲み又は塗(ぬ)す物を云ふ。凡て人に利益(りやく)を與(あた)ふる物の科トを云ふ。陶器(たうき)に光澤(くわうさく)を表はすべく塗(ぬ)して焼くもの。烟筒(えんどう)の科トを云ふ。
くすりこ(薬子) 固昔時一月の元日に屠蘇(とそ)を第一に嘗(か)けて毒味せる童子、くすりし(薬師) 固薬を製造する人。醫士(いし)即ちくすり。
くすりひ(薬日) 固陰曆の五月五日の異稱。昔は此の日を以て、藥草(やくそう)を刈(か)しよ。此の名あり。
くすりや(薬屋) 固薬を賣る人、又は賣るくすりゆ(薬湯) 固風呂の中へ、藥劑(やくざい)を入れて、沸(わ)せしもの。
くすりいれ(薬入) 固薬を入れて置く器物。くすりなべ(薬鍋) 固薬を煎(せん)じるに用ゆる鍋(かま)。
くすりばこ(薬箱) 固薬を入れて、貯(たくわ)へ置く箱。
くすりばこ(薬籠) 固又ヤクローも讀む

くすり、くせい 曲、辭

くすり(薬) 固種々の薬を入れて、病家へ携え行く、手提(てし)カパンの如き形を爲せる箱。
くすりみせ(薬店) 固薬を賣つて家(か)のこくすりみづ(薬水) 固水薬(すいやく)などを調合するに用る、美しき真水(まみづ)。
くすりひん(薬指) 固薬を入れるびん。
くすりゆひ(薬指) 固小指(こゆび)の隣(かた)に在る指を云ふ、此の指(ゆび)の尖(か)にて、薬の味(あじ)を試(こ)より此の名あり。
くすりとびん(薬土瓶) 固薬を煎(せん)じる土瓶(つちびん)。
くすりはみがき(薬齒磨) 固薬を齒磨の中へ入れたるもの。
くすんごふ(九寸五分) 固昔(むかし)女の持ちし短刀、即ち懐劍(わいけん)、其の長さが九寸五分ほどあるより云ふ。

(くぐせ)

くせ(曲) 固接頭(けつとう)或る名詞に冠(か)らせて、其の物の正しからざる意を表はす語、即ち曲者(まが)など。
くせ(辭) 固一方にのみかたまりたる習(な)はしを云ふ。
くせい(愚甥) 固我が甥(なまこ)のコトを、他人にくすり、くせい 曲、辭
向つて云ふ謙遜語(けんそんご)。
くせい(愚生) 固自分の事を、他人に向つて云ふ代名詞、即ちせつしや、私(わたくし)。
くせい(私誓) 固佛教の語にて、人々に善(ぜん)き事を授(たま)はけるを、佛(ほとけ)が誓(ちか)はれたる科トを云ふ意。
くせいのちみ(私誓海) 固御佛の弘誓(こうせい)が海(うみ)の如く廣大なりと云ふ科トを云ひ表せる語。
くせいのふね(私誓船) 固御佛の弘誓(こうせい)のたき科トを船に、たとへて云へる語。
くせき(驅斥) 固或る悪者(あくしや)などを追ひ退(お)はせる科トを云ふ。
くせせし(辭辭) 固魂性(こんせい)の、取り分(わ)けて、ひがんであり。
くせごと(曲事) 固まがりたる事。正道(ていどう)に反したる科ト。
くせつ(苦節) 固困難に甘(あま)じて、操(あそ)びを立(た)てる科ト。
くせつ(口説) 固互ひに仲の善き者が、争(まが)ひ事をするを云ふ。
くせつ(口舌) 固云ひ争ひ、口いさかひ。
くせつ(愚説) 固拙者の意見と云ふ、謙遜(けんそん)語(ご)。
くせもの(曲者) 固わる者。あやしむべき人。胡散なる奴。

(くぐそ)

くそ(屎) 固人其の他の動物が、食物(しょくじ)を胃(い)に送りて、其の滋養分(じやうえいぶん)を取りたる、残りのかすの、肛門(こうもん)より出でたる物、即ち大便の科ト。
くそ(屎) 固接頭(けつとう)或る語の上に附けて、いやしむ意を表はす語、即ちくそ虫(くそむし)と云ふ。
くそち(愚僧) 固僧侶(そうりょ)が、自分の科トを、他人に對して云ふ謙遜語(けんそんご)おろかなる僧侶(そうりょ)と云ふ意。
くそがめ(糞瓶) 固大小便を入れるかめ。くそつぼの科ト。
くそく(愚息) 固他人に對して、我が息子(こ)の科トを云ふ謙遜語(けんそんご)。
くそく(具足) 固物事の完然(くわんぜん)に、備(そな)へてある科ト。道具(どうぐ)の科トを云ふ。まるひ鏡。
くそくし(具足師) 固鏡(かがみ)の兜(かぶと)を製作する職人。

くそく、くだ 管

くそくは(具足煮)図一種の料理、伊勢蝦(イセエビ)を甲(カ)の付たるま、輪切(リンキ)にして、甘(アミ)くコッテリを煮し物、
 くそくびつ(具足櫃)図鑑(カン)及び兜(カブト)を蔵(クラ)めて置く箱、
 くそちから(糞力)図馬鹿氣(バカキ)で強き力くそばへ(糞蠅)図虫の名、蠅の一種、形大きく色青くして、好(ヨク)んで糞(クソ)にたかるもの、
 くそぶね(糞船)図大小便を積(ツ)て運(ツ)ぶ船(フネ)不潔(クセツ)き船、
 くそぶくろ(糞袋)図胃の腑(ハツ)と、腸(チ)を云ふ俗語、
 くそむし(糞虫)図こがれ虫、
 くそん(愚孫)図自分の孫(ムコ)のコトを、他人に向つて云ふ謙遜語、
 くそん(愚存)図我れの考へ。自家の意見(イデ)自分の存(ゾ)り云ふコトを他人に向つて云ふ謙遜の言葉(コトバ)、

(くぐた)

くた(管)図圓形(マ)にして、細く且つ長く、内(ウチ)の空なるもの(マ)機(ウ)の道具、竹の細き物を二三寸の長さに切り、物糸を巻きつけて桿(ウ)の中へ入れて、緯

くた、くたし 碎、下

(マ)糸を織り爲すもの(マ)糸をつなぎて、巻き附ける物(マ)次の句駄(マ)に同じ、
 くた(句駄)図くくして、何等の役にも立ぬコトを云ひ表す語、
 くた(句題)図和歌又は漢詩中の一句を抜き取りて、和歌又は漢詩の題となして作るコト、
 くた(軀體)図からだのコト、
 くた(具體)図形の具(マ)はつてるコト(マ)物事が其の形態(マ)を爲せるコトを云ふ、
 くた(管)図糸を管に巻しものを云ふ、
 くた(狗盜)図小さな、ぬす人、即ち、こそ、ぬすこのコトを云ふ、
 くた(碎)圖動(マ)われて形を失ふ(マ)勢力(マ)のおさるえる(マ)骨を折る、つかる(マ)よわる、即ち心を碎く、
 くた(碎)圖動(マ)はして細かくなす(マ)ちく、よはらせる(マ)やわらげる(マ)心配(マ)する、骨を打る(マ)金銭をはしたに分つ、假令(マ)拾圓札をくだくなどのる(マ)る、
 くた(碎)圖くだきたるコト、又は碎(マ)きたる其の物を云ふ、
 くた(碎)圖動(マ)われる、
 くた(下)圖さげおろすコト(マ)下し薬(マ)くた(下)圖さげおろすコト(マ)下し薬(マ)

くたし、くたま

(マ)の略、即ち下劑(マ)の略、
 くたしあめ(瀉飴)圖飴に下劑(マ)地黄煎(マ)を入れたるもの、此の飴を食すれば通(マ)をよくす、
 くたしふみ(下文)圖官府より下されたる文書(マ)云ふコトにて、命令書のコトを云ふ、
 くたしをすり(下劑)圖大便の通(マ)を善(マ)く爲す薬、
 くたす(下)圖動(マ)だらせる(マ)高より低へ下しやる(マ)大便の通(マ)をよくなせる(マ)くた(管)玉(マ)図珠玉(マ)を細工(マ)せし物の一種、圓く細長き形になせる玉の中心(マ)に、孔(マ)をあけたるもの、其の孔(マ)を通過して、飾(マ)りなすもの、
 くたは(九谷)圖九谷焼の略、
 くたはやき(九谷焼)圖陶器(マ)の名、金又は赤を多く用ひたる美しき物にて、加賀の國の九谷村より産出せるもの、
 くたばり(管絃)圖絃管(マ)の使用する銀(マ)の絃、銀製の細き管の中に入れて使用するもの、
 くたひれ(草臥)圖身體を勞動(マ)させる疲(マ)れるコトを云ふ、
 くたまき(管巻)圖小虫の名、即ちタダ虫

くたも、くたり 件、下

のコト、形キリギリスに似て、其羽(マ)大にして、小さき頭より二本の細き長き角を出す、其の鳴き聲恰も糸車(マ)を廻(マ)すが如き音を出すに依り、此の名あり、
 くたもの(果物)圖樹に生ずる實(マ)の、食料となる物の總稱、
 くたらごと(百濟琴)圖樂器の名、琴の一種にて、形は稍(マ)琴に似たれども小さく、線(マ)は七條(マ)にして、琵琶の如く、撥(マ)を用ひて、彈(マ)するもの、
 くた(件)圖前に在りし事柄(マ)個條(マ)の(マ)の(マ)前に記(マ)せし個條を指して云ふ語、
 くた(下)圖くだるコト(マ)都(マ)より田舎(マ)へ行くコト(マ)下り阪(マ)の略語(マ)時間(マ)の過ぎ行きしコト、即ち子の刻下りなど、
 くた(下)圖文章の行(マ)の(マ)コト、即ち文章を記したる條(マ)の筋、
 くた(苦勞)圖甚だしく、疲(マ)れて精力の衰(マ)るふコト、
 くた(下版)圖版の下り道(マ)物事の(マ)おさるえ行く状に云ふ、
 くた(下酒)圖上方(マ)より送り來れる酒の(マ)コトを云ふ、

くた、くたし 碎、下

くた(下)圖くだるコト(マ)都(マ)より田舎(マ)へ行くコト(マ)下り阪(マ)の略語(マ)時間(マ)の過ぎ行きしコト、即ち子の刻下りなど、
 くた(下)圖文章の行(マ)の(マ)コト、即ち文章を記したる條(マ)の筋、
 くた(苦勞)圖甚だしく、疲(マ)れて精力の衰(マ)るふコト、
 くた(下版)圖版の下り道(マ)物事の(マ)おさるえ行く状に云ふ、
 くた(下酒)圖上方(マ)より送り來れる酒の(マ)コトを云ふ、

くたも、くちあ 口、鏡

くち(口)圖顔面の下方に開ひたる孔(マ)凡て動物が、体内へ食物を受け入れる所(マ)言語(マ)を發する所(マ)人の出入(マ)なす所(マ)物を出入(マ)なす所(マ)物を出入する孔(マ)物を云ふコト、即ち差出(マ)口(マ)人の數(マ)種類(マ)即ち口(マ)物をふたする栓(マ)入込む(マ)所、又は身をまかすべき所のコトを云ふ、
 くち(鏡)圖魚の名、いしもちの一名、
 くち(愚痴)圖性質の愚(マ)なるコト(マ)云ふても何んの益なきに、其れを云ひなげくコト、
 くちあい(口合)圖双方(マ)の話が、双方の心に叶(マ)ふコト(マ)落語又は地口(マ)の(マ)コト、
 くちあけ(口開)圖物の口の開くコト(マ)物の爲し初め、
 くちあそび(口遊)圖詩歌などを吟(マ)じ

くちあ、くちお

て樂(レ)しむコト ●馬鹿口(ハカ)をたきて遊ぶコト、
 くちあたり(口當) 囃飲食物を、口へ入れたる時の味(シ) ●云ふべき意見(イ)のありさま、
 くちいれ(口入) 囃奉公人(ハカ)の周旋をする ●賈買(バ) 其他の周旋をする ●甲の事を乙に傳(ツ)える、
 くちいれび(口入業) 囃奉公人などの周旋(ハカ)を爲すを、稼業とするコト、又たする人のコト、
 くちうら(口占) 囃其の云ひ出たる言葉の容子に依りて、其の心の中を察するコトを云ふ、
 くちうつし(口移) 囃我が口に在る物を、他人の口へ、口にて送り入れるコト、即ち親が小兒に、物を與ふる時など ●物事を他人に其れから其れへ云ひ傳える、
 くちあ(口繪) 囃書物の初めに挿(サ)み入れてある繪(エ)のコト、
 くちおし(口惜) 囃無念(ムネ)なり、残念(ゼン)なり、悔(カ)し、
 くちおも(口重) 囃口輕(カサ)の反對にて、話振(ハシ)の重々(オモシ)しき ●テキパキと話を爲さぬ人のコト、

くちか、くちき

くちがき(口書) 囃筆(フデ)を手に持つ代(カ)りに、口でくわえて、文字を書くコト ●人の云ひし事を、其まゝ書き取りたる文書、
 くちがる(口輕) 囃前後(サキ)の考なく、無暗(ム)に饒舌(サカ)たつるコト ●内證事を、人に話すコト ●分別(ワカ)なく、矢鱈(ツ)に饒舌(サカ)り立つるコトを云ふ、
 くちかしこし(口賢) 囃巧(カサ)みに云ひなすなり ●自由(カサ)に能く話すなり、
 くちき(朽木) 囃枯(カサ)たる木 ●くされたる木のコト、
 くちき(口利) 囄上手(カサ)に話す、巧(カサ)に物語る人 ●掛合事(カサ) 談判事などを巧みにする人、
 くちきり(口切) 囄云ひ出す ●物事を爲し始め ●秋に至りて其年の茶(カサ)を貯はえ置し、茶入の蓋(カサ)を開く、
 くちき(朽木書) 囄細き木又は細き竹(カサ)の尖(サ)を焼(カサ)て、畫(カサ)を描くコト、又は描きたる畫(カサ)を云ふ、
 くちき(朽木形) 囄染物の模様(カサ)の名にて、木の朽てボロ(カサ)に爲つた形を表したるもの、
 くちきたな(口穢) 囄口のきたなきコト ●言葉の云ひ廻しの聞き苦(カサ)しきコト

くちき、くちい

くちきたな(口穢) 囄物云ひのあしき、話し振(カサ)の荒々しき、
 くちきたけ(朽木菌) 囄菌(カサ)の名、即ち朽たる木に生ずるきのこ、
 くちく(苦竹) 囄ただけの一名、
 くちく(驅逐) 囄おふて拂(カサ)ふコト、おひちらすコト、
 くちくせ(口癖) 囄常に云ひなれて、其れが一つの癖(カサ)となれるコト、
 くちくち(口々) 囄名々(カサ)の口大勢(カサ)の口、
 くちくかん(驅逐艦) 囄軍艦の一種、其形小さく、水雷艇(カサ)より、稍(カサ)速力の早き艦(カサ)にて、速射砲を有し、敵の水雷艇を追ひやり、又は敵艦を襲(カサ)ふ時に用ひらる小形の軍艦(カサ)のコト、
 くちくすり(口薬) 囄獵銃(カサ)に用ゆる火薬(カサ)のコト、くす火、
 くちく(口車) 囄巧(カサ)みに饒舌(カサ)りて人を欺き、まよはせるコト、
 くちくかんたい(驅逐艦隊) 囄二隻以上の驅逐艦より成り立たる一艦隊の稱號、
 くちけんくわ(口喧嘩) 囄口先(カサ)で互ひに物争(カサ)ひをする、
 くちくろしや(口巧者) 囄口先(カサ)の巧きを云ふ、

人、上手(カサ)に話す人、
 くちこと(口小言) 囄ブツ(カサ)とつぶやくコト ●言葉にて叱(カサ)りさすコトを云ふ、
 くちことたへ(口答) 囄目上の人の云ふ事に従はすして、理屈(カサ)をならべたつるコト、
 くちごもり(口籠) 囄くちごもるコト、次の條を見よ、
 くちごもる(口籠) 囄自動口の中に、物を云ふてある如く、其の言葉(カサ)のはつきりせぬ ●キバツリと答辯(カサ)出来ぬ ●くちぎ(口座) 囄區別のなしたる其々の(カサ)の場處 ●簿記(カサ)の原簿(カサ)に區別を設(カサ)けたる個所、假令貯金口座(カサ)などなるもの、
 くちぎ(口先) 囄口の先(カサ) ●言行(カサ)の一致せざる言葉(カサ)、即ち云ふても行はぬ事を、言葉をかざりて云ひ立つるコト、
 くちぎかし(口賢) 囄口先(カサ)のみ體裁(カサ)よし ●云ひ廻(カサ)し巧(カサ)なり ●言葉遣(カサ)上手(カサ)なり、
 くちぎがなし(口性無) 囄あしさまに云ひなす、くちきたなくあり、
 くちしほ(口鹽) 囄魚肉等の切り身の、其

くちし、くちし

の切りたる口へ、鹽を爲すコトを云ふ、
 くちじやちづ(口上手) 囄物云ひの巧(カサ)なるコト、話し振の器用(カサ)なるコトを云ふ、
 くちしやみせん(口三味線) 囄口にて、三味線の調子(カサ)を、云ひ出すコト、口で三味線のまねをする、
 くちすき(口過) 囄くらし向(カサ)、世渡り、なりわひのコト、
 くちすきむ(口吟) 囄くちづさびたるコト 次の條を見よ、
 くちすきむ(口吟) 囄動心に感じ、又は浮(カサ)びたるコトを、其まゝ詩歌又は俳句(カサ)などに作る ●精神の爽快(カサ)にして、陽氣(カサ)なるまゝに、詩歌などを吟(カサ)ふ、
 くちすすき(口滌) 囄又は口嗽(カサ)書(カサ)く、水又は薬などにて、口を洗ひきよむ即ちうがひする、
 くちだし(口出) 囄他人と他人と談話(カサ)の最中(カサ)に、横合より話(カサ)しかけるコト ●他人と他人が談判(カサ)を爲し居る事に付き、横合より彼是(カサ)云ひ出るコト、
 くちつぎ(口付) 囄物の云ひぶり ●口の有(カサ)くちつく(口付) 囄動(カサ)より、云ひ

くちつ、くちな

なれる、
 くちつぎ(口附) 囄口取(カサ)の ●と同じ、其の條を見よ、
 くちづたえ(口傳) 囄口づてのコト、人よりに物事を話し知らせる、
 くちづつみ(口鼓) 囄舌打(カサ)をするコト ●口笛を吹(カサ)くコト、
 くちど(口疾) 囄言葉の云ひ廻(カサ)の早きコト、即ちはやいコト、
 くちどめ(口止) 囄他人に漏(カサ)らすなと云ひ聞(カサ)すコト ●他人に漏(カサ)らすなにして呉るなと、頼む爲めに與(カサ)ふる金錢の口、
 くちとり(口取) 囄牛馬の口を取りて、伴(カサ)れ行くコト、又は其の人、即ち馬丁(カサ)牛方(カサ)の口 ●口取者(カサ)の略 ●茶菓子のコト、
 くちとりさかぬ(口取肴) 囄料理の一種、魚類(カサ)及び野菜(カサ)物などを甘(カサ)く煮きて盛り合せたる物 ●茶の相手に食ふ菓子(カサ)のコトを云ふ、
 くちなし(口掩) 囄木の名、高さ一丈二三尺に達す、葉は巾(カサ)廣く長くして厚く且つ強(カサ)し、夏は白き六瓣(カサ)の花を咲く、花に香氣(カサ)あり、其實(カサ)は、六角形を爲し、熟(カサ)すれば其の色黄(カサ)

くちな、くちは

くちなは(蛇) 困虫の名、へび、
くちなれ(口慣) 困くちぐせのコト、
くちなほし(口直) 困薬(くぢ)などの味、味(じ) 悪しき物を食したる後に、味の好き物(じ)を食(じ)ふコト、
くちならし(口馴) 困くちならすコト、次の條を見よ、
くちならす(口馴) 困馴云ひなれるやうに、
くちなぐさみ(口慰) 困徒然(くぢ)の餘りに面白(じ)き話をしたり、又は菓子などを食ふコト、
くちなま(口拔) 困場(じ)などの栓(じ)を抜(じ)るコト、
くちなは(口端) 困世間(くぢ)人の噂(じ)例(じ)ば口の端(じ)にかゝるなど、
くちな(口虎) 困俗語にて、恐(じ)ろしき言葉道(くぢ)のコトを云ふ、
くちな(朽葉) 困かれ葉(じ)かれてくされたる葉のコトを云ふ、
くちなし(嘴) 困鳥の口の、上下の端(じ)を轉じて物を云ふコト、即ち嘴を入れるなど、
くちなた(口端) 困口のそば、
くちはは(口幅) 困口の廣さ、思ひ切(くぢ)たる事を云ふコト、

くちは、くちま

くちはみ(蜃) 困毒虫の名、まむし、
くちはいろ(朽葉色) 困染色(くぢ)の名、赤味(じ)を帯たる黄色(くぢ)、
くちばし(口走) 困動他言(くぢ)して悪き事を思(じ)はす、しやべる、
くちひ(口火) 困小銃の火蓋(くぢ)に、導(じ)きく火(じ)物事を爲す、手引(じ)のコト、
くちひる(唇) 困人の口の上下(くぢ)の薄き膜(じ)の部(じ)、
くちひよりし(口拍子) 困口にて調子(くぢ)を合すコト、
くちふえ(口笛) 困口をつぼめて、笛の如くに鳴すコト、
くちふで(朽筆) 困ちびりたる筆(じ)使ひ古(じ)したる筆のコト、
くちふさき(口塞) 困口をぬすするコト、
くちべ(口紅) 困唇(くぢ)へ紅(じ)を塗(じ)るコト、轉じて器物などの様(じ)へ、紅を塗(じ)りたるコト、
くちへん(口返答) 困口ごたえをするコトを云ふ、
くちまい(口米) 困俵より、米(じ)にして、取りし米(じ)俵へ一分(じ)か二分(じ)か餘分(くぢ)に入れ置し米、假令(じ)五斗

くちま、くちゆ

俵(じ)なれば五合(じ)か、一升(じ)か餘分(じ)に入れたる米のコト、
くちま(口眞似) 困人の云ひたる言葉を其のまま(じ)に云ひ返(じ)すコト、「ぶり、くちまへ(口前) 困話(くぢ)の仕方、云ひつゝ、くちまめ(口忠) 困ベラベラ言、能く物を云ふコト、
くちまかせ(口任) 困口から出まかせに、饒舌(じ)するコト、即ち無責任(くぢ)のコトを云ふコト、
くちめ(朽目) 困木の枯れて、くされたる部分(くぢ)、
くちもと(口許) 困又た口元(じ)も書く、口のそば(じ)口の有様(くぢ)入り口のそば(じ)のコトを云ふ、
くちやち(區長) 困區役所の事務を總括(じ)する上役(くぢ)北海道、琉球に於ける各區の長官、
くちやかまし(口噓) 困無暗(くぢ)にしやべり立てる、一寸(じ)した事をやかましく云ふ、
くちゆ(苦衷) 困切(くぢ)なる心の中(じ)苦(じ)しき思(じ)のコトを云ふ、
くちゆ(愚思) 困ばか親切(くぢ)、前後(じ)見ずに親切なるコト、
くちゆ(愚衷) 困自己の切(くぢ)なる心を

他人に對して謙遜(くぢ)て云ふ言葉、
くちゆうざら(驅蟲劑) 困總て寄生虫及び害虫を殺(じ)す薬のコトを云ふ、
くちよ(驅除) 困おひのける、かりたやすコトを云ふ、
くちよく(愚直) 困馬馬正直(くぢ)、阿房律義(くぢ)のコトを云ふ、
くちよせ(口寄) 困巫女(くぢ)が死したる人の靈(じ)を招き、自分が死者の代(くぢ)りとして、死者の思ふ事を、述(じ)る云ふコトを云ふ、
くちよごし(口汚) 困食(じ)物又は飲物の十分に無きコトを云ふ、轉じて、人に飲食物を借(じ)めるときに、謙遜(くぢ)して云ふ語(じ)の悪しき食物のコト、
くちざし(鯨尺) 困織物の長さを計る時に用ゆる尺(じ)、其一尺は曲尺(くぢ)の一尺二寸に當る、
くちらじ(鯨汁) 困一種の料理、鯨の皮(じ)の下(じ)の脂肪(くぢ)、干し堅(じ)めたる物を、細かく切つて、入れたる味噌汁(じ)、
くちらとり(鯨捕) 困鯨を捕ふるコトを云ふ、
くちらぶね(鯨船) 困鯨を捕(じ)ふる時に使用する船、
くちりこち(口惻怛) 困口上手(くぢ)のコト

くちわき(口吻) 困口の兩方のあたり(じ)物の云ひつぶり、
くちわけ(口分) 困部類に依りて、物事を區別するコト、物(じ)を分(じ)ち與へるコトを云ふ、
くちわる(口惡) 困わる口、又は惡口(じ)をき(じ)つ(風) 困體(じ)を前へ曲げる、即ちかむ(じ)總て物の前へ折(じ)まがつてるコト、へりくたる、恐れ入る、從(じ)がふ、
くち(威力) 困等の爲めに残念ながら、據(じ)處なく從ふ、即ち屈服(くぢ)す風從す、
くち(備) 困こわくしてかたきコト、つらきコト、もさる、そむく、
くち(掘) 困土を取り除(じ)きて穴(じ)を穿(じ)るコト、即ちほる、土を取り除きて内の物を出す、即ちあばくコト、無なる、つくる、
くち(堀) 困地面をほり穿(じ)つコト、又は掘り穿ちたるもの、ほり、
くち(幅) 困山などの高くそびへてる状態(じ)のコトを云ふ語、
くち(軟) 困早きコト、速かなるコト、俄

くち(心) 困風の起(じ)りて物を飛ばす状を云ふ、
くち(語) 困かむでる、まがつてる、ちむでる、風從する、問(じ)ひ詰(じ)る類(じ)りさ問(じ)ふ、非常(じ)に嬉(じ)しがつてる状態(じ)を云ふ、
くち(靴) 困沓及び履の字をも用ゆる、足に穿く一種のはき物、多くは革(じ)にて作らる、種類多し、
くち(屑) 困物の中より、善き物のみ選(じ)び取りて、其の後に残りし物(じ)凡て物の細(じ)かくなりて、役に立なくなりし物、
くち(朽) 困木又は草のかれて弱(じ)くなる、おさる、くされゆく、
くち(愚圖) 困俗語にて愚なるコト、性質のいぶくして、物の役(じ)にたたぬコト、
くち(屑) 困善き糸のみを選(じ)び取りたる、其の後の糸(じ)屑(じ)になりたる糸、
くち(いと) 困(屑) 困屑物の精糸(じ)にて織りたる絹織物、
くち(苦痛) 困くるしみ、せつなき、なやみ、精神を満足(じ)させぬ感情(くぢ)のコト、
くち(弘通) 困佛教の語にて、其の教を

くつか、くつし 履崩

世にひろく敷(シ)と云ふ意、
くつがた(靴型) 図靴の恰好(カウツ)を、木に
て作りたる物、靴を製すに用ゆる一種
の道具、

くつがみ(屑紙) 図かみくづ、
くつがへす(覆) 図靴ひつくりがへす(カ)
をす、こかす(破)りて、メチャ(カ)にす
⑤ほろぼしてしまふ、

くつがへる(覆) 図靴ひつくりがへる(カ)
をれる、こける(亡)びる、メチャ(カ)
チャに爲る、

くつぎ(幅起) 図山などの、高く起つて
コトを云ふ(土地)の俄(カ)に高く
なりし事を云ふ、

くつこ(口籠) 図牛又は馬の、人を咬(カ)
爲に、其の口へ箆(カ)て置く籠(カ)、

くつし(屈指) 図指を折りて敷えること云ふ
コト(轉)じて多くの中より、敷(カ)える
ほどより無い、すぐれてあること云ふコ
ト、

くつし(靴師) 図靴を製造する人靴を直
くつし(崩) 図くづすコト、くづしたる物
⑤借金(カ)を月賦(カ)又は年賦等に
て、返すコトを云ふ、

くつし(靴敷) 図足の底(カ)の冷(カ)ぬ爲
めに、靴の中へ敷く靴底の形になせし
む、

くつぶく(屈伏) 図相手の勢力に恐れ入り
て、餘儀(カ)なく従ふ、

くつべら(靴籠) 図半靴を穿く時に用ゆる
巾(カ)の廣き籠(カ)の如きもの、之(カ)を
きびす(當)めて穿けば、容易(カ)く足
が靴へ入る、

くつみがき(靴磨) 図靴に靴墨(カ)を塗り
刷毛(カ)で擦(カ)りて、光澤(カ)を出すコ
トを云ふ、即ち靴の掃事、

くづもの(屑物) 図凡て屑と爲つたる物
不用となり物の總稱、

くづる(類) 図動(カ)だける(カ)おさる(カ)える(カ)
悪くなる(カ)集合などの濟(カ)て、人々の
バラバラになる、

くづや(屑屋) 図紙屑(カ)又はボロの類を
買(カ)ひ又は賣る家のコト、

くつわ(響) 図馬具の一種、馬の口に箆(カ)
る金屬(カ)にて、造(カ)られたる物、其
の形種々あり、此れにタヅナを附けて、
馬をあやつる、

くつわ(亡八) 図又た忘八とも書す、昔時
(カ)遊廓の町を、十文字に作りたるよ
り、出たる語にて、女郎屋の主人のコト
を云ふ、又た單に色町(カ)のコトを云
くつふ、くつわ 類、響

くつし、くつせ 風崩

一種の毛織物、
くつした(靴下) 図靴を穿(カ)し時に、足を入
れる毛織物、又はメリヤスの足袋(カ)の
コトを云ふ、

くつしん(風伸) 図のび、かがみ、
くつしがき(崩書) 図漢字の字畫を省(カ)
きて書くコト、又は書きたる文字(カ)草
書の書跡にて、書きたる文字又は書く
コト、

くつじよく(屈辱) 図恥(カ)をかかされる
はづかしめられる、

くつす(屈) 図動(カ)がむ、ゆがむ(カ)したが
ふ(カ)ゆきつまる(カ)精神の爽(カ)かなら
ぬ(カ)陰氣(カ)になる、

くつす(風) 図動(カ)がめる、かがめる(カ)無
理に從(カ)がはさす(カ)おさへつける(カ)無
閉口(カ)させる(カ)ちぢめさす(カ)おさへ
つける、

くつす(崩) 図動(カ)わす、そのふ(カ)碎(カ)
きて細(カ)かくす(カ)ささのふてる物を
亂(カ)す、揃(カ)ふてる物を悪くす(カ)敵
陣(カ)を破る(カ)漢字の畫(カ)を略する
くつす(靴墨) 図靴に塗(カ)りて、黒き光澤
(カ)を出すに用ゆる一種の煉墨、

くつせつ(屈折) 図おれまがる、おれか
むのゆがむ、

くつわたすけ(響助) 図響の先(カ)に、プラ
下けて置く飾(カ)、重に赤の絹糸を用
ひ、ふさ(カ)房(カ)をなせる物、

くつわむし(響蟲) 図虫の名、キリギリス
の一種にて、軀は緑色と黄色とより爲
り、足は頗(カ)る長くして、能く走り、
能く跳(カ)る、秋に至りて響の觸(カ)れ
合ふ如き聲を出して、喧(カ)ましく鳴く
(カ)ぐて

くつて(漱) 図水草などの生じてゐる、低き
沼(カ)の土地を云ふ、

くつてい(愚弟) 図我の弟(カ)の事を、他人
に對して云ふ謙遜語、

くつてち(口調) 図言葉の調子(カ)、物の云
ひつぶり、言葉遣(カ)の容子、

くつてち(九條) 図九つの色の異なりたる絹
布(カ)にて、製したる袷(カ)、

くつてん(愚姪) 図我れのおひ、又はめいの
コトを、他人に對(カ)して云ふ謙遜語、

くつてん(句點) 図文章の切れ目に、其の印
(カ)として附けるチヨボのコトを云ふ
くでん(功田) 図昔時(カ)功勞(カ)ありし
人に、朝廷(カ)より賜(カ)はりし田地(カ)

くつわ、くつてん 漱

くつそ、くつひ

くつそ(靴底) 図靴のそ、
くつたく(風託) 図氣に掛(カ)りて心配(カ)
びするコト(カ)疲(カ)れて飽(カ)が生ずる
コトを云ふ、

くつたひ(靴足袋) 図靴下に同じ、
くつづれ(靴摩) 図靴を穿きて、革(カ)にて
足のすりむけたるコト、

くつくり(靴造) 図靴を製造(カ)する職
くつなほし(靴直) 図靴の損(カ)じたる物
を、修繕(カ)する職工のコト、

くつぬま(靴拭) 図靴(カ)の底(カ)に附き
し泥(カ)をすり落す具にて、多くは棕櫚
(カ)の如き粗雜にして、且つ強き物を
用ひて、長方形の小さき敷物の如くに、
造(カ)られたるもの、室の入口(カ)に掛
(カ)置く、

くつぬき(香脱) 図家の入口(カ)に在る、
下駄(カ)などを脱(カ)ささる、

くつぬき(香脱石) 図揚り口又は椽先
(カ)などに、履物(カ)を脱(カ)ひて置く
爲めに掛(カ)ある石、

くつばけ(靴刷毛) 図靴の塵(カ)を去り、
又は研(カ)くに用ひるハケ、

くつひき(香引) 図又た臥機とも書く、機
(カ)に附られてある麻繩(カ)、之を足に
掛(カ)て引きて、アゼをあける用をなさ
むのゆがむ、

くつてん(口傳) 図言葉にて物事を人に傳へ
るコト、

くつてん(苦土) 図白色の粉(カ)にて、化学上
て云ふ、酸化マグネシウム(カ)のコト、

くつてん(曲突) 図竈(カ)の後の方に、煙(カ)
を出すべく穿(カ)られてある孔のコト
⑤轉じてかまごの口、

くつてん(愚罵) 図智恵(カ)の劣(カ)りたる愚(カ)
なるコトを云ふ、

くつてん(句讀) 図文章の一句一句の、句切
(カ)のコトを云ふ、

くつてん(狗偷) 図ぬす人、物を取る奴、
くつてん(功德) 図善行(カ)なる行(カ)の徳
(カ)が、他人に及ぼして、他人に徳を興
(カ)ゆるを云ふ、

くつてん(口説) 図動(カ)ひつこく繰(カ)かへし
て云ふ(カ)無理失理(カ)に承諾(カ)さす
くつてん(口説歌) 図賤(カ)しき俗曲(カ)
(カ)中の、なめやかなる文句を、鼻唄(カ)
にて歌ふもの、

くつてん(口説立) 図動(カ)やましく云ふ
口説(カ)き初める。さきたてる。ひつこ
く云ふ、

くつてん、くつき 五四七

くさし、くに 諱、國

くどし(諱) 國うるさし、ひつこし、
くどつ(驅突) 國馬を勢猛(マ)く飛して、敵
中へ(陣)り込むコト、
をどん(愚鈍) 國おるか、ばか、智識(チ)の
足りぬ、智惠(チ)のなきコト、

(くぐな)

くなし(苦無) 國苦勞のなき、心配のなき、
のんきななる、
くなし(苦惱) 國苦(ク)しみ、なやむ、甚だ
しく難義(ナ)するコト、
くなん(苦難) 國苦しむコト。難澁(ナ)す
るコト。困(ク)るコト、
くないしやち(宮内省) 國宮内大臣の指押
監督の下に在りて、宮中の凡ての事務、
及び御調度(チ)等の事を整理する官
府、
くないくわん(宮内官) 國宮内省に、仕(シ)
ふる官吏のコト、 「上官」、
くないたいじん(宮内大臣) 國宮内省の最
上、

(くぐに)

くた(國) 國國家、國土(チ)便宜(チ)上火別
したる一部の稱、即ち攝津國や武藏國

くにお、くにふ

なご(昔) 昔時に大小名(チ)の知行所(チ)
を云ふ(他) 他地方に在りて、己れの生
れし地方のコトを云ふ、即ちふるさと、
くにおや(國親) 國天皇陛下の御双親(チ)
の御事を申し奉る語、
くはから(國柄) 國其の國の成り立つてる
状態(チ)のコトを云ふ、國体(チ)に同
じ、

くはが(國管) 國徳川時代に、大名の領
地を、取り替られしコトを云ふ、
くはに(國) 國國又た國、即ち各國の
コト、
くはことば(國言葉) 國田舎(チ)の言葉の
コト、即ち國なまり、
くはさかみ(國境) 國國と國との境目(チ)
くにたみ(國民) 國國と人民、
くはづめ(國詰) 國徳川時代に、大小名
其の領國(チ)に居るコトを云ふ、
くはなまり(國訛) 國其の土地にて、特(チ)
に用ひられつゝある、正しからぬ言語、
くはらひ(國拂) 國昔時武士に科(チ)し
たる刑罰の一、其の國に住居するコト
を、禁(チ)せるを云ふ、
くはふ(口入) 國物事の周旋(チ)を爲すコ
ト、即ちくちいれ(公事訴訟(チ))のコ
ト、

くにふ、くぬき 陸、櫛

くにふみ(國文) 國我が國の文字にて書き
たる文書(チ) 昔時諸國より貢物(チ)
(チ)に添て、送りたる書類(チ)、
くにもち(國持) 國昔時 大名(チ)の國
以上の領地を、有(チ)てたコトを云ふ
くにもの(國者) 國都人(チ)に對しての
稱にて、田舎者(チ)、
くにめどり(國巡) 國國々を其から其へま
巡(チ)り歩くコト、
くにん(公人) 國昔時公文所に勤めてゐた
小役人のコト 朝廷の雜用を辨(チ)す
る小役人のコト、
くにん(宮人) 國宮中に仕ふる女官。大宮
人(チ)のコトを云ふ、

(くぐぬ)

くぬが(陸) 國くが、即ち陸地(チ)、
くぬき(櫛) 國又た櫛の字を書く、木の名
葉(チ)は栗(チ)に似(チ)て、稍や細長く、其
の周圍(チ)に、細かき刺(チ)あり、高さ
二丈より三丈に達(チ)する大木にて、其
の花も亦た栗の如く、白く小さくして、
穗形(チ)を爲す、其の實(チ)は圓く黒く
大なる黑豆(チ)の如し、即ち所謂(チ)
ごんぐりにて、其の木材(チ)は、重(チ)

に上等の炭(チ)に焼き、又は上等の薪(チ)
を云ふ、 「を云ふ」、
くぬち(國中) 國くにちゆう。 國內のコト

(くぐね)

くぬくぬし(曲曲) 國正しからずあり。ま
がつてるなり(性根(チ))よろしからず
あり、
くぬり(曲) 國又た紆曲(チ)も書く、ウネウ
ネさまがつてるコト、
くぬる(曲) 國、こまかく折れまがる(性
質(チ))のすれくるしき、即ち根性(チ)
のひがむ(す)れる。意地(チ)のわるき、
くぬんぼ(九年母) 國木の名、櫛(チ)の一
種にて、其の葉亦た長し、其の果實(チ)
は、密柑に等しけれども、皮、厚くして
味(チ)は酸(チ)く、且つ甘(チ)し、

(くぐの)

くぬき(櫛) 國木の名、クヌギに同じ、
くぬち(苦惱) 國くるしみなやむ、
くぬめ(五目) 國俗語、博奕(チ)に用ゆる
の目、五點(チ)のコトを云ふ、
くぬえち(薰衣香) 國香料の一種、専ら
くぬち、くぬえ、曲、櫛

衣服に、香氣(チ)をうつし有(チ)せるに
用ゆるもの、

(くぐは)

くは(桑) 國木の名、葉は木櫛(チ)に似て、
草色(チ)を爲したる大なる物、春葉に
先(チ)だちて花を咲(チ)せて實(チ)を結
ぶ、實は葎(チ)の如き物にて、甘く食ふ
べし、葉は蠶(チ)の食料として、大切な
るもの、木材は上等の器具を製するに
用ひられる、
くは(鎌) 國農具(チ)の一種、其の頭(チ)
を、鐵にて扁(チ)たく作り、其の先(チ)
を薄くし、及な付け、長き柄(チ)を附た
る物、土を掘る用を爲す物、
くは(此者) 國此ればさ云ふ意を強く早く
云ひ表はす時に用ゆる語、
くはいろ(桑色) 國色合の名、薄き黄色の
コトを云ふ、
くはち(公方) 國朝廷の御事。皇族の御事
を申す(昔時) 將軍のコトを云ひし稱
(チ)、
くはち(苦飽) 國草の名、ひきこ、ひやうた
んのコトを云ふ、
くはえ(加) 國くはえるコト(まし増(チ))

くは、くはえ、桑、鎌、加

すコト(儀式(チ))上の酒席(チ)に用ゆる
器具の名、即ち銚子(チ)に酒を差し
加(チ)える爲めに、酒を入れて置く器物
(チ)、水指(チ)の如き形をせるもの、
くはがた(櫛形) 國兜(チ)の附屬品にて、
即ち兜のマザシの部(チ)より、角(チ)の
生じてる如く、左右より二本出てるも
の、其の櫛の如くなるより此名あり、
くはく(置歩) 國なでしこのコト、
くはく(苦壁) 國きはだのコト、尙ほきは
だの條を見られよ、

くはこ(桑子) 國蠶(チ)の一名、
くはこぶ(桑瘤) 國桑の木に、生ずる玉子
大の瘤(チ)の如き物を云ふ、
くはぎけ(桑酒) 國丹波の國八木地方より
製出する一種の酒、味淋(チ)の如き物、
桑の實より製せる物にて、香氣ある強
き味淋の如きもの、 「なり」、
くはし(詳) 國こまやかしき、つまびらか
くはし(委) 國前條に同じ、
くはし(細) 國美しくあり。細かくあり、
くはしめ(細女) 國美しき女。やさしき女
子のコトを云ふ、
くはしほちたるのくに(細矛千足) 國
我が日本國のコトを賞(チ)えて云ふ語、
くはずせらひ(不食嫌) 國食つて試(チ)た
くはか、くはす、詳、委、細、五四九

くはか、くはす、詳、委、細、五四九

企、衝、配

事なき辯(シ)に、其の物を嫌(サ)ひなり云ふコト、

くはた(桑田)罔桑の樹の植(シ)られてある田地、即ち桑畑(カサタ)。

くはそめ(桑染)罔薄黄色(カサタ)に染めし色、

くはたつ(企)罔動考へ出す、工夫し出す計畫(カサタ)する、

くはたて(企)罔くはだつるコト、もくろむコト、

くはちや(桑茶)罔桑の葉を茶の如くに製したるもの、煎(シ)じて飲料とす、

くはつみ(桑摘)罔桑の木を葉を、摘み取るコト、

くはのかど(桑門)罔僧侶のコト、

くははる(加)罔動有る上に、更に添(シ)るコト、

くはふやす(加)列(シ)なる、入(シ)る、

くはふ(加)罔動物の上に、物を添る(シ)寄(シ)て、ふやす、

くはふ(衝)罔動齒と齒とにて、物を軟(シ)かくはさみ持つコトを云ふ、

くぼり(配)罔くぼる(シ)生花(カサタ)の用語にて、配木(カサタ)の口を略して云ふ語、

くぼる(配)罔動分(シ)て與(シ)える(シ)其(シ)其(シ)の處へ備(シ)へ置く、假令は兵を配るなど(シ)行き渡(シ)らす、行き届(シ)かする、

焼、首、杖、頭

くはる、くひせ 焼、首、杖、頭

くぼる(焼)罔動物が火の中へ入りてやける、

(くひせ)

くひ(首)罔あたま、かしら、しるし、

くひ(杖)罔又た杭の字を用ゆ、地面へ打ち込みたる長き木材(カサタ)、

くひ(頭)罔頭と胸(カサタ)との間(カサタ)に在る部分の稱(シ)凡て物の形の、頭の如くになつて部分のコトを云ふ、

くひ(具備)罔物事のそなはつてつるコト(シ)物事が十分に、調(シ)なふてつるコトを云ふ、

くひあたり(食傷)罔悪しき物を食(シ)ふて、病氣となる、多分に食ふて病氣となる、即ちよくしようの口、

くひあはせ(食合)罔甲の物と乙の物とを同時に食へば善なるを云ふ、假令は鱧と生梅(カサタ)、ニンジン葉と芥子(カサタ)などのある(シ)器具(カサタ)又は道具類の木と木が、互ひちがひに組み合わせられてあるコトを云ふ、

くひあま(食餘)罔食ひのこしたる食品

くひおけ(首桶)罔斬りたる首を、入れて置く(シ)蓋(シ)のある桶の如き物、

五五〇

くひか、くひし

くひかせ(頸枷)罔昔時の刑罰の名、罪人の頸(シ)にかせを入れる刑、

くひかざり(頸飾)罔頭に掛るかざり物、多くは寶石(カサタ)類を、繋ぎ合せて、輪(シ)させるもの、

くひき(頸木)罔荷車(カサタ)の先に、横(カサタ)に爲つて附てる木にて、牛(カサタ)の頭(シ)へ掛(シ)るもの、

くひきる(首斬)罔動首をきるコト(シ)雇人に(カサタ)を出す、其職を解く、

くひきりない(首斬臺)罔罪人の首を斬る

くひきりちよ(首斬疔)罔悪性の腫物の名、首(シ)の周圍(カサタ)に生ずる疔(シ)のコト

くひくり(首輪)罔頭(シ)を吊(シ)て、死するコト、又た死する人のコトを云ふ、

くひけ(食氣)罔物を食ひたがるコト、即ち食慾(カサタ)の口、

くひころ(食頃)罔食ふべき其の者の味(シ)の、最(シ)も善き時のコトを云ふ、

くひさし(食止)罔食かけにして置くコト

くひし(食かけ)罔食かけにして置くコト

くひしろ(食代)罔飲代(カサタ)に對しての稱にて、食物を求(シ)むる、其の代金、

くひしほ(喰締)罔動上下の齒を強く合して、口を閉(シ)る(シ)轉じて辛抱(カサタ)する、

くびじんさ(虞美人草)罔ヒナゲシの口を云ふ、

くびす(踵)罔足の裏の後の方の部分で、即ちかかとのコトを云ふ、

くびす(食過)罔餘計(カサタ)に物を食ふコト

くびす(多分)罔多分に物を食ひて、胃腸(カサタ)を損すコト、

くびす(頸筋)罔頸の後と、左右の部、即ち襟頭(カサタ)、

くびせ(株)罔木の切りかた、

くびせん(首錢)罔首を斬(シ)れるところを、助けて貰ふ爲めに、出す金錢のコト

くびぞめ(食初)罔一種の儀式(カサタ)にして、生後百二十日に爲りたる時に、初(シ)めて小兒に飯(シ)を食(シ)させるコトを云ふ、

くびたい(首代)罔首錢(カサタ)に同じ、

くびたま(頭玉)罔太古(カサタ)に、珠玉(カサタ)に通して、飾(カサタ)りして頭に掛たる物

くび猫(カサタ)の頭へ、箱(カサタ)の金屬製の環(シ)の、(カサタ)頭の口、

くびたせ(食倒)罔動(カサタ)からかすに、くらして人(シ)何事をもなさに、人の世話(カサタ)に爲つて、暮(シ)して人(シ)のコトを云ふ、

くびたせ(食倒)罔酒食に贅澤(カサタ)を盡すコト、

(カサタ)して、其れが爲めに、貧窮(カサタ)なるコト、又た爲りし人(シ)食漬(カサタ)に同じ、

くひちがひ(組離)罔くひちがふコト、

くひちが(組離)罔動物事の相違する、まぢがふ、

くひつ(愚筆)罔自分の書きたる文字、又は手紙などの謙遜語、

くひつく(食付)罔動くらひつきて離(カサタ)さぬ(シ)職業を得る、

くひつな(頸綱)罔犬の頭(シ)などへ、結び付(シ)て置く紐、

くひつめ(食詰)罔動食ふ物の無(シ)なる(シ)食ふコトの出来ぬ(シ)生活(カサタ)を立(シ)てるコト出来なくなる、

くひつむ(食詰)罔食ひつめるコト、又た食つめた人、

くひつたけ(頸丈)罔立ちて地面(カサタ)より頭(シ)の邊までの高さ(カサタ)を云ふ、假令は水の深(カサタ)が頭丈ある(シ)女色(カサタ)に迷ひて、無我夢中(カサタ)となるコト、

くひつびき(頸引)罔一種の遊戯にて、輪(シ)に爲したる紐(シ)を互ひに頭へ掛け引張合つて、勝敗(カサタ)を決(シ)する遊戯

くひつぶし(食漬)罔食ひつぶすコト、又くひち、くひつ

た食ひつぶしたる人、

くひつぶす(食漬)罔動食(シ)ひつぶす意義にて、即ちた(シ)にて物を食ふ(シ)人に助けられて生活する(シ)働(シ)かすして、生活して、

くひつめもの(食詰者)罔生計(カサタ)を立る事の出来なくなりし人のコト、

くひて(食手)罔物を食べる人、又た能く食べる人、

くひとむ(食止)罔動ふせき止(シ)むる、

くひな(水鶏)罔水鳥(カサタ)の名、形は鷓鴣(シ)に似て、稍(シ)小さく、嘴(カサタ)長くして、其の基(シ)の處に軟(シ)らかき皮あり、全體の色は黒赤(カサタ)く、處々(カサタ)に茶と白の斑點(カサタ)あり、足は長くして、好(シ)んで水邊に棲(シ)み、水中に入りて小魚(カサタ)を捕へ食す、又たよく鳴く、其の鳴き聲が恰(シ)も、戸を叩(シ)く如くなるより、人々(シ)は之(シ)を愛して、其の鳴き聲を聞くを樂(シ)して貴(シ)はる、

くひにげ(食逃)罔食物を食ふて、其の代金を拂はずに去るコト(シ)利益(カサタ)を得たるに依り、後(シ)の事に構(シ)はずに、其のまゝ、手を引くコト、

くひのき(食退)罔物を食らふて、其の席

括、縮

くひのくひる 括、縮
を立ちのくコト、
くひのこす(食殘) 縮くひのこすコト、又
はくひあましたる物のコトを云ふ、
くひのこる(食殘) 縮食ひあます(食) 食ひ
かけてやめる、
くひはづし(食外) 縮くひはづすコト、
くひはづす(食外) 縮食ひそなふ(利)
益を得べき時機を逃(か)す(生活の道)
を逃す、
くひびき(首引) 縮クビツビキに同じ、其
の條を見られよ、
くひぶん(食分) 縮食物を食ひあさふ(徳)
(分) 即ち食分を持つてゐる、
くひまき(頭巻) 縮寒さを防ぐ爲めに、頭
へ巻きて置く物、多くは毛織物にて製
(代)せらる、
くひまがり(頸曲) 縮頸が左右何(ひ)れか
に、曲(か)つてゐる不具者(物)の科トを
云ふ、
くひもの(食物) 縮食ひあさふべき凡ての
物のコト、
くひる(括) 縮くひ入るさ云ふ義にて、
即ち物の中央(か)を結びて、其の兩端
(か)がふくれてゐる、一しめる、
くひる(括) 縮動物の中央(か)を強く結び
くひる(縮) 縮自我れさ我が咽喉(の)をし

食、構

くひる、くふり 食、構
めて死する、
くひる(縮) 縮頭をしめて人の生命を絶
つ、即ちしめ殺(す)す、
くひれち(食料) 縮食物を求(き)むる料金
くひわ(頭輪) 縮犬や猫の頭(か)へ飾さし
て、掛(か)けて置く眞鍮(か)にて、製した
る巾(か)の廣き輪、
くひわく(食分) 縮動物を食して、其の味
(か)の眞否(か)を分(か)る、
くひわけ(食分) 縮くひわくるコト、
くひん(狗養) 縮天狗(か)の別名、
(く) (く)
くふ(食) 縮動たまされる、あざむかれる、
つられる、物を口へ入れる、
くふ(構) 縮動、しらへる、かまへる、いご
なむ、假令(か)蜂(か)が巢を構(か)ふなど、
くふ(愚父) 縮我が父の科トを、人に向つ
て云ふ稱、
くふ(供奉) 縮天子の行幸の、御供(か)を申
し奉るコト、
くふ(工夫) 縮物事に就(か)つて、思案(か)
するコト(考)へて方法を定むるコト、
くふ(興風) 縮俄(か)かに渦巻(か)の如

焼、回

くふつ、くほま 焼、回
くに爲つて、吹き起(か)る暴風(か)、即
ちツムジカゼの科ト、
くふつ(愚物) 縮おろかなもの、役にた
ぬ人の科トを云ふ、
くぶん(區分) 縮細(か)かく分るコト、
(く) (く)
くべつ(區別) 縮物事を、其々(か)に細か
く分(か)るコト、
くべる(焼) 縮動物を火の中へ投げ込みて
焼く、もやす、
(く) (く)
くぼ(凹) 縮土地其の他、物のへこんでゐる
部分の科トを云ふ、
くぼ(矩步) 縮足なみを揃(か)へて、歩み行
く(愚母) 縮自分の母の科トを、他人に
對して云ふ謙遜(か)の語、
くぼし(凹) 縮周圍(か)が高くなつてゐて
中の低(か)きさまを云ふ、
くぼ(弘法) 縮佛教の語にて、佛(か)の
教を天下にひろむるコト、
くぼ(回) 縮くぼまるコト、
くぼまる(凹) 縮動又た窪の字を書く、中

くぼ(凹) 縮へこんでゐるコト、
くぼ(凹) 縮へこんでゐる、中が低(か)く
なつてゐる、
くぼ(凹) 縮中を低(か)くする、へま
くぼ(凹) 縮くぼんでゐる目、おちこん
でゐる目、即ち奥目(か)、
くぼ(凹) 縮くぼんでゐる状(か)を云ふ、
くぼ(凹) 縮み方の容子、
くぼ(凹) 縮へこんでゐる處、くぼ
くなつてゐる處、
くぼ(凹) 縮佛語にて極樂淨土の科ト
(く) (く)
くま(隅) 縮土地又は水などの、岸へ曲(か)
りて深く入り込みし部分を云ふ、即ち
すみの科ト、假令(か)岸の隈又は山の隈
など(内密)なるコト、心に思ひて
外へ出さぬコト(奥)ふかく、隠れて
ある處を云ふ(色)色又は光(か)影
(か)との互ひに連り合つてゐる部を云ふ、
くま(熊) 縮猛獸の名、形大にして全身黒
毛を以て覆(か)はれ、唯だ咽喉(か)の部
に、三日月形(か)をなせる、白毛の部
くま、くま、 凹、隅、熊

あり、之を月の輪と云ふ、鉢の長四尺内
外にて力量強く、齒及び爪(か)共に強し
常に深山に棲(か)ひ、冬季は穴(か)の中
に棲む、其の毛皮は、敷物として賞用せ
られ、其の肉は食料となり、脂(か)及び
膽(か)は薬用となる、
くま(熊) 縮(接頭)名詞の上に附加へて、猛
(か)く強き意を表はす語、即ち熊蜂(か)
熊笹(か)など、
くま(供米) 縮神にそなへる米、
くま(愚妹) 縮我が妹の科トを、他人に
對して云ふ謙遜(か)の語、
くま(愚味) 縮おろかなるコト(物)の道
理(か)のわからぬ人、
くま(隅) 縮一種、丈(か)は五六
尺止りにて、莖(か)細(か)く、葉の廣(か)
きもの、
くま(熊鷹) 縮鷹の一種にて、其の大
き普通の鷹の三倍以上あり、性質(か)
亦た極(か)めて猛烈(か)にして、嘴(か)
は鉤形(か)に曲つて、其の尖(か)鋭く、
能く狐(か)又は、狸(か)などを突き殺
(か)して食ふ(轉)じて性質の荒(か)くし
て、強慾(か)なる人の科トを云ふ、
くま(限路) 縮隅(か)に同じ、
くま(熊手) 縮昔時に用ひし武器(か)の
くま、くま、

一種にて、鐵にて熊の爪(か)の如き形の
物を造り、此れに長き柄(か)を附(か)け
し物にて、之を人に引き掛(か)けて、倒す
に用ひし物(竹)にて熊の爪の如き物を
造り、長き竹(か)の柄を附(か)し物、落葉
や穀類(か)を引き寄(か)るに用ひ(同)
じ形にて、柄の短き物、田の草を取るに
用ひ、
くま(暈取) 縮くまざるコト、
くま(暈取) 縮動彩色(か)の仕方(か)
にて、色分(か)にす、ほかす、ほかして
いろざる、
くまなし(曲無) 縮心正しき(心中にわだ
かまりなき)心にくもりなし(清淨潔
白にてあり)、
くま(熊膽) 縮熊の膽(か)の科ト、味苦
(か)けれども、胃病(か)の薬として貴(か)
はれる、
くま(熊蜂) 縮虫の名、蜂の一種にて、
我が國に於る、蜂の中の最(か)も大な
るもの、全身(か)黒茶色にして、頭(か)腹
(か)は稍や黄色(か)を帯ぶ、毒の殊に強
(か)きもの、
くま(熊鷹) 縮鷹の一種にて、形大き
く、性質(か)亦た甚だ猛烈にして、時に
人を害(か)ふコトあり、其の年數(か)、
くま、くま、 五五三

くまま、くみ組

を經たるものは、頭より尾までに、鼠色(マウ)の斑點(マカ)あり、
くままつり(熊祭) 關北海道の土人、即ちアイヌ人種(アイヌ)の行ふ、一種の儀式にて、熊の子を捕(マシ)え、婦人(メシ)の乳汁(マシ)にて之を成長せしめ、三年の後に、殺して捧(マシ)げて、祭事を營(マシ)むコトを云ふ

(くぐみ)

くみ(組) 團系と糸とを、あみ合すコト
組合、即ち、仲間(マシ) ① そろひ、即ち對(マシ) ② 同じ、調子(マシ)で、其の語句(マシ)の短(マシ)かき物や、幾許(マシ)か寄せて、一つとしたる琴(マシ)の曲(マシ)、
くみ(組) (接尾) 数字の下に附加えて、捕(マシ)ふて、一つの物とされる物を數ふるに用ゆる語、即ち一組、二組、
くみ(苦味) 團にがき味、
くみ(胡頰子) 團木の名、重に温(マシ)かき土地を好んで、自生す、普通は其の長さ六七尺にして、小さき枝を數多(マシ)生じて、其の枝に葉を生ず、葉は梨(マシ)にて、表は綠色を呈し、裏は白色又は茶色を呈するもの、冬の末に小さき卵形(マシ)の無色の實を結ぶ、味(マシ)は少し酸

くみあ、くみな

(マシ) けれども食料となる、
くみあ(汲上) 團動水を汲(マシ)て上へ引き上(マシ)る、
くみあ(組上) 團動くみ合せて成就(マシ)くみあ(汲上) 團くみあぐる、
くみあ(組合) 團互(マシ)ひに組み合つてコト ① 仲間(マシ)に爲つてるコト ② 互ひに出資(マシ)し、又は規約(マシ)を作りて、一つの團鉢(マシ)を形成(マシ)りたるコト、
くみあ(組合) 團動仲間になる、一團に爲る、入り交(マシ)りて一なる、
くみあ(組合員) 團其の組合を組織してある人を云ふ、
くみあ(組合契約) 團組合員が互(マシ)ひに商議して、定(マシ)めたる約束即ち規約(マシ)の事、
くみいと(組系) 團系を互(マシ)ひに組み合はせて、一本とせし物、
くみい(汲入) 團動双方(マシ)の間(マシ)に割(マシ)り込(マシ)で入(マシ)つて、
くみい(組入) 團動汲み取る、
くみうち(組打) 團敵(マシ)味方(マシ)互に抱(マシ)き合ふて、勝負(マシ)を争ふ、
くみを(組緒) 團系を編(マシ)み合せて作りたる組(マシ)、

くみか、くみた 輿

くみか(組垣) 團竹(マシ)又は薄(マシ)き板(マシ)にて、組(マシ)み合せて、作(マシ)りたる垣根(マシ)、
くみか(組髪) 團髪(マシ)の結び方、組み合せて結(マシ)たる髪、即ち束髪、
くみかしら(組頭) 團其の組合長、即ち組長のコトを云ふ、
くみかはす(組交) 團動互ひに盃(マシ)の取り與(マシ)をして、酒を飲む、
くみこ(組子) 團其の組(マシ)に屬する人々、即ち其の組の手下(マシ)、
くみこ(汲込) 團汲み入れる、
くみこ(汲込) 團動水(マシ)を汲(マシ)て器物(マシ)へ入れる、
くみしく(組敷) 團動互ひに取り組で、相手(マシ)を下に敷(マシ)く、
くみした(組下) 團其の組(マシ)の頭(マシ)の下に附き従ふ者、即ち手下(マシ)、
くみす(組) 團動組合に入る、仲間(マシ)となる、仲間入をする、
くみす(與) 團動組すと同じ、
くみだ(組出) 團汲み出すコト、
くみだ(汲出) 團動水、酒などをすくひ取る、すくふて他へ移す、
くみたつ(組立) 團動くみて爲(マシ)る、成り立(マシ)つ、くみあがる、

くみたつ(組立) 團動組(マシ)み合せて、一つの物とせし初む、
くみたて(汲立) 團汲み取りたるばかり、汲み出して未だ時間(マシ)の經(マシ)ぬ、汲み立てのコト、
くみちんき(苦丁幾) 團藥の名、ゲンチャナの皮、又は橙(マシ)の皮(マシ)などを、アルコールに浸(マシ)して、作りたるもの、
くみてがた(組手形) 團組合(マシ)したる手形と云ふ意にて、振り出したる手形の紛失、又は毀損(マシ)の時の用意として、同じ番號(マシ)を、記入せる同一の手形を、一通作りて、之を互ひに連なり合せ置きたるもの、
くみとる(汲取) 團動汲み出して、器物(マシ)へ移(マシ)す ① 他人の意中を、おしほかりさつする、
くみとり(汲取) 團組み取るコト、
くみなは(組繩) 團組み合せて、編みし繩(マシ)のコトを云ふ、
くみひも(組紐) 團系(マシ)にて編(マシ)て、組立(マシ)たる紐(マシ)、
くみやしき(組屋敷) 團昔時各藩士が互(マシ)に同じ身分、又は扶持(マシ)の同じき物が、一組(マシ)と爲りて、住居居る屋敷のコトを云ふ、

くみわく(汲分) 團動汲み取りて、幾個(マシ)にも、盛(マシ)り分る ① 人の身上の事をおもひやりする、
くみわけ(汲分) 團汲み出して分(マシ)るコト ① 人の身上(マシ)を思ひやる、
くみん(區民) 團其の區に、住宅を構(マシ)てる人々、
くみん(愚民) 團學問のなき人民、おろかなる人々、

(くぐむ)

くむ(組) 團動互ひに一所になりて事をなす、即ち仲間(マシ)となる ① 相手と抱(マシ)き合ふ、即ち取りくむ、
くむ(組) 團動系をあみて、紐(マシ)となす ① 甲の物と乙の物とを、取り合して、一つの形の物となす、
くむ(汲) 團動水をすくひ出す ① 酒を盃(マシ)へ入れて飲む ② 意中(マシ)を悟(マシ)る 推量(マシ)、

(くぐめ)

くめ(貢馬) 團みつぎものに朝廷へ奉りたる馬のコトを云ふ、
くみわ、くめ 組、汲

くめい(艱命) 團身軀と、生命又た單(マシ)に生命のコトを云ふ、
くめい(苦茗) 團にがき味の茶 ① 品質(マシ)の悪しき茶、
くめべ(久米部) 團大昔に武家のコトを云くめん(工面) 團物事のつもり、工夫(マシ) ① 自己の身代(マシ)、假令は工面が善(マシ)まか悪いまか、

(くぐも)

くも(雲) 團地球を取り巻(マシ)てる空氣の上の方に浮(マシ)んで、一種の水蒸氣(マシ)の凝(マシ)りたる物 ① 高き處處を、形容(マシ)して云ふ語 ② 見當(マシ)のつかぬ物事を、捜(マシ)すに云ふ語、
くも(蜘蛛) 團虫の名、八本の足を有し、頭(マシ)は小なれども、胴(マシ)は殊に大きく尻(マシ)の周圍(マシ)に在る、五六個の疣(マシ)の如き物より、糸を出す、之を巧(マシ)みに掛け渡して、其れに虫のかゝる捕えて、其の血を吸ふ、種類甚だ多く、形も亦た大小種々あり、併し害虫(マシ)を捕ふるを以て、益虫の部に入れられてあり、

(くぐも)

くもあし(雲脚) 團雨雲(マシ)の動く状(マシ)あり、
くめい、くもあ

(くぐめ)

くみた、くみや

くもあ、くもき

を云ひ現はす語。
 くもあみ(蜘蛛網) 蜘蛛(モ)の糸(ヒ)にて網(シ)の如く張りたるもの、即ち蜘蛛の巢(ネ)。
 くもる(雲居) 宮廷(ワカ)の雲の在る處。
 遠(ト)く離(ワ)れてる處。
 くもり(愚蒙) 愚(ト)しきコト、即ち馬鹿(バカ)のコト。
 くもがた(雲形) 凡て雲の形を爲したる模様を、描(ヒ)きたる物、又た其の模様を形(カ)たるもの、コトを云ふ。
 くもがみ(雲上) 雲の其の上を云ふ意にて殊更に、最も高き所のコトを云ふ。
 くもかみ(雲紙) 鳥の子紙の一種にて、金泥(ニ)又は銀泥(ニ)を用ひて、雲の形(カ)を表(ハ)したる紙を云ふ。
 くもがくれ(雲隠) 雲の何方(カ)かへ去り失(セ)しコト。
 くもがれ(雲隠) 轉じて人の隱(カ)れ去るコトを云ふ。
 くもがれ(雲隠) 身分の殊に高き方の死を去せしコトを云ふ。
 くもかすみ(雲霞) 雲と霞とを混ぜり行く消え去るコトの枕詞(マツル)。
 くもきり(雲霧) 雲と霧とを云ふ。
 くもきれ(雲切) 雲と霧との離(カ)れたる部分を云ふ。

くもし、くもて

くもじ(華文字) 雲漢(ワカ)の一名、くもしくたに(雲散谷) 雲や霧の、深く立ちこもつて谷を云ふ。
 くもすけ(雲助) 昔時街道筋の宿場(ヤ)にゐて、籠(カ)を昇(ノ)り、又は旅人の荷物(モノ)などを、持ち運(カ)びせし、下等の労働者のコト。
 くもすけ(雲助) 轉じて住所不定の賤(チ)しき者のコトを云ふ。
 くもすたれ(雲籠) 俗語にて、目の前を薄(カ)く、ぼんやりと覆(カ)つて薄雲の如く、コトを云ふ、即ち雲をすたれに見立(カ)つて云ひたる語。
 くもたご(蜘蛛網) 蜘蛛(モ)の一種にて、其の形の極(カ)めて小さく、宛然(カ)蜘蛛(モ)の如き形を爲せるもの。
 くもち(雲路) 雲の進(カ)み行く方向。
 くもち(雲路) 鳥が空中を飛び行く方向の如く、コトを云ふ。
 くもち(雲路) 神佛に供(カ)ふる食物の如く、コトを云ふ。
 くもて(蜘蛛手) 凡て物が、蜘蛛(モ)の足の如く、互に入り交(カ)つてるコトを云ふ。
 くもて(蜘蛛手) 物事の入り亂(カ)れて、亂雑(カ)になつてゐる状態に云ふ語。
 くもて(蜘蛛手) 木を十字形に組み作りたる、手洗鉢(ハ)の臺、即ち竹を十文字に組み、結(カ)びたるの臺の如く、コトを云ふ。

くもの、くもり

五五六

くものす(蜘蛛巢) 蜘蛛(モ)の糸(ヒ)のコト。
 くものふね(雲船) 雲の大きに漂(カ)やうてるさまを云ふ。
 くものみね(雲峯) 大空に、雲が山の峰(カ)のやうに立つてゐるを云ふ、重に夏の雲に云ふ語なり。
 くものかけはし(雲懸橋) 深山の谷間、高く架(カ)られたる橋の如く、コトを云ふ。
 くものほく(雲箔) 金銀箔を雲の薄(カ)くたな引てる様(カ)に、置(カ)くコト、又は置きたる物の稱。
 くもはなれ(雲離) 雲のちぎれてるコト、即ち断絶(カ)せる雲(カ)互ひに遠(カ)く離(カ)れる(カ)たつてゐるコト。
 くもひたひ(雲額) 雲居にて女形の用ゆる、一種のカツラの名。
 くもま(雲間) 雲と雲との間(カ)晴(カ)の間(カ)の如く、コトを云ふ。
 くもみづ(雲水) 雲と水とを混ぜりて行衛(カ)の定(カ)まりぬ、身の上の如く、コトを云ふ。
 くもゆき(雲行) 雲の動き行く状(カ)に、即ち雲脚(カ)と同じ、轉じて物事(カ)の成行(カ)の如く、コトを云ふ。
 くもり(雲) 雲が出て、太陽(カ)の光線(カ)を、薄く遮(カ)りしコト。
 くもり(雲) 光(カ)の如く、コトを云ふ。

くもり、くやみ 悔

のうすらぐコト 疑(カ)はしきコト。
 心の爽(カ)ならざるコト。
 くもりぐさ(曇草) 松の如く、コトを云ふ。
 くもり(曇) 固(カ)く、薄く出る。薄暗(カ)くなる。光澤(カ)を失ふ、假令(カ)鏡(カ)がくもる。
 くもりがらす(曇硝子) 固(カ)く、硝子のコト。
 くもん(公文) 固(カ)く、發する命令書。布達(カ)の公文書。
 くもん(苦悶) 固(カ)く、しみる。なやみくるしむ。
 くもんしよ(公文所) 固(カ)く、幕府時代に將軍が政令を發したる役所のコトを云ひし語。
 (くぐや)
 くやち(供養) 固(カ)く、死者の靈魂に、物を供(カ)えて回向(カ)するコト。
 くやく(公役) 固(カ)く、官務的(カ)に割り當(カ)られたる仕事(カ)の如く、コトを云ふ。
 くやし(悔) 固(カ)く、口惜(カ)し、残念(カ)なり、無念(カ)に思ひなす。
 くやみ(悔) 固(カ)く、くやみ(悔)死者を吊(カ)るコト。

くやむ、くら 蒸、座、倉、藏

くやむ(悔) 固(カ)く、後悔(カ)する。死者をいたはりさる。
 くやくしよ(區役所) 固(カ)く、市を更に區に分ちたる其の區に於て、市より委(カ)せられたる行政事務を取り扱ふ役所のコト。
 くやくしよ(區役所) 北海道又は琉球島に於たる區の、其の行政事務を取り扱ふ處を云ふ。
 (くぐゆ)
 くゆ(悔) 固(カ)く、後悔(カ)する。後悔(カ)するコト。
 くゆらす(蒸) 固(カ)く、すばらせる。煙(カ)を立て上らせる。
 くゆる(蒸) 固(カ)く、すぶる。いぶる。燃(カ)す。煙(カ)を爲りて立ち上る。
 (くぐら)
 くら(座) 固(カ)く、物を載せる臺(カ)又は載せる處。
 くら(倉) 固(カ)く、貯(カ)へる處。貯(カ)へる處。
 くら(藏) 固(カ)く、石倉(カ)等の別あり。
 くら(藏) 固(カ)く、倉に同じ。

くら、くらう 鞍、位

五五七

くら(庫) 固(カ)く、倉に同じ。
 くら(鞍) 固(カ)く、馬に置く、木又は革(カ)にて作られたる物、人を乗せたりする爲めのもの。
 くら(位) 固(カ)く、天子のおわしまする處。國家を治(カ)むる、全權(カ)を有したる地位(カ)、即ち天子の御位(カ)華族(カ)勅任(カ)官及官及び國家に對して功勞(カ)を盡し、又は勳功ある者に下賜(カ)する位、其の功勞を示される標(カ)にて、一位より八位までの等級(カ)あり、即ち從一位から正八位まであり、其の朝廷(カ)に列(カ)する時の、席順(カ)の高下(カ)を定められたる資格(カ)官吏(カ)の位置(カ)を假令(カ)勅任(カ)の位置(カ)局長の位置(カ)一般に物事の階級(カ)を表はすに用ゆる語。
 くら(位) 固(カ)く、或る語の下に附加(カ)して、ばかりと云ふ意を表はすに用ゆる語。
 くら(位) 固(カ)く、位、即ち十位とか百位とか、萬位とかを定むるコトを云ふ。
 くら(苦勞) 固(カ)く、心をなやまして物事を考へるコト。
 くら(愚老) 固(カ)く、老人が、自分のコトを他

くらう、くらげ

くらう(蔵人) 蔵昔時の役名、宮中の校書殿(コツシ)に、蔵(サ)められある書物の取締(サツシ)をなせる役、

くらうせう(苦勞性) 蔵物事を矢鱈(サツ)に氣にする質(サ)のコトを云ふ、

くらうつし(蔵移) 蔵甲の蔵の物さ、乙の蔵に入れ置きたる貨物さを入れかゆるコト、

くらおきちま(鞍置馬) 蔵ハダカ馬に對しての稱にて、脊(サ)に鞍(サ)を置きたる馬のコト、

くらおきどころ(鞍置所) 蔵馬の脊の鞍を置くべき部分のコト、

くらがえ(鞍替) 蔵馬の鞍を取り替(カ)るコト、

くらがえ(藝妓又は娼妓等の、其の働(カ)いてる家を、取りかへるコト、

くらかけ(鞍掛) 蔵馬具の一種、鞍を掛(カ)て置く臺、

くらがり(暗) 蔵くらくなるコト、くらき場所(サ)のコトを云ふ、

くらく(苦樂) 蔵くるしみさ、たのしみ、くらむら(黄昏) 蔵ゆうぐれ、くれがた、たそがれのコト、

くらげ(水母) 蔵海中に浮(ウ)んでる一種の動物の名、其形松茸(サツ)の如くにして、

くらげ、くらし

くらげ(海月) 蔵水母に同じ、

くらざ(暗) 蔵くらきコトのほざあひ、暗きコトのありさま、

くらし(暗) 蔵くらい、はつきりせぬ(オ)おろかなり、其物事を能く知らざるなり

くらし(鞍敷) 蔵乗る時に、鞍の上に敷く、敷物(サ)のコトを云ふ、

くらし(倉敷) 蔵蔵へ貨物を入れて置く爲めに、其の蔵の持主へ、支拂ふ預料(サ)サ、即ち倉庫料のコトを云ふ、

くらし(鞍鹿) 蔵鹿の一種、かもししのコト、此の鹿の皮を鞍に敷くよりして、此の名あり、

くらじり(座下) 蔵下(サ)の方の席、

くらした(鞍下) 蔵鞍の置(カ)れてある其の下に當る部(サ)の肉のコトを云ふ、即ちロースのコトなり、

くらし、くらふ

くらし(倉代) 蔵倉敷(サ)に同じ、

くらしかた(暮方) 蔵生計の容子。なりあひのありさま、

くらしむき(暮向) 蔵なりあひの立て方、即ち生活状態(サ)のコトを云ふ、

くらす(暮) 蔵くらすコト、即ち生命をつなぐコト、

くらす(暮) 蔵暮業をいさなみて、生計(サ)を立つる、

くらす(暮) 蔵働日の出より日の入までの時間を過す(サ)年月を送(サ)り過(サ)する

くらす(鞍坪) 蔵鞍の中央(サ)の凹(サ)んである部を云ふ、即ち乗手(サ)の尻(サ)をすゆるところ、

くらす(鞍) 蔵牛馬の脊(サ)が、其の上(サ)に置(カ)れてある鞍(サ)の爲めに、擦(サ)れ破(サ)れたる疵(サ)の稱、

くらし(倉) 蔵(倉)倉庫証券(サ)蔵倉庫業者が、其の倉庫へ貨物を預け入れたる、其の主の請求(サ)に依りて、其の預りたる貨物に對して、發(サ)する証券のコトにて、預(サ)り証券さ買入(サ)り証券の二種あり、

くらし(蔵開) 蔵新年に吉日を卜して初めて蔵の戸を開くコトを云ふ、

くらふ(鞍) 蔵働又は比の字をも書す、甲

くらふ、くらめ

の物さ乙の物を引き合す(サ)互ひにきそひ合ふ、

くらふ(食) 蔵食物を口へ入れる(サ)酒をのむ(サ)受けるもらふ、假令ば小言(サ)を食ふ(サ)物を金子(サ)に代(カ)て生活(サ)の料(サ)となす、

くらふ(俱樂部) 蔵英語なり、組合(サ)のくらふ(蔵船) 蔵一定(サ)の場處に繫ぎ置きて、中へ品物を積(サ)み貯(サ)へて置く船、

くらべ(鞍) 蔵くらべ合すコト、

くらぼぬ(鞍骨) 蔵鞍のまへ輪さ、しづわのコト、

くらまい(倉米) 蔵蔵に入れてある米(サ)蔵へ入れる米のコト、

くらます(暗) 蔵くらくす(サ)こまかす(サ)まよはす(サ)だます、

くらまぎれ(暗粉) 蔵やみを幸ひにかくれるコトを云ふ、

くらむ(鞞) 蔵又た肢の字を用ゆ、眼のくらくなる、即ち目まゐす。目がまわる

くらむ(肢) 蔵同上、

くらむ(暗) 蔵くらくなる、

くらむ(瓦) 蔵西洋の、ばかり目の單位の名、一瓦は我が二分六厘強に當る、

くらめつけ(蔵目附) 蔵昔時の役の名、倉

くらや、くり

庫の取締(サ)、

くらやく(蔵役) 蔵政府の米庫(サ)を取締る役人の稱、

くらやみ(暗闇) 蔵まつくら、眞(サ)のやみ(サ)無茶苦茶(サ)で、手の附(サ)られぬコトに云ふ語、

くらやし(蔵屋敷) 蔵米倉のみ、多く並(サ)んである所を云ふ(徳川時代に、關西地方の大名が、其の領分内(サ)にて、取れたる米を、賣捌(サ)く、く途り來りて、入れ置きし蔵のコトにて、大阪に設け置きしもの、

くらんど(蔵人) 蔵くらうぎに同じ、其の條を見られよ、

くらばん(蔵番) 蔵蔵の番人、

(くぐり)

くり(栗) 蔵樹の名、葉は長き卵形(サ)をなして、其の周囲(サ)に齒あり、夏の頃(サ)に穂(サ)の如き、白き小花を咲(サ)せ、秋の中頃に至りて、實(サ)を結ぶ、實は針にて充(サ)されたる、皮の中に、一個乃至三個ありて、更に褐色の、堅(サ)き皮に包まれ、尙ほ厚き澁(サ)き皮にて覆はる、焼き又は煮きて食料とす、味殊

くり、くりい

によるし、木材は種々の器具を製すに用らる、

くり(屈輪) 蔵赤の漆(サ)にて塗りたる、唐草(サ)模(サ)の如くになれる物を云ふ又た湯(サ)巻の如き狀(サ)の物の稱

くり(庫裡) 蔵寺院の臺所、

くりあ(糶上) 蔵働次第に送(サ)りて上る(サ)順々に進める(サ)糸(サ)などおくり終る、

くりあげ(糶上) 蔵くりあぐコト、

くりあん(栗筒) 蔵栗の實を煮て、摺(サ)り潰(サ)し、砂糖(サ)を入れて、更に煮(サ)し物を云ふ、

くりあはす(糶合) 蔵働糸の類をくりて編(サ)み合す(サ)都合(サ)をつける、彼(サ)さ此(サ)取りかへる、

くりあはせ(糶合) 蔵くりあはすコト、

くりい(栗芋) 蔵栗の實(サ)の如き、上等の味(サ)をなせる芋のコトを云ふ、

くりい(糶入) 蔵働次第に入れる、

くりい(栗色) 蔵栗の實の厚皮の如き、赤黒き色合を云ふ、

くりい(繰入) 蔵くり入るコト、

くりい(繰出) 蔵くり出す、

くりい(繰出) 蔵繰くりて順々(サ)に引き出す、

くりう、くり、
くりちめ(栗梅) 図染色の名、栗色の濃(ワ)きもの。
くりがた(栗形) 図栗の實(ワ)の如き形を爲せるもの。
くりかは(栗皮) 図赤黒き色合を爲せる革(ワ)の稱。
くりかふ(綴替) 圖甲の物と、乙の物と融通(ワ)し合ふて替る。
くりかへ(綴替) 圖くりかふる。
くりから(俱梨迦羅) 圖佛法の語にて、不動尊(ワ)の持てる劍(ワ)に、黒き龍(ワ)の巻きつける圖を云ふ。
くりかへず(綴返) 圖同一の事を、幾度(ワ)も替る。
くりかへる(綴替) 圖彼と此と都合をつけて取りかへる。
くりかんな(別鈍) 圖孔(ワ)を穿くるに用ゆる一種の鈍。
くりき(功力) 圖こりよりのコト、即ちてがら(ワ)のしのコト。
くりき(苦力) 圖クリーのコトにて、支那にて労働者(ワ)のコトを云ふ。
くりげ(栗毛) 圖馬の毛色の名、全身栗色にて、たてがみのみが黒色なるもの。
くりこし(綴越) 圖くりこすコト。
くりこす(綴越) 圖順々(ワ)に送る、次

くりこ、くりも
第送り(前より次第(ワ)に持ち越す、くりこみ(綴込) 圖くり込むコト。「る、くりこみ(綴込) 圖順々に入り込みて來くりさむ(綴下) 圖順々を下へ送りやるくりさび(綴下) 圖くり下げるコト。くりさぐコト。
くりだす(綴出) 圖くり出すコト。
くりだす(綴出) 圖次から次へ出て行く、相連(ワ)なり出て行くを云ふ。
くりぬく(別抜) 圖器械(ワ)を用ひて、水及び鐵などを抉(ワ)りて、孔(ワ)を穿(ワ)る。
くりのべ(綴延) 圖日を延(ワ)す、期限(ワ)を長引かす。
くりはち(別鉢) 圖木をくりて鉢の如くに爲したる物。
くりぶね(獨木橋) 圖太き木材を其のま、抉(ワ)り取りて、舟(ワ)の如くに作りたる舟の科トを云ふ。
くりぼん(別盆) 圖茶盆(ワ)の一種、木をえぐりて盆と爲したる物。
くりむし(栗蟲) 圖虫の名、栗の實に生ずる、圓き小き虫(ワ)。
くりめし(栗飯) 圖栗の實の皮剥(ワ)たる物を、飯(ワ)へ入れて煮(ワ)し物。
くりもどし(綴戻) 圖くりもどす。

くりも、くる 來、暮、繰 五六〇
くりもどす(綴戻) 圖出したる物を、次第(ワ)に、取りもどす(ワ)くりかへす、くりや(厨) 圖臺所(ワ)のコト。
くりや(綴矢) 圖遠くに在る物を射るに用ゆる矢の科トを云ふ。
くりよ(愚慮) 圖自分の考を他人に向つて云ふに用ゆる謙遜語。
くりわた(綴綿) 圖綿の實を繰(ワ)て、其の種のみを取り去りたる綿の科ト。
くりん(九輪) 圖塔(ワ)の一番上の屋根の中央(ワ)より、高く出でたる柱(ワ)の如き物に、飾り付られてある、輪形(ワ)の物が九つ重(ワ)なりて、附けられてある物の科トを云ふ。
(くるる)
くる(尙獲) 圖病氣の名せむし。
くる(來) 圖動きたる、まかりこす。
くる(暮) 圖日の入りて暗(ワ)くなる、即ち夜になる(ワ)考のつかぬ、事のわからぬ、即ち思案はてる、終る、しまるになる又は途方(ワ)にくる。
くる(繰) 圖動其れから其れへ引出す(ワ)次第(ワ)を追(ワ)て敷(ワ)える(ワ)綿花の種を取り去る(ワ)細く長く繰(ワ)ひて

る物を巻きつけつ、引き出す、
くる(笑) 圖動物をあたる、物をつかばす物を作る。
くる(別) 圖器械(ワ)を廻轉(ワ)させて木などに穴(ワ)を穿(ワ)る。えぐりぬく、くりぬく。
くる(眩) 圖目がくらむ、めまひ。
くる(苦) 圖いたみて切(ワ)なし(ワ)堪(ワ)がたし(ワ)困難(ワ)なり。
くるしみ(苦) 圖くるしみコト。難儀(ワ)なるコト。
くるしむ(苦) 圖いたみ、なやむ(ワ)苦勞する、難儀する(ワ)物事の仕末(ワ)をつけるに困(ワ)る。
くるしき(苦紛) 圖本心ではなければども苦しさの餘(ワ)りにさ云ふ意味の語、くるはし(狂) 圖くるはしむるコト。
くるはず(狂) 圖亂(ワ)らかす(ワ)精神をみだらす(ワ)そんじる、やぶる、そなふ。
くるひ(狂) 圖くるふコト。
くるひさき(狂咲) 圖咲くべく時期(ワ)でなき時に花の咲くコト(ワ)形の、くるひて咲きたる花。
くるひばぬ(狂花) 圖くるひて咲きたる花(ワ)異なる(ワ)なれる形の花。
くるる、くるひ 笑、別、眩、苦、狂

くるふ(狂) 圖常(ワ)に、こまなる(ワ)心を亂(ワ)す(ワ)無暗(ワ)に走り廻(ワ)る(ワ)物事に夢中(ワ)になる(ワ)ふける、おぼれる。
くるふし(躁) 圖クロボシに同じ、其の條を見られよ。
くるま(車) 圖輪を心棒(ワ)にて回轉(ワ)せしむる器械(ワ)のコトにて、其の種類頗る多し、其の用は器械を運轉(ワ)す目的と、此れに載(ワ)へき臺(ワ)を仕掛(ワ)せて、人又は貨物(ワ)を載せて運搬(ワ)せる用に充(ワ)つ(ワ)單に人力車(ワ)の科トを云ふ。
くるま(車座) 圖多くの人が車の輪の如く、圓く取り圍みて座(ワ)るコト、即ち圓形に座すコト。
くるまや(車屋) 圖車を製造する職人(ワ)車を賣る家(ワ)車を曳(ワ)く人、くるまど(車井戸) 圖井戸(ワ)にクルマキを仕掛け、釣瓶(ワ)に繩をつけて、クルマキに掛け、二個の釣瓶(ワ)にて、互ひ違ひに水を汲むやうにせる井戸の科トを云ふ。
くるま(車) 圖蝦(ワ)の一種、大きき七八寸ほどにて、殻(ワ)は厚く、硬(ワ)く色は薄黒(ワ)色にして、煮(ワ)ば、全体桃

色と變じ、而して鉢は輪の如く圓(ワ)くなる、秋より冬へ掛けて殊に味よろしきなり、
くるま(車) 圖支那にて古に行はれたりさ云ふ、慘酷(ワ)なる刑罰の一、即ち罪人の手足(ワ)に繩(ワ)を附けて、車に結び付け、反對の方向に車を走(ワ)らせて、身軀(ワ)を引き裂きて、殺す刑罰を云ふ。
くるま(車) 圖車賃に同じ、くるま(車) 圖昔時貴人が車に乗りて、外出される時に、其の車の傍(ワ)に付き添ひ行きし人、くるま(車) 圖人力車に乗りし賃の科トを云ふ、くるま(車) 圖同上、くるま(車) 圖凡て車を挽(ワ)て運ぶコトを禁するコト、くるま(車) 圖又は車引(ワ)き、車に人又は荷物を載せて、曳(ワ)て運ぶを業とせる人、くるま(車) 圖車部屋(ワ) 圖車を入れて置く小屋(ワ)車曳の居る處、くるま(車) 圖車宿(ワ) 圖人力の帳場(ワ)の科ト、くるま

くるま

即ち車を置き、車夫を置いて、客の求(に)に應ずる家、
 くるまゆり(車百合)園草の名百合の一種、其の葉は普通の百合よりも巾(の)廣く、莖の節(の)の部に於て互生す、花は大にして花瓣(の)は残らず反(の)かへつてあり、
 くるまよせ(車寄)園車を引き寄せて、昇降(の)をする所、
 くるましかけ(車仕掛)園器械に車の取り付られてある物、
 くるまど(車戸)園大きな戸棚は、持ち運びに不便(の)なるより、其の下に小車の附けある戸棚、
 くるまながもち(車長持)園長持の持ち運びを、自由(の)ならしむる爲めに、長持の底(の)に、小車の附けあるもの、コトを云ふ、
 くるまどど(車舎)園身分ある人の邸内に、建(て)てられてある、車を入れる小屋のコトを云ふ、
 くるまかがり(車掛)園封建時代に用ひられたる陣立(の)の名、一番手、二番手、三番手と、順次に軍隊を並(び)べて、一番手破るれば、二番手此れに代(り)ると云ふ方法にて、敵に對する陣立を云ふ、

くるみ、くるり 包、轉、周

くるみ(包)接尾、數字の頭に附加えて、つゝみたる物を、數ふるに川ゆる語、例ば二包さか三包さか、
 くるみ(包)園物を物にて覆(ふ)ふコト、即ちつゝむコトを云ふ、
 くるみ(胡桃)園木の名、夏の初めに栗(の)の如き小さき白花を咲す、花落ちて實を結ぶ、實は大きく桃の其れの如くにして青く、熟(す)するに従(ひ)つて黒く爲る、其仁(の)は脂(の)に富(み)みて、味(の)甘(い)、故に菓子を製する材料と爲し、又た料理の材料(の)ともなる、其の葉(の)は漆(の)に似て、周圍(の)に細かき齒(の)ありて且つ多少の光澤(の)あり、
 くるみいろ(胡桃色)園染色の名、胡桃の核(の)の如き色を爲せるもの、
 くるむ(包)園動物をつゝむ、集(む)めて一まとめになす、方(の)に人を欺(か)く、即ちまるめ込む、
 くるめがすり(久留米耕)園筑後の國の久留米市より、産出する紺(の)がすりのコトを云ふ、
 くるり(轉)園物の廻(る)るありさまを云ひ表(は)はす語、
 くるり(周)園物のまわりめぐり、

くるり、くれた 幅、郭、暮、吳 五六二

くるりおとし(周落)園女の髪(の)結ひ方の一種、鬢(の)を幅(の)を一つにして出したるもの、稱、
 くるる(幅)園戸の締(む)を爲すべく爲に戸に仕掛(か)てある棧(の)一般に云ふさばそのコト、即ちさる、
 くるわ(郭)園城などの周圍(の)を取り圍(こ)みてある石垣(の)、又は土塹(の)の、コト、圍(こ)ひたる内、即ち區域内(の)を、遊里(の)色町(の)を、
 (くぐれ)
 くれ(暮)園日の入りたる時、夕方(の)年の終り、四季の季節の末(の)、即ち秋のくれなど、園物事の衰(へ)えたる状態(の)を云ふ語、即ち末路(の)、
 くれ(塊)園凡て物のかたまりたるを云ふ例ば土のくれなど、
 くれ(吳)園動あたへるつかはす、
 くれがた(暮方)園日の將(ひ)に暮(る)る頃合(の)、即ち日暮(の)の、
 くれをくれ(吳々)園幾重(の)にも、かへすがへすも云ふ意、
 くれたけ(吳竹)園竹の一種、其葉細かく幹(の)細く、節(の)の多くあるもの、種々

の細工物に用ひらる、

くれなる(紅)園紅花(の)にて染めたる赤き色合の、コトを云ふ、
 くれはし(樽階)園阪路(の)などに伐(た)たるまゝの木材(の)を、横(に)に渡して段々(の)なしたるもの、
 くれはし(吳橋)園所り橋、太鼓橋、
 くれむき(暮向)園日の暮(る)なるコト、年の暮(る)なるコト、
 くれる(暮)園動夜(の)なる、時(が)たつ、年(の)暮(る)なる、

(くぐろ)

くろ(黒)園色の名、光のなき暗(い)き色、即ち墨(の)の如き色、
 くろ(畔)園田と田の境(の)、即ちアゼ、
 くろ(洞)園俗語にて、樹木に朽(く)て出来た穴(の)、地面(に)生じたる穴、
 くろ(愚魯)園たわけ、おろかなるコト、
 くろあしび(黒葦毛)園馬の毛色の名、葦毛の黒味を帯(び)たるもの、
 くろあづき(黒小豆)園小豆(の)の一種、其の實(の)は小さく、色は薄黒くして、味あしきもの、
 くろいし(黒石)園色の黒き石、
 くれな、くろい、紅、黒、畔、洞

くろいろ(黒色)園色合の黒さ、

くろいろ(愚弄)園人をあざけりなぶるコト、ひやかして馬鹿(に)にする、
 くろちと(黒人)園素人(の)に對しての稱にて、其の物事に堪能(な)せる人のコトを云ふ語、
 くろえぬり(黒江塗)園漆器(の)の一種にて、紀伊國の黒江(の)より製出するに依り、此の名あり、
 くろがき(黒柿)園柿の樹の中心(の)に通(つ)てる色の黒く、且つ光澤(の)ある部分の、コトを云ふ、其實堅(い)く美しきに依り、諸種の器具を造るに用ひ、
 くろかげ(黒鹿毛)園馬の毛色の名、黒き斑點(の)のある毛、
 くろかはらげ(黒川原毛)園馬の毛色の名、黒味を帯(び)たる、カハラケ色の毛をなせるものを云ふ、
 くろかみ(黒髪)園漆(の)の如き光澤(の)ある女の髪(の)毛、舞曲(の)の名、
 くろがね(黒金)園鐵の一名、
 くろかはおとし(黒革絨)園黒革(の)にておとしたる、絨(の)の、
 くろき(黒木)園唐木(の)黒檀(の)の一名、
 木の皮を剥(は)く、さるもの、京都(の)の大原女(の)の頭(の)に載(か)けて、

賣り歩く薪(の)の、コト、即ち木材を一尺ほどに切り、蒸(か)して黒くなしたるもの、此の名あり、

くろきぬ(黒衣)園黒無地(の)の衣物、
 中(の)に著る衣物、
 くろくろ(黒々)園色合の殊に黒き状に云くろくわ(畔鐵)園田畑を耕(か)す人、土方(の)人夫の、コトを云ふ、
 くろくりげ(黒栗毛)園馬の毛色の名、栗毛に黒味(の)を帯(び)てる毛、
 くろくわ(黒慈姑)園草の名、慈姑の一種、多く池(の)に生ず、莖(の)は長さ二三尺ほどに達する、管状(の)を爲せるものにて、夏の中頃(の)に至りて、莖(の)先(の)に短(い)き種(の)を出す、地下に球(の)の如き圓形の塊(の)を生ず、其色黒し煮て食ふ、
 くろくひやく(九六百)園徳川時代に一文錢を勘定せしに用ひし語にて、錢(の)九十六文を以て、百文と定めたるを云ふ、
 くろけ(黒毛)園馬の毛色の名、黒くして墨の如きを云ふ、
 くろけむり(黒烟)園濃(い)き烟(の)、黒く見える烟(の)の、コトを云ふ、
 くろごま(黒胡麻)園草の名、葉は細長き卵圓形(の)にして、小さき白花を咲

くろく、くろし 黒

(ク)す、中には黄(ハ)又は紅(ベ)の色を帯
(カ)る物あり、其の種は黒色をなせる米
の小さな形のものにて、食料となる、
くろこめ(黒米)図ゲン米のコト、
くろこは(黒琥珀)図琥珀(クハ)の一種に
て、其の色黒くして、光澤(ツヤ)のある質
の固き物、
くろざ(黒)図染色(ハ)の黒きコトを云ふ
●黒き色の度合(ワ)り、
くろざん(黒棧)図サントメ皮の黒色なる
ものを云ふ、
くろざとち(黒砂糖)図精製(サ)せざる色
の黒き砂糖(サ)のコトを云ふ、
くろし(黒)図色(ハ)くあり、
くろじほ(黒潮)図海の名にて、我が
國の南海を流れてあるものにて湖(ウミ)の
色の、黒くみて見ゆるもの、又た黒瀬
川(ハナ)の稱(ナ)あり、
くろしほ(黒鹽)図創薬(サ)の一種にて、
鶴の骨に鹽(ハ)を加へて、黒焼(ヤ)した
るものを云ふ、
くろしろ(黒白)図黒と白と●轉じて善
悪(サ)のこトを云ふ語、
くろじゆす(黒襦子)図襦子(シ)の色の黒
き物を云ふ、
くろしやうぞく(黒裝束)図黒色の衣服を

くろし、くろち

着たる扮装(ハ)を云ふ、
くろしほりあぶら(黒絞油)図上等の胡麻
油(カ)の一種、黒胡椒(クハ)の實より絞
り取りたる油を云ふ、
くろざぬきやち(黒住教)圖備前國御調郡
中野村の人にて、黒住宗忠(サ)と云
ふ人の、始めて開きし神道一派の稱、
信徒非常に多し、
くろすゐ(黒水晶)図礦物(ク)の名、水
晶の一種にて、其の色黒くして光澤
(ツヤ)ある物を云ふ、
くろせがは(黒瀬川)図黒潮(ク)と同じ
其の條を見られよ、
くろぞめ(黒染)図黒色に染めるコト、又
た染められたるもの、
くろたひ(黒鯛)図魚の名、鯛の一種にて、
全身薄黒(カ)き色を呈せるもの、又た
チヌ鯛とも云ふ、
くろたな(黒棚)図座敷に飾りて、書物其
の他小道具を載(カ)せ置(カ)り籠、
黒漆(ク)で塗(カ)れるもの、
くろたま(黒玉)図黒き光澤(ツヤ)ある玉
玉烟火(カ)の、はせ能(ハ)物のコトを
云ふ ●瞳孔(ヒ)のコトを云ふ、
くろち(黒血)図牛(ウ)くされか、りし、
色の黒き血のコト、

くろち、くろひ

くろち(黒地)図織物の地合(ハ)の黒色を
呈せるものを云ふ、
くろつか(畔塚)圖田圃(ハ)のあぜのコト、
くろつち(黒土)図色の黒(ク)き土 ●焼(ヤ)
て黒く爲りたる土を云ふ、
くろつむぎ(黒纏)圖鶴(ハ)の一種にて、
其の毛色の黒き物を云ふ、
くろど(黒戸)圖昔時の御所の名にて、清
涼殿の北にて、瀧口の戸の西に在りし
と云ふ、
くろと(黒人)圖其物事に、充分に熟達(サ)ズ
あり經驗(ハ)ある人のコトを云ふ ●
其物事に能く馴し人、
くろとこしよ(黒戸御所)圖黒戸と同じ、
其の條を見られよ、
くろなまり(黒銘)圖錫(カ)の別名、
くろぬり(黒塗)圖漆(カ)にて黒く塗(カ)りた
る物、又た黒く塗るコト、
くろは(黒羽)圖羽毛(ハ)の色の黒色なる
もの、稱、
くろはちぢやち(黒八丈)圖織物の名、黒
色の絹糸を以て織りたる、無地(カ)の物
にて、地合厚し、
くろひ(黒日)圖曆(ハ)に表はれし黒星(ハ)
の日、此の日は萬事に用ひて、悪(サ)
しとて古來より忌めり、

くろふ(黒斑)圖黒きマバラのあるコト、
黒色の斑点(ハ)、
くろふ(黒生)圖俗語にて、野原(カ)に在
る草を焼きて、其の後(ハ)に生じたる草
を云ふ、
くろぶね(黒船)圖昔時西洋(カ)より來
(カ)りたる、黒く塗りたる蒸気船(サ)の
のコトを云ふ、
くろぶどち(黒葡萄)圖葡萄の粒(カ)の色
合に依りて、名附(サ)し物、其の色の黒
く紫(サ)なる物、
くろぼ(黒穢)圖稻(カ)又は麥(カ)に生じた
る寄生虫(ハ)の爲めに、害(サ)を受け
て穂の黒色に變じたる物を云ふ、
くろぼち(黒保)圖淺草紙(サ)の一名な
りと云ふ、
くろぼく(黒木)圖黒き色をなせる木材 ●
未だ皮(カ)を剥さざる木材のコトを云ふ
くろぶし(黒)圖膠(カ)の下の方の骨の圓
く、内側(カ)へ出てる部分の稱、
くろぼし(黒星)圖黒く圓く記したる標(カ)
●射的(ハ)の正中(カ)のコト、
くろぼん(黒本)圖天保文化の年代に盛ん
に行はれたる、黒き表紙(ハ)を附けた
る小説本(サ)のコト、
くろぼたん(黒牡丹)圖牡丹の一種、其の

花の色の紫(ハ)にして、黒味(ハ)ある
ものを云ふ、
くろま(黒幕)圖芝居で用ゆる黒色の幕
●陰(ハ)に居(カ)人(カ)を助け、又は指揮(カ)
などをするコトを云ふ、
くろまつ(黒松)圖木の名、松の一種にて
葉の長く太くして、樹皮(カ)の黒色を帶
(カ)てるものを云ふ、
くろまめ(黒豆)圖大豆の一種にて、其の
色の黒き物の稱、
くろまゆ(黒眉)圖墨(ハ)にて黒く引きた
る眉毛(カ)のコト、
くろまなこ(黒眼)圖黒き眼と云ふ意にて
ひまみのコトを云ふ、
くろみ(黒味)圖くろき色合(ハ)を云ふ、
くろみ(黒身)圖魚肉の中に在る黒き色を
呈(カ)せる肉(ハ)、即ち、ちあひ、
くろみは(黒味走)圖動物(カ)を办びる
黒くなる、
くろむ(黒)圖動物の黒色を帶(カ)て來(カ)
る黒くたつて來る、
くろむ(黒)圖動くるくする、
くろむぎ(黒麥)圖つかざる麥 ●蕎麥(カ)
の一種なり、
くろむらさき(黒紫)圖染色(ハ)の名、紫
に黒味(ハ)を帶(カ)てる色合、

くろめ(黒目)圖眼の中に在るひまみのコ
ト、即ちくろまなこ、
くろも(黒文字)圖小楊子(カ)ツマ楊子
の科トを云ふ、
くろもんつき(黒紋付)圖黒無地(カ)の衣
服に紋處を付たるもの、
くろやま(黒煙)圖物を焼(カ)して黒
色なせし物、
くろやま(黒山)圖人の多く寄り集(カ)つ
てるコトを云ふ、(黒山の人)、
くろゆり(黒百合)圖百合の一種、葉及び
花の形共に、百合と同じ、花の色は薄鼠
(カ)色なるより此名あり、
くろん(愚論)圖おろかな議論(カ) ●役
(ハ)にた、ぬ意見(カ)を云ふ、
くろんぼ(黒坊)圖色の黒き人 ●熱帯地方
に住む色の黒(カ)で、黒き人種の特稱 ●
芝居道(ハ)の語にて、全身に黒き衣
物を着る、黒き覆面(カ)をなし、舞臺にて
役者の助けをなす人のコトを云ふ、

(くぐわ)
くわ(和)圖おりあふ。なかなほり ●やわ
らぐ。おたやか ●したがふ。こいなふ ●
行ひのよろしきコト。正道にかなふた
くろめ、くわ 和 五六五

くわ 化、花、華、味、禍、過、渦、壩

る行ひ 心神の元氣 他(人)の發したる聲につれて聲を出す。他の人の作りたる詩に應じて詩を作る。即ち韻(詩)を合してこたふ 陣屋の正門。表門の口。

くわ(化) 箇萬物の生きてる口 人を教へ導きて善き方に引き入れる。即ち感化す ばける。かはる 天壽(命)を全ふして死す。あや、うつくしき模様。

くわ(華) 箇はな。さきたるはなの口 はやかなる口。ひかり輝くやきてうるはしき口。つやある口 體裁(文法)のよき口。かさりの口 容子(容姿)の口を云ふ。

くわ(味) 箇古の和の字、和を見よ。くわ(禍) 箇わざわひ。災難(災厄)に立ち寄る。よき口をさかゆる。責め立つる。あやまち。けが。しゆつさくしくじる。しそんする。

くわ(渦) 箇水がうづを巻てる。うづ。くわ(壩) 箇金屬を火に掛けて溶かすに用ゆる。土製の小さき壩。即ちるつ

くわ 果、窠、稜、蹠、菓、類、編、蹠

ぼの口を云ふ。くわ(果) 箇木や草に生ずる實。即ちくたもの。結果(實)の果にて、むくぬ。はて。おぼり。爲しとける。果(實)をまじき口。強き口 轉じて勝(力)の口を云ふ。

くわ(窠) 箇穴(か)を住居としてる口。即ち巢(う) 紋所の名。もかうの口を云ふ。即ち瓜(う)を横切にして、仰向(あ)たる如き形の紋。

くわ(稜) 箇草の名。麥(あ)の口を云ふ。米や麥などの實(こ)の口。くわ(蹠) 箇足の後(か)の部に出てる骨。即ちくるぶしの口を云ふ。

くわ(菓) 箇果(くだもの)に通ず。果物(くだもの)の口。特に菓子(あ)の口。くわ(類) 箇粒(つぶ)の口。轉じて總て細かき圓き玉の如き形の物。

くわ(編) 箇物を煮(ゆ)く具。なべ。油を入れる皿(わ)の如き物の稱。くわ(蹠) 箇脚の骨。特に股(もも)の骨と膝(ひざ)の骨の口を云ふ。

くわ 譚、鞞、鞞、鞞、鞞、鞞、鞞

課(か)が保安課(か)の類。ほごあひ。きまり。ためす。試みる。即ち試験(しけん)する。爲すべき事柄(こと)。即ち仕事例は日課(じつか)など。

くわ(鞞) 箇やかましう、しやべる口。かまびすしき口を云ふ。くわ(鞞) 箇革(かわ)にて、造(つく)られたる。くつの口を云ふ。

くわ(鞞) 箇おびたしき口。轉じて甚だ盛(さか)なる口。くわ(鞞) 箇人の筋肉(にく)を骨よりけづりて取る口を云ふ。けづる。切り取る。さき取る。

くわ(鞞) 箇足に穿(く)く具。革にて作られたるもの。即ちくつ。くわ(鞞) 箇糸の一種。しげ糸の口。しげ糸を以て織りたる。ぬの。

くわ(鞞) 箇ひの口。もゆる口。火の英雄(ゆうゆう)火事(か)の昔の軍隊組織の名。十人を一組(じゅうにんひと)としたるものを、一火(ひと)を云ふ。

くわ(戈) 箇武器の名。ほこの口。轉じていくさの口を云ふ。

くわ(寡) 箇少(すく)なき口。わづかなる口。勢(いき)の弱き口。人数の少(すく)なき口。昔時大名が、自分の口を他に向つて云ひし謙遜語。又た大名の臣下が我が君主の口を、他に向つて云ふ謙遜語。例は寡君(かきん)など。やもめの口を云ふ。

くわ(蘇) 箇和の古字。くわ(瓦) 箇土器の一種にて、かわら。かわらけ。素焼(すやき)の土器。いさまき。かはらぶきの家。

くわ(訛) 箇あやまる口。うそ。いつはり。口。なまり。ばげ。かはる。野にて焚(く)火。

くわ(禍) 箇さいなん。わざわひ。災害(わざわい)の口。くわ(花押) 箇昔時に用ひられたるかきはんの口。尚ほかきはんの條を見られたし。

くわ(快) 箇精神のたのしき口。心持のさわやかなる口。速(すみ)かなる口。くわ(會) 箇多くのもの。寄(よ)り集(あ)まる口。人の集まりて相談(さうだん)する。くわ、くわい、戈、寡、蘇、瓦、訛、快、會

くわ(人) 人との接見(あひまひ)する。あふ。おりの口。はづみ。凡て集(あ)り。集めたる口。總じて、即ち計算(けいさん)。

くわ(回) 箇ぐるぐる口。物のまはり。即ち周囲(まわり)をかさぬる口。即ち、たび(度)よこしま。正しからざる。おそれよける。か。まる。

くわ(晦) 箇やみ。まつくら。即ち月の姿(すがた)を表はさぬ夜(よ)層(かさね)の語にて、其の月の終りの日の口。即ちみそか。くらき口。くらし。

くわ(回) 箇(接尾)数字に附加えて、度(ど)の重(かさ)なる意(い)を表(あらわ)すに用ゆる。例は第一回第二回など。

くわ(外) 箇そこほか。はづれる。邪(よこしま)にす。のける。くわ(魁) 箇さがけ。かしら。

くわ(壞) 箇やぶれる。こはれる。くわ(夫) 箇きめる。定める。くわ(滄) 箇狭(せま)き流れ。即ち小さき川。轉じて溝(みぞ)の口。くわ(繪) 箇彩色(いろど)を施したる。み。がく口。布帛(ぬい)などへ、ぬもやうをぬひする口。又はぬもやうをぬひしたる布帛。

くわ(繪) 箇みだらなる口。ふざける。くわい、回、晦、外、魁、壞、夫、滄、繪

くわ(惡才) 長(なが)にたる。即ちわるがしこき口。云ふ。

くわ(脛) 箇料理の語。なますの口を云ふ。くわ(脛) 箇なますの口。くわ(脛) 箇双方の間(ま)に立ちて、商(か)品を賣買(うりばい)して、利益を得る人の口。即ち才取(さいと)の口。

くわ(劍) 箇さる。たつ。わる。くわ(槍) 箇赤き布帛を以て、作(つく)られたる旗。昔時陣に於て大將が部下を指揮するに用ひたるもの。弓(ゆみ)の一種。石ゆみの口。

くわ(灰) 箇物の燃(も)え盡きて後に、残りたるかす。即ちはい。あく。轉じて物の燃えて盡きたる口。

くわ(恢) 箇大にして廣き口。くわ(恢) 箇あやし。あやしむ口。不思議(ふしぎ)なる口を云ふ。

くわ(悔) 箇くやむ口。くやしむ口。後悔(こうかい)する口。あやまち。けが。しくじりの口。くわ(誨) 箇さす。おしえる。おしゆる。いましむる口。くわ(誨) 箇ふざける。たはむ。おどける口を云ふ。

くわ(蜻) 箇虫の名。さなだむし。くわい、脛、槍、劍、槍、灰、惟、五六七

しわい

働くコトを云ふ。
 くわいかく(外客) 国外國より遊びに来れる人のコトを云ふ。
 くわいかく(外殼) 国外面を覆(フ)てゐる殼(カ)の外面を覆ふて皮。
 くわいがふ(會合) 個人々の寄り集まるコト。一所に集まるコト。
 くわいかん(快感) 開心地(カウチ)のよき感覺(カウチ) 愉快(カウチ)なる心地。
 くわいがん(魁岸) 個人並(カウチ)すぐれて身軀(カウチ)の立派(カウチ)なるコト。
 くわいさよ(快樂) 愉快(カウチ)きくわだて愉快なるふるまふ。
 くわいさち(懷舊) 固昔に在(カウチ)し事を思ひ出すコトを云ふ。
 くわいさん(外勤) 固内勤(カウチ)に對する名にて、外(カウチ)の仕事(カウチ)にのみ從事(カウチ)するコトを云ふ。
 くわいさわ(繪畫) 固畫(カウチ)に同じ。
 くわいさわ(外科) 固ゲカのコト。
 くわいけい(會計) 固金錢(カウチ)の出納(カウチ)を計法(カウチ)するコト。
 くわいけい(外形) 固外部に表(カウチ)はれる形、即ちみえのコトを云ふ。
 くわいけい(塊壘) 固地中に生する壘(カウチ)の根の、特別に大なる物を云ふ、即ちジ

くわい

ヤガキ(カウチ)などの類。
 くわいけり(外教) 固我國の固有の宗教でない、外國より傳(カウチ)はり來たりたる。宗教のコトを云ふ。
 くわいけつ(怪傑) 固不思議な力量を有する萬人にすぐれたる人。
 くわいけつ(潰決) 固堤防(カウチ)などが、大水の爲めに、くづれされる。
 くわいけん(懷劍) 固懷(カウチ)にして、持ち歩く小き刀(カウチ)のコト。
 くわいけん(會見) 固互ひに面會(カウチ)するコト。接見するコト。
 くわいけん(外見) 固外(カウチ)より見るコト、即ちみえ、みてくれコト。
 くわいこう(外寇) 固外國より攻め來れる仇(カウチ)、即ち外敵。
 くわいこく(廻國) 固國々々をめぐり歩くコト、即ち遊歴(カウチ)。
 くわいこく(外國) 固その國、他國、
 くわいこん(塊根) 固地上を這(カウチ)廻りて成長する蔓草(カウチ)に生する、大なる根、即ちさつまいもの類。
 くわいこん(悔恨) 固くひうらむ。
 くわいさい(快哉) 固心地の宜(カウチ)きコトを云ふ。愉快(カウチ)なるコト。
 くわいさい(外債) 固外國より資金(カウチ)を

くわい

借(カウチ)るコト、又た借し資金。
 くわいさち(回想) 固昔時ありし事を、思ひまわすコト。舊(カウチ)を思ふ。
 くわいさち(快走) 固心持よく疾(カウチ)く走る。最も速かに行く。
 くわいさち(廻漕) 固船にて荷物を運(カウチ)ぶコトを云ふ。
 くわいさち(潰走) 固破(カウチ)れ、くづれて逃げ行く。亂れて逃げ行く。
 くわいさち(會葬) 固葬儀に列(カウチ)するコト。葬儀を送るコト。
 くわいさん(灰散) 固灰(カウチ)が風にて吹き散る如く、バラ(カウチ)に飛(カウチ)ぶコト、バラバラに散(カウチ)かり行く。
 くわいさん(潰散) 固チリ(カウチ)バラ(カウチ)に爲る、即ち四分五裂のコト。
 くわいじつ(會日) 固集會すべき其の日。會合すべき當日(カウチ)。
 くわいしや(會社) 固互ひに資本金を出し合ふて、組合(カウチ)にて事業(カウチ)を營(カウチ)むコトを云ふ。
 くわいしん(外臣) 固外國の家來(カウチ)。
 くわいじん(灰燼) 固燒(カウチ)たる後の灰(カウチ)燒て灰となつたる物。
 くわいじん(外人) 固外國の人。
 くわいせい(快晴) 固上元氣のコト、空(カウチ)

くわい

の晴れ渡れるコト。
 くわいせい(外征) 固外國を征伐(カウチ)するコトを云ふ。
 くわいせき(懷石) 固茶の湯にて、茶を備(カウチ)むる前に、客人に馳走する料理物のコトを云ふ。
 くわいせき(會席) 固人々の會合する座敷 會席料理の略 會席料理茶屋の略語
 くわいせき(外戚) 固母方の親類。
 くわいせつ(惟説) 固あやしきうわさ 條理にそはぬ物語(カウチ)。
 くわいせん(快戦) 固心持(カウチ)よき戦ひ、花々しき合戦(カウチ)のコト。
 くわいせん(會戰) 固戦ひ合ふコト、即ち合戦のコトを云ふ。
 くわいせん(廻船) 固運送船のコト。
 くわいせん(快船) 固早く進む行く船、即ちヨットのコト。
 くわいせん(外船) 固外國の船。
 くわいそち(回送) 固貨物などを送り戻(カウチ)すコト。
 くわいそち(帷僧) 固あやしき僧、いかがはしき僧侶(カウチ)のコト。
 くわいそち(外層) 固外方(カウチ)の重(カウチ)なり合つてる部を云ふ。
 くわいそく(快速) 固心持(カウチ)よく、早

くわい

(カウチ)きコトを云ふ。
 くわいそく(外族) 固母方の一族。
 くわいそふ(外祖父) 固母方の祖父のコトを云ふ。
 くわいそぼ(外祖母) 固母方の祖母のコトを云ふ。
 くわいそん(外孫) 固我が娘が他家へ婚姻(カウチ)して生みたる孫。
 くわいたい(懷胎) 固子を体内にやどす、即ちはらむコト。
 くわいたい(外帶) 固地理學の語にて、曲(カウチ)り連(カウチ)つる山脉(カウチ)の膨(カウチ)れ出てる部分の稱へ。
 くわいたち(會堂) 固人々の集合する大きな家 ①ヤソの教會堂の略。
 くわいたち(外套) 固寒氣を防ぎ又は雨(カウチ)を防(カウチ)ぐべく爲に、洋服の上へ着る毛織物の長き服(カウチ)。
 くわいたつ(迴達) 固其れから其れへ順(カウチ)順(カウチ)に物を送り届く。
 くわいたふ(回答) 固返事のコト。
 くわいたん(快談) 固心持よきばなし。心持よく物語るコト。
 くわいたん(惟談) 固化者(カウチ)の話 ①あやしきうわさ。
 くわいたん(會談) 固大勢(カウチ)集りて相談(カウチ)なごなすコト。

くわい

くわいたん(會談) 固會見して物語する、會合して物語する。
 くわいてち(外朝) 固外國の朝廷。
 くわいてち(詠嘲) 固からかひ半分に、あざけるコトを云ふ。
 くわいてき(快適) 固心地よきコト。
 くわいてき(外敵) 固外國の敵(カウチ)。
 くわいてん(回天) 固世の中の變(カウチ)り行くコトを云ふ。
 くわいてん(廻轉) 固まわるコト(車など)の。グル(カウチ)くまわる。
 くわいでん(外電) 固外國より來たれる電報(カウチ)のコトを云ふ。
 くわいとち(會頭) 固其の會の長、即ち總ざりしまりのコト。
 くわいどち(會同) 固個人々の寄り集まるコト。一所に會合するコト。
 くわいどく(會讀) 固他人集會して書物を讀みて互ひに其意義を解き明し合ふコトを云ふ。
 くわいなん(外難) 固外(カウチ)より來れる難儀(カウチ)、即ち外患(カウチ)。
 くわいなん(懷妊) 固にんしんするコト、即ち子をはらむコト。
 くわいねん(懷念) 固心に思ふてるコト、即ちこころ思ひ。

くわいはら(快報) 固心持のよき知らせの
 コト。吉報(キキョウ)。
 くわいはら(懐抱) 固こころに思ふコト、
 心にいだけるコト。
 くわいはら(廻報) 固返事のコト。廻文の
 コトを云ふ。
 くわいはら(快方) 固病氣又は創(シ)など
 の、なほりゆくコトを云ふ。
 くわいはら(外方) 固そこがわ、その方。
 そこつづらのコト。
 くわいはら(惟報) 固あやしき知せ。不思
 議なる知らせのコト。
 くわいはら(外邦) 固外國の國、
 くわいはら(外防) 固外國に對するそなへ
 防備のコト。
 くわいはら(外貌) 固表面(シ)のありさま
 ◎外に表(シ)はれる容子、
 くわいはら(外泊) 固我が家以外に泊(シ)
 るコトを云ふ。
 くわいはら(外藩) 固海(シ)を隔(シ)てたる
 領地(シ)即ち屬國(シ)。
 くわいはら(外資) 固我が國へ遊(シ)びに
 來た身分ある外國人。
 くわいはら(回復) 固元(シ)へ戻(シ)るコト
 元の通りになるコト。一旦取られたる
 物を取り戻すコト。

くわいはら(快復) 固病氣又は創などの癒
 (シ)るコト。
 くわいはら(外物) 固ほかの物。我れに見
 る又は感じる凡ての物事を云ふ。
 くわいはら(惟聞) 固あやしき評判。合點
 のゆかぬうわさのコト。
 くわいはら(廻文) 固順々に送(シ)り廻(シ)
 ず案内状のコト。
 くわいはら(外聞) 固他人の間(シ)え、即ち
 世間(シ)の評判(シ)。
 くわいはら(惟物) 固あやしきもの。ばけ
 物。尋常ならぬ性質、又は大力を具(シ)
 へ居るもの。
 くわいはら(外兵) 固外國の兵士。城の外
 (シ)を固(シ)めてある兵士、
 くわいはら(外壁) 固外(シ)のかゝる、
 くわいはら(外邊) 固そこがわ。そこまわ
 り。そこつづら、
 くわいはら(快辯) 固辯舌(シ)の達者なる
 コト。巧みにしゃべるコト。
 くわいはら(潰崩) 固くづれやぶる。
 くわいはら(快奔) 固心持よく早く走(シ)
 る。早くかけ出たす。
 くわいはら(外民) 固外國の人民、
 くわいはら(快眠) 固心持よく眠(シ)る。
 くわいはら(命盟) 固互ひに寄り集りて盟

くわいはら(結ぶ) 固(シ)を結ぶコト。
 くわいはら(晦明) 固暗(シ)きと明(シ)き
 と夜(シ)と晝(シ)と。
 くわいはら(晦冥) 固眞(シ)のやみ、まつく
 らがりのコトを云ふ。
 くわいはら(壊滅) 固メチャクにこわれ
 る。全くこわれる。
 くわいはら(灰滅) 固ほろびる。
 くわいはら(外面) 固うわべ、そこつづら、
 うわがはのコト。
 くわいはら(晦蒙) 固くらくして、四邊(シ)
 の判然(シ)とわからぬ。
 くわいはら(槐門) 固大臣の異稱、位高く
 身分貴き人の門と云ふ意義。
 くわいはら(會約) 固其の會の規約(シ)の
 コト。
 くわいはら(外用) 固外部の用事。外部に
 用ゆるコト。外用薬の略。
 くわいはら(魂毒) 固小石の多くして、歩
 き難き凸凹道(シ)。轉じて心の平か
 ならぬコトを云ふ。
 くわいはら(外來) 固そこより來るコト。◎
 外國より來るコト。
 くわいはら(快樂) 固心持よくたのしき◎
 おもしろきコト。
 くわいはら(懷落) 固こわれて落ちる◎

づれて落る。
 くわいらん(潰亂) 固くづれて、ゆちやめ
 ちやに爲る。
 くわいらん(潰爛) 固疵(シ)などの、くづれ
 てただれるコト。
 くわいらん(廻變) 固天子が行幸(シ)され
 たる先(シ)より、歸らせ給ふ。
 くわいらん(外幸) 固數學の語にて、比例
 式、左右の兩端(シ)に立つ數量を云
 ふ。
 くわいらん(外輪) 固車のそまわ。◎外のま
 わりのコト。
 くわいらん(悔吝) 固やりそなひ、しく
 じり、こづくわい(後悔)。
 くわいらん(魁壘) 固特別に用愼堅固(シ)
 なるさりで。◎人並(シ)優(シ)れて身軀
 のたくまじきコト。
 くわいらん(回曆) 固年の立ち歸(シ)りた
 るコト、即ち新年のコト。
 くわいらん(廻禮) 固家々を挨拶(シ)して
 歩くコト。
 くわいらん(瑰麗) 固殊に美しき。◎取分て
 立派(シ)なるコト。
 くわいらん(廻廊) 固まわり廊下(シ)、重
 に神社などに在るもの。
 くわいらん(回祿) 固火災に罹りて、焼失

したるコト。
 くわいらん(惟胸) 固あやしき腕まえ。◎不
 思議な伎量(シ)。
 くわいらん(外交家) 固外交の事をつか
 さざる役人、又は役向きの人。◎外交の
 事に、精(シ)しく通じてある人のコトを
 云ふ。
 くわいらん(回籍熱) 固一種の熱病(シ)。
 くわいらん(外廓) 固そこがわ。即ち
 外のかこひ。
 くわいらん(快活) 固精神さわやかにし
 て、心廣く、些(シ)たる物事を苦にせぬ
 コト。◎心持よくして、物事が苦になら
 ぬコト。◎春の陽氣の如き心持であるコ
 ト。
 くわいらん(快活) 固心持(シ)が爽(シ)
 やかにして、精神のいき／＼してあるコ
 ト。
 くわいらん(外果皮) 固凡て果物(シ)の
 一番外(シ)な、取り巻(シ)てある、薄(シ)
 き皮を云ふ。
 くわいらん(外觀) 固外の見(シ)え、上べ
 ばかりの有様(シ)のコト。
 くわいらん(外患) 固外國に對する心配
 (シ)、外國と事を争ふコト。
 くわいらん(會商) 固多くの人々が集り

て、相談(シ)するコト。
 くわいらん(廻狀) 固一つの文書に、姓
 名を連記して、其れから其れへ順次
 に持ち歩いて、事實(シ)を知らず案内
 狀の類を云ふ。
 くわいらん(外相) 固外務大臣、
 くわいらん(外交) 固他處(シ)に(シ)ひ
 置く妾。◎外國人の妾(シ)。
 くわいらん(回收) 固もどり來るコト、
 委しく云へば貸し出したる金錢の戻
 (シ)り來るを云ふ。
 くわいらん(懷柔) 固手なつけるコト。◎
 やさしく取扱ふコト、なびかせるコト
 を云ふ。
 くわいらん(外出) 固外へ出るコト、他
 處へ行くコト。
 くわいらん(會衆) 固會合せし、人々の
 くわいらん(蛔虫) 固人軀内に生(シ)す
 る虫の名、小腸内に生する、ウジ虫の如
 きものを云ふ。
 くわいらん(懷春) 固女の年頃と爲りて
 色氣(シ)つきたるコト。
 くわいらん(會食) 固多くの人が一處
 に集(シ)まりて、食事を爲すコトを云ふ
 くわいらん(會長) 固其の會の長、會頭
 (シ)。

くわい

くわいりより(外療) 図外科(サ)治療の
トを云ふ。
くわいりよく(惟力) 図あやしむべきほど
力量(リキ)のすぐれてあるコト。奇妙(イ
ミ)奇態(イ)な術。
くわいかりくわん(外交官) 図外務大臣の
監督(カウ)の下に属(カ)して、外國に出張
して、外交の事務を執(カ)る官吏の總稱
即ち全權大使、全權公使、領事、公使館
書記官。
くわいぎん(會議員) 図其の區内の大切
なる事を評議すべく爲めに其の區民よ
り選出せし議員。
くわいさうだん(懷舊談) 図昔の事を思ひ
出して話をし合ふ。
くわいけいぐわんり(會計官吏) 圖會計の
事務を執(カ)る役人。
くわいけいねんど(會計年度) 圖政府が國
家の會計を處理(カ)するに、便宜(カ)に
なる爲めに、設けたる期間のコトにて、
即ち四月一日より翌年の三月末日まで
を云ふ。
くわいけいけんざくわん(會計検査官) 圖
會計検査院の事務を執(カ)る高等の官吏。
くわいけいけんざん(會計検査院) 圖官
府の名、天皇に直隸(カ)して、國家の會

くわい

計を検査(カ)し、其の誤(カ)なきコト
又た不都合なきコトを取締(カ)る役所
を云ふ。
くわいけつびやち(瘰癧病) 圖病氣の名、
齒ぐきが紫色に腫(カ)れて、腐(カ)れたる
血が出る病氣にて、段々身軀(カ)が
やせてゆく病氣。
くわいこくこうし(外國公使) 圖我が國に
駐在(カ)せる外國の使臣。
くわいこくせん(外國船) 圖外國政府又た
外國人の所有(カ)せる船。
くわいこくひん(外國品) 圖外國の製産品
即ち舶來品(カ)。
くわいこくほりえき(外國貿易) 圖外國人
と物品の取引賣買を爲(カ)すコトを云
ふ。
くわいこくゆうひん(外國郵便) 圖外國へ
差し出し、又た外國より來る郵便物の
コト。
くわいさうてん(廻漕店) 圖廻漕の業務を
營(カ)む家。
くわいさうとひや(廻漕問屋) 圖同上。
くわいしゆにふ(外資輸入) 圖外國で借
入(カ)たる資本金が、我が國へ運び來られ
たるコト。
くわいさうきつぷ(回数切符) 圖幾回分の

くわい

切符を、一綴(カ)となして賣(カ)る物。
くわいせきちや(會席茶屋) 圖會席料理
を爲す料理店。轉じて上等の料理屋の
コト。
くわいせんとひや(廻船問屋) 圖廻漕問屋
くわいせきちり(會席料理) 圖會席茶屋
にて、拵(カ)る上等の料理のコトを云
ふ。
くわいむしより(外務省) 圖外務大臣の指
揮(カ)命令を受けて、外國に關する行政
(カ)の事務を執(カ)る役所。「長官」
くわいむだいじん(外務大臣) 圖外務省の
くわいゆうれつしや(回遊列車) 圖或る區
域内(カ)の各所を、見物とする爲めに
特に仕立たる列車。
くわいちゆうどけい(懷中時計) 圖懷中へ
入れて、持ち歩く小さき時計のコト。
くわいちゆうすずり(懷中硯) 圖懷中して
持ち歩き得るやふに墨筆と共に小箱
に入れたる硯。
くわいちゆうかがみ(懷中鏡) 圖懷中へ入
れて持ち歩く、小形の鏡のコトを云ふ。
くわいちゆうもの(懷中物) 圖懷中(カ)に
入れて、持ち歩く物を云ふ。重に錢入の
コトを云ふ。
くわいちゆうしるこ(懷中汁粉) 圖一種の

五七四

くわい、くわう、侏、桃、晃、恍

菓子にて、餡(カ)を干してカラ／＼に爲
したる物を、最中(カ)の皮にて包みた
る物、之を熱湯(カ)にて溶(カ)ば汁粉と
なる。
くわいふくこうげき(回復攻撃) 圖軍隊の
語にて、占領されたる陣地などを取り
戻(カ)す爲めに、攻めたつるコト。
くわいよりやく(外用薬) 圖外部より用ゆ
る薬、即ちぬり薬など。
くわいらいぐわんじや(外来患者) 圖診察
(カ)を受に來る病人のコト、入院患者
に對しての稱。
くわいろばい(懷爐灰) 圖懷爐の内へ火を
つけて入れる一種の灰にて、茄(カ)の
莖(カ)などを黒焼(カ)にしたる物を紙
の袋へ入れたる物。
くわい(侏) 圖盛大(カ)なるさま。
くわい(桃) 圖絹(カ)のわた、眞綿(カ)絹
糸(カ)にて細かく織(カ)たるもの、即ち
ぬめのコトを云ふ。
くわい(晃) 圖明(カ)かなるコト。轉じて
光(カ)り輝(カ)やけるコト。キラキラし
てゐるコトを云ふ。
くわい(恍) 圖深遠(カ)にして知れ難きコ
ト。うつさりにする。見されて氣を失
ふコトを云ふ。

くわう、洗、幌、航、棧、横、鏡、演、黄

くわう(洗) 圖甚だしく怒れるさま。強き
ありさま。水の勢ひ強く湧き出で、又
は飛び散る水の光(カ)のコトを云ひ表
はす語。
くわう(幌) 圖幕(カ)さばりのコト。雨や
雪などを防ぐ覆(カ)ひ物、即ちほろのコ
トを云ふ。
くわう(航) 圖牛の角(カ)で作したる盃(カ)
コト。剛直(カ)なるコト。
くわう(横) 圖書物を載(カ)せて讀む臺、即ち
見臺(カ)窓(カ)のコト。
くわう(横) 圖巾(カ)よこそばかたは
ら。よこになつてゐる。よこに倒(カ)れて
ゐる。我がまゝよこしま。不埒(カ)な
るコト。
くわう(鏡) 圖大なる釣鐘(カ)轉じて鐘
の鳴(カ)るひびき。
くわう(演) 圖水の溜(カ)つてある處、即ち
池沼(カ)のコト。池などの廣くして、
水の深き狀(カ)を云ふ。
くわう(黄) 圖色の名、きいろのコト。さば
みたるもの又はきいろきもの。黄金(カ)
チのコト。金(カ)年のゆかぬコト。幼
馬(カ)四きいろの毛の多く交(カ)つてゐる
馬。老人の髪(カ)の毛、即ち金髮(カ)消
化器病の名、黄疸(カ)の略。

くわう、皇、惶、陸、追、徨、五七五

くわう(皇) 圖天子。君主のコト。總て天
子の御事に冠(カ)ちせて、尊敬(カ)の意
を表はすに用ゆる語、例ば皇居、皇族。
皇室(カ)美麗(カ)なるさま。大いに美し
き狀(カ)を云ふ。
くわう(惶) 圖おそるコト。かしこまり
たてまつるコトを云ふ。
くわう(陸) 圖水のなき池や堀などを云ふ
即ちから堀のコトを云ふ。
くわう(追) 圖てすき。ひまのコト。
くわう(徨) 圖ブラ／＼と歩くコト。そ
ろ歩き。さまよひのコト。
くわう(陸) 圖城のから堀のコト。
くわう(陸) 圖甚だしく光る。キラキラと
輝(カ)やくコト。
くわう(蝗) 圖虫の名、いなご。
くわう(鐘) 圖大きなまさかり。
くわう(喧) 圖子供の泣き叫ぶ聲。轉じて
やかましき、さわがしき。
くわう(艦) 圖大なる和船。多數の人を乗
(カ)る渡し船のコト。
くわう(葦) 圖笛(カ)の一種の名。竹のコ
ト。竹の群(カ)がり生へてる處、即ちた
かむら。竹やぶ。
くわう(荒) 圖あれる。やぶれる。すさぶ。

くわう

くわうびん(荒原) 固あはれてたる野原(ハ)

くわうごう(皇后) 固天皇の御嫡妃

くわうごう(黄口) 固羅鳥(ハ)の嘴(ハ)の黄色を呈してゐるコト

くわうごう(皇國) 固大日本帝國

くわうごう(廣告) 固世上一般の人人にある物事(ハ)を告げ知らせるコトを云ふ

くわうごう(新聞紙) 又は雑誌などに記載(ハ)して告げ知らせるコト

くわうごう(恍惚) 固物に見されて呆然(ハ)とせざるコト

くわうごう(黄昏) 固暮(ハ)れ方、たそがれ日暮(ハ)

くわうごう(宏濟) 固あまねく、世をすくふコト。世の爲めに盡す

くわうごう(光彩) 固あてやかなる光

くわうごう(鑛山) 固鑛物の生ずる山

くわうごう(皇室) 固天子の御家、天皇の御一門の事を申す

くわうごう(曠日) 固あだに日を過(ハ)すコト。遊びて暮(ハ)す

くわうごう(黄塵) 固うるさき世間の事をくわうらん(黄人) 固黄色人種の略

くわう

くわうじん(荒神) 固神の名、三寶(ハ)荒神の略語にて、靈(ハ)を守らせ給ふ神

くわうせい(荒政) 固おそろえたる政(ハ)の亂(ハ)れたる政事の事

くわうせん(轟然) 固さるるきわたる。大なる聲のコト

くわうせん(光線) 固燃(ハ)る火より發する光(ハ)

くわうせん(鑛泉) 固鑛物質を含む(ハ)んで湧き出る水を云ふ、其の種類極(ハ)めて多し

くわうせん(黄泉) 固地の下の奥の方を云ふ

くわうせん(皇宗) 固天子の御代々(ハ)の御先祖のコトを云ふ

くわうせん(皇族) 固天皇の御一族の御事

くわうせん(宏壯) 固取り分けて立派(ハ)なるコト

くわうせん(皇孫) 固天子の御まご

くわうせん(廣大) 固廣く大なる

くわうせん(黄道) 固太陽のめぐる軌道(ハ)日柄(ハ)の吉きコト

くわうせん(光澤) 固色が光線の反射(ハ)に依りて、輝(ハ)くコト、即ちつや

くわうせん(輝) 固つや

くわうせん(輝) 固つや

くわうせん(輝) 固つや

くわうせん(輝) 固つや

くわうせん(輝) 固つや

くわう

くわうたん(荒誕) 固うそ事、いつはりの言葉、てたらめのばなし

くわうたん(荒談) 固てたらめの話、うそ物語(ハ)のコト

くわうちよ(皇儲) 固皇太子の御事を申す

くわうちよ(皇女) 固天子の御姫様

くわうちん(轟沈) 固軍艦が砲彈(ハ)を受けて、打ち沈(ハ)められるコト、又た軍艦が火薬(ハ)の破裂(ハ)に依りて沈むコトを云ふ

くわうてい(皇帝) 固天子の御事

くわうてつ(荒鐵) 固銅の一名

くわうてん(皇典) 固我が國の書物

くわうてん(荒田) 固あれたる田地

くわうてん(皇天) 固上天のコト、即ち天の上

くわうとう(皇統) 固天子の御血筋

くわうとう(黄金) 固金鵬の名、銅の一種にて、稍(ハ)黄金(ハ)の如き色澤を呈し居る物、又は真鍮(ハ)の別名なりとも云ふ

くわうとう(荒唐) 固てたらめの言葉(ハ)でほうだいのコト

くわうとう(皇徳) 固天子の御盛徳

くわうとう(鑛毒) 固鑛物中に、含(ハ)まれている毒(ハ)の毒分のコト

くわう

くわうねん(荒年) 固五穀殊に米の出來のあしき年。凶年(ハ)

くわうはい(荒廢) 固あれ果(ハ)て見る影(ハ)もなきコトを云ふ

くわうはい(紅梅) 固十分に熟(ハ)して黄色を呈して來た梅の實(ハ)

くわうはい(黄白) 固金線の異稱

くわうはい(廣漠) 固廣くして、はてしなき。極(ハ)めて廣きコト

くわうはい(黄髮) 固七十歳以上にして、髪の毛の黄色を呈し來りしもの。老人の髪の毛のコト

くわうはい(光風) 固雨の晴れたる後に、ソヨ吹く心地(ハ)よき風

くわうはい(鑛物) 固地中の岩石(ハ)を指(ハ)して、其の實質(ハ)の種類を云ふ、即ち金銀(ハ)銅鐵(ハ)土砂(ハ)玉石(ハ)等の類

くわうはい(廣表) 固横巾(ハ)と長さとのコトを云ふ

くわうはい(光世) 固光の發散(ハ)せる状態

くわうはい(光明) 固光のかがやく

くわうはい(黄門) 固官名にて、中納言の別名、即ち水戸黄門など

くわうはい(黄楊) 固ツゲのコト

くわう

くわうらい(光來) 固人の來るコトを費(ハ)びて云ふ言葉

くわうらい(皇靈) 固御代々の天皇の靈魂(ハ)たましい

くわうらい(宏麗) 固すばらしくうるはしき。極めてきれひなる

くわうらい(皇皇) 固最(ハ)も立派なるコト

くわうらい(廣廣) 固ひろびろとしてある状態に云ふ語

くわうらい(煌煌) 固まばゆく光(ハ)つて有る様(ハ)を云ふ

くわうらい(轟轟) 固さるるき渡つてる音(ハ)のコトを云ふ

くわうらい(黄卷) 固書物のコトを云ふ

くわうらい(荒凶) 固作物(ハ)の出來のあしきコトを云ふ

くわうらい(皇極) 固天子の御位

くわうらい(皇極) 固天子の御位

くわうらい(皇宮) 固天子の住はせらるるお宮、即ち御所(ハ)

くわうらい(廣軌) 固廣軌にな

くわう

くわうらじ(黄口兒) 固凡て物事に經驗(ハ)のなき人をあざけて云ふ語

くわうらじ(皇后宮) 固皇后のあまします御殿(ハ)のコト

くわうらじ(鑛山師) 固鑛山より鑛物を掘り取るを業(ハ)せる人

くわうらじ(鑛山學) 固鑛山の事に關する學問(ハ)のコト

くわうらじ(鑛山局) 固農商務省内に在る一局にて、鑛業に關する凡ての事務を司(ハ)るところ

くわうらじ(皇室費) 固皇室に關する諸入費(ハ)のコト

くわうらじ(皇上) 固天子の御事を申す

くわうらじ(荒神松) 固荒神に供(ハ)する松の枝のコト

くわうらじ(荒神幣) 固かまごを掃除(ハ)する小さきほうぎ

くわうらじ(皇室財産) 固皇室の御有(ハ)に屬する財産

くわうらじ(皇室典範) 固憲法と相對して、我國法令の最上位に在るものにて、皇位の繼承其の他皇室に關する諸規則を定められたる我が國の大典

くわうらじ(黄色火藥) 固火藥

くわう

の名にて、爆發力(バウワウ)の勝(ハレ)れて強
 き、黄色を帯(ヒ)てゐる火薬。
 くわうしよくじんしゆ(黄色人種) 罔肌色
 (ハダ)の黄色なる人種のコト、日本人支
 那人など此の種に屬す。
 くわうたいし(皇太子) 罔天皇の御位(ミタ)
 を、つがせ給ふ御方と定まれる皇子の
 御事を申す語。
 くわうたいご(皇太后) 罔先帝の皇后の
 御事を申す語。
 くわうたいご(皇太后宮) 罔皇太后
 のあまします御殿。
 くわうたうさちじつ(黄道吉日) 罔總て物
 事を爲し行ふに宜き日。
 くわうてつ(黄鐵鐵) 罔石の一種に
 て、眞鍮(シヤウ)の如き色を爲せる物、化
 學上より云へば硫黄(リウワウ)と鐵の化合せ
 る物。
 くわうぶつ(鑛物學) 罔凡ての鑛物の
 性状及び其の形等を研究(ケンキウ)する學問
 くわうふちせいびつ(光風霽月) 罔物事に
 屈託なく、精神の朗(リウ)して、至極(シヨク)
 暢氣(チヤウキ)なる状。
 くわうみやう(光明) 罔輝(キ)やける光り
 勢の強きコト 佛(ブツ)が俗界(ソコ)に慈悲
 (シイ)善根(ゼン)を授(ウケ)け給ふ勢(イセ)の科ト

くわう、くわん

を云ふ佛語。
 くわうみやう(鑛脈) 罔山中の岩石の割れ
 目へ、其の山に在る鑛物の溶(ト)けたる物
 が、流れ來て填(ミ)たる筋(スジ)のコトを
 云ふ、此(コト)に依りて此の山に、如何な
 る鑛物があるかを知り得らるる。
 くわうみやうじざい(光明時代) 罔國家の
 太平無事に治(チ)まつてゐる安穩(アンオン)
 なる時世のコトを云ふ。
 くわうりやう(荒涼) 罔おほは、
 くわうりやう(荒野) 罔野原(ノ)の状態(ケ
 ヲ)なごの、物(モノ)すこきコトを云ふ。
 くわうれいでん(皇靈殿) 罔宮中に於て皇
 宗の皇靈を祭(マツル)らせ給ふ御殿。
 くわうれいさい(皇靈祭) 罔大祭日の名、
 宮中に於て皇宗の神靈を祀(マツル)らせ給ふ日
 春(ハル)と秋(アキ)の彼岸(ヒガン)の中に行はせらる
 即ち春季皇靈祭秋季皇靈祭是なり。
 くわえい(花英) 罔花(ハナ)花(ハナ)ぶき、
 くわえう(火曜) 罔火曜日の略にて、月曜
 日の翌(ツギ)日のコト。「を云ふ、
 くわえん(瓦窓) 罔瓦を焼くかまごの科ト
 うの科トを云ふ。
 くわえん(火焔) 罔燃(ヒ)上りたる火(ヒ)の
 くわえん(花園) 罔花の植えてある畑(ハタケ)

くわえ、くわか

即ち花その科ト、
 くわえん(臥烟) 罔性質(シヤク)荒(ハル)く品行
 不正にして、物の道理を辨(ワカ)まへざる
 者を、嘲(ウツ)りて云ふに用ゆる語、無賴
 (ムライ)の科ト、
 くわえんたいこ(火焔太鼓) 罔舞樂(マユガク)に
 用ゆる一種の太鼓にて、足のある臺(イ
 の)の上に、胴(タテ)の中の狭(ヒヤウ)き、兩面に巴
 形(ハツタテ)又は龍(リウ)の形(カタチ)なごを、彩色(シキ
 シ)にて描(エガ)たる太鼓を吊(ツル)つて、其の
 周圍に炎(ヒ)たる燃(ヒ)上つてゐる形を、刻
 たる物を、つけたるものを云ふ。
 くわち(花押) 罔昔時印判の代りに、一
 定したる形の物を、名前の下へ書て、
 證據(コト)となしたるもの、即ちかきはんの
 コト、
 くわさく(瓦屋) 罔瓦にて、屋根をふきた
 る家の科ト、
 くわか(畫家) 罔畫を描(エガ)く人 畫を描
 くを業(ウヂ)とせる人、
 くわかい(瓦解) 罔瓦の碎(クヰ)ける如くに
 物事がメチャメチャになる科トを云ふ
 語。「の科ト、
 くわがい(花街) 罔色里(シキリ)、即ち遊女町
 くわがい(禍害) 罔さいなん、わさわわ、
 くわち(花梗) 罔植物學上の語にて、花

くわか

の附てる柄(カマ)即ち花の心棒(シノ)とな
 つてゐる、細(ホソ)き莖(カマ)。
 くわがふ(化合) 罔化學の語にて、二種以
 上の物質が、互(タガ)ひに結合(ケツゴウ)して、一つの
 形(カタチ)の物(モノ)と成る科ト、假令(カレバ)牛(ウシ)と曹(ソウ)達
 (ダツ)を混(マシ)して熱(ネツ)すれば、石鹼(セッケン)
 と成るが如き類。
 くわがら(華甲) 罔本卦(ホンカ)にかへりしコ
 ト、即ち六十一歳に達(タツ)せる科トを云
 ふ、遺(イ)層(ソウ)の科ト、
 くわがら(花香) 罔花の蕊(ヒメ)より、發する
 香氣(カウキ)。
 くわがく(畫學) 罔畫を描く伎術(ギジュツ)。
 くわがく(化學) 罔理學(リガク)の一部に 罔
 (リ)して、凡(ソト)て物體(ブツテイ)の實質(シツシツ)の變
 化(ヘン)を、研究(ケンキウ)する學問、
 くわがく(科學) 罔萬般(マンパン)の原理、及び
 萬物(マンブツ)の變化(ヘン)及び人類社會に
 於ける、互(タガ)互(タガ)の權利義務等に、關する學
 問の科トを云ふ、
 くわかん(果敢) 罔決斷力の強き科ト 物
 事を思ひ切つてなす科ト、
 くわがふ(和合) 罔わごうとも云ふ、まぜ
 て一所にする 罔おりあひのよき、なご
 のよきコト、
 くわがくし(畫學紙) 罔西洋産の紙の名に

くわか、くわき

て、其の質(シツ)脆(ヒヤウ)く、且つ粗末(ソボ)なり、鉛筆
 (エン)にて、圖畫を描(エガ)くに用ひらるる
 物、
 くわがくしや(化學者) 罔化學の學理に精
 通(トウ)せる人 化學を學ぶ人、
 くわがくさや(化學作用) 罔物質(ブツツク)が
 變化(ヘン)する働き(カキ)を起(オコ)す科トを云
 ふ、委(オ)しく云へば、物質が互(タガ)ひに化合し
 て、一つの物質と爲たり、又は物質が互
 ひに分解して、別々の物質と爲るはた
 らき、
 くわがくてきへんくわ(化學的變化) 罔化
 學的作用に依りて、或る物質が全く異
 なりたる性質の物と爲る科トを云ふ、
 くわき(火氣) 罔火の勢、火の力、
 くわき(火器) 罔火を燃(ヒ)し又は火を盛
 (カ)てる器物、即ち火鉢(ヒバチ)カンテキの類 火
 を用ひて事を爲す器具、即ち大砲(ダイポウ)小銃
 又はライゴ(ライゴ)などの類、
 くわき(花卉) 罔花と云ふ科トにて、委(シ
 しく)云へば、觀(ミ)て樂(タノシ)しむべき花の咲
 (ハ)く木、花の咲く草の科トを云ふ、
 くわき(花器) 罔花いけの科ト、
 くわき(禍機) 罔禍(ワ)の生ずる原因 禍
 の生ずるしほ、おりの科ト、
 くわき(瓦器) 罔土皿(ツチハ)に同じ、

くわき、くわく

くわきり(蝸牛) 罔虫の名、カタツムリの
 コト、
 くわきふ(火急) 罔至急(シヨク)火急、
 くわきよ(寔居) 罔やもめぐらし、
 くわく(鞆) 罔革(カウ)に似せて拵(ツクリ)たる
 もの、模造皮(モゾウカウ)の科ト、
 くわく(獲) 罔得(トク)る捕(ツ)る科ト、又
 た捕(ツ)たる物、えもの、
 くわく(獲) 罔獸類を捕ふる具、即ちわな
 の科トを云ふ、
 くわく(獲) 罔稻(イネ)を刈る科ト、五穀類を
 取り入れる科ト、
 くわく(懷) 罔おごるきて胸先(ムネサキ)のさわ
 き立つる科トを云ふ、
 くわく(漚) 罔水が激(ヒ)する状(カタチ)を云ふ
 雨(アメ)だれの落(フ)る状(カタチ)を云ふ 轉じて
 散(チ)かる、ちらばる 保護(ゴ)するコ
 トを云ふ、
 くわく(噴) 罔しゃべり立てい、やかまし
 きコト 非常(ヒョウ)に驚(オドロ)きたる時に、思はず
 發する聲(コエ)の科ト、
 くわく(鑊) 罔足のなき鼎(ヒツ) 大なる鍋
 (カ) 昔時罪人を煮(ヒ)殺したる時に用
 ひし釜(カ)。
 くわく(擴) 罔ひろめる科ト、押しひろむ
 る科ト、大きくする、

くわく

くわく(漢) 弓矢を張りて、放(た)つたこと
 する状(を)を云ふ語。
 くわく(鏝) 器具の名、特別に大なるす
 きのこトを云ふ。
 くわく(擲) 図なりつつけて奪ひ取る。つ
 かむ。つかみ取る。
 くわく(擲) 図驚きて跳(は)ぬる。びつくり
 て視るこトを云ふ。
 くわく(擲) 図はれる。おどる。飛ぶ。速か
 に歩み行くこト。
 くわく(霍) 図雲の盛んに出てる状を云ふ
 ①速(や)か、俄か、突然②烈(た)しく飛
 び散るこト。
 くわく(霍) 図反(ひ)す①手の掌(て)を反対
 にする②相談(わ)する。はかるこトを
 云ふ語。
 くわく(藿) 図草の名、かたりぐさ①わか
 き豆のこト②豆の木の葉(は)のこトを
 云ふ。
 くわく(割) 図さく。きざむ。くぎる。けづ
 る①器具の名、錐(い)。
 くわく(鹹) 図首(く)を切り落とすこト、又は
 切り落したる首②耳を切り落とすこト、
 又は切り落せし耳(み)。
 くわく(畫) 図分(わ)る。區切(わ)つたをつける
 こト①明かなるこト、正(た)しきこト②

くわく

はかる。はかりごと①漢字を書くに筆
 (つ)の一筆(た)なるこトを云ふ、假ば
 大の字は三畫、天の字は四畫など云
 ぶが如し。
 くわく(擲) 図ひつき、概を納(め)める白木
 (た)の箱を云ふ。
 くわく(郭) 図くるわに同じ①城(しろ)のこ
 ②火(くわ)を發(は)しきする目的
 に用ゆる器具。
 くわく(臥) 図臥(ふ)に用ゆる道具、即ち夜
 具及び枕(まくら)。
 くわく(火) 図火のひかり。
 くわく(郭) 図鳥の名、ホトトギス
 の一種、其の形はホトトギスと異(ちが)ひ
 たらぬも、稍や大きく、樹枝に在りて好
 (た)んで毛虫の類を捕へて食ふもの、益
 鳥なり。
 くわく(畫) 図計(けい)を廻らす、工
 夫(つ)するこト。
 くわく(散) 図物の廣(ひろ)がり散(ち)ら
 ばるこト。
 くわく(擲) 図つかみて取るこトを
 くわく(擲) 図苦(く)むる物を拂
 (か)ひ去るこト①亂雑(らんざつ)に爲つてる
 事を調(しら)えて正しくなすこト、
 くわく(畫) 図キツパリと調(しら)ふ

くわく

てめて亂(らん)れざるこト。
 くわく(大) 図廣く大きい①取り廣
 げて大きくなす。
 くわく(大) 圖部下の意見のみを聞
 きて、自己(じ)の意見を附せず承諾す
 るこト①上官が部下の案文(あんぶん)に、首
 目判(しらべ)を捺すこト。
 くわく(大) 圖我れの所有物を爲す
 我が手に入るこト。
 くわく(内) 圖くるわの内①遊廓(あそび)の
 くわく(内) 圖一定の區域(くわい)を立
 てて、山林の木材(まき)を伐(き)り採(と)る
 こト。
 くわく(大) 圖漢字の字引の編み立
 て方、漢字の字畫の數に依りて、文字を
 排列(らんべい)せるもの。
 くわく(霍) 圖病氣の名、コレラ病
 の如く、烈(た)しく吐き瀉(しゃ)する病
 氣。
 くわく(花) 圖花のくるわ、即ち色
 町。遊女町のこトを云ふ。
 くわく(花) 圖花びら。
 くわく(花) 圖年老(ねんらう)て勢(いき)の
 盛(さか)んにして、元氣(げんき)の強(つよ)き状に
 云ふ語。
 くわく(花) 圖ひろむる。

くわく

くわく(聲) 圖聲器(せい) 圖器械の名、發す
 る音聲を遠方まで、達し得せしむるや
 ぶに、口(くち)で用ゆるラツパの口の
 如き器械を云ふ。
 くわく(火) 圖石綿(せきわた)を引き
 延(の)ばして、糸(いと)として織りたる布(ぬ)を
 火を防ぐ力に富む。
 くわく(區) 圖わかつこト①便利上にて
 土地其他の物事を、細かく分(わ)ちた
 るこト又は其のもの。
 くわく(花) 圖花物の植(うゑ)られてあ
 る畦(あぜ)に花(はな)ばたけ。
 くわく(果) 圖物事を、テキパキと定
 めるこトを云ふ。
 くわく(過) 圖云ひすこし。
 くわく(訛) 圖出たらめの評判(ひやう)①偽(いつはり)
 じりの風説(ふうせつ)②なまり言葉(なまりごた)③即ち一
 地方で云ひはやす、言語(ごんご)④方言(ひょうげん)
 のこト。
 くわく(真) 圖くだらぬ事をしやべら
 ぬ性質(しやうせつ)①おもきこト。
 くわく(瓦) 圖瓦にて作りたる硯(いん)石
 石作(いし)に對しての稱。
 くわく(禍) 圖禍の起る原因。
 くわく(過) 圖すぎ去りしこト①過ぎ去
 りし年月又は時②前の世、即ち自己の

くわく

生れ出でざる前の時代①文法上の語に
 て、過ぎ去りし動作(どうさく)を示す動詞又
 は助動詞。
 くわく(訛) 圖なまり言葉(なまりごた)、なまつ
 てる言葉。
 くわく(過) 圖まちがひ、あやまり。
 くわく(火) 圖火山の噴火口。
 くわく(瓦) 圖瓦を焼く職人。
 くわく(畫) 圖畫を描く業(わざ)せる人
 ぶかきのこトを云ふ。
 くわく(過) 圖さきほど、先刻。
 くわく(禍) 圖わざわひの基(もと)①禍
 の因で生ぜる原因(いん)。
 くわく(火) 圖火山の噴火口の
 (つ)と、其の外廓(ぐわく)との間(ま)に在る
 低(ひ)き土地のこト。
 くわく(花) 圖ミカゲ石のこト
 を云ふ。
 くわく(火) 圖地理學の語、火山
 の噴火(ふんか)したる、其の後へ水の溜(たまり)
 りて、湖水の如く爲れるものを云ふ。
 くわく(過) 圖寺院にて、檀家
 の死者の姓名を記し置く帳面①先祖代
 々の死者の年月日を記し置く帳面。
 くわく(畫) 圖かけじ掛のこト。
 くわく(禍) 圖災難のこト。

くわく

くわく(貨) 圖たからせ、金錢。
 くわく(火) 圖家屋の燃焼(もや)するこ
 ト、即ち火事。
 くわく(花) 圖美しき花を咲せる草物
 のこトを云ふ語。
 くわく(畫) 圖えさうのこトにて、即
 ち描きたる像。
 くわく(火) 圖死骸を焼きて、骨のみ
 を葬(むす)むるこト。
 くわく(畫) 圖畫の上に、其の畫を張
 りて書く文句。
 くわく(火) 圖煙又は火を噴き出す山
 のこトを云ふ語。
 くわく(花) 圖花かんざし。
 くわく(火) 圖火葬(くわ)を行ふ場屋(ばや)の
 (つ)のこトを云ふ。
 くわく(火) 圖石の種類(しゆしゆ)に
 て、火成岩(かせいがん)の一種。
 くわく(火) 圖火山砂①火山灰の固(かた)
 まりて、砂利(すざり)の如く爲りし物。
 くわく(火) 圖火山灰①火山の噴火口
 より噴(ふ)き出したる灰。
 くわく(火) 圖火災保險①火災の一種
 火災に依りて、生じたる損害(そんがい)を辨
 償(べんばい)するこトを目的とせる保險の
 こト。

くわさ、くわし

くわさんぢしん(火山地震)図火山が破裂(わ)したる際に、生(せい)する地震のコトを云ふ。
 くわし(花絲)図植物學上の語にて、雄蕊(めいずい)の花粉(ちゆうじん)を附(つ)ける柄(がら)のト細き糸の如きもの。
 くわし(畫師)圖畫を描く人。
 くわじ(華事)圖はてなコト、はなやかなコト。
 くわじ(火事)圖人家其他建物のもゆるコト、火災のコト。
 くわし(菓子)圖食事以外に食(た)ふ、食品の總稱にて、一般に小麥粉、餅(もち)等に小豆(あずき)砂糖又は玉子などを合せて、味を甘(あま)く製したる物、種類極(たぎ)めて多し。
 くわじゆ(果汁)圖凡ての果實(くだもの)にある汁(じゅう)のコトを云ふ。
 くわしき(菓子器)圖菓子を盛る器物(うつ)のコトを云ふ總稱。
 くわしし(菓子師)圖菓子を製造する職人。
 くわしつ(過失)圖あやまち、そそ、
 くわじつ(過日)圖此のほど、こないだ、先日(せんじつ)、
 くわしつ(畫室)圖畫工が畫を描く部屋のコトを云ふ。

くわし

くわじつ(果實)圖植物の實(み)即ちくだもの法律上の語にて、基礎(きそ)の物より、生じたる利益、即ち利息(りそく)などのコトを云ふ。
 くわしや(菓子屋)圖菓子を作り、又は菓子を賣る家。
 くわしや(華奢)圖はてやか、はなやか、かざり、おごるコト。
 くわしや(貨車)圖鐵道にて、荷物のみを積み運ぶ車を云ふ。
 くわしや(火車)圖火の力に依りて、走る車と云ふ意にて、汽車のコト。性根(せいこん)の悪き婆(ば)のトを云ふ。
 くわしや(火舎)圖煙草盆(たばこ)などの、火入(ひいれ)のコトを云ふ。
 くわしよ(華胥)圖支那の故事にて、ひるねと云ふコト。
 くわしゆ(貨主)圖荷主(にじ)、
 くわしゆ(火酒)圖燒酎(ちゅう)のコト。
 くわしよ(過所)圖關所(せき)などを、通り過る切手(きり)のコト。
 くわじゆ(花樹)圖美しき花の咲く木。
 くわじゆ(果樹)圖果實(くだもの)の生する樹のコトを云ふ。
 くわしん(花信)圖花が咲きたり云ふ知(し)らせ、
 くわしん(花神)圖花の靈(たま)。

くわし

くわしん(花心)圖花の心(こゝ)たるもの、即ち蕊(めいずい)のトを云ふ。轉じて美しくき女の心と云ふ意。
 くわしん(花唇)圖花の開き初めたるを云ふ。
 くわしん(禍心)圖禍害を起さんたくみる心(こゝ)悪意(あくい)や害意(がい)。
 くわしん(化身)圖神佛(しんぶつ)の性能(せいねい)を受けて、此の世(よ)へ生れて來たと云ふコト、うまれかわり。
 くわじん(尊人)圖大名などが自分の事を他人に向つて云ふ謙遜語(けんそんご)。
 くわしいれ(菓子入)圖菓子を入れて置く凡ての器(うつ)のコト。
 くわしをり(菓子折)圖菓子類を進物(まが)と爲すべく爲めに、入れる折箱(おれか)紙、木、など種々あり。
 くわしがた(菓子型)圖菓子を製造するに用ゆる種々の型(かた)を云ふ。
 くわしざら(菓子皿)圖菓子を盛る陶器製の皿のコトを云ふ。
 くわしぼこ(菓子箱)圖菓子を入れて置く菓子折(おれ)のコト。
 くわしばん(菓子麵)圖パンに甘き味を附けし物、又は中へ餡(あん)を入れし物。
 くわしぼん(菓子盆)圖菓子を盛る盆(ひら)。

頂(たか)に漆器(しやくき)にて製さる。
 くわいしゆ(會主)圖其の會を設(た)げたる發起人(きしやく)のコト。
 くわしよち(臥床)圖ねど、病氣にて床(とこ)に就(つ)くコト。
 くわしよち(火傷)圖火にて身軀を損(こ)じたるコト、即ちやけど。
 くわしよち(過賞)圖ほめすぎる。
 くわじよち(過剩)圖多すぎる。あまつてあるコトを云ふ。
 くわしよち(過食)圖食ひすぎ。
 くわしよち(華燭)圖はなやかなる燭臺(しやくたい)と云ふ意にて、婚姻(こんいん)の事を云ふ。
 くわしよち(貨殖)圖財産(ざいぜん)を増(ま)しふやす。事業を盛大にする。
 くわしちゆち(菓子重)圖菓子を入れて置く、小さき重箱(じゆう)。
 くわしつざい(過失罪)圖不注意に依りて人に損害を與(あた)へたる罪。
 くわじばおち(火事羽織)圖徳川時代に、武家が火事場へ出掛る時に、用ひたりし陣羽織(じんう)の如きもの。
 くわしんふる(花信風)圖梅の花の咲(さ)く頃より、吹き初めて、夏の初めまでに吹く風のコトを云ふ。
 くわしよく(華燭典)圖婚禮(こんいん)のくわし、くわし

儀式(ぎし)のコトを云ふ。
 くわじしよち(火事裝束)圖火事場へ出掛る衣服を着(き)て、仕度(しど)をせしコトを云ふ、重に消防に云ふ語。
 くわす(化)圖動物が其の形を變(か)へす。卵(たまご)が雛(ひな)になる。人の徳(とく)にあやかりて善くなる。
 くわす(和)圖動物の形をかへさせる。卵(たまご)を母鶏(はは)に抱(かか)せて、雛(ひな)にさせる。徳(とく)を數(かず)て人を善道(ぜんどう)にまじりかす。
 くわす(和)圖動物の形をかへさせる。よくす。やわらぐ、おりあふ。附き從(したが)ふて事をなす。他人の作りたる詩の韻(うた)に合せて、詩を作(つく)る。仲直(なかつち)の出来(き)る。
 くわす(和)圖動物の形をかへさせる。れんごろにする。おだやかにする。ささのへる。一所(いここ)にする。まぜあわする。
 くわす(課)圖動物ありて、負擔(りゆう)する、おはする。
 くわす(訛)圖動物なまる、あやまる。
 くわす(科)圖動物刑罰(けいばつ)に處する。
 くわす(臥)圖動物、ねむる、ふす、横(よこ)になる。
 くわせい(和聲)圖やさしき聲。多人數(たにんすう)のくわし、くわせ

一所(いここ)に爲りて、發(は)する聲、即ち甲の人の聲に合して、云ひ出すコトを云ふ。
 くわせい(化成)圖異なりたる形の物と成る。他物と化合して、一つの物と成るコトを云ふ。
 くわせい(化生)圖おひたち、そだつ。生物(せいぶつ)が、其の形を變(か)へる。
 くわせい(火勢)圖燒けつつある火の勢(いきほ)。
 くわせい(課税)圖税をわりあてるコト。官府へ收(こ)むべき税金。
 くわせち(過小)圖小さすぎる。
 くわせち(過少)圖少なすぎるコト。少(すく)に失(な)す。
 くわせき(化石)圖死せる生物の死體(したい)が、久しく土中に在りて、化學的(かぎく)變化を起して、其のまま石となりたるものを云ふ。
 くわせん(瓦石)圖瓦と石と。
 くわせん(火戰)圖大砲(たいぱう)を射ち合ひて戰(いくさ)かふコト、砲兵戰。
 くわせん(果然)圖其の通りはたして。思ふた通り、其の通り。
 くわせん(瓦全)圖此れと云ふ事もせずにボンヤリと生てるコト、
 くわせ

くわせ、くわた

くわせんし(畫仙紙) 圖支那産の紙の名、其の判(紙)は唐紙(紙)より大きく、色(紙)は白くして、光澤(紙)ある上等の紙、重(紙)に書畫を書くに用ゆるものにて、質(紙)極めて弱し。

くわせいがん(火成岩) 圖石の名、地下に在る甚しき地熱(火)の爲めに、地質(火)中の或る物が、溶解(火)されて、地質の割れたる部分より、外部へ流れ出でて、固(火)まりて石となりたるものを云ふ。

くわぞく(華族) 圖貴族のコトにて、明治二年の六月に、大名及び朝廷の重臣に賜(皇)はりたる稱呼(皇)にて、四氏の上位に在る家柄(皇)之(皇)を公侯伯子男の五等に分たる。又た特に國家に對して、勳功(皇)ある者にも、授け賜ふなり。

くわぞくくわい(華族會館) 圖華族が互ひに集合して、相談を爲す爲めに、設(皇)けられる處、東京市の麹町區内に在り。

くわぞくちよがつかう(華族女學校) 圖皇后陛下の御誼(皇)を奉じて、華族の女子に、教育を授(皇)くる學校のトを云ふ。

くわた(過多) 圖多きに失する、多すぎるコト。多分なるコトを云ふ。

くわた

くわた(過多) 圖おびただしきコト、即ち非常に多きコト。

くわたい(過意) 圖あやまち、おこたり、なまけるコトを云ふ。

くわたい(禍胎) 圖禍の生ずる原因、みなも基礎(禍)のコト。

くわたい(課題) 圖和歌などの、其の作るべき題を定めて出すコト。

くわたい(畫題) 圖描くべき畫の表題(畫)のコトを云ふ。

くわたい(過大) 圖大にすぎる、なみにはすれて大きいコトを云ふ。

くわたい(花臺) 圖花瓶(花)を載せる臺、形種々あり。

くわたい(過當) 圖過分に同じ。

くわたい(畫道) 圖畫の道。

くわたい(火宅) 圖佛教の語にて、せちがらき此世と云ふ。

くわたい(花托) 圖植物學上の語にて、花の下に花を受け、載(花)てる如くに爲つて物、即ちうてな、尙ほ菴(花)の部を見られ。

くわたい(花壇) 圖美(花)くしき草花を植(花)たる土(花)を、高く盛り上たる畦(花)の如きもの、稱。

くわたい(果斷) 圖決斷力の強きコト。物

くわた、くわつ 語、語、語 五八六

くわた、くわつ 語、語、語 五八六

事を思ひ切つて行ふコト、

くわたい(過意) 圖過料に同じ。忘たりたる爲めに出す金子。

くわたい(花臺) 圖花壇(花)に植(花)られてある菊(花)のコト。

くわたい(華胃) 圖位あり、身分の別して高き家柄(華)を云ふ。華族の異稱。

くわたい(花軸) 圖花の心(花)となつてる莖(花)のコトを云ふ。

くわたい(課長) 圖一課中の長官。

くわたい(渦中) 圖水などの渦(渦)を卷いてる中(渦)コトとしてる事件の最中(渦)と云ふ。

くわたい(火中) 圖火の中。

くわたい(花柱) 圖植物學上の語にて、雌蕊(花)についてある、長く細き柄(花)のコトを云ふ。

くわたい(過重) 圖取り分けて大ききにするコト。甚だしく重きコト。

くわたい(暗) 圖おろかなるコト。智慧(暗)の足らざるコト。無暗にやかましきコトを云ふ。

くわたい(括) 圖其所に達す、即ちいたる(括)面會(括)す、會合す。

くわたい(刮) 圖けづる。磨(刮)ひて少なくするけづりて、かきさる。

くわつ 括、括、答、結、結、滑、道、闊、滑

くわつ(括) 圖反(括)る木を直(括)すに用ゆる木、即ちため木。木の名、びやくしんのコト、ひの木の名。

くわつ(括) 圖くる。たげれる。結(括)ぶ。もごりのコト(響)。

くわつ(答) 圖失はづのコト、尙ほやはづの條を見られたし。

くわつ(結) 圖虫の名、なめくじら、

くわつ(結) 圖内のからなるコト、即ちむなし。開(結)ひてるコト、大きく廣(結)がつてるコト。度量(結)の大なる。心のひろくして。

くわつ(滑) 圖なめらかなるコト。つるつるして。轉じて。すべる。もごり。ふりのなき。亂(滑)れ混(滑)るコト。水のおだやかに流れ行く狀を云ひ表はす語。

くわつ(道) 圖最(道)早きコト。取分けて速(道)やかなるコト。

くわつ(闊) 圖さうし遠(闊)さがる。離(闊)れて。へだたる。あらし。粗末(闊)なり。廣(闊)し大なり。長(闊)く廣(闊)し。骨を折つて。動(闊)み動(闊)める。苦んで精を出す。す。

くわつ(滑) 圖悪(滑)し。きコト。おもちゃにする。もてあそぶコト。

くわつ 活

くわつ(活) 圖生きてるコト。役(活)に立つ。いさましき。柔道(活)の語にて。氣絶(活)したる人人を蘇生(活)せしむる仕方を云ふ。即ち活(活)を入れる。

くわつ(活氣) 圖いきいきしたる狀(活)勢よく働(活)らく狀。元氣(活)の強(活)き狀を云ふ。

くわつ(月忌) 圖死者のめいにちのコトを云ふ。

くわつ(活語) 圖文法上の語にて。活(活)てる語と云ふ意、即ち動詞(活)のコトを云ふ。

くわつ(括弧) 圖記號の名にて、數字又は字句(括)又は文字を他の其と全く區別すべく爲めに、其の物の前後に挿(括)むもの、稱。

くわつ(活字) 圖活字版に組み立(活)る文字のコト、即ち鉛(活)と他の金屬とを合したる金屬にて製したる文字のコト、第一號より八號まで、大小種々(活)あり。

くわつ(猾智) 圖悪(猾)し。き智慧(猾)悪しき智慧のコトを云ふ。

くわつ(赫怒) 圖突然(赫)に怒(赫)つて、顔(赫)を赤くする狀(赫)を云ふ語。

くわつ(月日) 圖月と日。

くわつ

くわつ(潤歩) 圖大股(潤)にて歩くコト。意張(潤)て歩くコト。

くわつ(蛸輪) 圖ナメクシラのコト。

くわつ(活路) 圖助(活)かるべき道、遊(活)ゆ道(活)にげ道。

くわつ(活眼) 圖活(活)たる目と云ふ意にて、物事を正確に判斷(活)する識見(活)に富(活)てるコト。

くわつ(活計) 圖くらしむき、なりわひ、生計(活)のコト。

くわつ(活劇) 圖芝居(活)にて爲すやうなる事を、實際(活)に演(活)するコトを云ひ表はす語。

くわつ(滑車) 圖くるまきに用ゆる車(滑)のコトを云ふ。

くわつ(滑石) 圖石の名、其の肌(滑)極めてなめらかにして其の質もろく、小刀(滑)にて能く削(滑)る事を得、色は概(滑)れ白けれども、中には黄色の物もあり、之を粉にして紙に敷くに用ゆ。

くわつ(豁然) 圖廣(豁)として爽快(豁)なる狀を云ふ。心の迷(豁)が晴(豁)て、精神の爽(豁)やかに爲りし狀を云ふ語。

くわつ(活塞) 圖ポンプなどの筒(活)の中に、挿入(活)られてある鐵棒(活)

くわつ

の先に、結(ヒ)び付られてある物、即ち之を上下して、水を汲(ヒ)み上る事が出来る、仕掛(ヒ)なれるもの、くわつたい(活體)活生活(ヒ)營(ヒ)なるてゐる物、(ヒ)の總稱、くわつたつ(潤達)活精神(ヒ)がゆつたりとしてゐて、些々たる物事に頓着(ヒ)せぬコトを云ふ、くわつどろ(活動)活活(ヒ)ハキと働(ヒ)くコト精力(ヒ)を注(ヒ)ぎて働(ヒ)らくコトを云ふ、くわつのち(括弧)活口(ヒ)をくりたる(ヒ)の(ヒ)云ふ意にて、即ち口をくりて云はぬ、物事にしめくりがある、(ヒ)物堅(ヒ)キコト、くわつばい(月牌)活活(ヒ)毎(ヒ)月(ヒ)位(ヒ)牌(ヒ)に物を供(ヒ)えて祀(ヒ)るコト、くわつばつ(活潑)活其(ヒ)の精神(ヒ)又は其の行動(ヒ)の勢(ヒ)あるコト、魚類(ヒ)が水中(ヒ)で勢よくはれてゐる、くわつばふ(活法)活工(ヒ)合(ヒ)よく應用(ヒ)し能(ヒ)ふやうにされてある方法、即ち容易(ヒ)く活用(ヒ)し能(ヒ)ふ方法、便利なる方法(ヒ)のコト、くわつばん(活版)活活(ヒ)字(ヒ)を組み立て作りたる印刷(ヒ)。

くわつ

くわつぶつ(活物)活生(ヒ)きてゐる物、(ヒ)盛んに活動(ヒ)する物を云ふ、くわつめい(活命)活いのち(ヒ)確固(ヒ)たる命令(ヒ)と云ふコト、くわつめく(活目)活物(ヒ)事を注意(ヒ)して視るコトを云ふ、くわつやく(活躍)活活(ヒ)に(ヒ)おどる勢(ヒ)よく動き出すコト、くわつやく(括弧)活くりちちむる、しめて小さくするコト、くわつより(活用)活いかして用(ヒ)ゆる、即ち十分に役に立つやうに用(ヒ)ゆ、適當(ヒ)なる應用(ヒ)のコト、くわつしよく(月蝕)活地球(ヒ)が月(ヒ)太陽(ヒ)の間(ヒ)に挿(ヒ)りて、月の受(ヒ)へべき太陽(ヒ)の光(ヒ)を、覆(ヒ)ひかくせる状態(ヒ)を云ふ、くわつりよく(活力)活活(ヒ)てゐる働き活動(ヒ)すべき精力(ヒ)、くわつじがね(活字金)活活(ヒ)字(ヒ)を鑄造(ヒ)する原料(ヒ)となるべき合成金(ヒ)のコト、委(ヒ)しく云(ヒ)へば、鉛(ヒ)百分中(ヒ)に、アンチモニー十八分(ヒ)を含める合成金(ヒ)のコト、くわつくわさん(活火山)活現在(ヒ)に煙(ヒ)を噴出(ヒ)しつつある火山(ヒ)のコト、假令(ヒ)浅間山(ヒ)霧島山(ヒ)の如き其

くわつ

れなり、くわつばんほん(活版本)活活(ヒ)版(ヒ)にて印刷(ヒ)したる書物(ヒ)のコト、くわつばんずり(活版摺)活活(ヒ)版(ヒ)にて印刷(ヒ)したる凡(ヒ)ての文書、くわつばんしよ(活版所)活活(ヒ)版(ヒ)を組(ヒ)み立(ヒ)るを業(ヒ)とする所、くわつたいしやく(月帶蝕)活月蝕(ヒ)に同じ、其の條(ヒ)を見よ、くわつさつじざい(活殺自在)活我(ヒ)の思(ヒ)ふままに、他人(ヒ)を扱(ヒ)ふコトを云ひ表(ヒ)はす語、くわつじんごわ(活人畫)活人(ヒ)が變裝(ヒ)して、畫(ヒ)に在(ヒ)る人物(ヒ)の如き形(ヒ)を爲(ヒ)して、人(ヒ)に見(ヒ)せて喜(ヒ)ばしむるを云ふ、即ち餘興(ヒ)の一、くわつどろしやくしん(活動寫眞)活幻燈(ヒ)の一種、電氣(ヒ)の力(ヒ)に依(ヒ)りて、寫眞(ヒ)を寫し出し、其の畫(ヒ)中に人物(ヒ)などの爲(ヒ)せる事が、實際(ヒ)の通り動く幻燈(ヒ)のコトを云ふ、くわてい(課丁)活官府(ヒ)の仕事(ヒ)に召(ヒ)れて使用(ヒ)する、若者(ヒ)、くわてい(課程)活わりあてたる仕事(ヒ)の程度(ヒ)のコトを云ふ、くわてい(科程)活ほごあひしな、

くわてい(過程)活物(ヒ)事の進(ヒ)み行(ヒ)きたる其のあさ(ヒ)仕事(ヒ)の出来(ヒ)ば、くわてい(禍梯)活禍(ヒ)のはしこ、即ち禍(ヒ)の次第(ヒ)に生(ヒ)じて来る、原因(ヒ)となる物(ヒ)事(ヒ)のコトを云ふ、くわてう(花鳥)活花(ヒ)鳥(ヒ)、くわてう(花朝)活陰曆(ヒ)の二月(ヒ)十五日(ヒ)のコトを云ふ、くわでち(畫帖)活畫(ヒ)のみを寄せ集(ヒ)めて、作りたる折本(ヒ)、くわてん(花鉦)活花(ヒ)かんざし、くわでん(瓜田)活瓜(ヒ)の種(ヒ)である畑、くわでん(訛傳)活間違(ヒ)たると云(ヒ)ひ傳(ヒ)へ(ヒ)偽(ヒ)の風説、くわてうづかひ(花鳥使)活色文(ヒ)、即ち艶書(ヒ)を持(ヒ)せて、遺(ヒ)る使(ヒ)の人のコトを云ふ、くわてんびつち(花天月地)活稍(ヒ)には花(ヒ)ありて、地上(ヒ)には月影(ヒ)ありと云ふ意(ヒ)よりして、花(ヒ)のある春(ヒ)の月夜(ヒ)のコトを云ふ、くわど(蝌蚪)活蛙(ヒ)の幼虫(ヒ)にておたましやくしのコト、文字(ヒ)の名(ヒ)にて、篆(ヒ)の字(ヒ)のコトを云ふ、くわど(過渡)活わたるコト、又は渡(ヒ)る處(ヒ)舊(ヒ)き有様(ヒ)を去(ヒ)つて、新(ヒ)くわて、くわ

らしき有様に移(ヒ)らんこと、しつたある時(ヒ)を云ふ、くわと(過度)活程(ヒ)を越(ヒ)すコト、度(ヒ)をすこすコトを云ふ、くわと(畫圖)活畫(ヒ)のコトを云ふ、くわとち(科頭)活頭(ヒ)に何物(ヒ)をもかぶつてゐぬコト、くわとち(臥榻)活れぞこ(ヒ)れたい(寢臺)のコトを云ふ、くわとち(五燈口)活家の壁(ヒ)に設けたる出入口(ヒ)のコト、上(ヒ)の方(ヒ)を弓形(ヒ)に設けるもの、多く寺院(ヒ)の壁(ヒ)に設けるもの、くわねん(火難)活火(ヒ)事に同じ、くわねつ(火熱)活火(ヒ)のあつさ、くわのち(化膿)活腫物(ヒ)が膿(ヒ)を成るコト、うむて来た(ヒ)コト、くわはち(果報)活むくひ(ヒ)善(ヒ)き事(ヒ)のめぐり来るコト、くわはち(火砲)活大砲(ヒ)のコト、くわはち(畫報)活出来(ヒ)事(ヒ)の有様(ヒ)を畫に描(ヒ)きて世間(ヒ)の人に知(ヒ)らせるコト、又は其の物(ヒ)を云ふ、くわはく(畫伯)活伎術(ヒ)の優(ヒ)れたる畫工(ヒ)畫工(ヒ)を敬(ヒ)ふて云(ヒ)ふ語、くわはん(過半)活なかば以上(ヒ)おほかた

あらまし、ほごんど、くわはんずり(過半数)活残(ヒ)らすの數(ヒ)の半分(ヒ)以上(ヒ)のコト、くわはちもの(果報物)活しやはせのまきのコトを云ふ、くわひ(花被)活植物(ヒ)學(ヒ)上の語(ヒ)にて、花(ヒ)の事(ヒ)を云ふ、其の意は花體(ヒ)を、花(ヒ)をさして被(ヒ)んでるより云ふ、くわひ(果皮)活果實(ヒ)の外部(ヒ)を包んでる皮(ヒ)のコトを云ふ、くわひ(華美)活うつくしきコト、はなやかなるコト、美(ヒ)しき粧(ヒ)を爲(ヒ)したるコト、即ち花(ヒ)やかな飾(ヒ)、くわひん(華品)活美(ヒ)しき品物(ヒ)、立派(ヒ)な品物(ヒ)品物(ヒ)を賞(ヒ)めて云(ヒ)ふ語、くわひん(花瓶)活花(ヒ)をさして生(ヒ)ける瓶(ヒ)、即ち花(ヒ)いけ(ヒ)のコトを云ふ、くわひん(過敏)活するごきコト、殊(ヒ)にささきはしつ、ごきコトを云ふ、くわひより(臥病)活病氣(ヒ)にてれるコト、病氣(ヒ)にか、つてゐるコト、くわふ(寡婦)活やもめの女、くわふ(花譜)活花(ヒ)の形(ヒ)を其の咲(ヒ)く季節(ヒ)の順(ヒ)にて描(ヒ)きし物、花(ヒ)のみの畫本(ヒ)のコト、くわは、くわ

くねふ、くわへ

くわふ(書譜) 圖書を描きたる巻物、畫を描きたる折本(ワキ)、
くわふく(禍福) 圖わざわひさ、さびわひ、即ち幸、不幸、
くわふく(畫幅) 圖書を描きたる軸物(マタ)、かけちのこト、
くわふつ(菓物) 圖くだもの、
くわふん(花粉) 圖植物學上の語にて、花の心(ハジ)に在る、雄蕊(オシベ)より出づ、黄色の粉(コ)のこトを云ふ、動物(カウ)で云へば卵(ワタ)のこト、
くわぶん(訛聞) 圖聞きそなひ、
くわぶん(算聞) 圖世事に通ぜぬ、物事の心得の少なきこト、
くわぶん(過分) 圖程(ハジ)に過ぎたるこト、多すぎるこト、
くわぶそ(過不定) 圖多きさ足(ハジ)ざるこトを云ふ、
くわへい(寡兵) 圖兵士の少なき、
くわへい(火兵) 圖大砲及び小銃のこトを云ふ、即ち火の武器、
くわへい(貨幣) 圖通用の金銀貨及び紙幣(カネ)のこトを云ふ、
くわへい(花瓶) 圖花いけ、即ち花(ハナ)びん
くわへい(畫餅) 圖描(カキ)きたる餅(ハシ)云ふ意にて、むだ(徒勞)、即ち其の用を爲さ

くわへ、くわも

ぬき云ふこト、
くわへん(花片) 圖花びら、
くわへん(火片) 圖火のかけら、即ちひのこトを云ふ、
くわべん(花弁) 圖花のこト、花の各片(ハナ)びら、
くわへん(瓦片) 圖瓦のかけら、
くわへいせん(火兵戦) 圖敵味方互ひに離れ合つて、大砲を放(はな)つて戦争をするこト、
くわほう(臥房) 圖寝る所、れや、
くわほう(花木) 圖美しくしき花の咲く木のこトを云ふ、
くわほん(畫本) 圖書を集めたる本、又は畫を挿(は)みて、其の畫解(カキ)をなしたる本のこト、
くわみつ(花蜜) 圖花の心(ハジ)より出す甘き汁(シ)、虫の好みて吸(ス)ふもの、
くわみやく(火脈) 圖火山脈のこト、
くわめん(火綿) 圖火薬に用ゆる一種の原料にて、化學的の製作品、
くわもく(課目) 圖わりあてられて爲すべき事の種類(カネ)、
くわもく(科目) 圖學校等にて、其々(カネ)修め且つ行ふべき事柄を區別(カネ)したるこト、

くわも、くわり

くわもつ(貨物) 圖荷物のこト、
くわもん(火門) 圖大砲及び小銃の彈丸(ダマ)の出る口、
くわもん(花紋) 圖花の形を現(ハジ)はしたる模様(カネ)のこトを云ふ、
くわもんせき(花紋石) 圖天然(カネ)に花の形の如き模様(カネ)のある石、
くわやち(花様) 圖花の模様、
くわやく(火藥) 圖煙硝(カネ)、
くわやく(課役) 圖わりあてられたる仕事又は労働(カネ)、
くわゆる(化誘) 圖透導(カネ)して、善に化すこト云ふ意にて、即ち人を教(カネ)えて、善き方に導(カネ)くこト、
くわよ(過譽) 圖ほめすぎすこト、ほむべき程度を越(カネ)るこト、
くわよく(寡慾) 圖慾心の薄き性質(カネ)のこトを云ふ、
くわらく(和樂) 圖くつろぎ、たのしみ、打ちまけて、たのしみ、
くわらん(禍亂) 圖わざわひ、世の中のみだれたるこトを云ふ、
くわりよ(過慮) 圖考(カネ)すぎし、
くわりん(火輪) 圖太陽の一名、
くわりゆち(花柳) 圖花さ柳さ、轉じて遊女のこトを云ふ、

五九〇

くわり

くわりゆち(顆粒) 圖つぶのこト、
くわりより(過量) 圖分量(ハジ)の多すぎるこト、量(カネ)の多きこト、
くわりより(火龍) 圖火事の火の盛んに上つてるを云ふ、
くわりより(臥龍) 圖龍(カネ)の寝(カネ)る状を云ふ、樹(カネ)の幹(カネ)が龍(カネ)の寝(カネ)てる如き形を爲せるを云ふ、隱(カネ)れてる大人物のこトを云ふ、
くわりよく(火力) 圖火の力、
くわりんしや(火輪車) 圖火の力にて車を運轉(カネ)させるこト云ふ意(カネ)より轉じて、汽車のこトを云ふ、
くわりんせん(火輪船) 圖同上の意義にて、汽船のこトを云ふ、
くわりんとち(花林糖) 圖一種の菓子、小麥粉(カネ)に砂糖(カネ)を加えて、煉(カネ)て細かく切(カネ)りて、油(カネ)にあげし物但し下等の菓子なり、
くわりゆちかい(花柳界) 圖色里(カネ)遊女社會のこト、
くわりゆちばい(臥龍梅) 圖梅(カネ)の木の種類、古木の梅の幹(カネ)が、其の地上を這(カネ)ふ如くに、横(カネ)に長く臥(カネ)てゐて、枝の地上に垂(カネ)れ下つてるもの、稱、
くわりゆちひやち(花柳病) 圖梅毒及び梅毒

毒性の病氣の總稱、

くわれい(華麗) 圖ばでやか、ばなやか、
くわれち(科料) 圖警察犯處罰令(カネ)に依りて、所罰されたる者に、科する金銭、罰金の次に在る金刑にして、三十圓以下の金銭を科せられる刑、
くわれち(過料) 圖規則に違反(カネ)せる者より、取り立(カネ)る金銭、
くわれき(瓦礫) 圖瓦ささき石、
くわれつ(瓦裂) 圖瓦のさける如くに、世の亂(カネ)れるを云ふ、
くわろ(蟻虻) 圖小さき家のこト、轉じて我が家のこトを、他人に向つて云ふ謙遜語、
くわろ(火爐) 圖こたつ、
くわわち(花王) 圖牡丹(カネ)のこト、
くわん(鯨) 圖魚の名、あめのうを、
くわん(喚) 圖呼(カネ)ぶ、まねく、
くわん(菅) 圖草の名、すげのこト、すげを編(カネ)みて簀(カネ)の如くせるもの、即ち苦(カネ)のこトを云ふ、
くわん(換) 圖かへる。取りかふ、
くわん(串) 圖手形(カネ)のこト、物を刺す具、即ちくし、さうす。つらぬく、なれる管(カネ)なる、
くわん(完) 圖欠(カネ)たるこトなき、即ち全

くわれ、くわん、院、喚、管、換、串、完

(カネ)きこト、満足(カネ)のこト、そらふ、さ、なふるこト、

くわん(莞) 圖草の名、蘭(カネ)のこト、編(カネ)たる簀(カネ)ホ、笑(カネ)む状を云ふ、莞爾(カネ)として笑ふ、
くわん(患) 圖うれふるこト、うれひ、わざわひ、病氣(カネ)にかゝる、わづらふ、苦(カネ)む、くろし、
くわん(道) 圖にける、途(カネ)るこト、
くわん(僮) 圖小役人(カネ)又は舍人(カネ)のこトを云ふ、
くわん(官) 圖官途に就くこト、官吏役人、
くわん(學問) 圖習ふ、
くわん(煥) 圖火の燃(カネ)てる光(カネ)りのこト、轉じて明(カネ)かなるこト、
くわん(管) 圖笛(カネ)のこト、かぎのこト、
くわん(鬘) 圖髪を束(カネ)れて結びたるもの、即ちまげのこトを云ふ、
くわん(鑲) 圖總て金屬にて作りたる輪(カネ)のこトを云ふ、
くわん(浪) 圖水が輪(カネ)を爲して流れ行くを云ふ、即ちうづを巻(カネ)きつ、激(カネ)しく流る、こト、
くわん(緩) 圖ゆるやかなるこト、ゆるきこト、轉じておこなしき。やわらかな

くわん、莞、患、僮、煥、緩、五九一

くわん 懐、懐、冠、観、浣

くわん(懐) 懐人の足を別々に車に結びつけ、車を進めて身体を二つに裂(裂)コトを云ふ語。
くわん(冠) 冠性急(冠)なるコト。短氣(冠)なるコトを云ふ。
くわん(冠) 冠頭にかぶる物の稱、即ちかんむり。凡て特別に優れたるコトを云ひ表す語。
くわん(観) 観ながめる、見る。外部(観)の體裁(観) 凡て物の有様(観)形状(観)遊(遊)ぶコト、たのしむコト。凡てみるべき物(観)物事を考へ察(観)するコト、即ち觀察(観)物事を見て、斯々(観)ひき分別を自己(観)の能力に依りて付るコト、即ち樂觀(観)さか、悲觀(観)さかの如し。
くわん(官) 官朝廷(官)政府(官)官府(官)府(官)に仕(官)へて其の事務(官)を執(官)る位置(官)及び種類の稱、假令ば武官(官)文官(官)高等官、判任官など、くわん(浣) 浣旬(浣)と同じ意義にて、即ち一月を三つに分ちたる其の一を云ふ、故に十日の間の稱呼(浣)、因(浣)て一日より十日までを上浣(浣)と云ひ、十日より二十日までを中浣(浣)と云ひ、二十日より月末までを下浣(浣)と云ふ。

くわん 款、關、款、館、棺、環、管

くわん(款) 款たのしき、うれしき、よしみ。規則(款)などの個條、即ち定款(款)など。味方(款)に反(款)きて敵に附く。まめやかなる、なまけあつき。印判(款)などに文字を回(款)ませて刻(款)コト、又は刻たる物、即ち書畫に捺す印判(款)の類。
くわん(關) 關くわんの木、即ち門の閉(關)を爲す物。出入(關)するに是非(關)通(關)らねばならぬ大切な所。通行人を取り調(關)る處、即ち關處(關)からくり機械。
くわん(歡) 歡よるこぶコト、たのしむコト、うれしきコト。
くわん(館) 館家、即ちやかた。家の大なる構造(館)の物、大建築の家。やど(館)宿屋。
くわん(棺) 棺死骸を納める箱(棺)、即ちひつぎのコトを云ふ。
くわん(環) 環銅鐵(環)などの金屬にて作りたる環(環)の器(環)に附ける引手(環)、即ち算筒(環)の環など。
くわん(管) 管くた、即ち細く圓く長くして、中の空(管)なる物。樂器(管)の稱にて、笛(管)の種類の總稱。數字の下に附

くわん 寬、鑑、賈、賧

くわん(寬) 寬心のひろきコト。ゆるやかなるコト。くつるぐコト。
くわん(鑑) 鑑又た鑑(鑑)の字を書く、水の如き液體を汲(鑑)取るに用ゆる物にて、釣瓶(鑑)の類(鑑)を云ふ。薄(鑑)き鏡力(鑑)板にて、製(鑑)られた陶(鑑)、物を入れて貯(鑑)はえ置くに用ゆる具。
くわん(賈) 賈老人のやもめ、即ち年老ひて妻のなき人のコト。
くわん(賧) 賧書籍(賧)の科ト。卷物(賧)の科ト。まく、まきつける。
くわん(賧) 賧つらぬくコト。目的を達するコト。錢の高(賧)を云ひ表はす語にて、昔時は一千文(賧)を云ひしも、中頃に至りて九百六十文を賈(賧)と云ふ。物の重量を計(賧)るに用ゆる語にて、千匁(賧)の科トを云ふ。
くわん(賧) 賧眼を圓くして物を見る、みつむるコト。明(賧)かなるコト。明らかに見ゆるコト。立派(賧)にして、美しきコトを云ふ。
くわん(賧) 賧かへるコト。もどるコト。もどすコト。めぐる。まわる。めぐらす。再び復(賧)と云ふ意を表はす語。す

くわん(直) 直桶(直)に盛りたる水にて、手を洗ふコト、てあらひ。轉じて、てあらひ具即ちたらひ。
くわん(直) 直よるこぶ。うれしがる。悲(直)しむ。うれふるコト。
くわん(直) 直馬が仲よく樂(直)しむでる状態を云ふ。轉じてうれしがる。よろこぶコトを云ふ。
くわん(灌) 灌水をかける。そぐ。ぬらす。うるほす。飲む。酒を酌(灌)む。洗(灌)ふ。信(灌)をいたす。徳義を盡す。物の多く集り群(灌)がる。樹の一所(灌)に集(灌)まりて生(灌)てるコトを云ふ。手や足を洗ふコト。
くわん(睥) 睥大(睥)きくして出てある眼の科ト。見張(睥)るコト。
くわん(譴) 譴やかましきコト。叫(譴)び呼ぶコト。やかましき鳴(譴)く。歎に通ず。よろこぶ。
くわん(紉) 紉白色の絹織物のれりたるもの、即ち白のれりきぬ。
くわん(澣) 澣十日の日數の科トを云ふ語。

くわん(澣) 澣清くすす。
くわん(澣) 澣静(澣)かに水の流れ行く有様(澣)の科トを云ふ。
くわん(桓) 桓武勇のすぐれたる状(桓)を云ふ。語。道中の宿場(桓)に印(桓)として建つる札(桓)。
くわん(玩) 玩もてあそぶコト、又は其のもの、即ち、おもちゃの科ト。
くわん(玩) 玩へし折る。くじく。身體をもむ、即ち按摩(玩)をなす。
くわん(玩) 玩もて遊ぶ物おもちゃ玩具。もてあそぶコト。
くわん(剝) 剝物の角を削(剝)り落(剝)して圓(剝)くすコト。
くわん(峯) 峯山の頂(峯)の尖(峯)つてる状を云ふ。峰(峯)の尖がつてる山又は尖つてる處を云ふ。
くわん(頑) 頑かたよる。強情(頑)。確(頑)りしてゐて移り動(頑)かぬ状(頑)を云ひ表すに用ゆる。
くわん(願) 願れがふコト、いのるコト、たのむコト。
くわん(丸) 丸まるき物、まるきかたまり。凡て形(丸)の圓きもの。丸薬(丸)の下へ附けて用ゆる語。例ば解熱丸、くわん(願)願れがふ事柄(願)のぞ

む事柄の科トを云ふ。
くわん(官) 官威の威光、官吏の權力(官)の科ト。
くわん(官) 官位。官其の官と其の位、くわん(官)官世の中、天下、くわん(官)官家。官朝廷(官)の科ト。
くわん(換) 換價。物品物を代金にみつもるコトを云ふ。
くわん(官) 官暇。官役向の手すき、くわん(官)官役所(官)官府、くわん(官)官。官よるこぶ、うれしき、くわん(官)官。官よるこぶ、うれしき、くわん(官)官。官よるこぶ、ふるひ起す。ふるひたつコト。
くわん(官) 官規。官官廳(官)の規則、くわん(官)官。官吏の規則、官吏のさりしまり、くわん(官)官。官朝辭にて歌舞(官)音楽(官)を奏(官)する爲めに、朝廷に出入する女子の科トを云ふ、くわん(官)官。官其の管轄(官)の區域(官)の科ト、くわん(官)官。官うれしくたのしむコト。仲のよろしきコト、くわん(官)官。官馬鹿強情(官)にして道理の分らぬコト、くわん(官)官。官もてあそぶ具、即ちお

くわん

くわん (官庫) 図政府の所有に歸して
 庫(ツ)の官府の倉
 くわん (謹呼) 図多くの人が集りて騒
 (ツ)き立て喜びさげふコト
 くわん (歡呼) 図よるこびのあまりに叫
 (ツ)び騒ぐコトを云ふ
 くわん (歡娛) 図よるこびたのしむ
 くわん (歡語) 図たのしく話す嬉しく物
 語るもつここのコト
 くわん (欺語) 図打ちくつるきて、物語
 をなすコトを云ふ
 くわん (執務) 図務(ツ)の一種にて白き
 れり絹(ツ)にて仕立(ツ)たるもの、禮服
 の時に着用す
 くわん (頑固) 図かたくるしき、かたい
 じなる、わけのわからぬコト
 くわん (環坐) 図車坐(ツ)に同じ
 くわん (冠詞) 図文法上の語にて、ま
 くらこばのコト
 くわん (環視) 図四方より見張(ツ)てる
 取り巻きて視(ツ)てるコト
 くわん (管視) 図取締りて見る
 くわん (莞爾) 図ニツコリ笑ふ
 くわん (願事) 図れがひこさ、のぞみこ
 のコト

くわん

くわん (鑪子) 図茶の湯に用ゆる器具の
 一種、金屬(ツ)にて造(ツ)られたる小
 き、茶釜の如き物にて、湯をわかすに用
 らるもの
 くわん (冠) 圖頭(ツ)に物を載(ツ)る帽
 子(ツ)などなをかぶる、總て上へかうむ
 らす
 くわん (管) 圖動支配(ツ)する、さりし
 まる、ひつくるめておさめる
 くわん (元祖) 圖物事を考へ出して、初
 めて爲したる人
 くわん (官地) 圖官府の所有(ツ)に歸し
 てる土地のコトを云ふ
 くわん (關知) 圖其の物事にたづさはり
 て知つてるコト
 くわん (環堵) 圖家の周圍(ツ)を取り巻
 てる垣(ツ)轉じて家の周圍のコト
 更に轉じて粗末(ツ)なる家のコトを云
 ふ
 くわん (官途) 圖官吏の位置(ツ)、官府に
 仕ふる道のコト
 くわん (觀破) 圖見やぶるコト、見ぬく
 くわん (官費) 圖政府より支出される費
 用のコトを云ふ
 くわん (完膚) 圖無疵(ツ)のコト
 くわん (官府) 圖役所のコト

くわん

くわん (還附) 圖所有し又は我が領分と
 せる土地などを、かへしもどすコトを
 云ふ
 くわん (完備) 圖不足なく、なふ、満
 足に備(ツ)はれる
 くわん (患部) 圖身軀に病氣又は損傷(ツ)
 のある部分の稱
 くわん (緩歩) 圖ゆる／＼と歩くコト
 靜(ツ)かに歩むコト
 くわん (玩味) 圖味をよく見るコト轉
 じて物事の意義を充分に考へるコト
 くわん (關興) 圖物事にたづさわる、あ
 づかるコト、くみするコト
 くわん (官吏) 圖官途(ツ)に仕(ツ)ふる
 人、即ちやく人のコトを云ふ
 くわん (官遊) 圖政府の費用にて諸處
 (ツ)へ旅行するコトを云ふ
 くわん (寛宥) 圖心の廣(ツ)くしてや
 さしきコト、小事を告(ツ)め立(ツ)せぬ
 コトを云ふ

くわん

くわん (灌域) 圖河水の流れに依りて
 田面(ツ)へ其の水を注(ツ)がれる得る
 區域内のコトを云ふ
 くわん (官員) 圖官吏に同じ
 くわん (官印) 圖官符又は官吏が其の
 職務(ツ)の爲めに捺(ツ)す印(ツ)
 くわん (卷纏) 圖冠(ツ)の後に附(ツ)
 てる、巾(ツ)の廣き紐(ツ)の如き物の
 垂(ツ)れ下らすして、輪形(ツ)になつて
 るもの、コトを云ふ語
 くわん (環衛) 圖周圍を取り巻きて、
 保護(ツ)するコト
 くわん (官營) 圖政府にて、營(ツ)む
 事業、即ち政府事業のコト
 くわん (冠絶) 圖冠絶に同じ
 くわん (觀櫻) 圖櫻の花を眺める、即
 ち花見(ツ)のコトを云ふ
 くわん (棺桶) 圖死體(ツ)を納(ツ)む
 べき棺に、用ゆる粗末(ツ)な桶
 くわん (觀音) 圖觀世音菩薩の略
 くわん (官海) 圖官吏の仲間
 くわん (環海) 圖四方が皆な海と云ふ
 コト、島國のコトを云ふ
 くわん (勸解) 圖法律上の語、勸(ツ)め
 て和解させること云ふ意味にて、即ち裁
 判所にて、判事が原告と被告とに和解

くわん

を勧め、訴訟(ツ)を取り下げますコ
 トを云ふ
 くわん (灌漑) 圖水を注(ツ)きて、土地
 を濕(ツ)し、作物の豐成(ツ)を期する
 コト
 くわん (還幸) 圖天子の行幸(ツ)先
 より歸(ツ)らせたまふコト
 くわん (慣行) 圖しなれてるコト、此
 れまで行ひ來りたる事
 くわん (振甲) 圖鎧(ツ)を身軀(ツ)に
 つけるコトを云ふ
 くわん (觀客) 圖凡て興行物(ツ)を
 見る人、即ち見物人
 くわん (勸學) 圖學問(ツ)をすすめる
 コト、學を勵(ツ)ます
 くわん (願掛) 圖神佛に祈願(ツ)をこ
 むるコトを云ふ
 くわん (管轄) 圖其の執る事務の範圍
 (ツ)又は其の治(ツ)むる區域(ツ)をさ
 りしめるコト
 くわん (歡顔) 圖よるこんでる顔付
 うれしさうなほつき
 くわん (官給) 圖官府より金錢物品を
 與(ツ)ふるコトを云ふ
 くわん (緩急) 圖ゆるきコトと急ぐコ
 ト轉じて國家に變事の生じたるコト

くわん

を云ふ
 くわん (官許) 圖政府よりの許(ツ)り
 官府よりの許可
 くわん (還御) 圖天皇の御歸り
 くわん (官金) 圖官府の所有にかかる
 金錢のコトを云ふ
 くわん (觀經) 圖佛經を讀むコト、經
 文(ツ)を唱(ツ)むるコト
 くわん (欸遇) 圖手厚き取り扱ひ。あ
 つきもてなしのコト
 くわん (官軍) 圖賊軍に對する稱にて
 政府の軍勢のコト
 くわん (還啓) 圖皇太后、皇后、皇太子
 皇太子妃等の御方々(ツ)が、行啓(ツ)
 先より歸らせたまふ
 くわん (換刑) 圖法律の語にて、甲の
 刑罰を、乙の刑罰にかへて、執行するコ
 ト、假令ば罰金を鉢刑にかゆるなどの
 如し
 くわん (關係) 圖物事が互ひに、かか
 わり合(ツ)てるコト、甲の物と乙の物
 とが、相對(ツ)して双方(ツ)の状態(ツ)
 を示し合てるコト、血族(ツ)同士が
 互ひに連(ツ)り合つてるコト、男女と
 情交(ツ)を通ひ居るコトなどを云ふ
 くわん (歡迎) 圖よるこびむかふ、誠

くわん

くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 コトを云ふ、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 足に終(ワ)る(ワ)成就(ワ)する、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 事業、官府の仕事、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 きき、かきき云ふ意より轉じて、物事の
 大切なる事を云ひ表はすに用ゆる語(ワ)
 轉じて文章の肝要(ワ)なる句切(ワ)の
 コト、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 考え(ワ)げちなかかんがへのコト、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 は國家のおきての、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 の物と爲るコトを云ふ、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 へて云ふコト、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 (ワ)より轉じて節(ワ)や、三味線などに
 て、音楽(ワ)を奏するコトを云ふ(ワ)單
 に音楽の、

くわん

くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 つ親切(ワ)なるコト、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 めるコトを云ふ、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 るコト。工業を上げます、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 ぶコトを云ふ、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 すめるコト、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 近江(ワ)の調境(ワ)なる逢坂(ワ)に關處
 (ワ)ありしより、逢坂山以西を云ふ
 關東に對しての稱なり、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 勅定(ワ)を全部(ワ)する、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 を見て吉凶を判断す、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 の道理を考へもさむるコト、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 の道徳を考へもさむるコト、

くわん

くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 なる數にかへて云ひ表(ワ)はすコト
 を云ふ、磅(ワ)を圓(ワ)にかへて云へば
 などの類、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 くに刻(ワ)たる文字の、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 (ワ)の儀式を行ふ室、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 與(ワ)えられる住宅、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 (ワ)めて冠をかぶつた者の稱、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 コトを云ふ、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 ち發端(ワ)の、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 より轉じて用ひなれて巧(ワ)みになり
 しコトを云ふ、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 知るコトを云ふ、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 の山門

五九六

くわん

の座主(ワ)の、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 のコトを云ふ、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 病氣にかゝつて、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 雲隠(ワ)の、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 心の、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 ト(ワ)僧侶(ワ)が佛教(ワ)に關(ワ)する
 事にて、俗人(ワ)に寄附(ワ)を勧め歩く
 コトを云ふ、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 のあるコト。なまけふかき、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 人(ワ)物事を官府へ願(ワ)ひ出る人、即ち
 訴願人の、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 えふコト、又は酔ふた心持、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 じを執行するに付き、權限(ワ)を分ち
 たる規定(ワ)を云ふ、

くわん

くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 る神佛(ワ)の靈(ワ)を、我が所に移して奉祀
 するコトを云ふ、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 こころの、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 コト。全部(ワ)する、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 満足に成就(ワ)す、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 て立る聲、歡呼の聲、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 滞(ワ)なく出来る、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 て其の國の税關にて徵收(ワ)る税金の
 コトを云ふ、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 類(ワ)の身躰、澤山の環(ワ)に分(ワ)れ
 てるコトを云ふ、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 ト又た設立された物、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 の稱(ワ)轉じて物と物とが接合してある

くわん

部分の、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 コト(ワ)殊更に勝(ワ)る、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 横合より差し出るコト、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 コトを云ふ、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 て戦争の仕方を見物するコト(ワ)又は演
 習を見物するコト、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 鐵道線路(ワ)電信線又は電話線など
 の類を云ふ、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 てえらび定むるコト(ワ)官府にて編輯(ワ)
 び又は著作(ワ)せし文書、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 をあけるコト、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコト(ワ)欠
 (ワ)てあらぬコト。満足、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 タムシの、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 はかるコトを云ふ、
 くわん(ワ)を盡して迎へせりなすコトを云ふ
 ある土地の、

五九七

くわん

へば原籍所在地、
 くわんぞく(官屬) 官府の所屬、
 くわんたい(緩帶) 圖帶(せ)を緩(せ)く、
 るさ云ふ儀にて、即ちダラシの無き衣
 服の着方(せ)の事、
 くわんたい(款待) 圖手厚(せ)くさりなす
 あつきもてなし、
 くわんたい(寛待) 圖ゆるやかにもてなす
 心を盡(せ)して取り持つ、
 くわんたい(冠帶) 圖かんむりさ帯(せ)こ
 のコト、轉じて禮儀を堅(せ)く守りて正
 しきコトを云ふ、
 くわんたい(寛大) 圖心のゆるやかにして
 大なるコト、即ち些々(せ)たる事に頓着
 (せ)せぬコト、
 くわんぢり(官道) 圖政府より開きたる道
 路(せ)修繕(せ)其他を官府に於て爲す道
 路(せ)、即ち國道、
 くわんたく(官宅) 圖官舎に同じ、
 くわんたて(願立) 圖神佛に誓(せ)を立て
 物事を願ふコト、
 くわんたん(元旦) 圖元日に同じ、
 くわんぢく(巻軸) 圖書物又は巻物の終り
 のコトを云ふ、
 詩歌の數(せ)ある物の
 中にて、秀逸(せ)なる物のコトを云ふ、
 くわんぢり(巻帙) 圖書物のコト、

くわん

くわんぢよ(巻舒) 圖巻くコトと、ゆるめ
 るコトを云ふ、
 くわんぢよ(官女) 圖宮中に仕へる女官の
 コトを云ふ、
 くわんぢよ(寛恕) 圖心ゆるやかにして、
 思ひやりふかきコト、
 其の失策(せ)を
 大目に見て咎(せ)め立をせぬコトを云
 ふ、
 くわんつち(貫通) 圖つらぬきさうす、
 き通る彈丸(せ)などの、
 物事を成功
 さすコト、
 くわんづめ(鑑詰) 圖食料品を永く腐敗(せ)
 せしめざるやふ、
 貯(せ)はへる爲めに
 鐵力(せ)の鑊に入れて煮(せ)て、
 其の口
 を密封したるものを云ふ、
 くわんてい(官邸) 圖官宅に同じ、
 くわんてい(官邸) 圖朝廷、
 官府、
 くわんてい(貫徹) 圖つらぬき通すコト、
 物事を成就(せ)さすコトを云ふ、
 しさうすコト、
 くわんてん(寬典) 圖寛大なるおきて、
 ゆ
 るやかなるおきて、
 くわんとう(關東) 圖昔時箱根山に關處あ
 りしより、
 箱根以東の土地を稱して云
 ふ、
 關西に對しての稱、
 くわんとう(官等) 圖官職の等級(せ)、

くわん

くわんどう(玩讀) 圖ながさみに本を讀む
 コトを云ふ、
 くわんどん(頑鈍) 圖片意地にしておろか
 なるコト、
 馬鹿の事、
 くわんない(管内) 圖管轄する区域内(せ)
 のコトを云ふ、
 くわんちち(完納) 圖残らずおさめる、
 即
 ち税金(せ)などを皆な納(せ)めるコト
 又は納めたるコト、
 くわんちち(還納) 圖官府より受(せ)たる
 物をおさめかへすコト、
 くわんなん(患難) 圖なんざなるコト、
 う
 れひコト、
 くわんぬき(門) 圖門の扉(せ)又は家の入
 口の戸などの、
 開き得られぬやうに鎖
 (せ)し固(せ)むる、
 横に入れる木の
 コト
 を云ふ、
 物をくわんぬきの如くに、
 横
 に差し込みたる其の有様(せ)の
 コトを
 云ふ、
 相撲(せ)の四十八手の一にて、
 相手の力士がもる差(せ)に差し込んで
 来た腕(せ)を上より抱(せ)きこめてしほ
 り上げる手を云ふ、
 くわんぬん(觀念) 圖心を沈(せ)めて靜か
 に思ふコト、
 思ひ切るあきらめる、
 思
 ひ切るコト、
 くわんのち(官能) 圖人又は鳥獸類の身軀

くわん

の諸器具のはたらきのコトを云ふ、
 くわんのち(勸農) 圖農業をすすめるコト
 農事を勵ますコト、
 くわんのせ(貫木) 圖くわんぬきのコト、
 門(せ)の扉(せ)のよ、
 くわんばい(環拜) 圖其の周圍(せ)を取り
 圖(せ)みて拜(せ)むコト、
 くわんばい(觀梅) 圖梅の花を眺(せ)める
 コトを云ふ、
 くわんばち(觀望) 圖のぞみ見るコト、
 自
 己(せ)の進退(せ)を決(せ)すべく爲めに
 其の容子をうかがひ視てあるコト、
 其
 の物事又は事件の成り行き如何(せ)を
 眺め、
 視てあるコトを云ふ、
 くわんばち(願望) 圖れがひ、のぞむ、
 くわんばく(關白) 圖一つの官名、
 昔時天
 下に代(せ)りて、
 天下の大政(せ)を執
 (せ)りし官職を云ふ、
 くわんはつ(煥發) 圖かがやき表(せ)はる
 る、
 明(せ)かに天下に示すコト、
 即ち
 大詔煥發を云ふ、
 くわんはふ(觀法) 圖佛教の語にて、
 佛法
 を見るさ云ふ意、
 即ち心を沈(せ)めて眞
 理(せ)を思ひ悟(せ)るコト、
 くわんはん(官版) 圖官府にて製作(せ)著
 作せし繪畫(せ)書籍(せ)等の發行物

くわん

のコトを云ふ、
 くわんぶち(觀風) 圖其の土地の風俗(せ)
 を觀(せ)て察(せ)するコト、
 「コト、
 くわんぶち(觀楓) 圖紅葉(せ)を見物する
 くわんぶく(官服) 圖法令に依りて定めら
 れたる官吏の制服の事、
 くわんぶつ(官物) 圖政府の所有せる物件
 (せ)の事、
 くわんぶつ(灌物) 圖佛の像に香氣の含
 (せ)める水などなをそぎ掛るコトを云
 ふ、
 假令は四月八日に釋迦如來(せ)の
 像に、
 甘露(せ)をかふる、
 如きコト、
 くわんぶん(願文) 圖神佛(せ)へ祈願(せ)
 を籠(せ)る、
 其の願意を認めたる文書、
 官省へ願ひ出る文書、
 くわんべい(官兵) 圖官軍に同じ、
 くわんべい(觀兵) 圖兵隊を列(せ)ばせて
 其の容子を視(せ)る、
 軍隊の威勢(せ)を
 如何を視るコト、
 くわんへい(官幣) 圖宮内省の式部職(せ)
 の取扱ひにかかる全國の神社へ、
 其
 の格式(せ)に依りて、
 俸(せ)げ申する幣
 帛(せ)の事、
 くわんべん(完壁) 圖十分に勝(せ)りて滿
 足せる物、
 欠(せ)てある事のなきコト、
 十分にさへなふ、

くわん

くわんべん(官邊) 圖おがみ、
 おもてむき
 ⑤やくむきのコト、
 くわんぼち(關防) 圖國境(せ)を防(せ)ぐ
 コト、
 書畫(せ)を書きて、
 其の物が捕
 (せ)ふてあるか、
 又は端物(せ)なるかを
 知るに、
 便(せ)ならしむる爲めに、
 其の
 物の右の肩(せ)に、
 捺す印の
 コトを云ふ、
 くわんぼち(官房) 圖各省又は府縣廳又は
 特別の官廳にて、
 其の長官に附屬(せ)
 して、
 特別(せ)の事務を執(せ)る所を云
 ふ、
 くわんぼく(瀧木) 圖木の種類の區別の名
 にて、
 莖(せ)の丈(せ)短(せ)かくて、
 莖(せ)
 の下より枝(せ)の多く、
 分(せ)れ出てる
 種類の木を云ふ、
 假令はポタン、
 ツツジ
 山吹(せ)、
 南天(せ)などの木は皆な瀧
 木の類なり、
 くわんぼつ(官沒) 圖官府に取りあげてし
 まふコト、
 即ち沒收(せ)の事、
 くわんぼん(官本) 圖官有の書籍、
 官府よ
 り發行せる書物の事、
 くわんまん(緩漫) 圖グブ／＼して
 るコト
 ゆるやかなるコト、
 くわんみん(官民) 圖官吏と人民、
 くわんみん(頑民) 圖頑冥なる人民、
 くわんめい(官名) 圖役目の名、

くわん

くわんめい(頑迷)固片意地(ひん)にして、
 智識の乏(ひ)しきコト、
 くわんめい(頑迷)固片意地にして、心の
 定(ま)まらぬコトを云ふ、
 くわんめん(願面)固官府へ願(ねが)ひたる、
 其の願書に認(た)めてある、願意又は
 其の文面のコトを云ふ、
 くわんもつ(玩物)固おもちや、
 くわんもん(關門)固關所の門(かど)轉じて物
 事の大切なる、頂上の事に喩(たと)へて云
 ふ語、
 くわんもん(喚問)固呼び寄せてたづねる
 コト、重に官府の命令に依りて云ふコ
 ト、
 くわんやく(管鑰)固かぎ(鍵)、
 くわんやく(關輪)固くわんぬきまぢやう
 と云ふ意より轉じて、内部(うち)へ入り
 込むべき、大切(たいせつ)なる所と云ふコト
 ①凡て物事の大小なる所と云ふに用ゆる
 語、
 くわんやく(丸藥)固藥を二種以上合して
 煉(ね)りて服(く)み易(やす)く小さく圓く
 なしたるもの、稱、
 くわんゆう(患憂)固うれひ、なやむコト
 ①病氣にて難義せるコト、
 くわんゆう(勸誘)固すすめ、いざなふさ

くわん

そひみちびくコト、
 くわんより(歡容)固うれしそなる容子
 よるこぼしきありさま、
 くわんより(寬容)固人の云ふ事を能く聞
 き入れるコト、
 くわんより(慣用)固用ひなれるコト①常
 々に用ゆるコトを云ふ、
 くわんより(換用)固取りかへて用ゆる。
 交々(たが)に用ゆるコト、
 くわんらい(元來)固もともと、最初(しう)
 から、初めからと云ふのみ、
 くわんらく(歡樂)固よろこび、たのしみ
 コトを云ふ、
 くわんらん(觀覽)固ながめ見る、見物す
 くわんりき(願力)固神佛に祈願を籠めて
 其の願意を貫(ぬ)かんとする熱心(ねっしん)
 を云ふ、
 くわんりつ(官立)固官設に同じ、
 くわんりん(官林)固政府の所有にかかる
 山林(さん)のコト、
 くわんりん(官廩)固政府の倉庫、
 くわんりより(完了)固物事のさきこまり
 なく、終(は)るコトを云ふ、
 くわんれい(慣例)固しきたり、
 くわんれき(還曆)固年の立ちかへるコト
 即ち新年(しんねん)本卦にかへるコト、六十一

くわん

歳に成つたコト、
 くわんれん(關聯)固物事の、互ひにかか
 はり連(つ)なり合つてゐるコト、
 くわんろち(玩弄)固もてあそぶコト、な
 ぶり物にするコト、
 くわんろく(官祿)固政府より下される祿
 分(ぶん)のコトを云ふ、
 くわんいちち(官有地)固政府の所有せる
 土地のコトを云ふ、
 くわんきてん(歡喜天)固聖天(せい)に同じ
 佛の名なり、
 くわんきやく(頑強)固かたこわなるコト
 ①馬鹿強情(ばか)のコト、
 くわんくわち(觀光)固風光を見ること云ふ
 意にて、他國の風俗(ふうぶく)景色(けいしき)國の
 容子などを觀(み)るコトを云ふ、
 くわんをわい(管外)固管轄(か)の區域
 外(がい)領分(りやうぶん)外(がい)のコト、
 くわんくわつ(寬濶)固心のひろきコト、
 物事にあくせくせぬコト、精神が春の
 如くさわやかなるコト、
 くわんをわん(還願)固はんばききに同じ
 其の條を見られよ、
 くわんこうば(勸工場)固多數の商人が互
 ひに規約(きやく)を設けて、一つの大なる
 建物(た)の内に、種々雑多の商品を

六〇〇

くわん

陳列(ちんれい)して、販賣せる所のコトを云
 ふ、
 くわんしやく(勳獎)固すすめはげまする
 コトを云ふ、
 くわんしやく(環狀)固環(わ)の如くなつ
 てる形のコトを云ふ、
 くわんじやく(願狀)固願書(ねが)ひの
 次第を、認めたる手紙、
 くわんしやく(官爵)固役目と自分、
 くわんしやく(慣習)固ならばせ引きたり
 なれ来りたるコト、
 くわんしやく(管掌)固つかさどるコト、
 取締(とと)つてるコト、
 くわんしやく(官省)固役所、
 くわんしやく(觀賞)固見てほめる①なが
 めてたのしむコト、
 くわんしやく(勳賞)固ほめてすすめるコ
 ト①ほめそやすコト、
 くわんしやく(官職)固官吏のやくめ、即
 ち官府の事務(じむ)を執る階級(かいけい)のコ
 トを云ふ、
 くわんせいふ(觀世鉄)固鉄(てつ)の一種、
 くわんちやく(管長)固宗門を監督して、
 取締(とと)る役(やく)の長(なが)、
 くわんちやく(官長)固官吏の長、
 くわんちやく(灌注)固そそぎかけるコト

くわん

①水などをかけてうるはす、
 くわんちやく(官廳)固官のコト、
 くわんちやく(灌頂)固佛敎の語にて、僧
 侶が佛を念(ねん)じつつ頭(かぶ)より香水
 を注ぎ掛る儀式を云ふ①石碑(せき)の上
 より水を注ぎかけるコトを云ふ語、
 くわんちやく(勸懲)固勸善懲惡(くわんぜん)
 の略、
 くわんちやく(灌腸)固醫學上の語、尻(し)の
 穴(あな)より、ポンプ仕掛(し)の器械(き)を
 用いて、藥品を腸内へ送(お)り込み、
 大便の通じた、催(もよほ)さす醫療の一
 法の名、
 くわんびせい(官費生)固入費(に)を官府
 より支給(し)されて、修學(しゆがく)する學
 生のコトを云ふ、
 くわんぶつ(灌佛會)固陰曆四月八日に
 釋迦如来(しやくた)の像に、香水甘茶(かん)を
 注ぎ注(つ)ぐ佛式、
 くわんべいし(官幣使)固官幣を神社へ捧
 (た)ぐる爲めに差遣(さ)はさるる使者
 のコトを云ふ、
 くわんほどき(願解)固神佛に、こめたる
 祈願(ねが)いをほごくコト、
 くわんりにん(管理人)固凡て物事を管理
 する人。物事を取締(とと)る人、

くわん

くわんりはふ(管理法)固學校の取締(とと)り
 及生徒の監督(とく)を爲す方法のコ
 トを云ふ、
 くわんりやく(願力)固立てたる願意を、
 貫(ぬ)かむとせる、其の精神(しん)、
 くわんろち(玩弄)固凡ておもちや
 するべき物を云ふ、
 くわんいちち(官有物)固政府の所有物
 のコトを云ふ、
 くわんおんちく(觀音竹)固シユウロ竹の
 一種にて、一尺ほざより以上に延(の)びさ
 る物、琉球に産す、盆栽(ばいざい)として賞賛
 する、
 くわんかんしき(觀艦式)固天皇陛下が御
 自身にて、軍艦を檢閲(けん)あらせらる
 る儀式のコトを申す、
 くわんびちやく(勸化帳)固勸進帳(くわんじん)
 に同じ、其の條を見よ、
 くわんざい(管財人)固法律の語、他
 人の財産を管理する人、
 くわんさん(元三日)固一月一日のコ
 トを云ふ、
 くわんじやく(管城子)固筆の一名、
 くわんじやく(患者室)固病氣にて病人
 の居る部屋のコト、
 くわんしやく(慣手段)固相變(さへ)らす

六〇一

くわん

お定りのでだてのコト、
くわんじんのち(勸進能) 図勸進の爲めに
催す能樂 見物料を取りて見せる能樂
のコト、
くわんじんちと(勸進元) 図勸進相撲を爲
す其の發起人のコト 轉じて凡て物事
(事)を計畫せる發願人のコトを云ふ、
くわんせんより(觀世音) 図紙を細長くよ
りたる物のコトを云ふ、
くわんぞくかへ(貫屬替) 図戸籍(き)を甲
の地より乙の地へ移(シ)すコトを云ふ
語、
くわんちより(灌瀉器) 図灌瀉を行ふ器
具、ポンプ仕掛の物、
くわんちんや(廣東焼) 図陶器の名、南
清(シ)の廣東地方より、産出せるもの
くわんはつしち(關八州) 図關東八州の略
語、
くわんべいしき(觀兵式) 図天皇陛下が御
自身にて、軍隊を檢閲(シ)あらせらる
る、儀式的コトを申す、
くわんへいしや(官幣社) 図神社の格式(シ)
の、名、即ち官より幣物を捧(サ)げて祭
られる、格式の高き神社のコトにて、大
社、中社、小社、別格社の區別あり、
くわんらんじん(觀覽人) 図見物人のコト

くわん

を云ふ 轉て物を見る人、 「に同じ、
くわんいちざいさん(官有財産) 図官有物
くわんおんびらき(觀音開) 図戸の一種に
て、右より戸を寄(キ)て、中央(キ)で
合(フ)して、閉閉(シ)の出来るやふに作
られてある開き戸、
くわんきふしや(緩急車) 図列車に速力の
緩急を、自由に爲し得る器械の具(キ)へ
附けてある車のコトを云ふ、重に車掌
が、此に乗つて其の器械を取り扱ふ、
くわんきふれつしや(緩急列車) 図汽車の
速力を、或は急め、或は緩(ク)くするコ
トの、自由に出来る器械の具(キ)え附
(キ)てある列車、
くわんくわんらん(觀光團) 図觀光を爲す
べき人々の、集合、即ち團體(キ)のコト
を云ふ、
くわんくわんこく(蠶寡孤獨) 図やもな、
やもめ、みなしこ、ひさりものコトを
云ふ語、
くわんげふきんかち(勸業銀行) 図農業及
び工業の改良發達を圖(ル)るを以て目
的とし、其の方面にのみ、資金を貸附(シ)
ぐる株式組織の銀行、
くわんしんをかふ(買歡心) 図人の機嫌(シ)
をさるコト、

くわん

くわんじんすま(勸進相撲) 図勸進の爲
めに、催す相撲 相當の見物料を取り
て、爲す相撲、
くわんじんちや(勸進帳) 図勸進の次第
即ち其の主趣を記するたる文書、帳面
のコトを云ふ、
くわんじんぼち(願人坊主) 図徳川時代
に、江戸の市中にて、相當の禮金を受け
て、人の代(カ)りに願掛を爲したり、又
は水指離(カ)を爲せし乞食(キ)坊主の
コト 轉じて乞食坊主のコトを云ふ、
くわんせんきよく(管船局) 図海事に關(シ)
する、凡ての取締(キ)り、及び其の事
務を執(シ)る、通信省内の一局の名、
くわんせつどちふつ(環節動物) 図蜂(キ)
の細く長くして、且つ軟(ク)らかにして
全身が環(シ)の連り合つたるが如き狀
(キ)を呈してある虫類(キ)のコト、假令
(キ)ばミミツなどの如きもの、
くわんせんちや(勸善懲惡) 図善事
をすすめて、惡事をこらすコトを云ふ
語、
くわんつちしや(貫道傷) 図小銃(キ)の
丸(キ)が貫き通つて、受けたる傷(キ)の
コトを云ふ、
くわんよりしゆらん(慣用手段) 図其の人

が、當(カ)りに用ひて、一つの例(シ)の如く
に爲つてゐる、でだて、しかたのコトを云
ふ、
くわんちうしへい(玩弄紙幣) 図おもちゃ
の札(シ)のコト、
(くぐん)

くん(襦) 図衣物の下の部分、即ちす
そ 轉じて凡ての下の方の部分のコト
を云ふ、例は山の裾(シ)など 凡て劣
(カ)つてゐる、下つてゐるコトを云ふ、即ち
末(シ)、
くん(着) 図裾(シ)に同じ 肌(シ)に着(キ)
る衣物 下着(キ)のコトを云ふ、
くん(着) 図總て物を炙(キ)つて煙を立ち
上らせるコト、即ちいぶす、くすべる 轉
じて物をくすべて、にほひのするコ
ト、即ちかほる、
くん(醜) 図酒を飲(ミ)ると云ふコト 醜(シ)
て樂(シ)しむコト、
くん(薰) 図總て善き香氣(キ)のある
草のコトを云ふ、即ちかほり草(キ)かほ
る、かほり、即ち善きにほひ(ク)くすべる
やく(カ)かほると云ふ意より轉じて、す
なほにして、やさしき狀(キ)を云ふ、
くわん、くん 裙、帯、袴、圍、薰

くん(嚙) 図夕方(キ)夕方の太陽の光(シ)
りのコトを云ふ、
くん(纏) 図赤の薄き色合を云ふ 轉じて
薄赤く染めしもの、
くん(膾) 図總て獸肉(キ)類の焼きたる
物を云ふ 肉類のあつ物、
くん(薫) 図えぶす、くすばらせるコト 香
氣ある物をやく 暮れ方のコト、日
のくれ(カ)おだやかにして、安(シ)らけき
さまを云ふ 心に感ずる、精神を刺戟
す、

くん(葷) 図一種の臭氣ある野菜物の稱、
即ち、れぎ、にら、にんにくなどの類を
云ふ 此等の物を食(キ)て、其の臭氣が
呼吸に含(ミ)まれてあるを云ふ語、
くん(蹠) 図寒さの爲めに、皮の表面が薄
(ク)く裂(キ)れるコト、即ちひび、あかぎれ
のコトを云ふ、
くん(鮮) 図齒(シ)の自然に抜けて落ちるコ
ト、又た落ちたるコト、
くん(軍) 図いくさ、たたかひ、たたかふコ
トを云ふ 陣(シ)を取る、兵隊が陣地(シ)
(カ)に就く 戦かふべき兵勇(キ)のコト
を云ふ、即ち軍隊(シ)軍勢のコト 軍
隊の語にて、兵士の團體の稱、即ち軍團
(シ)一軍團(シ)二箇師團のコトを云ふ

くん(羣) 図群(シ)に同じ、其の條を見られ
よ、
くん(君) 図ヤミのコト、即ち國家の主權
者、帝王(キ)のコト 人を呼ぶに敬意
(シ)を表す爲めに、其の氏名の下に、附
け加ふ語、
くん(訓) 図さす、おしえる 漢字の意
義を、我が國語にて云ひ表はすコト 漢
字の意義を、解き明かすコト、又はさ
き明したるもの、
くん(勳) 図いさほし、てがら 勳章の
等級を云ふ、即ち勳一等乃至勳八等な
ど、
くん(群) 図凡て物の多く集(メ)りて、一
かたまりとなるコト 多きコト 仲間
(シ)のコト、
くん(郡) 図こほり、一國を更に細かく區
別したるもの稱、
くん(群) 図むらがるからす。一國
(シ)となつてゐる島、
くん(君位) 図帝王の位、
くん(勳位) 図國家に功勞あり、勳功(シ)
のある人に、賜はる勳章の、位階(シ)の
コト 勳章の等級の稱、第一等より
八等まであり、
くん(軍醫) 図陸海軍に屬する、醫官の

くん、くんい 羣、君、訓、郡 六〇三

くんい、くんか

くんい(薫蕪) 薫香氣(かき)のよきさ、悪
きさ(行(せ)の正さ、正しからぬさ
賢者(せじ)と、愚者(ぐ)と、
くんい(群遊) 人多くの人々が、むら
つて遊びたはむるコト、
くんい(群遊) 人多くの人々が集(た)が
つて、水中をおよぐコト、
くんい(訓育) 人を教えそだつコト。
くんい(薰育) 善き行ひを爲して、人
を善に導き教へるコト、
くんいかん(軍醫監) 陸海軍の職名、少
將相當の軍醫、即ち將官相當の軍醫(じ
い)、
くんえい(軍營) 陣營(せい)の陣所
の陣所を云ふ、
くんえい(群英) 人に秀(ひ)たる智能(えい
い)を有せる、多くの人々を云ふコト、
くんえき(軍役) 軍隊(たい)の勤(しん)に、
服するコトを云ふ、
くんおん(君恩) 君主のおめぐみ。君主
のおなまき、
くんか(軍歌) 固(こ)士氣(し)を振(び)ひ起(た)
さすべく、作られたる壯烈(さうれつ)なる歌、
重(じゆう)に七五調(しちごてう)の唱歌體(かた)なり、

くんか

くんが(郡衙) 郡役所のコト。郡内の行
政を、つかさどる役所、
くんか(群下) 郡澤山の家來(けらい)、即ち群
臣(しん)のコトを云ふ、
くんかい(訓解) 固(こ)文章中の字句(じく)を、解
(かり)易く説き明(あ)すコト、又は説き
明したるもの、
くんかい(訓戒) 固(こ)えいましむコト、
教えさすコト、
くんか(薫香) 薫香氣の殊に善きコト、
くんか(軍港) 固(こ)領守府(りやうしゆ)の所在地
にして、海軍の根據地(こんこ)の陣所を云
ふ、
くんが(群豪) 固(こ)多の豪傑(ごうたけ)、多く
の豪族(ごうぞく)、
くんが(軍學) 固(こ)軍隊にて奏(そう)づる、勇
壯なる音楽、
くんかん(軍艦) 固(こ)海上の戦争、港灣(こうわん)
の攻撃(こうげき)、及び防禦(ぼくご)等の役を爲
す、軍用船(ぐんようせん)の總稱(そうせう)を云ふ、
くんかん(軍監) 固(こ)凡て軍事を取締(とら)る
コト、
くんかん(軍艦旗) 固(こ)我が日本帝國の、
軍艦なる事を表す旗にて、陸軍に於け
る聯隊旗と同じく、最も大切にして、且

くんか、くんき

くんか、くんき
つ貴重たる物、旭(あ)の状(じやう)を描(え)かる
くんか(軍樂隊) 固(こ)軍隊に屬して、
軍樂(ぐんがく)を奏する一部隊の稱、
くんき(勳記) 固(こ)勳章(じゆうしょう)を與(たま)ふる證
として、其の勳功(じゆうこう)のありし次第(しだい)
を、記して賜はる官文書、
くんき(軍旗) 固(こ)其の聯隊(れんたい)を表はす、
貴重(じゆう)なる旗にて、其の聯隊の設立
(せつり)されたる時に、天皇陛下より、下し
賜はりたる、朝日(あ)の狀(じやう)を描(え)きたるものにて、即ち聯隊旗の陣所、
くんき(軍機) 固(こ)軍事に關する秘密(ひみつ)な
る事、
くんき(軍紀) 固(こ)軍隊の規則、
くんき(軍記) 固(こ)戦争の容子(ようし)を、記す
コト、又は記されたるもの、
くんき(軍氣) 固(こ)軍隊の勇氣(ゆうき)、即ち軍
隊の士氣(しき)、
くんき(群起) 固(こ)むらがつて立つコト。集
(あ)まつて起(た)る、
くんき(群議) 固(こ)多くの人が集まつてなす
議論、又は相談、
くんき(軍議) 固(こ)軍事に關する相談の陣所
くんき(群疑) 固(こ)多數の人のうたがひ。衆
人のさわくのコト、
くんき(群居) 固(こ)多人數一所に爲つて住

あ居るコト、

くんき(軍旗祭) 固(こ)聯隊にて、行はれ
る壯嚴(さうげん)なる儀式、即ち其の聯隊の
軍旗を、天皇陛下より下し賜はりたる
日さか、又は其の聯隊が、戦ひに勝ちた
る紀念日に於て、行はれる祝典、
くんき(軍機漏洩) 固(こ)軍事上の秘
密なる事柄(ことば)が、世間(よ)に洩(は)れ、又は戦時
に於て敵國へ知れるコト、
くんくわ(訓化) 固(こ)教えて善道(ぜんどう)に引き
入れるコト、
くんぐん(群) 固(こ)多くの物、又は人のむ
らがり集(あ)まれるさまを云ふ、
くんくわい(訓誨) 固(こ)教(け)えさすコト
教へましむコト、
くんくわい(郡會) 固(こ)郡會議員が會合して
其の郡内の歳出入、其他郡行政(せいせい)
に關する、大切な事を、議決(ぎけつ)する
會合の陣所を云ふ、
くんくわい(郡會議員) 固(こ)其の部内
の、公民權(きんけん)を有せる者より、選出
されて、郡會を組織(そくせい)せる議員、
くんけん(軍監) 固(こ)くんに同じ、
くんけん(郡縣) 固(こ)郡と縣と、
くんけん(訓言) 固(こ)教えさす言葉(ことば)いま
しめさなる言葉、
くんき、くんけ

くんけん

くんけん(郡縣制度) 固(こ)全國を縣
(けん)に分ち、縣を更に郡に分ちたる政事
(せいじ)の仕方の陣所、
くんこ(訓詁) 固(こ)古き文章、又は語詞(ごご)
の意義を、さき明(あ)すコトを云ふ、
くんこ(軍鼓) 固(こ)昔時に陣中にて鳴(な)し
て、諸種の合圖となしたる太鼓(たいこ)、
くんこ(軍侯) 固(こ)大名を尊(たう)んで云
ふ語、
くんこ(君公) 固(こ)君(きみ)又は主人のコト
を云ふ語、
くんこ(勳功) 固(こ)てがらいまし。國家
に對する功勞(こうらう)、
くんこ(群口) 固(こ)多數の人々の云ふ言葉
(ことば)を云ふコト、
くんこ(曠野) 固(こ)日の全く暮れたるコト
日の没せしコト、
くんこ(軍功) 固(こ)戦争にて立たるてがら
戰場の功績(こうせき)、
くんこ(軍國) 固(こ)戦争を爲す仕度を調え
たる國(くに)戦争を爲しつゝある國のコト
くんさい(措探) 固(こ)あつめさる。拾(ひろ)ひさ
るコトを云ふ、
くんざり(軍裝) 固(こ)戦争の仕たくのコト、
即ち軍隊のよそほひ、
くんけ、くんき

くんざり

くんざり(軍曹) 固(こ)陸軍下士官の名、曹長
の次に位するもの、
くんし(君子) 固(こ)精神の善真(ぜんしん)にして、
品行(びんぎん)正しく、學識ありて、衆人の手
本となるべき人(ひと)位ありて、行ひ正し
き官吏のコトを云ふ、
くんし(君子) 固(こ)僧侶の用ゆる衣服の一種
ヒダの多く在る、短(みじ)かき袴(はかま)の如き
もの、
くんじ(訓示) 固(こ)おしえしらす。上官(じやくわん)
下官に對して、其執務(しやくむ)の心得を知
らせるコトを云ふ、
くんし(軍士) 固(こ)戦(いくさ)をする人、即ち軍
人、
くんし(軍資) 固(こ)戦争のいりよう、即ち軍
用金(ぐんようぎん)の陣所、
くんし(軍使) 固(こ)戦争中に、軍事に關する
用件を、敵陣(てきじん)に傳へ行く人の陣所
を云ふ、
くんし(軍師) 固(こ)戦争に就ての、謀(はかり)を
廻(まわ)らす人、即ち參謀官(さんぼうくわん)、
物事
の手段を上手(うず)に廻らす人の陣所を
云ふ、
くんし(郡司) 固(こ)其の郡内の長官、即ち郡
長に同じ、
くんじ(軍事) 固(こ)戦争(いくさ)軍備(ぐんび)其の他
軍隊に關する事柄のコトを云ふ、
くんき、くんし

くんし
 ぐんじ(群兒) 圖子供の多く集(ツ)まつて
 るコト。大勢の子供の多、
 ぐんしふ(掛捨) 圖落ちてる物を拾(ヒ)ひ
 上る。集めて取るコト、
 ぐんしゆ(君主) 圖國家の元首(シヤ)、即ち
 帝王の事を申す、
 ぐんしゆ(軍酒) 圖酒(シヤ)と酒(シヤ)を食
 して酒を飲みしコト共に、香氣(シヤ)高
 ければ、佛(シヤ)は忌みきらふ云ふ、
 ぐんじゆ(軍需) 圖軍隊にて、入用なるコ
 ト。戦争に必要(シヤ)なる品物のコトを
 云ふ、
 ぐんしゆ(郡守) 圖其郡の長官、即ち郡長
 (シヤ)のコト、
 ぐんしよ(軍書) 圖軍事上の事を記載せし
 書物のコト、
 ぐんしよ(群書) 圖澤山の書物、
 ぐんしん(君臣) 圖君と臣下、
 ぐんしん(勳臣) 圖國家に功勞のありし家
 來(シヤ)のコトを云ふ、
 ぐんじん(軍人) 圖戦争をする人。軍務(シヤ)
 云に從事する人、
 ぐんじん(軍神) 圖軍人の武運(シヤ)長久を
 守らせらる、神。其の生前に、戰場に
 て拔群(シヤ)の功を立てたる軍人のコト
 を神とし尊(シヤ)びて云ふ語、

くんし
 ぐんしん(群臣) 圖多數の家來(シヤ)、
 ぐんじつち(軍事通) 圖身軍籍(シヤ)にあ
 ざる人にして、軍事に精(シヤ)しき人のコ
 トを云ふ、
 ぐんしゆち(軍餉) 圖軍隊に必要な食料
 即ち兵糧(シヤ)のコト、
 ぐんしゆち(勳章) 圖國家に勳功功勞(シヤ)
 のある者に對して其れを表彰(シヤ)して
 下し賜はる記章にて種類及び等級あり
 ぐんしゆち(軍將) 圖其の軍の指揮官(シヤ)
 云ふ。其の部隊の大將のコト、
 ぐんじゆち(勳狀) 圖部下(シヤ)の勳巧(シヤ)
 を褒(シヤ)めて大將(シヤ)より下される感狀、
 ぐんじゆち(群書) 圖繪物の一種、繪具(シヤ)
 云を製する原料なる物、
 ぐんしゆち(蒸料) 圖かやくコト。自然
 に響(シヤ)き渡るコト、
 ぐんしゆち(群集) 圖人々の多數、よりの
 かれるコトを云ふ、
 ぐんしゆち(群衆) 圖あつまりたる人々(シヤ)
 云ふ。其の部を云ふ、
 ぐんしよ(軍職) 圖軍事に關する職務の
 コトを云ふ、
 ぐんしよ(郡書記) 圖郡役所に奉職(シヤ)
 する、判任官又は判任待遇の書記、
 ぐんじゆひん(軍需品) 圖軍用品のコトを

くんし、くんせ 軍、風 六〇六
 云ふ、
 ぐんじちひん(軍事郵便) 圖戦地より軍
 人軍屬が發する郵便のコトにて、無賃
 (シヤ)にて取扱はれるもの、
 ぐんじちちさい(軍事公債) 圖戦争(シヤ)の
 費用(シヤ)に充(シヤ)る爲に、發行したる公
 債、
 ぐんじさいばん(軍事裁判) 圖軍法會議に
 ぐんじたんでい(軍事探偵) 圖敵國又は他
 國に忍び入りて、軍事に關する諸種の
 秘密(シヤ)を、探(シヤ)るコト、又は其の人
 のコトを云ふ、
 ぐんじきやうせい(軍事行政) 圖軍隊の編
 成組織、軍艦の配置、教育衛生等にて、
 陸海軍に關(シヤ)する政事(シヤ)のコトを
 云ふ、
 ぐんす(軍) 圖陣(シヤ)を張る、陣を取る、
 陣地を敷く、
 ぐんす(風) 圖動風(シヤ)すに同じ、其の條を
 見よ。いやになる。あきる、
 ぐんせい(燻製) 圖獸肉(シヤ)類を、いぶし
 て固(シヤ)ませたるもの、稱、即ちハム
 のコト、
 ぐんせい(軍勢) 圖其の一軍の勢力。兵隊
 軍隊のコト、
 ぐんせい(軍政) 圖戦地に於て、其の軍の

長官が、其の土地の政治(シヤ)を執るコ
 ト。軍事に關する政治のコトを云ふ、
 ぐんせい(郡制) 圖法律の語にて、郡を治
 (シヤ)むる事に關する、凡ての法律規則を
 云ふ、
 ぐんせち(群小) 圖多くの小きき人。多
 の善(シヤ)むらぬ人のコト、
 ぐんせき(勳績) 圖いさほして、功勞
 (シヤ)の多を云ふ、
 ぐんせき(群籍) 圖多くの書物、即ち群書
 のコトを云ふ、
 ぐんせき(軍籍) 圖軍人の籍に在(シヤ)るコ
 ト、軍人の名簿(シヤ)、
 ぐんせん(薰染) 圖善き方に導(シヤ)く、教
 えて善くなす、
 ぐんせん(軍屬) 圖昔大將が戰場に於て、
 味方の軍勢を、指揮(シヤ)するに用ひたる
 日と月の形を、両面に描きたる扇(シヤ)、
 即ちぐんばい、
 ぐんせん(燻然) 圖酒に酔(シヤ)たる状を云
 ぐんせん(軍船) 圖戦争に用ゆる船、即ち
 軍艦(シヤ)のコト、
 ぐんせん(楯鏡) 圖楯の一種にて、さるが
 きのコトなり云ふ、
 ぐんせん(君前) 圖君公の御前、
 ぐんせんし(君仙子) 圖ウツギの木の實

くんそく(君側) 圖君公のおそば。君公の
 そばちかくのコト、
 ぐんそく(軍屬) 圖陸海軍に仕へて、軍事
 に關する事務(シヤ)を執る官吏、及び雇員
 (シヤ)の總稱、
 ぐんそつ(軍卒) 圖兵士のコト、
 ぐんそん(郡村) 圖郡と村と、
 ぐんたい(裙帶) 圖束帶(シヤ)の時に、一番
 ぐんたい(軍隊) 圖軍人の一團(シヤ)と爲
 りしもの、即ち兵隊(シヤ)、
 ぐんたい(郡代) 圖徳川時代の職制の名、
 代官(シヤ)の上に在つて、一郡の取締を
 爲す役人、現今の郡長に同じ、
 ぐんたい(薰陶) 圖徳を敷(シヤ)て、善道に導
 (シヤ)くコト。轉じて人を教(シヤ)ゆるコ
 ト、
 ぐんたい(軍刀) 圖戦争に用ゆる刀(シヤ)の
 コトを云ふ、
 ぐんたい(訓導) 圖人を教え導(シヤ)くコト
 ぐんたい(資格) 圖具(シヤ)を具(シヤ)える、小
 學校の教員。神道者(シヤ)に與える職
 名のコト、
 ぐんたい(群島) 圖多くの小島が、一團(シヤ)
 ぐんそく、くんた

くんた(群黨) 圖多くの仲間(シヤ)。多數
 の團體(シヤ)のコト、
 ぐんた(群盜) 圖多くの盜賊、多くの悪
 ぐんた(軍團) 圖師團を二個集(シヤ)めた
 るもの、稱、
 ぐんた(軍談) 圖戦争に關する事實(シヤ)
 を、小説體に面白く記されたるもの。戦争の物語(シヤ)のコト、
 ぐんた(軍談師) 圖戦争の物語を、講
 談する講釋師(シヤ)、
 ぐんた(軍備) 圖軍用金を用意して貯
 (シヤ)はへて置くコト、
 ぐんちん(軍陣) 圖戦場の陣屋、陣地(シヤ)
 陣營(シヤ)のコトを云ふ、
 ぐんちん(君龍) 圖君主に氣に入るコト
 ぐんちん(君氣) 圖君主の氣に入り、
 ぐんちん(郡長) 圖郡の長官、即ち郡役
 所の長官、
 ぐんちん(軍中) 圖軍隊の内、軍營(シヤ)
 の内。戦争(シヤ)の間(シヤ)と云ふコト、
 ぐんちん(訓點) 圖漢文に附(シヤ)る反(シヤ)り
 點のコト、
 ぐんちん(訓電) 圖上級官署(シヤ)より、下
 級官署へ、電信にて發する至急の訓令
 (シヤ)、
 ぐんちん(軍幣) 圖軍事に必要な金子、即

くんせ

くんそく、くんた

くんた、くんそ

ち軍用金(ケンヨウ) 規則(キョウ)戦争を爲す方法(ケイザウ)陸海軍の刑法(ケイザウ)即ち軍人の犯罪者を罰(ケイザウ)する法律の科トを云ふ。

くんとく(訓讀) 圖漢字を國語に直(トク)して讀むコト、音讀(オン)の對、

くんない(郡内) 圖其の郡の内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

くんない(郡内) 圖其の郡内(ク)織物の名(ク)甲斐絹(ク)の如きもの、甲斐の群内地(ク)方より製出す。

けげ

け(箭) 圖物を入れる器(ケイ)即ちはこのコト(ケイ)櫛箭(ケイ)の科ト。

け(氣) 圖元氣(ケイ)いきほひ(ケイ)病氣(ケイ)の容(ケイ)子(ケイ)人の容(ケイ)子(ケイ)即ちけは(ケイ)舌(ケイ)に感ずる味(ケイ)の容(ケイ)子(ケイ)例は(ケイ)鹽氣(ケイ)な(ケイ)ど。

け(性) 圖あやしきコト(ケイ)いぶがしきコト(ケイ)。

け 食、消、家、毛、野、卦、牙

●ものけ。たたり、
 け(食) 囙食(食)ふコト、食ふもの、
 け(消) 囙きゆるコト。きへゆく、
 け(家) 囙家(家)のこト。家すじ。家柄(かへ)など云ひ表はすべく爲めに、或る語の下に附加へる語、
 け(毛) 囙牛馬羊豚などの動物の皮に生ずる、細く長き絲(け)の如き物を云ふ。●男女の頭に生ずる、かみの毛。●凡ての物の外部に生ずる絲の如きものを云ふ、
 け(野) 囙文字を記すに便利(け)なる爲めに、紙の上に細く引きたる線(け)のこト。●凡て物の表面に、細く引きたる線のこト、假令ば蓋盤や將蓋盤などの表面に引かれたる、縦横(け)の線の如きを云ふ。●活版の器具にて、組み上たる活字と活字の行(け)の間へ入れる、薄き板(け)のこトを云ふ、木又は鐵力(け)にて製せるもの、
 け(卦) 囙易の語にて、即ち筮竹(け)を以て占(け)ひて、算木(け)に表はれたる形を云ふ、此れに乾、坤、兌、離、震、巽、坎、艮の八種あり、之を八卦と呼びて、易の卦の基(け)なり、八卦更に變じて六十四卦と爲る、
 け(牙) 囙齒と齒の間より、長く尖(け)つて

け、けあは、下、夏

出てる角(け)の如きもの一稱、即ちきば
 ●象牙(け)の略、
 け(下) 囙しもした。●轉じて劣(け)られる、即ち下等のこト、
 け(夏) 囙なつのこト。●佛法の語、結夏(け)のこト、即ち陰曆(け)の四月十五日より、七月十五日まで、夏期(け)九十日の間(け)、外出せず引籠(け)りて佛道(け)の修業を爲すこトを云ふ、
 (け)あ
 けあがり(氣上) 囙氣ののぼるこト、即ちのぼせるこトを云ふ、逆上、
 けあがり(蹴上) 囙けあがるこト、
 けあけ(夏明) 囙佛法の語、結果(け)の業のすみしこトを云ふ、
 けあを(蹴上) 囙蹴上にて、けつて下より上へ物をあげる、
 けあし(氣懸) 囙心持(け)の懸きこト。氣分のよからぬこト、
 けあし(毛足) 囙毛の多く生(け)てる懸(け)●髪(け)の生え工合(け)を云ふ、
 けあな(毛孔) 囙皮膚(け)に一面に在る細かき孔(け)にて、其處より毛が出てゐるけあは(毛粟) 囙粟の一種にて、大粟(け)

けあひ、けい、敬、畦、厩、形、六二〇

のこト、其の實(け)大なり、
 けあひ(敬合) 囙足にて、互ひにけり合つて喧嘩するこト。●鶏(け)に喧嘩(け)をさせるこト、
 けあふ(敬合) 囙動足にて互(け)ひにけり合ふ。けりつくら、
 けあんと(夏安居) 囙佛法の語、僧侶(け)が夏期九十日の間、外出せず一室にこもつてるこトを云ふ、
 (け)い
 けい(敬) 囙つゝしむ。うやまふ。たつさぶと云ふ意を表はす語、
 けい(畦) 囙田と田のくぎり、即ち田圃のさかひ、即ちうれ。●轉じて田圃のこトを云ふ。●田地五十畝のこトを一畦と云ふ、
 けい(厩) 囙膝(け)と足の間(け)、即ちすねはぎのこト。●轉じて歩(け)むこトを云ふ。●ふくらばみ、
 けい(形) 囙かたち。かた。かつ。こう。●容子(け)有様(け)模様(け)例ば天下の形勢(け)など。●其のかたちに似(け)せる、即ちかたごる。●知れる。表(け)はれる。あらはす。●かざる。よそふ、
 おさすこトを云ふ、
 けい(畦) 囙圭(け)に同じ。●一種のたま、
 けい(奚) 囙下男(け)下僕(け)のこト。●何(け)ぞ、なぜか。云ふ意を表す語、例ば奚(け)ぞ知らむなど、
 けい(契) 囙約束(け)する。ちかふ。ちぎる。ちぎり。●ちかふ。云ふ意より轉じて、わりふ。てがた。●くるしむ。なげく、うれふる。●苦しみてつさめる。一心不乱になつて働く。●わがる。おそれる。●木や石に物を刻(け)る、即ちきざむ、
 けい(嬖) 囙下女(け)下婢(け)、
 けい(溪) 囙谷(け)のこト、
 けい(颯) 囙風(け)の一種、はつかれづみ、
 けい(谿) 囙溪(け)に同じ、谷(け)、
 けい(蹊) 囙谷間(け)に在る細き路。●轉じて兩方の高くなつてゐる、其の中間の細き部分のこトを云ふ、
 けい(稷) 囙刈り取りたる稻(け)。●稻の莖(け)の枯(け)たるもの、即ち藁(け)のこトを云ふ、
 けい(輕) 囙重(け)からざるこト、即ちかるきこト。●あなざる。馬鹿(け)にする。みくびる。即ちかるんする。●直打(け)なき。落ちつかぬ、即ちかるがるし。●前後の考へなくして、事を爲す、かるばづみ

けい(型) 囙物を拵(け)らへるかた、即ちいがた。●かた。云ふ意より轉じて、手本(け)模範(け)のこト、
 けい(刻) 囙さす。さしこ。さす。●わる。こはす。●ころす。ほふる、
 けい(套) 囙左右の股(け)の間のこトを云ふ。●股の間に云ふ意義に依りて、二十八宿の中の十六星のこトを云ふ。●轉じて大またに歩(け)み行く状(け)を云ひ表はす語、
 けい(圭) 囙一種の玉(け)、其の形の上の方(け)が尖(け)りて、下の方の四角形を爲せる物を云ふ、●閨に通ず、寢屋(け)の入口のこトを云ふ。●いさぎよきこトを云ふ。●さがつてる尖(け)のこトを云ふ、圭角(け)など、
 けい(桂) 囙盛(け)んに火の燃(け)てる状(け)と云ふ意より轉じて、明(け)かなるこトを云ふ。●小がたのかまど、小さきへつつひのこトを云ふ、●「の胸の名、
 けい(桂) 囙木の名、かつらのこト。●將基(け)桂(け)囙禮服の時に婦人が、其の一番の上(け)に着る衣物。●うちかけのこトを云ふ、
 けい(經) 囙一定不變なる正しき道のこト。即ちのり。てほん。●つれ。たてのこト、
 けい 型、剗、莖、圭、桂、鞋、經

たてに通つてる線(け)、布帛(け)のたて糸のこト。●いさなむ。こしらへる。おさむ、例ば經管(け)するなど。●糸を引いたやうに、連(け)なり合つてる線、例ば神經など。●連(け)なつてるすじ道(け)のこト、例ば經路(け)など。●萬世の教えとなる書物、例ば經書(け)など、
 けい(逕) 囙細(け)き路(け)、小さき路。●速(け)やかなるこト。●近(け)きこト。●其の處を通り過る。●達(け)す。至る。通る。届く、
 けい(徑) 囙小みち。細き路。●山間溪谷(け)などに通(け)つてゐる細き路(け)。●直徑(け)の徑にて、さしたしらのこト。●すぐ。すみやか。●特に近路(け)のこトを云ふ、
 けい(徑) 囙山中に在る狭(け)き路。●細き谷間(け)に通(け)つてる路。●山阪(け)の細き路。●ほら穴(け)、
 けい(勁) 囙非常に強(け)きこト。●堅(け)きこト。●わきこト。●身軀の頗る強健(け)なるこトを云ふ、
 けい(痠) 囙病氣の名、筋(け)、即ち神經(け)の引きつれる病氣、
 けい(頸) 囙くび。うなじ、
 けい(頸) 囙首(け)を切るこト。頸を、はれ

けい 逕、徑、勁、痠、頸、剗
 けい 珪、奚、溪、谿、輕 六一一

けい 穢、瘻、堀、系、係、洞、炯、綱、槩

けい(穢) 図みそぎ。みそぐコト。
 けい(瘻) 図精神の狂(ま)ふコト。狂(ま)ひ暴(ま)れるコトを云ふ。
 けい(堀) 図家畜(け)の類を養ひ置く處、即ちまき場のコトを云ふ。●森林(けい)の附近に在る道。
 けい(系) 図總て物事のつらなつてくるコトつながらる。●受けつぐ●系統(けい)のコト即ち連絡(けい)の通じてるコト●血すぢのコト。
 けい(係) 図つながらつてる。關係(けい)してゐる。かゝはり合つてる●結(けい)びつける●其の事に、たゞさはつてゐるコト、即ちかゝりのコト。
 けい(洞) 図遠(けい)さま●深くして、はかり知るべからざるさまを云ひ表はす語
 けい(炯) 図火の盛(けい)に燃(けい)るさま●かゝやく●明(けい)らかなる。
 けい(綱) 図うすき布(けい)、うすき絹(けい)●轉じて單衣(けい)のコト。
 けい(洞) 図はるかなる。遠(けい)き。かすかなる。●隔(けい)てるさま云ふ意を表はす語。
 けい(帆) 図身軀(けい)の表面。はだえ。はだのコトを云ふ。
 けい(槩) 図さしあぐる。さしぐる。
 けい(槩) 図燈火(けい)を載(けい)る臺(けい)、即ち

けい 警、訥、鷄、雞、鷲、鶯、鶯、復、繁

けい(警) 圖三本組(けい)み合せたる物。
 けい(警) 圖さし教へる。いましめる●貴人の通行(けい)に際して、先き拂(けい)をなす、即ち警蹕(けい)すばしつ、ききささき●目をさます。さますコト。
 けい(訥) 圖、つそり見る。うかがふ●さぐる。さますコト。
 けい(鷄) 圖鳥の名、にはさり。
 けい(雞) 圖前條に同じ。
 けい(鷲) 圖おどろく。びつくりする。仰天(けい)するコト。
 けい(鶯) 圖虫の名、はたるの科ト。
 けい(鶯) 圖光(けい)の強(けい)きコト、即ちかゝやく。明るきコト●轉じて目(けい)くらむ。まばゆき●燈火(けい)を云ふ。
 けい(鶯) 圖草の名、あさみの科ト。
 けい(復) 圖美しき色を爲せる玉(けい)の科ト●美しき彩色(けい)を施(けい)されたるものコトを云ふ。
 けい(復) 圖かたむくコト●かたまるコト●下の方を向く。伏(けい)す●危險(けい)なるコト●そばだてるコト●仕損(けい)する。破れる。
 けい(繁) 圖つながらる●結(けい)びて動かぬやうに止めて置く●きづな。ほだし●捕(けい)える。止(けい)て置く●罪人

けい 警、警、鷲、葉、景、間 六一二

けい(警) 圖樂器の一種、石又は玉(けい)にて作られるもの●石を打(けい)きて發(けい)する音(けい)のコトを云ふ。
 けい(警) 圖嚴重(けい)に物事をさしなふ。又は整(けい)のひたるコト●整(けい)る。むなしき●残らず、みな。
 けい(鷲) 圖かけ離(けい)れてる●極めて遠(けい)き、はるかなるコト。
 けい(鷲) 圖昔時の刑法の一つ、即ち罪人の身軀(けい)に入れ墨をなす刑罰(けい)のコトを云ふ。
 けい(葉) 圖絹織物(けい)の一種にて、其の肌(けい)の格別に細かくして、且つ一種の光澤(けい)あるもの。
 けい(葉) 圖旗(けい)の先きに附きたるほこのコト●鞘(けい)を入れたるまゝの鋒(けい)又は槍(けい)のコト。
 けい(景) 圖けしき。ありさま。容子(けい)●かゝやく。光(けい)る●かけ(影)のコト●明(けい)かなる●盛(けい)なり。大なり●望を屬す、即ちあほくしたふ。
 けい(葉) 圖緻密(けい)なるコト●總て物の肌(けい)の細(けい)かきコト。
 けい(間) 圖土塀(けい)などに、穿(けい)たれた

けい 詣、輓、勅、啓、憲、計、頃

る、くぐり門のコト●宮城(けい)に在る小き門●れや、即ち寢室(けい)のコトを云ふ。
 けい(詣) 圖赴(けい)くコト。行くコト●進(けい)むコト●特に位置(けい)の我まり上の人などの許(けい)へ行くコトを云ふ。
 けい(輓) 圖道路(けい)を歩み行く時に、埃(けい)のかゝるのを防ぐ爲めに、上へ着る衣服のコト、即ち、ちりよけのコトを云ふ。
 けい(勅) 圖勢(けい)の猛(けい)きコト●勇(けい)まじきコト、強きコト。
 けい(啓) 圖開くコト●人を教(けい)えて、才智を進め、善き方に導(けい)き教(けい)ゆるコト●行列(けい)の先き拂(けい)ひを爲すコト●申し上げる。申し述(けい)ぶるコト●うづくまる。しやむむコトを云ふ。
 けい(憲) 圖あはれみて救(けい)ふ、即ちめくむ●すなほにしたがふコト●三股(けい)に爲つてる銚(けい)。
 けい(計) 圖數(けい)える。はかる勘定(けい)するコト●はかりこ。
 けい(頃) 圖暫(けい)らくの間(けい)。つかぬ間(けい)●昨日(けい)●今日(けい)●このころ。近(けい)る●田地(けい)の面積(けい)を數(けい)ふる語、即ち百畝(けい)を一頃(けい)と云ふ。

けい 筭、兄、京、竟、卿、携、慶

けい(筭) 圖女の髪(けい)を結ぶ飾(けい)に用ゆる具、即ち、かすがひのコト。
 けい(兄) 圖あにの科ト、即ち男の兄弟(けい)の年長(けい)の方の稱●親(けい)しき間(けい)の人を敬(けい)ふて呼(けい)に用ゆる語●あにと云ふ意より轉じて、まされる人、又は我より年老(けい)たる目上(けい)の人を云ふ。
 けい(京) 圖天子の居(けい)す處、即ちみやこ(都)●小高(けい)くなつて土地の稱、即ち丘陵(けい)●大數の稱、即ち兆の十倍を云ふ。
 けい(竟) 圖極度(けい)、即ちきはむ。きはまる●おほり●つひに。しまひに、最後(けい)●さかひ、境界(けい)のコトを云ふ。
 けい(卿) 圖天子が臣下(けい)を呼ばせ給(けい)ふに用ひらるる語●公卿(けい)の卿にて、朝廷(けい)に仕(けい)ふる三位以上の位を、有(けい)る人の稱●明(けい)かなるコト。立派(けい)なるコト。
 けい(携) 圖たづねふ。つれる。ともなふ。もつ。ひつさげる●かかはりあふ。關係(けい)する。
 けい(慶) 圖目出度コト●いはふコト●祝(けい)の科ト●悦(けい)ばしきコト。嬉(けい)

けい 睽、睨、刑、繼、稽 六一三

しきコト●幸福(けい)なるコトを云ふ。
 けい(睨) 圖伺(けい)ふ●たづねる。さかすさぐるコトを云ふ。
 けい(睨) 圖互(けい)ひに睨(けい)めつゝ見る●眼(けい)を、もきて物を見つむる狀(けい)を云ふ●そむく。もさる。
 けい(睨) 圖恨(けい)めしく思(けい)ひて見る●明(けい)かに光(けい)り輝(けい)やける狀(けい)を云ふ。
 けい(刑) 圖木の名、いばらの科ト●刑具の名、罪人を答(けい)つに用ゆる杖(けい)のコトを云ふ。
 けい(刑) 圖おきて●刑罰(けい)のコト●罪を正(けい)して罰(けい)する●殺(けい)す。頭(けい)を斬(けい)りはれる●河(けい)せり、したかふコト、ならふ。
 けい(繼) 圖石の名、さいしの科ト。
 けい(繼) 圖女子が、一番の上に着(けい)つる衣物●うちかけのコト。
 けい(繼) 圖後(けい)をつぐ。つらなる。つながらるコトを云ふ。
 けい(稽) 圖工夫(けい)する。はかる●考(けい)える。思案(けい)する●かぞへる。しらべみる●達(けい)する。至(けい)る。さやく●首(けい)を下にすりつけて禮拜(けい)するコト。

けいけい、けいけい
の目のコト、
けいけいしよく(警戒色) 図獣類(ケツ)や
虫類(シ)に具(ツ)はつてある身軀(カラダ)
の毛の種々雑多(シラカバ)の色合(シ)のコトを云
ふ、其の色合に依りて、敵(トク)を防ぎ自
分を護(マ)る事を得るより、此の名あり
けいけい(警戒) 図軍隊が敵
(トク)に近づきたる時のコトを云ふ、
けいけい(京畿) 図天子の都(ミヤ)し給ふ附近
(シ)の土地を云ふ、
けいけい(勁騎) 図強き騎兵、
けいけい(經紀) 図おきて、きまり、
けいけい(景氣) 図容子、ありさま、
けいけい(景氣) 図買(シ)のありさまを云ふ、
例ば景氣(シ)のありさまを云ふ、
けいけい(輕騎) 図手がるに、いでたちたる
騎馬(シ)の兵士のコト、
けいけい(刑期) 図刑罰を受けてある其の期
間のコトを云ふ、
けいけい(藝妓) 図酒席に侍(シ)べつて歌舞
(シ)を奏(シ)して、興を添(シ)るを業(シ)す
る女(メ)のコト、
けいけい(輕便) 図身輕(シ)なるいでたち
のコトを云ふ、
けいけい(輕舉) 図からはすみ、かるがる

けいけい、けいけい
けいけい(環珞) 図美事なる玉(シ)寶石(シ)
の玉(シ)を云ふ、
けいけい(景況) 図やうす、ありさま、
けいけい(荆棘) 図いばら、
けいけい(輕氣球) 図空氣より其の重量
(シ)の輕(シ)き瓦斯(シ)體(シ)、假令(シ)水
素(シ)瓦斯(シ)の類(シ)を、
けいけい(輕便) 図入り、空中を自由に上
下(シ)し得るやうに搭(シ)らへたる物
にて、即ち風船(シ)のコト、
けいけい(警句) 図すくれてつよき意義を現
はしたる文句(シ)のコト、能く物事の道理
を云ひ表(シ)はせる句、
けいけい(敬具) 図手紙の書き終りに記す語
にて、うやまいて申す云ふ意味、
けいけい(刑具) 図罪人の身軀(シ)の自由をい
しむる器具(シ)にて、繩(シ)手錠(シ)などの
類(シ)を云ふ、
けいけい(京華) 図みやま、京都(シ)、
けいけい(經過) 図時の過ぎ行くコトを云
ふ、
けいけい(螢火) 図ほたるの火、
けいけい(鷓鴣) 図はりの多く集(シ)
まへてるコトを云ふ、

けいけい、けいけい
けいけい(輕快) 図かるくして早きコト
重(シ)に舟車(シ)に云ふ、
けいけい(病氣の快方) 図
赴(シ)くコト、
けいけい(螢光) 図ほたるの光(シ)、
けいけい(計畫) 図もくろみ、
けいけい(工夫) 図の、
けいけい(鶴冠) 図ささかのコト、
けいけい(挂冠) 図冠(シ)をかけること
ふ意(シ)より轉じて、官職(シ)を辭(シ)するコト
を云ふ、
けいけい(慶歡) 図めでたくよる、
けいけい(警官) 図警察に關する職務を
奉(シ)する官吏の總稱、
けいけい(焚焚) 図くらがりて、ひかるコ
ト、
けいけい(鯨鯢) 図魚の名くららのコト、
けいけい(迎擊) 図むかえうつ、敵の來る
を待(シ)て、うつコト、
けいけい(桂月) 図陰曆の八月の別名、
けいけい(勁健) 図よくす、よかなるコ
ト、
けいけい(經驗) 図試るコトためすコト、
けいけい(屬健) 図ちようまへのコト、
けいけい(敬虔) 図うやまひつ、しむ、
けいけい(敬虔) 図うやまひつ、しむ、

けいけい、けいけい
佛(シ)に眞實(シ)を盡(シ)すコト、
けいけい(輕犬) 図にはさけいぬ、
けいけい(輕減) 図へらす、少くする、
けいけい(稽古) 図物事及び藝術(シ)を習
ふコト、
けいけい(敬語) 図うやまいて云ふ言葉(シ)、
けいけい(丁寧) 図なる言葉、
けいけい(警固) 図變事(シ)の生ぜざるやふ
に固(シ)く守り防(シ)ぐコト、
けいけい(懸姑) 図虫の名、
けいけい(懸語) 図れこさ、うはこ、
けいけい(傾向) 図かたよるコト、かたむ
きむかふ、其の方に寄(シ)る、
けいけい(景仰) 図人の優(シ)れたる徳を
うやまひしむコト、
けいけい(慧巧) 図すばしこく、たくみ
なるコト、
けいけい(敬告) 図うやまひつげる、
けいけい(頃刻) 図わづかの時間、即ちし
ばらくのまの、
けいけい(給谷) 図たにの、
けいけい(警告) 図氣をつけさすべく云ひ
しらすコト、

けいけい、けいけい
けいけい(繫獄) 図牢(シ)に捕はれ、つな
がれるコト、
けいけい(經國) 図國家を治め、安寧秩序
(シ)を保ち、國民(シ)の福を圖(シ)るコト
を云ふ、
けいけい(傾國) 図美人(シ)の稱、
けいけい(頭骨) 図くびの骨、
けいけい(腰骨) 図すねの骨、
けいけい(輕忽) 図そつかはしい、
けいけい(稽古場) 図物事を習ひおぼえる
所(シ)、
けいけい(稽古屋) 図遊藝を教(シ)へる家
の、
けいけい(稽古本) 図淨瑠璃(シ)など
の稽古(シ)に用ゆる、大なる文字にて記(シ)
されてある本、
けいけい(稽古袴) 図武術の稽古(シ)を爲
す時に用ゆる袴(シ)のコト、
けいけい(擊鎖) 図つなぐ自由のきかぬや
ふに爲(シ)すコト、
けいけい(稽査) 図十分に考えて、しらべる
けいけい(荆妻) 図我が妻(シ)のコトを他人に
向(シ)ふ語、
けいけい(繼妻) 図後をひの妻、

けいけい、けいけい
けいけい(掲載) 図かき、のすコト、しるす
した、むるコト、
けいけい(經濟) 図總て費(シ)を省(シ)き
て利益(シ)を増(シ)すコトをはかる、方
法手段(シ)を考ふるコトを云ふ、
けいけい(輕罪) 図かるきつみ、
けいけい(贓罪) 図入黒(シ)に處する罪の
コトを云ふ、
けいけい(迎歲) 図年を迎へる、新年、
けいけい(輕躁) 図おちつかぬコト、矢鶴
(シ)に驅(シ)ぐコトを云ふ、
けいけい(輕裝) 図身輕(シ)なる、いでた
ちの、
けいけい(計策) 図はかりこ、
けいけい(刑殺) 図死刑に處するコト、刑
法(シ)に觸(シ)て殺されるコト、
けいけい(警察) 図法律の語、
けいけい(幸福) 図守るべく爲めに
法律規則に違反(シ)せざる様(シ)に守
りて、社會の安寧(シ)を保(シ)つ職務を
云ふ、
けいけい(卦算) 図文字などを置く時に重
(シ)として、紙の上に置く具、
けいけい(計算) 図かんじようするコト、
はかりかぞふコト、

けいさ、けいし

けいさん(珪酸) 珪酸化学上の語、珪素の酸化せし物にて、珪石(矽石)のコト、
 けいざいか(經濟家) 經濟の事に達して人①儉約して利益を計(けい)るに巧(けい)なる人、
 けいさつる(警察醫) 警察に關(けい)する醫務(けい)に従事する醫士のコトを云ふ、
 けいざいぶく(經濟學) 經濟に關(けい)する學理を研究する學問、即ち理財學(けい)の科ト、
 けいさつげん(警察權) 警察の事務を行ふ凡ての權利(けん)、
 けいさつしよ(警察署) 警察の事務を執り扱ふ役所、
 けいさつくわん(警察官) 警察上の事務を執る凡ての官吏、
 けいし(經史) 經書(けい)と歴史、
 けいし(惠賜) 賜めぐみ下されるコト、目上の人より物を貰(けい)ひし時などに云ふ語、
 けいし(京師) 國みやこのコト、
 けいし(桂枝) 國桂(けい)の木の枝のコトにて、藥に用ゆるもの、即ちニツケルのコト、
 けいし(經始) 國いさなみはじむ、物事を

けいし

爲しはじむる、
 けいし(罪紙) 罪を引きたる紙、
 けいし(警子) 國瓦器(けい)を載(けい)る裏(けい)にて、形長短大小種々あり、
 けいし(履子) 國下駄の一種、あしだの科トを云ふ、
 けいし(揭示) 國事實(けい)を認めて、吊(けい)して一般の人に知らせるコト、
 けいし(啓示) 國おしえしめすあらはし見せるコトを云ふ、
 けいし(輕視) 國みくびるコト見さげるコト①あなどりて見るコトを云ふ②馬鹿(けい)にするコト、
 けいし(警視) 國官名、委任官(けい)の警察官吏にして、警部の上に位(けい)するもの、
 けいし(慶事) 國うれしきコト①いはふべきコト、めでたきコト、
 けいし(擊辭) 國一つ事實(けい)につきて、説き明(けい)を爲したる言葉のコトを云ふ語、
 けいし(刑事) 國法律の語にて、民事に對しての稱、刑法に關するコトを云ふ①探偵吏(けい)の一名、即ち刑事巡查の略語、
 けいし(刑死) 國死刑に處せられて、死す

けいし

コトを云ふ、
 けいじか(刑而下) 國心理學の語にて、刑而上の反對で、即ち形を具(けい)えてるコトを云ふ、
 けいしき(形式) 國かた(型)外形(けい)①定まりたる形(けい)、
 けいしつ(繼室) 國後妻(けい)のコト、
 けいしつ(閨室) 國同上、
 けいじつ(頃日) 國このころ、
 けいしつ(功賞) 國格のつよき生れつきのコト又は其人、
 けいしや(傾斜) 國かたむくコト、ゆがむコト、はすになれるコト、
 けいしや(藝者) 國藝妓に同じ、
 けいじゆ(繼受) 國うけつぐコト、
 けいしゆ(傾首) 國首をかたむけるコト①轉じて思案するコト、
 けいしゆ(稽首) 國丁寧(けい)に、じぎなするコト、頭(けい)を下ぐるコト、
 けいしゆ(警手) 國宮城を守衛する警察官吏のコトを云ふ、
 けいしゆ(擊手) 國手をさしあげるコトを云ふ、
 けいしよ(經書) 國昔の聖人君子が、人の修(けい)むべき正義の道を教(けい)えられたる書物のコト、即ち四書五經などの類を云ふ、

六一八

けいしん(敬神) 國神をうやまひたつことコト、
 けいしん(輕進) 國前後(けい)見ずに進み行けいしん(輕信) 國かほすみに信用する①人の言葉(けい)を、譯もなく信するコトを云ふ、
 けいじん(鷄人) 國役の名、昔時宮中にて夜明を知らせる役を掌(けい)れる役人のコト、
 けいしやち(警鐘) 國非常の出來事を知らす爲(けい)に鳴(けい)す鐘(けい)、
 けいしやち(形象) 國かたち、ありさま、
 けいじやち(形狀) 國すがた、かたち、
 けいじやち(啓上) 國申上る、言上する、申し述(けい)るコトを云ふ、
 けいしやち(形勝) 國景色の秀(けい)れたる土地、眺(けい)の善き場所、
 けいしやち(癩相) 國宮内倉の高等官のコトを云ふ、
 けいしゆち(輕舟) 國かるき舟、小舟(けい)、
 けいしゆち(閨秀) 國秀(けい)でたる女子のコトを云ふ、
 けいじゆち(輕重) 國かるさま、おもさま、
 けいじゆづ(藝術) 國學門と技藝、
 けいしよち(輕懸) 國土などの質(けい)荒くして目方のかるきコト、

けいしよち(輕症) 國かるき病氣、「ト、
 けいしよち(繼承) 國後(けい)を受くつぐコト、
 けいしよち(敬承) 國敬聽に同じ、
 けいしよち(敬稱) 國うやもつてこのふる言葉(けい)、
 けいじけん(刑事事件) 國刑法の規定に關する犯罪事件、
 けいじか(形而下學) 國凡て形を具(けい)へてる物の性質變化等に就きて、研究する學門のコト、即ち理科學のコトを云ふ、
 けいじじよち(形而上) 國形の無き物と云ふふ意にて考に因て判斷するコトを云ふ、
 けいしちよち(警視廳) 國役所の名にて、東京府の警察の事務を監督(けい)する役所、
 けいじよちひ(經常費) 國經常歳出に同じ、
 けいしそちかん(警視總監) 國敬視廳の長官、
 けいじひこくはん(刑事被告人) 國刑法に違反(けい)せる犯罪者(けい)にして、未だ其の裁判(けい)の確定(けい)せざる者を云ふ、
 けいじじやち(形而上學) 國形而下學の反對にて、無形の物に就(けい)て研究する學門、即ち哲學のコトを云ふ、

けいじよちざいしゆつ(經常歳出) 國毎年定(けい)つて國庫より支出(けい)すべき費用(けい)のコトを云ふ、
 けいじやちさいにゆち(經常歳入) 國年々定つて國庫へ入る所得、
 けいす(刑) 國刑罰に行ふ、
 けいす(慶) 國慶(けい)に、いはふのしゆくす、
 けいす(敬) 國動(けい)やもふ、たつとぶ、あがけいす(經水) 國月經(けい)、即ちつきやくのコトを云ふ、
 けいす(啓) 國動(けい)申上る、言上する、申しけいす(計數) 國數(けい)を數ふるコトを云ふ、かぞへたるかず、
 けいすち(鯨鬚) 國くじらのひげ、種々の細工物に用らる、
 けいせい(傾城) 國女色に耽(けい)り、城を危くするこ云ふ意より出で、美人のコトを云ふ①遊女のコト、
 けいせい(經世) 國經國に同じ、
 けいせい(跡籍) 國經書のコト、
 けいせい(形跡) 國あさかた、
 けいせい(契誓) 國けいやくに同じ、
 けいせい(警醒) 國迷ひ事をいましめ悟

六一九

けいせい、けいそ
 (け)らすコト目(け)をさめさせるコト
 ●轉じて世の中に、注意を與(け)ふるコトを云ふ。
 けいせい(形勢)固ありさま、やうす、なりゆきのコトを云ふ。
 けいせい(警世)固世の中の人々を、さとしましむコト。
 けいせい(形成)固形の具(け)はれるやうにつくるコト、出来るコト。
 けいせい(輕少)固少なきコト●粗末(け)なるコト。
 けいせい(警折)固立ちたるまゝにて、腰(け)を前へかむコト。
 けいせい(警雪)固ほたるさ、ゆきのコト●支那の故事にて學問を勉強するコト
 けいせい(迎接)固來る人をむかえるコト●あいさつするコト。
 けいせい(勁節)固氣だての強きコト、みさほの正しく堅(け)きコト。
 けいせい(經緯)固地球の表面へ、想像上に引きたる經度(けい)を、示(け)せる線(け)の科トを云ふ。
 けいせい(迎擊)固迎撃に同じ。
 けいそ(驍鼠)固はつかれづみ。
 けいそ(敬崇)固うやまひたつまぶ、大切に思ふコト。

けいそ、けいた
 けいそ(荆叢)固いばらの生(け)てる草むらのコトを云ふ。
 けいそ(惠贈)固物を、おくるコト。
 けいそ(繼續)固つながら、つらく、引きつらくコト。
 けいそ(傾側)固はすになる。
 けいそ(擊屬)固つながら、つらくコト、つながらつらくコト。
 けいそ(勁卒)固勁兵(けい)に同じ。
 けいそ(輕卒)固からはずみ、早や合點(けい)の科トを云ふ。
 けいそ(繼續費)固年々引きつづきて政府より支出する費用。
 けいそ(はん)固(繼續犯)固刑法に觸(け)る行ひ、即ち犯罪行為(けい)が、長き時間をつゞきたるコトを云ふ、假令ば不法監禁(けい)の如きもの●一つの犯罪が其れから其れへと繋(け)がりて、種々の犯罪行為を生ぜるもの、コトを云ふ
 けいそ(携帶)固たづさるコト、持つて行くコトを云ふ。
 けいた(繼體)固あさつき、よつぎの科トを云ふ。
 けいた(傾頰)固くづれかゝる、すたりかゝるコトを云ふ。
 けいた(形體)固なりかたち、「云ふ、けいた(藝當)固遊藝のしかたの科トを

けいた、けいづ
 けいた(傾倒)固横にたをれる●こがすコト●心をよせるコト●器(けい)をさかさにして、内に在る物を残らす出すコト。
 けいた(敬語)固謹(けい)んで承知するコトを云ふ。
 けいた(鷄蛋)固鷄の玉子のコト●玉子のしるみのコト。
 けいた(輕暖)固ホンノリと暖(けい)ひ、即ち春先の時候(けい)。
 けいづ(啓聲)固曆の語二十四氣の一、陰曆の二月の節の科トを云ふ、即ち春の科ト。
 けいぢ(敬聽)固つゝしんで、うけたまはる。能くきくコト。
 けいぢ(傾聽)固熱心に物事をきくコト。つゝしみてきくコト。「云ふ、けいぢ(刑場)固おしおき場の科トをけいぢ(圍中)固れやのなが、けいぢ(傾注)固そいぎあつむる●一心になるコト。
 けいぢ(慶長金)固慶長年間に鑄造(けい)したる金貨(けい)の科トを云ふ、即ち大判、小判等の稱。
 けいづ(系圖)固其の家の先祖代々、血筋(けい)の科トを、記したる表(けい)の科ト

を云ふ、
 けいづ(藝盡)固知つてる藝のあるだけ、重に遊藝について云ふ。
 けいてん(兄弟)固きようだい、あにをなをさの科トを云ふ。
 けいてん(運庭)固はなれ、へだてるコト●相違の甚(けい)はだしきコトに云ふ語、けいてん(京兆)固府の知事の異名、けいてん(輕光)固かるがるしきコト●薄情(けい)なるコト。
 けいてん(勁敵)固つよき敵、けいてん(經典)固經書のコト、けいてん(慶典)固よるこび事を祝ふ儀式(けい)の科トを云ふ。
 けいでん(經傳)固經書と傳記、けいと(毛糸)固毛を糸の如く細く長く引きのばしたるものにて、種々の編物(けい)●細工の原料となるもの、けいと(塋土)固はかば、墓地、けいと(經度)固地球に經(けい)に、即ち南北に引きたる線(けい)の度數の科トを云ふ、三百六十度に分(けい)たれる、けいと(刑徒)固さか人、囚人、けいと(鷄頭)固草の名、莖(けい)の高き二尺以上、三尺内外(けい)ありて、莖の色赤く、葉は互生(けい)して、其の尖(けい)さが

けい、けい
 けい(夏)の末より秋(けい)の初へかけて、莖(けい)の先に鷄の、ささかの如き形を爲せる、美しき花を咲(けい)す、其の色は黄、赤、白など種々あり、けいと(患投)固人に物を贈(けい)るコト、又た人より贈られたる物、けいと(系統)固ちすじ●凡て物事の連なつてる、其の筋道(けい)の科トを云ふ、けいと(輕動)固かるく動く、かるやかに動くコト、けいと(鞆衝)固ひさりもの、けいと(鷄豚)固にはさりこ、ぶたの科トを云ふ、けいと(毛絲針)固毛糸をあむに用ゆる針の科ト、けいな(境内)固くぎりの内●神社又は寺院などの構(けい)へ内、けい(鷄肉)固鷄(けい)の肉(けい)、けい(繼任)固やくめをうけつぐコト、けい(遊藝)固遊藝を業とす人の科トを云ふ、けい(新年)固新年をむかえるコトをけい(藝能)固藝に長(けい)たる人●遊藝に達せる人、けい(鯨波)固さきの聲●大なる波(けい)の科トを云ふ、

けい、けい
 けい(輕輩)固身分の低(けい)き者●小使(けい)又は人足などの科ト、けい(輕砲)固重砲に對しての稱にて、輕(けい)き大砲と云ふ意、即ち口径(けい)十二吋(けい)以下の、小さき大砲の科トを云ふ、けい(敬白)固謹(けい)んで申す、けい(輕薄)固分別心(けい)の乏(けい)しきコト●人情のなき薄情(けい)の科トを云ふ、けい(繫縛)固しぼる、くくるコト●つなぐコトを云ふ、けい(啓蒙)固智恵(けい)を開きみがく●教へて智恵を開く、けい(刑罰)固政府が正道に反して、世の中に危害を加へ、又は人民に損害を與ふる者に對して、加ふる制裁(けい)の科ト、けい(刑法)固刑罰の法律、けい(刑法學)固刑法に關する理論を研究(けい)する學問、けい(輕肥)固美衣を着る、美味を食ふコト、即ちぜいたくなる暮(けい)をなすコト、けい(警備)固前以て、そなへるコト、あらかじめ防(けい)ぐコト、

けい、つ、けい

けい、けい

けい、けい

けいひ、けいふ
けいひ(輕微) 圍わづかなる、極く少しの
コト。極くかるきコト。
けいひつ(警蹕) 圍天子の出御(出陣)し給
ふ時に、先拂(先導)の聲をかくるコトを
云ふ、又た(ケイヒチ)とも云ふ。
けいひん(慧敏) 圍智惠のすぐれあるコト
けいひん(景品) 圍景物の(景)に同じ。
けいひかん(警備艦) 圍海岸を守る爲めに
備(た)へられてある軍艦。
けいひたい(警備隊) 圍島を守らせる爲に
其の島地に置かれてある軍隊のコトを云
ふ。即ち對島警備隊など。
けいふ(荆婦) 圍自分の妻のコトを他に向
つて云ふ語。
けいふ(警部) 圍官名、判任官の警察官吏
にして、巡查(巡査)の上、警視(警視)の下に
位するもの。
けいふ(系譜) 圍系圖(系圖)に同じ。
けいふん(埜墳) 圍はか所。
けいふ(輕浮) 圍心のうき立つるコト。薄
情(薄情)なるコトを云ふ。
けいふ(繼父) 圍まゝ父。
けいふ(繼夫) 圍後ぞひの夫(後夫)。二度目
の夫(後夫)のコトを云ふ。
けいふ(繼婦) 圍後ぞひの妻、二度目の妻
後妻(後妻)。

けいふ、けいふ
けいふ(輕侮) 圍馬鹿にするコト。あなご
るコト。
けいふち(輕風) 圍そよ風、即ち春風
のコトを云ふ。
けいふち(勁風) 圍つよきかぜ。
けいふち(惠風) 圍陰曆の三月の別名。
けいふく(敬服) 圍うやまひふくするコト
つつしみひたがふ。
けいふく(敬復) 圍つしんで返事を爲す
コト。
けいふく(慶福) 圍めでたきコト、よろこ
びコト。
けいふく(景福) 圍しあわせのよき、幸(幸)
ひの多きコトを云ふ。
けいふく(傾覆) 圍ひっくりかへすコト、
ひっくりかへるコト。
けいふつ(景物) 圍四季、其の折々の眺(眺)
りとなる物。商家にて賣出などの時に
商品に添(添)へて客に出す品物のコト
を云ふ。
けいふん(輕粉) 圍毒藥(毒藥)の名、水銀(水銀)
より取りたる、かす。
けいふん(奎文) 圍學問のコトを云ふ。
けいふは(警部補) 圍警察官吏の職名にて
警部の見習の役。
けいへい(迎聘) 圍禮を厚(厚)ふし、報酬を
出して人を招(招)くコト。

けいへい、けいふ
けいへい(勁兵) 圍つよき兵士。
けいへい(輕兵) 圍すばしつこく、はたら
く兵士。
けいへき(刑辟) 圍つみ、さがめ。
けいべつ(輕蔑) 圍あなごる、馬鹿にする、
かるんするコト。
けいべん(輕便) 圍かんりやく、てがるの
コト。
けいほ(輕歩) 圍かるく歩む(歩)らるるこ
歩むコト。
けいほ(輕慕) 圍心をよせるコト。
けいほ(繼母) 圍まゝ母。
けいほ(景慕) 圍うやまひしこふ。
けいほ(敬慕) 圍其の人の徳(徳)などをう
やまい、しこふコト。
けいぼち(形貌) 圍なりすがた、かたち。や
うす。ありさま。
けいぼち(閨房) 圍れま、即ち寢室。
けいぼち(計謀) 圍はかりごとをめぐらす
コト。はかりごとコト。
けいぼち(警報) 圍凡て警戒(警戒)を要す
べき事柄(事柄)を、一般に知(知)すコトを
云ふ。測候所(測候所)より、雨風の來らむ
コトを、前以て知らすコト。
けいば(桂馬) 圍將某の駒の名、銀(銀)と香
車(香車)との間に位する物にて、斜(斜)に
一つ置きに盤面(盤面)を進み行くもの。

けいば、けいふ
けいば(碁)の語にて、桂馬の進み行く如き形
に、石を置くコトを云ふ。
けいまい(兄妹) 圍兄(兄)と妹(妹)の
けいみやく(經脉) 圍すじみち。
けいむ(警務) 圍警察にて取り扱ふ事務
(AP)のコト。
けいむちやう(警務長) 圍官名、東京府を
除(除)きたる各府縣の、其管下の警察事
務を取り締る役人の長官の稱。
けいめい(敬命) 圍つしみやもふコト
けいめい(鷄鳴) 圍夜のしらしら明に鷄の
鳴くコト。丑の刻の別名。
けいめい(刑名) 圍法律の語、刑法に規定
されたる罪科(罪科)の名。
けいめい(藝名) 圍藝人が其の遊藝に關し
てのみ、用ゆる通り名、假令ば市川團十
郎さか、妻八さか云ふが如し。
けいめち(輕妙) 圍文章などの、スラスラ
と書いて、たくみに、出来(出来)たるコトを
云ふ。
けいもん(圍門) 圍れやれるべき部屋(部屋)
を轉じて一家内に於ける男女の行狀(行狀)
を、即ち夫婦間のおりあい(和合)のコ
トを云ふ。
けいやく(契約) 圍やくそく、ちがひ、
けいやく(契約) 圍かるがるしく約束する
コト。

けいひ、けいり
けいひ(經由) 圍通るコト、過ぎ行く、經て
來るコトを云ふ。
けいひ(經由) 圍へて來るコト。
けいひ(刑餘) 圍罪を待て、刑罰を濟(濟)せ
たるコト、即ち前科(前科)。
けいひ(惠與) 圍めぐみ、あたふ。
けいひ(形容) 圍すがた、ありさま。物
事の有様を譬(譬)て云ふコト。「を云ふ」
けいひ(形況) 圍智惠を開きみかくコト
けいひ(輕難) 圍薄き絹の織物(織物)。
けいひ(警邏) 圍非常の出來事をいましむ
べく爲めに、見廻(見廻)るコト、又は其の
人。
けいらい(頃來) 圍頃日に同じ。
けいらく(經絡) 圍すじみちのコト。體内
に血液(血液)の循環(循環)するコト。ウ
ネウネとめぐりゆくコト。
けいらん(京洛) 圍みやこのコト。
けいらん(鷄卵) 圍鶏の玉子。
けいり(經理) 圍おさめ、さゝのふ、きりも
りする。金錢物品の出入を取扱ふコト
けいり(警吏) 圍警察の事務を執る官吏の
コト。
けいりち(稽留) 圍こもるコト、
こもるコト。

けいり、けいり
けいりち(稽留) 圍こもるコト、こもる
コト。
けいり(刑戮) 圍刑罰に行はれるコト。
けいりん(桂林) 圍文人の仲間。
けいりん(鷄林) 圍朝鮮の一名。
けいりん(經綸) 圍圖をおさめ、さゝのふ
るコト。
けいりん(藝林) 圍藝術の社會。藝人の仲
間のコトを云ふ。
けいりやく(計略) 圍はかりごと、もくろ
みのコト。
けいりる(係累) 圍身にかはり來るなん
きのコト。
けいれい(敬禮) 圍うやまひて、禮を行ふ
けいれい(刑例) 圍刑罰に就ての規定(規定)。
刑法のさだめ。
けいれち(鯨鯨) 圍鯨(鯨)をさらへるコト
けいれち(經歴) 圍すじみち。經て來た履
歴(履歴)のコト。
けいれん(痙攣) 圍筋肉(筋肉)の、つりて、う
ごくコト。「の儀式」
けいれいしき(敬禮式) 圍敬禮を行ふ一定
けいろ(徑路) 圍道(道)筋(筋)のコト。
けいろ(毛色) 圍毛の色合(色合)のコトを云
ふ。
けいろ(經路) 圍通(通)つて來た道(道)爲(爲)す
コト。

けうく、けうけ
 けうく(教訓) 図をしえさすコトを云ふ。
 けうくわい(教會) 図宗教(キリスト)に關する信徒の會合する所、又は其の團體(キリスト)。
 ①信徒を會合して説教(キリスト)などを爲す所を云ふ。
 けうくわい(教誨) 図教へいまして善き方へみちびくコト。
 けうくわい(曙光) 図日の出のひかり。朝日(キリスト)のひかり。
 けうくわん(教官) 図官立の諸學校にて、生徒を教授すべき官吏の稱。
 けうくわん(叫喚) 図わめきさけぶ。
 けうくわん(教科書) 図學校にて教授するに用ゆべき書物。
 けうくわん(叫喚地獄) 図佛教の語、八地獄の一つの名。
 けうけ(教化) 図けうくわに同じ、其の條を見られよ。
 けうけ(驕驕) 圖いさましく強き狀を云ふ。たけたげしきさま。
 けうけ(驕蹇) 圖高きかたち。けうけだかき狀(キリスト)を云ふ語。
 けうけ(翹翹) 圖多く集まれる狀を云ふ。
 けうけ(矯激) 圖常の行ひに反する舉動(キリスト)を爲すコト。①故意(キリスト)に正直(キリスト)をなすコト。
 けうけん(驕健) 圖強きコト。たつしやなるコト。すこやか。
 けうけん(驕蹇) 圖かつてきまゝ。わがまゝ。たかぶるコト。
 けうこう(嬌喉) 圖うるはしく、やさしき聲の出るコトを云ふ。
 けうこう(叫吼) 圖聲たかくさげぶ。①大聲にて、ほゆるコト。
 けうこう(機骨) 圖手の骨の名。
 けうさ(教唆) 圖そのかす、おだてるコト。けしをかけるコト。
 けうさ(曉霜) 圖夜あけのしも。
 けうし(教示) 圖おしへしめす。
 けうし(嬌姿) 圖なまめかしきすがた。①やさしきすがたのこト。
 けうし(教師) 圖學問を教ゆる人。①宗旨(キリスト)の教(キリスト)を傳(キリスト)える人。
 けうしつ(教室) 圖教授する部屋、印ち教場(キリスト)のこト。
 けうしや(驕奢) 圖ぜいたくなすコト。おこりに長ずるコト。
 けうしゆ(梟首) 圖首を斬り離してさらすコト。こくもん。
 けうじゆ(教授) 圖學問技術等を教へ授(キリスト)くるコト。①官立の高等學校の、責任官以上の教師の官名のコトを云ふ。
 けうしゆ(翹首) 圖首(キリスト)を延(キリスト)して待ち又は望(キリスト)むでるコト。
 けうしよ(教書) 圖共和國にて大統領より發する心得書(キリスト)のこトを云ふ、即ち大統領の諭旨書。
 けうじん(圉人) 圖馬を飼(キリスト)ふ人。
 けふしん(梟臣) 圖惡るき家來(キリスト)。
 けうしや(驕將) 圖つよき大將。
 けうじゆ(教授) 圖學問を教ゆる。
 けうしよ(曉鐘) 圖夜明け(キリスト)方に撞(キリスト)く鐘、あけの鐘のこト。
 けうしよ(教職) 圖生徒(キリスト)に學問を教ゆる職務のこトを云ふ。
 けうしよ(嬌飾) 圖おこりがさる。①美しき衣物を着て、みへばるコト。むだなおこりのこト。
 けうしよ(曉色) 圖あけ方のそら色。
 けうせい(矯正) 圖ためなはず、正しくなすコトを云ふ。
 けうせい(曉星) 圖あけ方の空に、まばらに出てる星のこトを云ふ。
 けうせい(驕嘶) 圖馬が大聲を發して、いなしくコトを云ふ。

けうけ、けうし
 けうけ、けうし
 けうし、けうせ
 六二六

けうせい(洗世) 圖世のすえ。
 けうせい(嬌笑) 圖いやらしき笑ひ。なまめかしき笑ひのこト。
 けうそ(翹楚) 圖萬人に秀(キリスト)でてるこト。
 けうそ(教祖) 圖教主(キリスト)に同じ、即ち始めて教を開きし人のこト。
 けうそく(脇息) 圖小さき机の如き形をなせるもの、脇(キリスト)をつく臺。
 けうたい(嬌態) 圖なめやかなる狀(キリスト)を爲すこト。
 けうたう(教導) 圖教えて善き方へみちびけうたうたう(教導團) 圖陸軍の下士となるべき生徒を、養成せし處の名、今はあらず。
 けうたうしよ(教導職) 圖神官又は僧侶などが、人を教えて善き方へみちびく職務のこトを云ふ。
 けうたつ(曉達) 圖其の物事の意義(キリスト)まで、達(キリスト)してゐるこトを云ふ。
 けうたつ(嬌奪) 圖人をあざむきて物を取らる。おびやかして物を奪ふ。
 けうたん(曉旦) 圖夜の白々あけ。朝(キリスト)ほらけのこトを云ふ。
 けうち(曉智) 圖すぐれたる智慧。
 けうち(蟻蟲) 圖腹内(キリスト)に生(キリスト)く虫の名、うじの如き二三分ほどの極めてけうせ、けうち。
 けうちやう(曉暢) 圖物事に委(キリスト)しく通達(キリスト)してゐるこトを云ふ。
 けうちつち(曉通) 圖其の物事に委(キリスト)しく通じてゐるこト。
 けうてい(輻丁) 圖かこがきのこト。
 けうてい(教程) 圖教授(キリスト)する學問の程度(キリスト)のこトを云ふ。
 けうてん(教典) 圖經文(キリスト)のこト。①教えに關する法式のこト。
 けうてん(曉天) 圖あけがたの空。
 けうと(氣疎) 圖けうとさしきこト。
 けうと(教徒) 圖其の宗教(キリスト)を信する人、即ち信者(キリスト)のこト。
 けうとち(教頭) 圖學校に於ける教師の上席(キリスト)のこト。①首席教師のこトを云ふ。
 けうとし(氣疎) 圖いやなり。快(キリスト)からす。①ばかばかし。②おそろし。こはし、けうは(教派) 圖宗旨(キリスト)の分れ。教のわかれのこトを云ふ。
 けうばち(驕暴) 圖たかぶりて、我まゝなるこト。①甚しき亂暴(キリスト)。
 けうばち(曉望) 圖足をつまんで、望み見るこトを云ふ。
 けうばく(蕃參) 圖そばのこト。
 けうはん(教範) 圖てほん、教の法則。
 けうふ(輻夫) 圖こしなかく人。かこがき人足(キリスト)のこトを云ふ。
 けうふ(嬌評) 圖いつはりて、有りもせぬこトを云ひそやすこト。
 けうふち(嬌風) 圖悪しききたりを、ため直すこトを云ふ。
 けうへい(嬌弊) 圖前條に同じ。
 けうへい(驕兵) 圖つよき兵。
 けうべん(教鞭) 圖昔時生徒を教へいまして、爲めに教師が用ひたる鞭(キリスト)。①轉じて生徒を教ゆるこトを云ふ。
 けうぼく(梟木) 圖首をさらして置く木。①獄門(キリスト)臺のこト。
 けうぼく(喬木) 圖まつすぐに高く立つてゐる木の種類を云ふ、假令ば松杉檜などの類。
 けうまん(驕慢) 圖おこりたかぶる。じまんするこト。
 けうむ(曉霧) 圖夜明けのきり。あきざりのこトを云ふ。
 けうめい(驕名) 圖武勇のひいでるほまれ。つよきへうばん。
 けうめい(嬌命) 圖命令をいつばる。①詔(キリスト)をいつばるこトを云ふ。
 けうめん(漚麵) 圖そば粉を打ちて切りたるもの、即ちそばきり。
 けうふ、けうめ
 六二七

けうも、けうわ

けりもん(教門) 聖宗旨(宗旨)のコト、
けりやち(教養) 聖教へやしなふ。おしへ
そだつるコト。
けりやち(驕陽) 聖夏の太陽の光、
けりゆ(教諭) 聖小学校以上の各種学校の
教師の稱呼。教へ知らするコトを云ふ
けりゆ(曉諭) 聖物事の道理を、さとし教
へるコト。さとしさかす、
けりゆ(梟雄) 聖すぐれたる者の頭(カビ)
すぐれてたけきコト、
けりゆ(驍勇) 聖よくたけきコトを云
けりら(毛末) 聖毛のさき。毛の末(シ)の方
のコトを云ふ、
けりら(驕樂) 聖贅澤をして、遊び樂(シ)
しむコトを云ふ、
けりりん(喬林) 聖喬木のみにて、成り立
てある森林(シ)のコト、
けりりやち(橋梁) 聖橋(シ)のコト、
けりりん(教練) 聖教へれる、即ち教へて
能くなれさせコト、
けりる(曉露) 聖朝方(カサ)のつゆ、
けりわ(協和) 聖心を一にする、即ち互ひ
に心を合して仲よくする、
けりわ(驕横) 聖高ぶりて、我ま、勝手
(カサ)なるコトを云ふ、

けおと、けから 編

(けお) けおとる(氣劣) 聖動まける。おさる。元
氣(シ)よわき、
けおり(毛織) 聖獣(カサ)又は鳥の毛を以て
織りたるもの。木綿織物の一種にて糸
をけばだたせて織りたるものメリヤス
の裏の如きもの、即ち其れなり、
けおりもの(毛織物) 聖獣鳥類の毛を晒
(カサ)して織りたる物、
(けげか) けが(怪我) 聖あやまち。しぞこなひ。そ
んじ。かけ(カ)あやまつて頁(カ)たる傷
(カ)のコトを云ふ、
けがい(下界) 聖天に對しての稱にて地球
上(カ)のコト即ち世界(カ)、
けかち(下向) 聖高處より低處へ下(カ)る
コト。下(カ)の向(カ)都より地方へ行
くコトを云ふ、
けかす(穢) 聖動又た汚の字をも書く、き
たなくする。よこす。そんじさす。はづ
かしむる、
けかち(飢渴) 聖うえかつえるコト、

けかに、けかん

けかにん(怪我人) 聖怪我をなしたる人。
傷をうけたる人のコト、
けかは(毛皮) 聖毛の附きたるまゝにて晒
(カ)したる獸の皮(カ)、
けかはり(毛更) 聖多く秋の頃に於て、獸
(カ)の毛の生へかはるコトを云ふ、又
は生へかはりたる毛、
けかへし(蹴返) 聖けりかへすコト。相撲
の手、四つに取り組み、相手の足を蹴り
て倒(カ)す手、
けかへす(蹴返) 聖動(カ)けて元(カ)へやる
。他人にけられたる、しかへしに其人
をける。足にて幾度(カ)も物をける。
けがらはし(穢) 聖動(カ)きたなし。きらひなり
。しりぞけて用ひぬなり、
けがる(穢) 聖動(カ)これる、きたなくなる
。女子の月經(カ)のある、
けがれ(穢) 聖動(カ)ける、きたなきコ
ト、
けかん(下疳) 聖月日の二十日より三十日ま
での間を云ふ、
けかん(下疳) 聖病の名、梅毒(カ)の初期
にて、陰部に生ずる一種の腫物、即ちか
んそのコト、
(けげき) けが(怪我) 聖動(カ)ける、

六二八

びき(逆) 聖さからふ。さかさま。よこし
ま。悪(カ)き。わるもの。もごる。みだれ
る。むかへる。はせる。即ち逆上(カ)
。おしのける。しりぞけるコト、
びき(現) 聖男のみ、男かんなぎのコト
を云ふ、
びき(閑) 聖閑人(カ)なくして、極めて静
(カ)かなるコトを云ふ。閑靜なるコト。
。いっせりせるコト、
びき(閑) 聖せめく。争(カ)ふ。うつたう。
にくむ。うらむ。仲の善(カ)しからざる
コト。いっせりして。しづかなるコ
ト、
びき(艦) 聖二股(カ)になつては、このコ
トを云ふ、
びき(艦) 聖船のへさきのコト、云ふ、
びき(展) 聖はき物。あした。くつのコトを
びき(卸) 聖(カ)に同じ、すさま。あひだ
のコト。いさはる。しりぞく。かへつて
。近(カ)よせぬ。遠(カ)ざける。あはる。す
つる。しめる。さづる。あほむくコト、
びき(鷓) 聖鷓の名、もすのコト、
びき(鷓) 聖一種の鳥、形、鷓(カ)に似て大
いなる水鳥。船のへさきに、此の水鳥
の形を刻(カ)り、又は描(カ)きたるもの
を云ふ、

びき(擊) 聖うつコト。打(カ)くコト。ぶち
當(カ)るコト。攻(カ)むコト。互ひに打
(カ)き合つて闘ふ、
びき(擻) 聖前條に同じ。戟(カ)を持つて、
闘(カ)ひ合ふコトを云ふ、
びき(殖) 聖鶏(カ)が卵(カ)子を孵化(カ)
さむとして、裂(カ)け破りて卵(カ)子の孵化
(カ)さるコトを云ふ。轉じて卵(カ)子の、
裂(カ)けて割(カ)るコトを云ふ、
びき(激) 聖はげしきコト、勢の強きコト
。言葉(カ)の正し過ぎるコト。世の中
の事に心を怒らすコト、
びき(激) 聖人に物事を動(カ)め、又た人の
心を動(カ)かましむ。爲めに發する
書狀(カ)回章(カ)の科ト、
びき(劇) 聖つきコト、きびしきコト、は
げしきコト。せむしきコト、いそがし
きコト。芝居(カ)の科ト。いたみ、な
やむ。甚(カ)だし、
びき(隙) 聖なかつたがひ喧嘩、不和。物と
物とのすさまの科ト、
びき(外記) 聖昔時の職名の一にて現今の
書記官(カ)に同じ、
びきあく(劇悪) 聖大惡の科ト、
びきいん(劇飲) 聖大酒(カ)を飲む、
びきかい(劇界) 聖芝居の仲間役者仲間の
けき、けきか、擻、殖、激、擻、劇、隙

コトを云ふ、
びき(激) 聖激揚。聖物事に感じ、強く意氣
(カ)のあがり高ぶるコト、
びき(隙) 聖隙。聖月日の經(カ)コトの速(カ)
きコトを云ふ、
びきけん(擊劍) 聖けんじゆつ、
びきけん(擊劍家) 聖劍術(カ)つかひ
。擊劍の達人(カ)、
びき(激語) 聖激(カ)を立て、言葉道(カ)
(カ)の荒々しきコト、
びきこん(展旗) 聖下駄の齒(カ)のあき、
びきさい(擊碎) 聖打ちくだく、
びきさち(劇争) 聖きびしくあらそふ。は
げしきけんくわ、
びきさく(戰架) 聖このコトを云ふ、
びきさつ(擊殺) 聖うち殺すコト、
びきしん(激震) 聖又た劇震とも書く、は
げしき地震(カ)、
びきじん(激甚) 聖はげしきコト、
びきしん(逆臣) 聖逆しき家來(カ)、
びきじやち(劇場) 聖演劇場、即ち芝居を
なすところ、
びきしゆち(逆襲) 聖逆けたる軍隊が、敵
(カ)かへつて襲(カ)ひ撃(カ)つて来るコト
を云ふ、きやくしゆち、
びきじよう(擊攘) 聖敵を打ち拂(カ)ふコ
ト、
けきか、けきし

六二九

けきし、けきち
けきしよく(劇職) 困いそがはしき仕事。
はげしきつこめ、
けきす(激) 自動はげしくなる。のほせおこる。さからふ。あたらしくなる。つきあたる。
けきす(激) 自動激文を飛(せ)せて人の心をふるひ起(おこ)す。
けきせき(劇寂) 困さびしきコト。最も静かなるコト。
けきせつ(鳩舌) 困譯のわからぬ事を、無暗にしやべるコト。他國人の言葉(ことば)を、あざけりて云ふ語。
けきせん(劇戦) 困はげしきたかひのこぼせん(劇然) 困極(き)めて静かなるさまを云ふ。
けきたち(激闘) 困はげしくたかふコト。
けきたち(劇道) 困芝居に就ての事から、けきたち(撃柝) 困拍子木を叩く。
けきたん(激湍) 困谷川の岩に當り、くだけて流るゝを云ふ。
けきたん(劇壇) 困芝居の仲間。
けきたん(劇談) 困芝居に就ての物語。つまさ談判(だん) きびしき掛合、
けきちん(撃沈) 困軍艦(せん)などに大砲弾を中(ちゆう)て、うち沈めるコト。
けきちやち(劇場) 困芝居小屋。

けきつ、けきま
けきつち(劇痛) 困はげしきいたみ。
けきつち(劇通) 困芝居の事からに委(まか)しき人のコト。
けきど(激怒) 困はげしく怒(おこ)る。
けきどち(激動) 困はげしくうごくコト、強(き)くゆさぶるコト。
けきどく(劇毒) 困はげしき毒、つよき毒。
けきは(激波) 困荒き波。
けきは(撃破) 困うちやぶるコト。
けきは(毛際) 困毛の生(は)てる縁(えり) 即ちへきはのコト。
けきはつ(激發) 困はげしく生(は)おこるコト。
けきぶん(激文) 困人心を激昂(き)ます爲めに發する文書。
けきへち(劇評) 困芝居に關する批評(ひ)のコトを云ふ。
けきへん(劇變) 困はげしきへんくわ(急なる變化)。
けきむ(劇務) 困いそがしき務(む) 務(む)のせわしきコト。
けきめつ(撃滅) 困うちつくす。撃つてほけきやく(劇業) 困其の分量(りやう)が、少しにても多ければ、直(ちゆう)に身體に害(がい)及ぼす。はげしき藥(やく)。
けきよ(懸魚) 困家の棟木(むね)の端に、魚の尾の如き形の物を、板にて作りて、垂

けきま、けくら
けきま(激) 置く物の稱(なづ)。
けきよ(下御) 困位高き人の、車馬より降(くだ)るコトを云ふ。
けきらひ(氣嫌) 困何(なに)の理由(りゆう)もなくして、嫌(きら)ふコトを云ふ。
けきりよ(逆旅) 困やまや、はたごや。
けきれ(毛切) 困毛にこすれて、負傷(ぶしょう)するコト。
けきれい(激勵) 困きびしく、はげますコト。奮發(ふんぱつ)するコト。
けきれつ(激烈) 困甚だはげしきコト。勢(いきほ)のするごきコト。
けきりん(逆鱗) 困天子の御怒り。甚だしき怒るコトにも云ふ。
けきろち(逆浪) 困さかまく浪(なみ)。
けきろち(激浪) 困あらなみ。
けきろん(激論) 困はげしき議論。きつき論判(ろん)。
けく(希求) 困又たキキユウとも讀む、ひれがひ、もさむるコト。
けぐち(外宮) 困伊勢の内宮に對し奉つての稱(なづ) 伊勢の豐受(とようけ)大神宮を奉祀せる宮の事を申す。
けく(げく)

けくつ、けけん
けくつ(毛沓) 困一名を、タツスキと云ふ。昔時將軍(せん)の用ゐたる歌類(うた)の、毛附(け)のまゝなる皮にて、作(つく)つたる。ツツキ沓の如き物。
けぐるま(毛車) 困車(くるま)の一種、いとげのくるまの科(か)を云ふ。
けくわ(外科) 困醫道(い)の語にて、内科に對する稱にて、身體の外部に受けたる創(きず)。總て負傷(おぶ)を醫(い)する科。
けくわん(下官) 困等級(たうじ)の低(ひ)き官吏(くわん)の科(か)を云ふ。
けくわん(解官) 困官を解(と)くま云ふ意にて、辭職(じ)の科(か)。
けくわん(下院) 困其の月の、二十日過ぎの科(か)を云ふ。
(げげ)
げげ(下下) 困下等の下等。しものしもの。最劣(せう)等(たう)。
げげつ(下血) 困病氣の名、肛門(こうもん) 又は女子の陰部より血の下る病氣の科(か)を云ふ。
げげん(化現) 困神佛が、姿(すがた)をかへ給(たま)ひて、此の世に現(ま)はれたまふコトを云ふ。
けくつ、けけん

げげん(怪現) 困合點のゆかぬ容貌(がう)。
げげん(下弦) 困陰曆の二十日後の、片割(かたわり)の科(か)を云ふ。
(げざい)
げざい(華筭) 困佛事、即ち法事などの時に、佛(ぶつ)に供(く)する花を盛る器の科(か)を云ふ。皿(わ)の如きもの。
げざい(家子) 困其の家の主人が、召使(めいし)の科(か)を云ふに用ゆる語。
げざい(下月) 困酒を好(この)ぬ人の科(か)を云ふ。
げざい(籠子) 困昔時、食物を盛(も)に用ひたりし器(うつ)。
げざい(下國) 困都(みやこ)より、國々へ赴(むか)ふ科(か)を云ふ。
げざい(下刻) 困昔時一刻(い)を上中下に三分したる、其の下(しも)の時間の科(か)を云ふ。即ち下(しも)の下刻(い)。
げざい(蹴込) 困人家の場(ば)のり口の下の部を云ふ。人力車(ぢきん)の腰を掛(か)る前の足を置く部の科(か)を云ふ。
げざい(蹴込) 困動物をけつて、内へ入れらる。甲の部に屬(ぞく)する物を、乙の部へ

げざい、げざく
げざい(袈裟) 困法師の用ゆる法衣の一種にて、肩(かた)に掛けて、衣物の上を覆(おほ)てるもの。
げざい(今朝) 困其の日の朝、今日の朝(あ)。
げざい(下座) 困末席(すゑ)しも座。
げざい(下劑) 困大便の通じを、よくなす藥。くだし藥の科(か)。
げざい(戯作) 困たはむれの著作物。即ちおどけの著作物。面白き讀物。即ち小説(せつ)の類。
げざい(下策) 困殊に劣(せう)りたる計略(けいりやく)の科(か)を云ふ。
げざい、げざく

けさく、けし

けさく(下作) 図した作、即ち小作。拙(ツ)なき著作物。
けさく(下作) 図風采(ツ)に乏(ツ)しきコト、ト、人格(ツ)の鄙(ツ)しきコト、
けさん(下山) 図山より下るコト、
けさん(卦算) 図文具(ツ)の一種、けいさんのコト、即ち金(ツ)にて作られたる細長(ツ)くして、中央(ツ)にて握(ツ)のある重り(ツ)具足(ツ)の名所(ツ)草摺(ツ)のあるコト、
けさくしや(戯作者) 図戯作を業とする人、即ち小説家、
けさくぼん(戯作本) 図小説のコト、
けさくもつ(戯作物) 図おどけて作りたる本(ツ)。面白き著作物、

(けげし)

けし(夏至) 図曆(ツ)の名、二十四氣の一、六月の二十一日の頃なり、此の日は晝の最も長くして、夜間(ツ)の最も短き時なり、
けし(芥子) 図草の名、二年草にして、秋に種を卸し、翌年の夏の初めに其の莖(ツ)が、四五寸の長さに達す、葉は薄き緑色にして、莖の周囲(ツ)を取り巻(ツ)て、

けし、けしき

けし(性) 図あやくあり。異なれり。只(ツ)ならずあり、
けし(家司) 図家事の總てをつかさどる家来のコト、現今の家令、
けし(消) 図けすコト、又たけしたるもの無くなるコト、
けし(消印) 図切手(ツ)印紙等を消す目的(ツ)に於て押す印形、
けしかける(映) 図動かだてる、そのかす、人を使いて事をなさしむ、
けしき(景色) 図風景。即ち山水のありさま、まよきながめ、
けしき(気色) 図かほ色(顔色)ありさま。○物事の容子(ツ)心持の舉動(ツ)に見(ツ)はる、コト、
けしき(気色立) 図動心に思ふてる事の外(ツ)に表はる。○凡て物事の隠(ツ)れたる容子が表はれ出る。○物事の働(ツ)が目に見えてはげしく爲り出す、

けしき、けしや

けしき(景色立) 図四季折々(ツ)の眺(ツ)をそえて来る重に花などに就て云ふ語、
けしき(消口) 図大事の一方の處を消したるコトを云ふ、
けしき(消炭) 図薪(ツ)の火を消たる物のコトを云ふ、
けしき(芥子粒) 図芥子の實(ツ)のこを云ふ、
けしき(極) 極めて小さき圓形物の物を云ふ語、
けしき(消盡) 図火けしつほの略語、
けしき(死人) 図他人を殺害(ツ)したる本人のコト、
けしき(芥子坊主) 図子供(ツ)の頭の周囲(ツ)を剃(ツ)りて、其の中央(ツ)の處に毛を、少し置くと云ふ、
けしき(下車) 図車より下る、汽車などより下るコト、
けしき(假粧) 図紅(ツ)や白粉(ツ)を用ひて顔面をかざるコト。○轉じて模様などに、美しく色彩(ツ)をなせしコトを云ふ、
けしき(芥子燒) 図神道にて、護摩(ツ)を焚(ツ)コトを云ふ、
けしき(掛錫) 図錫杖(ツ)を掛(ツ)て置

くま云ふ意(ツ)より轉じて、僧侶が久しく留(ツ)まりおるコト、
けしゆ(下宿) 図他家(ツ)に長く泊り居るコト。○奉公人のやどさがり。○下宿屋の略語、
けしゆ(毛襦子) 図織物の名、毛さ木綿糸にて、襦子の如く織し物、
けしゆ(下手人) 図手(ツ)を下して、他人を害(ツ)したる本人、
けしよ(下書) 図したかきのコト、
けしよ(下乗) 図車馬などより下(ツ)るコト。○下馬(ツ)に同じ、
けしらみ(毛虱) 図一種の寄生虫にて、陰毛又は腋(ツ)の下の毛などに生ずる、灰色にて圓く、扁平(ツ)き小さな虫、
けしん(化身) 図神佛の生れかほり云ふコト、
けしん(下臣) 圖位の低(ツ)き家來。○家來が自己のコトを、君主に對して云ふ語、

(けげす)

けす(消) 圖動形をうしなはする、形をなくしてしまふ。○曇(ツ)を引く。○燃(ツ)てけしゆ、けす、消

けす、けすち

けす、けすち

けす(解) 圖動事實(ツ)を知る。○理屈を會得(ツ)する。○けす、なくする、假令ば毒を解すなど、
けす(下司) 圖下級の官吏、
けす(下種) 圖又た下米とも書く、自分のひくき人、いやしき人、
けす(下水) 圖悪水(ツ)を流す溝、悪水の流れる溝(ツ)の、
けす(下板) 圖下水板(ツ)の略、五衛門風呂(ツ)などの釜(ツ)の上に、すえつけられある板(ツ)、
けす(下水道) 圖上水道(ツ)に對しての稱にて、悪水を流(ツ)す地下の溝(ツ)の、
けす(いた) 圖下水板(ツ)の上に、蓋(ツ)をして載(ツ)て置く板、
けす(種男) 圖殊(ツ)に身分のいやしき男のコト、
けす(種女) 圖いやしき女、極めて身分の低き女、
けす(下種) 圖甚だしくいやしき、最下等なり、
けす(毛筋) 圖髪をすきたる痕(ツ)、即ちくしあさ(ツ)の毛の、○物事(ツ)の極(ツ)めて小(ツ)きコトを云ふ、

けすち、けそく

けすち(毛筋立) 圖毛筋棒に同じ、
けすち(毛筋棒) 圖櫛(ツ)の一種、髪(ツ)の毛筋を綺麗(ツ)に揃(ツ)へる爲めに用ゆる具、巾(ツ)の狭(ツ)き櫛に、細き長き柄(ツ)の附いてる物、

(けげそ)

けせつ(下拙) 圖自分の事をへり下つて云ふ語、拙者、
けせわ(下世話) 圖下々(ツ)云ふ鄙(ツ)しきけせん(下賤) 圖身分の低(ツ)きコト、いやしきコトを云ふ、
けせん(牙齦) 圖象牙(ツ)又は角(ツ)などにて、拵(ツ)らへられたる、小さき薄き札、此に書物の下題(ツ)などを認めて標(ツ)とする、
(けげそ)
けそ(假粧) 圖化粧(ツ)を爲したるコトを云ふ、
けそ(懸想) 圖心を寄せる、ほれる、みされるコトを云ふ、
けそ(下足) 圖脱(ツ)たる履物(ツ)、
けそ(華足) 圖花などの彫物(ツ)を爲し

けそう、けた、桁、方

けたる(榎)又は机の足、
けそらふ(懸想文)懸懸(懸)なしたる
意味をば、記したる手紙、即ち懸書(懸書)
けそくちん(下足賃)図下足だ、
けそくばん(下足番)図下足を番する人の
コトを云ふ、
けそくたい(下足代)図下足の番をする爲
めに、受くる報酬、
けそくれち(下足料)図下足代に同じ、即
ち下足ちん、

(けげた)

けた(桁)図橋及び家の外廻(外廻)に在る
柱(かし)の上に、漆(漆)する木材のコト
算盤盤(算盤)の玉を通した竹の細き串
(串)及び其の串を貫(貫)きたる横の木
にて位取(位取)の記されあるもの、
じて勘定(勘定)及び分別(分別)のコトを
云ひ表はすに用ゆる語、假令(假令)桁をば
ずして飲むなどの類、
けた(方)図四角なる形を云ふ、
けた(下駄)図足にはきて、地上を歩く具
木材(材)をえぐり取りて作りし物、又
た木材を板の如くし、二枚(二枚)の木の齒
(歯)をつけたるもの、

けたい、けたし

けたい(怪體)図俗語にて、あやしきコト、
合點のゆかぬコト、
けたい(懈怠)図おこたるコト、なまける
コトを云ふ、
けたい(外題)図書物の表紙に記す、其の
書物の名(名)みだし、さなえ名、
けたいん(下駄印)図一種の印形にて、恰
(恰)も下駄の齒(歯)の如く、中央を凹
(凹)ませて、上下に文字などを刻(刻)り
し物を云ふ、
けたい(化導)図人を教へて善き方へみち
びくコトを云ふ、
けたい(外道)図佛教の語、佛法以外の宗
教のコトを云ふ、鬼(鬼)の形をなした
る假面(假面)の、こまなる心のもの、
けたい(蹴倒)図けたをすコト、
けたい(蹴倒)圖動足にて蹴(蹴)て、こ
ろがしたをす、こかすおしたをす、つきた
をす、

けたい(氣高)圖上品(上品)なり、品すぐ
けたをり(蹴手繰)圖相撲の手の一種、相
手の足を蹴り、其れと同時に相手の鉢
(鉢)を、はたきてたをす手のコトを云ふ
けた(蓋)圖蓋(蓋)の上より、内の物を考
へるを云ふ意にて、おしはかる推量(推
量)する、
けたい(解陣)圖敵(敵)をた陣所を、取り
拂(拂)ふコトを云ふ、

けたし、けたん

けたし(思ふに、殊に依ればの意、
けたし(蹴出)図けだすコト、女子の腰
(腰)より下に巻きつけてゐる華美(華美)な
染色の布帛(布帛)、
けたし(蹴出)圖動足にてけちらかして、
物を外へ出す、豫定(豫定)の入用を仕末
(仕末)して、其の中より幾分かの金子を、
取りて殘(残)す、
けたん(下駄段)圖下駄をぬぐべく、出
來たる段のコトを云ふ、
けたたまし(狼狙)圖うるたへるなり、あ
わてるなり、
けたつ(解脱)圖佛語にて、迷(迷)を去り
悟(悟)りを開きて、佛教(佛教)を會得(會得)
せしコト、

けた(蹴立)圖動けつておこす、けちら
けたばこ(下駄箱)圖下駄を藏(藏)し置く
箱のコトを云ふ、
けたばん(下駄番)圖下足番人、
けたもの(獸)圖足が四木ありて、全身に
毛の一倍いに生えてる動物の種類を云
ふ、
けたゆき(桁行)圖大工の語、一棟の家の
長さのコトを云ふ、
けたん(下段)圖下のだん、劍術の語にて
刀劍(刀劍)を持ちし、手を下げてかまゆ

るコトを云ふ、

(けげち)

けち(怪事)圖訝(訝)しき事柄、あやしき
事柄(怪事)延喜(延喜)の悪きコト、
けち(下知)圖指揮(指揮)命令(命令)、
けち(音階)圖しぶきコト、しみたれなる
コト、ひきまようなるコト、いやしきコ
トを云ふ、
けち(下直)圖直段(直段)の安きコト、安
くなりし直段、
けち(牙軸)圖軸を象牙(象牙)にて造(造)
りたる物と云ふ意にて、巻物(巻物)又は
掛物(掛物)などの軸(軸)の、兩端(兩端)に象
牙をはめたる物、
けちめ(別目)圖別(別)つコト、別たれたる
コトを云ふ、
けちよ(下女)圖女中のコト、
けちかし(氣近)圖ちかし、ちかづく、
けちがひ(蹴遠)圖ちかひのコト、しく
じるコト、
けちげち(蜘蛛)圖昆虫の名、多く人家に
棲(棲)ひて、壁(壁)障子などを傳ひ歩き
せる、むかひに似たる、小さき虫、人に
さらばれ、いやがる人のコトを、あざ
けち、けちけ

けりて云ふ語、

けちんぼり(音階坊)圖人情なき強慾(強慾)
の人を、ののしりて云ふ語、「コト、
けちやく(下着)圖都より地方へ赴きたる
けちちち(蹴散)圖動けつて、ちらばせる。
無暗(無暗)に、ける、
けちん(解陣)圖敵(敵)をた陣所を、取り
拂(拂)ふコトを云ふ、

(けげつ)

けつ(血)圖ちの血が附きて染(染)
まる、即ち、ちぬるコト、
けつ(偶)圖速(速)かに走り行く状(状)
轉じて疾(疾)きコト、急(急)勢(勢)の
強(強)くして勇(勇)しきコト、佛法の語、
偶(偶)に同じ、其の條を見られよ、
けつ(碣)圖際(際)だつて高く立(立)てる石
碣(碣)建石(建石)山の殊に高く時(時)だて
る状を云ふ語、
けつ(羯)圖去勢(去勢)を施(施)したる羊(羊)
(羊)のコトを云ふ、即ち男性の羊の男根
(男根)を取り去りしもの、野蠻(野蠻)なる
國、えびすの名、
けつ(揭)圖書き記して表(表)はし知らせ
るコト、轉じて建札(建札)看板(看板)の
けちん、けつ、血、碣、羯、揭

コトを云ふ、

けつ(揭)圖取り除(除)くコト、即ち去る。
のける。けづる。勢(勢)ひ強く勇氣の盛(盛)
なる状を云ふ、
けつ(歌)圖おさまる。やむ。やすむ、例は
雨(雨)が歌むなど、盡(盡)す、
けつ(碣)圖骨を折りて物事を爲す、盡(盡)
す、例は忠を竭(竭)すなど、先策(先策)に
る。やぶれる。物を脊(脊)に乗(乗)て上の方
へ擧(擧)ぐるコト、
けつ(揭)圖又たけいさも讀む、書き記(記)
して一般(一般)に示す、即ちか、か、か
がる。轉じて現(現)はす、示(示)す、上
へ擧(擧)ぐる。そばだてる。車(車)などの速(速)
かに、走り行く状に云ふ、物を肩(肩)
に載(載)せる、即ちになふ。かつぐコト、
けつ(決)圖決に同じ、次を見よ、
けつ(決)圖きまる。さだまる。きめる。き
め。たしかに處置(處置)する、即ち決斷
(決斷)分(分)つ。別(別)れる。水を流(流)
す、即ち決水(決水)きつ。さ。さうあつて
も、即ち決(決)してなご、かみきる、
けつ(訣)圖人と別(別)れる。特に生別(生別)
(生別)、死別(死別)のコトを云ふ、確(確)に
定(定)める。決(決)に通ず、さだむ。きめる
秘訣(秘訣)の訣にて、物事(物事)の、おくの手
けつ、碣、歌、揭、決、訣、六三五

けつつか、けつつき
 んくわんするコト、
 けつつかく(結核)図醫學上の語、一種の傳染病(インフルエンザ)の、怖(おそ)るべきバイキン(細菌)の名、
 けつつかみ(結合)図むすびあふコト、結ばれて離(わか)れぬように爲る、
 けつつかん(缺陥)図不足せるコト、不備なるコト、かけてるコト、
 けつつかん(月刊)図月に一回、出版する物又た出版するコト、
 けつつがらたい(結合體)図甲の物と乙の物とが、結び合つて一つの物體(分)と爲りたるもの、
 けつつからにん(結構人)図氣樂(カラ)に暮(す)して居る人、極(た)めておきなしき性質(性)の人のコト、
 けつつかくきん(結核菌)図結核の虫、此の虫が體內に入りて、繁殖(はは)すれば、即ち肺病と云ふ恐るべき病氣に爲る、
 けつつかひやうじん(月下氷人)図むすぶの神、
 けつつき(決起)図志を定(ま)めて、奮(は)り起るコトを云ふ、
 けつつき(血氣)図少壯者の盛んなる氣、
 けつつき(脈起)圖ふるひ起るコト、はれおこるコト、飛び上るコト、

けつつき、けつつく
 けつつき(決議)圖議論を定(ま)むるコト、意見を決するコト、
 けつつき(月氣)圖月の光のさへて強(つ)きコトを云ふ、
 けつつきち(月球)圖月のコト、
 けつつきち(血球)圖生理學の語、血の基礎(もと)となる成分の一、赤血球と白血球の二種あり、
 けつつきみ(月給)圖月々に得る給料(給)即ち俸給のコト、
 けつつきよ(穴居)圖土の穴(あな)を掘り、其の内に家として住居るコト、
 けつつきん(缺勤)圖勤(しん)めに出るのを休(やす)むコトを云ふ、
 けつつきん(月琴)圖樂器の名、形は琵琶(び)に似て、其の胴(た)は圓く、扁平(へいぺん)して、糸數(いとかず)は四線あり、
 けつつきよく(結局)圖つしまり、物事の終りのコトを云ふ、
 けつつく(結局)圖詩又は和歌の終りの句を云ふ、前條に同じ、
 けつつくわ(結果)圖できはえ、即ち出来上りたる容子(ようし)凡て原因に依りて生じた事實(じじ)のコト、
 けつつくわ(月華)圖月の光(ひかり)、月のかげのコトを云ふ、

けつつく、けつつけ
 けつつくわい(血塊)圖血がドロ／＼になつて、かたまつて居るコト、
 けつつくわち(月光)圖月のひかり、
 けつつくわく(闕畫)圖闕字(けつ)に同じ、其の條を見られよ、
 けつつくわん(血管)圖身軀中に在る血の通(と)ふて居る管、即ち動脈、
 けつつけ(結夏)圖夏期九十日間僧徒が外出せずして、寺に引き籠(こも)り居るコトを云ふ、此は芽(め)を出したる草を踏(ふ)たり、虫を知らずに踏み殺(ころ)したりしてはならぬと云ふ意より出でたる、一つの業(ご)陰曆の四月十五日より七月十五日までの間、
 けつつけ(毛附)圖馬の毛色の名、馬の毛色を帳面(やうめん)に書き記(し)すコトを云ふ、
 けつつけい(月經)圖女子十五六歳より四十五六歳までの間に、妊娠(にん)時の外に、月々来る惡血の子宮より出るものにてつきやく、
 けつつけき(穴隙)圖あな、すきま、
 けつつけつ(子)圖一本立(いっぴんたて)にて助のなきさま、互(たが)ひに和合(わが)せぬありさまを云ひ表はす語、
 けつつけいへいし(月經閉止)圖婦人病の一種、毎月必ずあるべき管の經水が、止

りたる病、
 けつつこく(欬刻)圖かけて取れてるコト、欠けて落ちて居るコト、
 けつつこん(血痕)圖血のあざ、
 けつつこん(結婚)圖夫婦の契約(けいぎ)を爲して、其の縁を結び合ふコトを云ふ、即ち婚姻(こんいん)、
 けつつこん(月痕)圖つきかけ、
 けつつさい(潔斎)圖ものいみ、
 けつつさう(血相)圖かほつき、かほいろ。顔の容子のコト、
 けつつさう(結裝)圖身仕度(しで)をなすコト裝束をつける、
 けつつさく(傑作)圖文章、詩歌等の、すぐれて出来のよきコト、
 けつつさく(月朔)圖月の第一日のコト、即ちついたち、
 けつつさん(決算)圖計算(けいさん)を爲し終(は)りたるコト、
 けつつし(血嗣)圖正しき後繼(ごせい)、血統(けつとう)を引きたるあそつき、
 けつつし(楔子)圖くさびのコト、轉(てん)じて物事の關係のコト、
 けつつし(決死)圖死する覚悟(かくご)で進(すす)むコト、死する覚悟で物事を爲すコト
 けつつじ(月次)圖月並(つきなみ)のコト、

けつつじ(闕字)圖文章中に在るべき管(かん)の文字が、取り落(お)されてあるコト、文章中に於て、天皇皇后并に高貴の御方の御名などを記す時に、敬意を表すべく爲めに、其の上を一字、又は二字或は一行(ぎ)明けて置くコトを云ふ、
 けつつじ(訣辭)圖別れの言葉(ことば)、暇乞(ひまご)の挨拶(あいさつ)、
 けつつしふ(結集)圖佛法の語、ちらばつてある法文集(ほっしふ)を云ふ、
 けつつしふ(月收)圖月々の收入、
 けつつしや(結社)圖二人以上の人が、一つに爲りて、一つの事業を爲すべく、團體(たいたい)を結ぶコト、
 けつつしや(月謝)圖月々に師匠(しせう)に贈る御禮(ごれい)のコト、假令ば學校の授業料などの類、
 けつつじよ(缺如)圖かけてある、はぶかれであるコト、
 けつつじよ(血書)圖我身軀の血液にて、文字を書くコト、又は血にて書きたる文字のコト、
 けつつじよ(闕所)圖昔時封建制度(けんていど)の時に、藩主が罪に依りて、取り上げられたる領地の、其のまゝになつてゐて、領主

の定まつてゐる土地のコトを云ふ、徳川時代の刑罰(けいばつ)の一、其の領地又は所有物を没收(ぼつしゆ)されるコト、
 けつつしん(結親)圖婚姻(こんいん)に依りて、親族(しんぞく)となるコト、
 けつつしん(決心)圖或る物事に就きて、志を定むるコト、
 けつつじん(傑人)圖萬人に秀(ひ)でたる人を云ふ即ち豪傑(ごうたけ)のコト、
 けつつしんたい(決死隊)圖決死の精神を、ちかひたる團體(たいたい)、
 けつつしやち(決勝)圖勝利を確かにきめるコトを云ふ、
 けつつしゆつ(傑出)圖すぐれたるコト、秀(ひ)でたるコトを云ふ、
 けつつしよち(結晶)圖金石學(けいしんがく)の語にて、礦物などの天然(てんぜん)に、かたまりたる其の形のコトを云ふ而して其のかたまりたるに、天然(てんぜん)の一定の法則(ぽうそく)ありて四面(よんめん)以上の平面(へいめん)を以て、圍(かこ)みたる形、
 けつつじよち(結繩)圖支那にて、太古(たいこ)に、文字(ぶんじ)の代(しろ)りに繩(な)を種々(しんじゆ)の形に結(む)びて、互(たが)ひに思ふ事を通(と)じ合(あ)ひしコトを云ふ、
 けつつじよく(血色)圖顔色(げんしき)、いろつや

けつし、けつせ

顔の元氣(げんき)のさま、
 けつしよく(月色) 固つきかけ、
 けつしよく(血食) 固先祖代々の祀(まつり)を
 たやさぬコトを云ふ。
 けつしよく(月蝕) 固太陽と月との間(ま)に
 地球(ちきゅう)がはさまりて、月の受くべ
 き太陽の光(ひかり)を遮(さ)るコト。
 けつしよくてん(決勝點) 固双方の勝敗(しょうばい)
 の、定(さだ)まる所の稱。
 けつしよたい(結晶體) 固天然に結晶し
 て、一つの形状を爲せる物のコトを云
 ふ。
 けつす(決) 固きまる、定まる。● 思案がつ
 く分別がきまる。● 堤防(ていぼう)が破(やぶ)れ
 て水が流れ出る。
 けつす(決) 固動さめ、定むる。● 思案を
 つける。● 堤(てい)を崩(くずれ)して水を流し
 出す。
 けつす(結) 固動大便が通じぬ、大便の通
 じがわるくなる。
 けつす(決水) 固堤防(ていぼう)などが、くす
 れ取れて、水の漲(たか)むるコト。● 堤防な
 どを、くすして水を泥濘(ぬじやう)せしむる
 コトを云ふ。
 けつする(月水) 固月經に同じ。
 けつせい(血清) 固醫學士の語、かたまり

けつせ、けつた

たる血の中より、化學的作用(けみざく)に
 依りて、分析(ぶんし)して取りたる一種の、
 澄(すみ)切(きり)たる薄黄色(はくじやう)の水の如
 きもの稱。
 けつせい(血稅) 固徴兵のコト。
 けつせき(月石) 固石の名、水晶の如くす
 きさうりたる石。
 けつせき(缺席) 固又た開席さし書く、會
 合(かいご)其他頭(た)を出すべき所へ出て
 行かぬコトを云ふ。
 けつせき(月夕) 固月夜のコト。
 けつせん(血戰) 固血を流(なが)し合ひて戦
 (いくさ)ふと云ふ意にて、はげしき戦ひの
 コトを云ふ。
 けつせん(決戦) 固生命(せいめい)を棄(す)て戦
 ふコト。● 勝敗を定める戦ひ。
 けつせきさいばん(調席裁判) 固又た欠席
 裁判さし書く、訴訟の相手方、即ち原告
 又は被告の一人が法廷(ほふ)に出頭せざ
 るも、證據(しやうこ)が十分なれば、其のま
 にて判決を下すコトを云ふ。
 けつそく(結束) 固集(あ)めて一(いつ)さす、即ち
 たばねるコト。
 けつそく(血族) 固其の家の、ちすじの人
 けつそん(鉄損) 固かけてそんするコト。
 即ち不足せるコト。● 思ふ通りに利益の

けつた、けつち

なかりしコト。● くひこむだるコトを云
 ふ。
 けつたい(結體) 固二つ以上の物が、結合
 して一つの形をなすコト。
 けつたい(血刀) 固血のついでる刀(やいば)。
 けつたい(結黨) 固仲間(なか)をつくるコト。
 ● 政黨(せいとう)を結ぶコト。
 けつたい(決闘) 固はたしあひをするコト
 トを云ふ。
 けつたい(結託) 固結び合ふコト。● 結び合
 った心(こころ)を一つにするコト。
 けつたい(決答) 固まちがひなき返事、し
 かさしたる返事。
 けつたい(血痰) 固血の混(ま)りたる痰、
 けつたい(決斷) 固しつかりさ定(さだ)める。
 けつたい(月旦) 固其の月のついたち。● し
 なさだめのコトを云ふ。
 けつたい(結黨式) 固黨派(たいは) (重に
 政黨のコトを云ふ) を結びたる爲めに
 舉(あ)ぐる儀式(ぎしき)のコト。
 けつたい(決斷所) 固裁判所のコトを
 けつたい(月旦評) 固人物のしなさだ
 めのコト。
 けつたい(決闘状) 固相手に決闘を
 申し込む手紙のコト。
 けつたい(調席) 固取り除(と)くコト、かけ

けつち、けつせ

てなきコトを云ふ。
 けつちやち(結腸) 固ひやくひろ、即ちは
 らわたのコトを云ふ。
 けつちやく(決着) 固きまりのつくコト、
 最後(さいご)の定(さだ)まり。
 けつちわん(結願) 固佛法の語、佛に日數
 を定めて、願(ねが)はれる祈願(せがな)の終(は)り
 したるコトを云ふ、即ち滿願(まんげん)のコ
 トを云ふ。
 けつちわん(結願日) 固結願の終る日。
 滿願(まんげん)の日のコト。
 けつてい(決定) 固確(かた)きさだむるコト
 けつてい(結締) 固かたく結びしむるコト
 ● 轉じて約束を堅く定(さだ)むるコトを
 云ふ。
 けつてい(暫提) 固ひつきげるコト、さげ
 て持つコト。● 補助(ほすけ)し合ふコト。● 携
 帶(たいてい)に同じ。
 けつてい(闕廷) 固御所(ごしよ)宮中(みやちゆう)。
 けつてん(缺典) 固物事の十分に備(ひ)は
 り居らぬコト。● 規則中に不十分なる點
 (てん)のあるコト。
 けつてん(厥願) 固けつまつきてこけるコ
 けつてん(缺點) 固たらざるところ。● あや
 まち、しそ、なひのコト。
 けつとう(血統) 固ちすじのコト。
 けつち、けつせ

けつせ、けつふ

けつどん(月暈) 固月に大なる輪の生ずる
 コト、即ち月のかさ。
 けつにく(血肉) 固血と肉と。● 骨肉(こつにく)と
 同じ。● 血を分けたる中。
 けつばい(賊敗) 固しそんじるコト、やり
 そこなふコトを云ふ。
 けつばく(潔白) 固交り氣のなき白きコト
 即ち純白。● 轉じて正直(せうじき)なる、かけ
 ひなたなきコト。
 けつばつ(結髮) 固髪(かみ)をたばねて結ぶ
 コト。● 元服(げんぷく)をなすコト。
 けつばふ(缺乏) 固さぼしきコト、足(たり)ぬ
 コト、不足勝なるコト。
 けつばん(血判) 固神文又は契文(けいぶん)に、
 我が氏名を記したる、其の下へ我れの
 指(さし)を切りて、眞の血を捺(お)して、判
 (はん)に代ゆるもの。
 けつばふ(月俸) 固月々の給金。
 けつばふ(月報) 固月々の出来事を報告す
 るコト、又は眞の報告書。
 けつび(結尾) 固おわり、しまひ。
 けつぶ(月賦) 固月に割(わ)りあて、金錢を支
 拂(はら)ふコト。
 けつぶつ(傑物) 固萬人に秀(ひ)でたる人
 物(ぶつ)の、豪傑(ごうたけ)のコト。
 けつぶん(缺文) 固文章中に在るべき管の

けつふ、けつま

文句が、取れてなきコト、又は文句の足
 らぬ文章。
 けつぶん(結文) 固文章の終り。
 けつぶん(闕文) 固缺文に同じ。
 けつびち(結氷) 固水(みづ)を結ぶコト、即
 ち水が氷となるコト。
 けつべち(月評) 固一月(ひと)中の出来事(う
 じ)を、批評(ひひ)するコト。
 けつべき(潔癖) 固きれひすきのコト、即
 ちかんしやう。
 けつべつ(訣別) 固わかれ行くコト、いと
 まごひのコト。
 けつべん(血便) 固血液の交(ま)りたる大
 便のコトを云ふ。
 けつほん(闕本) 固卷數(せきすう)のある書物
 の卷數が、不足してゐるコト、又は不足
 したる書物。
 けつまく(結膜) 固醫學上の語、眼瞼(がん)の
 の内面を覆(おほ)つて薄皮。
 けつまつ(結末) 固物事の終り。
 けつまつ(月末) 固一月(ひと)の終り、即ち
 つきすえのコトを云ふ。
 けつまつ(賦賦) 固けつまつくコトを云
 けつまつ(賦賦) 固物に知らず不足をあ
 てるコト。● しそんじる、しそこなふコ
 トを云ふ。
 けつふ、けつま

けつま、けつり

けつまくえん(結膜炎) 眼病氣の名、眼瞼(まぶた)の内側(うら)の薄き皮に、熱を持ちて血走り、たゞれる病氣、けつみやく(血脈) 眼血の通(と)ふて管(か)の(か)轉じて血統(けつとう)のコト、けつめ(脈爪) 眼(まぶた)などの鳥類の、歴(れき)の後の方に、二つに岐(ま)れて生(う)てる、大なる極(たぎ)めて堅き爪のコトを云ふ、けつやく(結約) 眼約束(やく)を定む、けつや(月夜) 眼月のある夜、即ちつき夜即ち明月の夜、けつよ(月餘) 眼一月(ひと)あまり、けつよ(子餘) 眼のこつてる物、はした物のコトを云ふ、けつつら(月老) 眼むすぶの神、けつつり(結禱) 眼縁組(えんぐみ)する結婚(けつこん)するコトを云ふ、けつつり(血痢) 眼大便に血が混(ま)じて、下るコトを云ふ、けつつり(削) 削げづるコト、けつつりん(血脈) 眼血の出る淋病、けつつりん(月輪) 眼満月の地上に、うつる影(かげ)のコトを云ふ、けつつりあめ(削鉛) 眼堅(かた)き鉛(な)を削(け)りて、食(た)ふやうにせるもの、稱、

けつり、けつれ

けつりか(削掛) 眼徳川時代に正月の十五日に七五三飾(ななご)を取り去りたる後へ、呪(のろ)ひまして門口(かど)に吊(た)せし物にて、柳の枝(えだ)又は檜(ひの)の枝を(え)で削(け)りかけて、茅(か)の花の如き形(かたち)なせし物を云ふ、けつりとる(削取) 削(け)りて取り除(と)る、かき餅(もち)のコトを云ふ、けつりもち(削餅) 削(け)りて薄く切りたる、かき餅(もち)のコトを云ふ、けつりやく(關略) 眼文章(ぶんしょう)を取り除(と)る、即ち(す)はぶくコトを云ふ、けつりぼち(削防風) 眼防風(ぼうち)を細かく刻(き)みたる物、刺身(さしみ)のツマなどに用(もち)ゆ、けづる(梳) 眼櫛(かみ)にて髪(かみ)の毛をさかす、總て櫛(かみ)を以て物をさかしならず、即ちくしげづる、けづる(削) 削(け)及物(もの)などを用(もち)ひて、物を少しづつ、減(へ)しゆく、かかつて取る、けづる(削) 眼血(けつ)の交(ま)りて出る涙(なみだ)の極度(たぎ)云ふ意にて、悲哀(あはれ)憤激(いきどお)の極度(たぎ)云ふ意を表す語、けつれい(缺禮) 眼禮儀(らいぎ)を盡(つ)さぬコト、

けつれ、けさう

けつれい(厥冷) 眼血の循環(けつじゆん)の止(と)まりて、其れが爲めに身體(からだ)の冷(ひや)たくなりしコト、けつれち(結了) 眼おわるコト、満足(まんじつ)に成就(じゆじゆ)するコトを云ふ、けつれつ(決裂) 眼さげやぶる、けつろ(血路) 眼一方(ひと)の眼(まぶた)みを破(やぶ)つて逃(に)げ行く路(みち)、難儀(なんぎ)なる場合(ばあひ)を漸(しだ)く(し)て逃(に)げしコト、けつろち(缺漏) 眼足(あし)ぬコト、わけてるけつろん(結論) 眼一つの議論(ぎろん)の基礎(きそ)を、しつかりと云ひ終(は)る、

(けげて)

けてち(怪鳥) 眼不思議なる形の鳥、けてん(怪顔) 眼あやしみおどろく、けてん(外典) 眼佛法の語、佛經(ぶつぎょう)の外、種々の書物のコト、けでん(下田) 眼下等の水田、米の出來の少なき田地(ち)のコト、

(けげん)

げどち(下等) 眼かさうのコト、おどりたるコトを云ふ、

げどく、げん

げどく(解毒) 眼毒を消(け)して無(な)にするコト、即ち飲(の)む毒を、薬を用(もち)ひてけすコトを云ふ、げどくざい(解毒劑) 眼解毒の薬、げどり(氣取) 眼げどるコト、げどる(氣取) 眼動其顔色、即ち容子を見て、悟(さと)り知る、見てさつする、げとばす(蹴飛) 眼動(うご)けて他處(た)へやる、げちらかす、

(げげな)

げなび(健氣) 眼心掛(こころか)の正しきコト、いさましきコト、ばきはきさしたる氣前のコトを云ふ、げなし(眩) 眼わるく云ふ、くさす、そしるののしる、げなし(毛無) 眼毛の生(う)えてなきコト、在(あ)る、る苦の處に毛のなきコトを云ふ、げなは(毛繩) 眼女の髪(かみ)の毛を、多く集(あ)めて繩(な)の如く編(あ)むたものコトを云ふ、げなみ(毛並) 眼毛の生える有様(ようざん)の種類(しゆるい)たるしな、

げさく、げなみ、げ

(げげに)

げげん(下男) 眼しもべ(下郎)、げげん(解任) 眼役目(やくめ)を解(か)るるコト、即ち免職(めんしやく)されるコト、げげん(家人) 眼其の家に仕(つか)えてる人、徳川時代に旗本(はたご)の祿高(ろくたか)の少なきものを云ふ、げげん(化人) 眼あやしき人、げげ物のコトを云ふ、げげん(下人) 眼身分の低(ひ)き人、いやしき人のコト、

(げげぬ)

げぬき(毛抜) 眼一種の器具、鐵又は眞鍮(しんそう)にて作られたる釘抜(かぎ)の小さき形をなせるものにて、毛を抜(ぬ)く、みて抜(ぬ)くに用(もち)ゆる具(ぐ)を云ふ、げぬきあはせ(毛抜合) 眼布片(ぬ)き布片(ぬ)きを縫(ぬ)ひ合(あ)はすコト、物をすれすれに、つなぎ合(あ)はすコトを云ふ、

(げげぬ)

げなん、げぬき

(げげの)

げげの(解熱) 眼病氣にて、發したる熱(あつ)が下るコトを云ふ、げげの(解熱劑) 眼熱(あつ)を下げるに用(もち)ゆる、薬の總稱、げげのやく(解熱藥) 眼熱(あつ)げ薬(やく)のコトを云ふ、げげん(懸念) 眼心にかゝるコト、案(あん)じわづらふコト、心配(しんぱい)のコト、

(げげは)

げげは(露) 眼極(たぎ)めて細き毛、げげは(下馬) 眼乘(のり)てる馬より下るコト、馬(うま)より下りて行く、げげは(下輩) 眼我より身分の低き人のコト、目下(めげ)の人、げげは(下白) 眼下等の精米(せいまい)、

げれつ、げはく、霧

りはし、けひん 隙

けはし(隙) 隙けんそなり。路の歩みにくあるなり。
けはち(義立) 隙けばだつてる。
けはち(義立) 面細き毛のたつ。即ちけもくたつさま。
けはひ(氣) 隙ありさま。やうす。けしき。
けはふ(下馬札) 隙馬上にて通行を禁する云ふ建札(マツ)のコト。
けはらひ(毛拂) 隙ブラシユのコト。即ち衣物などを拂ふ刷毛(ハシ)。
けはへくすり(毛生薬) 隙一種の塗薬(マシ)にて、毛の生(ぬ)ぬ部(マシ)、へ毛を生す薬。

(けびひ)

けび(下卑) 隙いやしきコト、いやしき舉動(マシ)をするコト。
けびるし(檢非違使) 隙昔時の官名。現今の裁判官や警察官吏の如き役のコト。
けびき(罪引) 隙罪(マシ)を引くコト。罪を引きたる物、罪を引く道具。
けびきおとし(毛引絨) 隙毛糸にておとしたるよるひのコト。
けびん(下品) 隙風采のいやしきコト。品格(マシ)のおさりたるコト。下等の品物

けひさ、けふ 爽、快、狭、狭、爽、爽

けびさち(下卑蔵) 隙俗語。性根(マシ)のいやしき人を、罵(マシ)つて云ふ語。
けびやち(假病) 隙にせ病氣。

(けげふ)

けふ(爽) 隙狭(マシ)に通ずるさま。だてのコト。左右より持つ。又は押(マシ)ふ。即ちはさむ。助(マシ)くる。救ふ。世話(マシ)する。そば、かたわら。ちかすく。ちかし。せはし。
けふ(俠) 隙義氣に富みたるコト。又は人、即ちをさ。だて。近(マシ)よる。近づ(マシ)く。爽(マシ)の。同じ。
けふ(狭) 隙はさむコト。たすけ持つコト。たすくるコト。持つ。保(マシ)つ。頼(マシ)にするコト。
けふ(狭) 隙せまきコト。せまくあるコト。少(マシ)し。多(マシ)からず。
けふ(狭) 隙器具の名。はさみ。刀(マシ)。(マシ)の。コトを云ふ。
けふ(英) 隙植物の實(マシ)を、覆(マシ)てある皮、即ち豆(マシ)の。豆(マシ)の。コトを云ふ。
けふ(篋) 隙細長き形を爲せる箱のコトを云ふ。単(マシ)に箱(マシ)。

けふ 悞、怯、切、腸、煩、業 六四四

けふ(悞) 隙十分に足りるコト。あきるコト。快(マシ)し。満足(マシ)。
けふ(怯) 隙こわがる。おづる。まわし。臆病(マシ)のコト。
けふ(切) 隙奪(マシ)ひ取る。おびやかして取る。こわがらす。おどかす。盗人(マシ)さうぞく。止(マシ)すに勤(マシ)め。勤(マシ)む。さまを云ふ。無限(マシ)に長く續(マシ)くコト。
けふ(怯) 隙おどかす。おそれしむる。おびやかすコト。
けふ(脅) 隙脇に通じ。又た助(マシ)に通ず。即ちわきばら。あばら。轉(マシ)じて片わき。そば。おびやかす。おどかす。肩(マシ)なごを怒(マシ)らす。そびやかすコト。
けふ(腸) 隙脅(マシ)に同じ。即ち前條の。及び。を見られよ。
けふ(脅) 隙おどかすコト。特に毒口(マシ)を叩(マシ)きて。おどかす。
けふ(煩) 隙人體の名所ほうへた。
けふ(業) 隙學問及び藝術(マシ)の。總てのわざ。つとめ。世渡(マシ)。生計(マシ)即ちなりわい。だて。しかた。手段(マシ)即ち。から。い。は。し。で。き。ば。え。ど。だ。い。も。さ。し。は。じ。め。し。か。け。即ち未(マシ)だ。成功せざるコト。過ぎ去りたる意味を

けふ、けふ

表はす、即ちすでのコト。著(マシ)し。立派(マシ)。壯(マシ)。
けふ(煙) 隙けむりのコト。
けふ(煙) 隙非常にせまきコト。狭量(マシ)に同じ。
けふ(狭) 隙せまき町、細き道路(マシ)に、せまき町。
けふ(狭) 隙義氣に富みたる、行爲(マシ)の。コトを云ふ。
けふ(俠) 隙をさ。だて、かほやくの。コトを云ふ。
けふ(俠) 隙谷と谷との間。
けふ(俠) 隙義氣(マシ)に富(マシ)でるコト。即ちをさ。き。の。コト。
けふ(協) 隙協議をあはす。即ち相談(マシ)の。コトを云ふ。
けふ(狭) 隙狭軌鐵道。隙レールの巾(マシ)を、ニフイート六インチ以内(マシ)なる鐵道(マシ)の。コト。
けふ(協) 隙協會の名、其の會員が互に力を合せて、維持(マシ)の方法(マシ)を講じてる會。
けふ(狭) 隙兩側(マシ)よりはさみ撃(マシ)の。コト。はさみうち。
けふ(狭) 隙前後又は左右より攻めるコト。はさみて攻む。

けふ、けふ

けふ(俠) 隙男氣(マシ)の強きコト。義氣に富んでる人。
けふ(俠) 隙はしくしてせまき谷間(マシ)に、即ちはさみの。コト。
けふ(形) 隙なりふり、いでたち、よそはひの。コトを云ふ。
けふ(狭) 隙管(マシ)などの細くなるコト。口の。せまきコト。
けふ(夾) 隙夾せつてる。
けふ(協) 隙互に力を盡して、物事の成就(マシ)を助くるコト。國會にて議員が、政府より提出の法律案や豫算案に就て、決議せるコトを云ふ。
けふ(算) 隙算書物の間に、讀みかけの印(マシ)として、夾(マシ)み置くもの、竹又は木又は厚紙などに製せらる、即ちしほりの。コト。
けふ(協) 隙協贊權。隙帝國議會が憲法に依りて受けてる、議決すべき事の權利(マシ)の。コト。
けふ(夾) 隙夾雑物。隙まぜものある物。純粹(マシ)ならぬ物。
けふ(狭) 隙斜。隙いる町、遊廓(マシ)。
けふ(俠) 隙心。隙をさ。き。
けふ(協) 隙心を一にして、たすけ合ふコトを云ふ。

けふ、けふ

けふ(俠) 隙十二律の第二。陰曆の二月の稱呼。
けふ(協) 隙互に相談し合つて物事を營(マシ)むコト。協議するコトを云ふ。
けふ(脅) 隙脅(マシ)おどかして従(マシ)はせる。無理に従はせる。
けふ(俠) 隙狭小。隙せまくして、小さきコトを云ふ。
けふ(脇) 隙器具の名、肘(マシ)を載(マシ)て、もたれる臺(マシ)。即ちきよくろくの。コトを云ふ。
けふ(業) 隙商賣の。コト。其の人のなりふり、容子の。コト。
けふ(竹) 隙竹の名、葉花とも桃に似たれど、葉には光澤(マシ)ありて花は赤し。
けふ(俠) 隙一般につうするコト。なかに。底(マシ)の。その。轉(マシ)じて箱の。なかに。コトを云ふ。
けふ(協) 隙相談し合つて、物事を定(マシ)むるコトを云ふ。
けふ(協) 隙協定税率。隙國家と國家とが、互に協議して其の貨物に、課すべき税關稅(マシ)を定めたる、税金の割合を云ふ。

けふさ、けふる 烟

けふどち(協同) 烟互ひに力に爲り合つて
けふにん(俠仁) 烟義氣に富んで、情(け)
けふはく(脅迫) 烟おどすコト
けふむ(業務) 烟人々の、日々に執るべき
けふゆく(協約) 烟相談し合つて、取り定
けふり(烟) 烟又た煙さも書く、火を燃(け)
けふりたし(烟出) 烟家内にて、焚(け)した
けふりやく(劫略) 烟おびやかして財物を
けふりよく(協力) 烟力を合せて事を爲す
けふる(烟) 烟自動烟が立ち上る

けふる、けほり

けふる(萌) 烟草や木が芽(け)を吹き出
けふれつ(俠烈) 烟をこゝ氣の、甚だ盛(け)
けふる(狭路) 烟せまくるしき路(け)。細き
けふわ(協和) 烟互ひに、心が一致(け)し
けほく(下僕) 烟しもへ、下男
けほくめん(下北面) 烟昔時、院の御所を
けほらち(毛箒) 烟毛を一束(け)として、
けほらし(毛帽子) 烟毛にて作(け)りたる
けほふ(外法) 烟止しからざる外(け)の法
けほり(毛彫) 烟毛の如く極(け)めて細か
けほりし(毛彫師) 烟細かき彫物を爲す職
人のコトを云ふ。

けまり、けむし

けむり(蹴鞠) 烟鞠を查(け)にて蹴りて、其
けむら(華臺) 烟佛法の語、佛の像の頭(け)
けむら(華臺) 烟佛法の語、佛の像の頭(け)
けむら(華臺) 烟佛法の語、佛の像の頭(け)
けむら(華臺) 烟佛法の語、佛の像の頭(け)
けむら(華臺) 烟佛法の語、佛の像の頭(け)
けむら(華臺) 烟佛法の語、佛の像の頭(け)
けむら(華臺) 烟佛法の語、佛の像の頭(け)
けむら(華臺) 烟佛法の語、佛の像の頭(け)
けむら(華臺) 烟佛法の語、佛の像の頭(け)
けむら(華臺) 烟佛法の語、佛の像の頭(け)

けむし、けも 獸

けむし(烟) 烟眼(け)に入りて、堪(け)
けむり(烟) 烟けぶりのコト。
けむる(烟) 烟動燃(け)すにくする。
けめん(外面) 烟そがわ(け)表の方(け)かほ
けも(獸) 烟四足動物の總稱、
けも(毛桃) 烟桃の一種、其の實(け)も亦
けも(毛桃) 烟桃の一種、其の實(け)も亦
けも(毛桃) 烟桃の一種、其の實(け)も亦
けも(毛桃) 烟桃の一種、其の實(け)も亦
けも(毛桃) 烟桃の一種、其の實(け)も亦
けも(毛桃) 烟桃の一種、其の實(け)も亦
けも(毛桃) 烟桃の一種、其の實(け)も亦
けも(毛桃) 烟桃の一種、其の實(け)も亦
けも(毛桃) 烟桃の一種、其の實(け)も亦
けも(毛桃) 烟桃の一種、其の實(け)も亦

けや、けら 樺、鉾

けや(下屋) 烟母屋(け)に附け加えて建
けや(下屋) 烟母屋(け)に附け加えて建
けや(下屋) 烟母屋(け)に附け加えて建
けや(下屋) 烟母屋(け)に附け加えて建
けや(下屋) 烟母屋(け)に附け加えて建
けや(下屋) 烟母屋(け)に附け加えて建
けや(下屋) 烟母屋(け)に附け加えて建
けや(下屋) 烟母屋(け)に附け加えて建
けや(下屋) 烟母屋(け)に附け加えて建
けや(下屋) 烟母屋(け)に附け加えて建

けらい、けれつ

けらい(家來) 烟其の家に召し使ふ者(け)其
けらく(快樂) 烟心持(け)よくたのしき
けらく(快樂) 烟心持(け)よくたのしき
けらく(快樂) 烟心持(け)よくたのしき
けらく(快樂) 烟心持(け)よくたのしき
けらく(快樂) 烟心持(け)よくたのしき
けらく(快樂) 烟心持(け)よくたのしき
けらく(快樂) 烟心持(け)よくたのしき
けらく(快樂) 烟心持(け)よくたのしき
けらく(快樂) 烟心持(け)よくたのしき
けらく(快樂) 烟心持(け)よくたのしき

けるう、けん 憲、嶮、嶮、嶮、嶮

(けげろ)

けろち(下郎) 嶮下僕(シモ)。身分の低(ヒカ)人のコトを云ふ。
けろふ(下腐) 嶮女官(シメ)。方の宮仕(シメ)して、其の年月(シメ)の未だ幾何(シメ)も經(シメ)ざる方のコトを云ふ語、上臈(シメ)に對しての稱。
けろん(戲論) 嶮おどけたる議論。たはむれの議論 嶮無意味なる議論のコトを云ふ。

(けげん)

けん(憲) 嶮おきて。のりてほんまなす方法(シメ)表(シメ)はし知(シメ)す(嶮著(シメ)る)るしく表(シメ)はる(シメ)さま。「を云ふ」
けん(嶮) 嶮眼の縁(シメ)即ちまぶたのコト
けん(嶮) 嶮口の尖(シメ)つてある犬(シメ)のコトを云ふ。
けん(嶮) 嶮心の曲(シメ)つてるコト 嶮正直(シメ)ならざるコト 嶮言葉巧みに云ひごまかすコト。
けん(嶮) 嶮取り調(シメ)ぶるコト 嶮物事を正(シメ)し見るコト 嶮手紙を入れて持ち

けん 嶮、犬、吠、猶、嶮、嶮、嶮、嶮、嶮、嶮

運(シメ)ぶ箱、文箱

けん(嶮) 嶮けはし。あやふき 嶮山の高きコトを云ふ語。
けん(犬) 嶮家畜の一種、いぬ。
けん(吠) 嶮細き川 嶮溝(シメ) 嶮狭(シメ)き谷川のコトを云ふ。
けん(猶) 嶮止しきコト 嶮正道を堅く守れるコト 嶮性質の急なるコト、即ち短氣(シメ)のコト。
けん(嶮) 嶮たげれる。つかぬ 嶮捕(シメ)へて自由の利かぬやうにする 嶮考(シメ)える 嶮推察(シメ)する。
けん(嶮) 嶮道具の名、かぎのコト 嶮同じく、くさびのコトを云ふ。
けん(嶮) 嶮物を肩に載せて運ぶ。即ちになふ 嶮こざる。ふさぎて通さぬ 嶮總て塞(シメ)ぐべく爲めに用ゆる品、即ち、うめくさのコト。
けん(嶮) 嶮たてる。たて、持(シメ)える 嶮鍵(シメ)のコト 嶮ひつくりかへす。くつがへす 嶮星の名。
けん(嶮) 嶮水が少しづつ流れてるコト 嶮細かく少なきコトを云ふ。
けん(嶮) 嶮細きぬきぬき物、
けん(嶮) 嶮車のくびきを縛へるに用ゆる革(シメ)の紐 嶮馬具の一種、くつわのコト

けん 嶮、妍、現、絃、弦、街 六四八

を云ふ。

けん(嶮) 嶮横目にて互ひに現(シメ)み合ふコトを云ふ 嶮轉じて双方の仲の悪(シメ)くなるコトを云ふ。
けん(嶮) 嶮さひ。かけひのコト。
けん(妍) 嶮美しきコト。うるはしきコト。あてやかなるコト。
けん(鉗) 嶮美(シメ)みて人を害(シメ)なふ 嶮れたむコト 嶮刑具の名、罪人の首(シメ)へ箝(シメ)て置く物、くびかせ。
けん(現) 嶮あらはる。あらはれてる 嶮今。只今即ち現今(シメ)ゆめ。うつゝのコトを云ふ。
けん(絃) 嶮船のへり。ふなべた。
けん(弦) 嶮弓に張る糸、即ちつる 嶮絃に通す、琴糸(シメ)のコト 嶮直角(シメ)三角の勾股(シメ)に對して一番に長き邊(シメ)のコトを云ふ 嶮半弦の月、片われ月のコト。
けん(絃) 嶮琴に張られてある糸、即ちつる糸のコト 嶮總て樂器に張(シメ)れてある糸のコトを云ふ。
けん(眩) 嶮太陽の光線、即ち日光(シメ)まばゆきコトを云ふ。
けん(街) 嶮みえはる。てらふ。ほこるコト 嶮品物を賣(シメ)りに行き歩くコトを云

ふ。

けん(鉗) 嶮鼎(シメ)の左右についてある、み。鼎の把(シメ)り手 嶮轉じて君主を輔佐(シメ)する重臣、即ち朝廷の大臣のコトを云ふ。
けん(嶮) 嶮欠(シメ)てるコト、かけてあるコト 嶮輕卒(シメ)からはずみ。そそつかしきコトを云ふ。
けん(嶮) 嶮ちりれる毛。ちりれ毛 嶮軟(シメ)らかき毛のコト。
けん(嶮) 嶮ちんばのコト 嶮忠實(シメ)なるコト 嶮なやむ。なんざする 嶮おこりたかふるコト 嶮ぐぐ。にぶきコトを云ふ。
けん(嶮) 嶮腰に着(シメ)る衣物、即ち袴(シメ)のコト 嶮ちむ、ちかむ。
けん(嶮) 嶮正しき言葉(シメ)、即ち忠言(シメ)云(シメ)難(シメ)きコト、言葉道の拙(シメ)なきコト、即ち、ごもるコトを云ふ。ごもりコト。
けん(嶮) 嶮人跡(シメ)の名所、即ちかた 嶮かつ 嶮ゆだねる。まかす。
けん(嶮) 嶮ゆがむ。まがる。かがまる 嶮まく。わにする 嶮まきもの 嶮書物を數(シメ)ふるに用ゆる語。
けん(嶮) 嶮勢(シメ)ひ。勢力 嶮骨を折(シメ)て

けん 嶮、倦、倦、嶮、嶮、嶮、嶮、嶮、嶮

けん 嶮、現、現、嶮、嶮、嶮、嶮、嶮、嶮

身体(シメ)が疲(シメ)れる 嶮拳(シメ)に通す、握(シメ)りたる手、こぶし。「になる」
けん(倦) 嶮うむ。つかれる。あきる。いや
けん(嶮) 嶮仲のよろしきコト。れんごるなるコト 嶮慎(シメ)み深(シメ)きさまを云ふ語。
けん(嶮) 嶮圓き形、即ち丸 嶮まわる。めぐる 嶮盤(シメ) 嶮獄屋(シメ) 嶮圓き形を云ふ
けん(嶮) 嶮美しきかほつき、やさしきかほつき 嶮轉じて素直(シメ)なる。やさしきまよふ意より轉じて、圓き形の人物(シメ)、即ちまげもの。
けん(嶮) 嶮圓き形を爲せる箱、即ち曲物(シメ)のコトを云ふ。
けん(嶮) 嶮美しきかほつき、やさしきかほつき 嶮轉じて素直(シメ)なる。やさしきまよふ意を表す語。
けん(嶮) 嶮介(シメ)の名、になのコト 嶮虫が身体(シメ)を輪の如く曲(シメ)て、屈(シメ)行く状を云ふ。
けん(嶮) 嶮しるしの札(シメ)、即ちわりふ、切手(シメ) 嶮契(シメ)ふ。約束。
けん(嶮) 嶮はげむ。つまむ 嶮身軀(シメ)の健全(シメ)なるコト。
けん(嶮) 嶮みるコト、察するコト 嶮面會(シメ)する。あふ 嶮あらはれる。知られてる 嶮目の前(シメ)。ありのまゝ。まのあたり。

けん(現) 嶮低(シメ)くして嶮(シメ)しき山 嶮支那に在る有名な山の名。
けん(現) 嶮太陽(シメ)が見(シメ)はれてるさ云ふ意より轉じて、光り輝(シメ)やくコト 嶮明(シメ)なるコト。
けん(現) 嶮すり石のコト。
けん(現) 嶮介(シメ)の名、しりみ。
けん(現) 嶮出てる目、即ちでめ 嶮めすみみ。うかひ見る。
けん(現) 嶮かく。かゝる。かゝつてる 嶮遠くはなれる。へだたる。
けん(現) 嶮かしこきコト 嶮すぐれて智慧(シメ)のあるコト 嶮秀(シメ)でたる人のコトを云ふ。
けん(現) 嶮けんそんの、けんにて、へりくだる 嶮謹みふかきコト。
けん(現) 嶮すこやかなるコト 嶮つまきコト、たつしや、さかんなる。
けん(現) 嶮つるぎ 嶮小銃(シメ)の尖(シメ)に附てる針(シメ)の如く尖(シメ)りたる及物 嶮昆虫の尻(シメ)に附てる針(シメ)の細く尖(シメ)れるもの、總稱。
けん(現) 嶮物の重(シメ)さをはかる器、即ち秤(シメ) 嶮秤のおもり 嶮物事を始末(シメ)する力 嶮けんしき、いきほひ。
けん(現) 嶮あがた 嶮郡及び市を以て組織

けん 驗、間、拳、乾、隄、蘭

けん(驗) 圖、間、拳、乾、隄、蘭
されたる行政(ギ)上の區域(ギ)のこ
を云ふ、即ち愛知縣(ギ)か、長崎縣(ギ)かの
如し。
けん(驗) 圖藥や祈禱(ギ)などのしるし、
即ち効能(ギ)ありさま、やうす、正しく
しらべるこト。
けん(間) 圖柱と柱の間を云ふ、物の長さ
を量(ギ)るに用ゆる語にて、六尺を一間
とす、あひだ、すさま。
けん(拳) 圖手を握(ギ)りたるこト、即ちこ
ぶし、一種の遊戯にして、二人以上の
人が、手又は指にて、一定したる種々の
形を表して、勝負(ギ)を決するもの、藤
八拳、ジャン拳など種々あり、
けん(乾) 圖易の算木(ギ)の面に、表はれ
たる卦(ギ)の名にて、天の象(ギ)を云ひ
て、天子(ギ)世の中に名の表はれ、發達
(ギ)する運氣(ギ)のこトを云ふ、又た
勢の強くして徳の高きこトを云ふ、天
のこト四方角の名にて戌亥(ギ)の間即
ち西と北との間を云ふ、
けん(隄) 圖動物の筋肉(ギ)の兩端にある
白き部のこトを云ふ、極めて強くして、
其の尖端(ギ)は骨に附着する、俗に云ふ
すじのこト、
けん(蘭) 圖まゆ(ギ)まゆより引き出したる

けん 胸、胸、喧、喧、顯、鳴、喧

けん(胸) 圖まげゆし、眼がくらむ、眼(ギ)
み合す、めくばせする、明(ギ)かなる。
あざやかなる、おこななき、やさしき
こト。
けん(胸) 圖胸を照(ギ)りてあたりかき
こト、春(ギ)の季、云
けん(喧) 圖太陽の照(ギ)りてあたりかき
こト、春(ギ)の季、云
けん(喧) 圖胸を照(ギ)りてあたりかき
こト、春(ギ)の季、云
けん(喧) 圖胸を照(ギ)りてあたりかき
こト、春(ギ)の季、云
けん(喧) 圖胸を照(ギ)りてあたりかき
こト、春(ギ)の季、云
けん(喧) 圖胸を照(ギ)りてあたりかき
こト、春(ギ)の季、云
けん(喧) 圖胸を照(ギ)りてあたりかき
こト、春(ギ)の季、云
けん(喧) 圖胸を照(ギ)りてあたりかき
こト、春(ギ)の季、云
けん(喧) 圖胸を照(ギ)りてあたりかき
こト、春(ギ)の季、云

けん 設、箝、兼、兼、兼、兼、兼、兼、兼、兼

けん(設) 圖馬の種類の名其の毛色の黒く
線(ギ)を呈せる馬、
けん(箝) 圖器具の名銅(ギ)にて製せられ
たる銚子(ギ)のこトを云ふ、鼎(ギ)の
一種其の脚(ギ)のなきもの、石(ギ)を打
(ギ)きて鳴る聲、
けん(兼) 圖一種の樂器の名、土を燒きて
製せられたる物にて吹きて鳴すもの其
の形は尖(ギ)のまがりて底(ギ)の平(ギ)
くなれるものにて丁度(ギ)錘(ギ)の如
き製を呈す又たの名をつちぶえと云ふ
けん(兼) 圖かたきこト、引き寄せるこト
引きつけるこト、
けん(兼) 圖はさむ、はめる、しめる、さざ
す、くびかせのこト、
けん(兼) 圖抜き取る、引き取る、
けん(兼) 圖水草の名、おき、荻、のこト、
ひめよしのこトをも云ふ、
けん(兼) 圖五穀(ギ)の實生(ギ)のよるし
からぬこト、轉じて食物の足らぬこト
不満足なるこト、
けん(兼) 圖快(ギ)きこト、満足なるこ
ト、正しき誠(ギ)の心、
けん(兼) 圖にくむこト、うらむこト、い
やがるこト、さらふこト、うたがはし

けん 愆、鈴、牽、獻、献、遣

けん(愆) 圖あやまち、しそんじ、惡(ギ)き
流行病のこトを云ふ、
けん(愆) 圖精神の爽(ギ)かなるこト、心
地のよろしきこト、ゆつたりとせる
こト、くつろぐ、
けん(鈴) 圖錠(ギ)のこト、犁(ギ)の大小
るもの、車の心棒(ギ)にはめられてあ
るくさびのこト、
けん(牽) 圖引きばる、引く、引きよせる、
つれゆく、つながらる、物を引きばるに
用ゆる具、即ちひき繩(ギ)引きつな、
けん(堅) 圖かたきこト、かたまるこト、
物がたきこト、總てかたき物を云ふ、
久(ギ)しき、強し、
けん(獻) 圖まらする、たてまつる、進む
進上する物、かしこきこト、又ばか
しこき人、
けん(献) 圖前條に同じ、
けん(躡) 圖遠路(ギ)を歩いて足のつかれ
痛(ギ)むこト、足に出來(ギ)る腫(ギ)の
こトを云ふ、
けん(遣) 圖使(ギ)にやる、つかはす、お
くる、あたへる、やる、特に葬儀(ギ)に
對して君主より下し賜(ギ)はりたる物

けん 嗽、嗽、嗽、嗽、嗽、嗽、嗽、嗽、嗽、嗽

けん(嗽) 圖口中の左右の頬(ギ)の裏の凹
(ギ)んでる部(ギ)を云ふ、轉じて飲食
物を口中に含(ギ)むでるこト、満足が
らぬ、へりくだる、
けん(嗽) 圖糸を二條(ギ)より合せて織り
たる布(ギ)のこトを云ふ、即ち二千織(ギ)
のこト、
けん(嗽) 圖はれかへる、をどり上る、速
(ギ)やかなる、早きこト、
けん(嗽) 圖みめよきこト、麗(ギ)しく美
しきこトを云ふ、
けん(嗽) 圖車に掛(ギ)て置く幕(ギ)のこト
即ち幌(ギ)のこト、
けん(嗽) 圖叱(ギ)る、責(ギ)る、たしなめ
るこトを云ふ、
けん(嗽) 圖壘(ギ)を練(ギ)り固(ギ)めて拵
(ギ)らへたる器物、即ちすえ物のこト、
瓦(ギ)のこト、軍隊の左右兩翼(ギ)
のこトを云ふ、明(ギ)なるさま、轉じ
て物事を十分に推察(ギ)するこトを云
ふ、
けん(嗽) 圖うかがひて探(ギ)り知るこト、
うかがふこト、うかがひ知るべく出掛

けん 件、虔、欠、研、儉、險、六五一

けん(件) 圖たごへるこト、なぞらへる
こトを云ふ、
けん(件) 圖くだり、わかち、分つ、區別す
る、ことごら、こ、異(ギ)なれる物事
を數(ギ)ふ語、
けん(虔) 圖つしむ、うやまふ、堅(ギ)く
るしきこト、かたきこト、極(ギ)めて正
しき狀(ギ)を云ふ、無理に取る即ち奪
(ギ)ふ、人をむごたらしく殺害するを
云ふ、
けん(虔) 圖缺(ギ)に同じ、かけるこト、不
足してあるこト、精神つかれて大なる
呼吸(ギ)を爲す即ちあくびをするこト
あくび、
けん(研) 圖まぐこト、みがくこト、學問
に精を出すこト、きわむ、視(ギ)に通ず
すすり石(ギ)のこト、
けん(儉) 圖つづまやかなるこト、即ちけ
んやく、足らぬ、けはし、
けん(險) 圖けはしきこト、おそろしきこ
ト、あやふきこト、
けん(險) 圖鳥の名、ほととぎす、
けん(險) 假令ば五軒(ギ)をかぞふるに
云ふ語、假令ば五軒(ギ)か、十軒(ギ)か香雪
軒(ギ)か香軒(ギ)かの如し、家號(ギ)か、
雅號(ギ)か、かの下に附け加える語、

けん 軒、元、原、現、支、幻、滅、巖、源

けん (軒) 圖車のコト、**家の橋(支)**、**轉じて家(元)**のコト、**窓(源)**のある長き廊下(加) **坐敷(現)**のおはしまに張る板の稱、**高くなれるさま**を云ふ、**げん(元)**、**圖物事の初め**、**即ちれも**、**か(源)**、**暦(加)**の第一の日、**即ち元日(現)**の改(支)たりたる、**其の第一**年のコトを云ふ、**げん(原)**、**圖平(支)**かにして、**廣き土地**、**即ち**はら**みなも**と、**ごだい**、**げん(現)**、**圖現在(支)**の現にて、**其の場**に在るコトを云ふ、**うつつ**、**まぼろし**、**或る語の上に冠(支)**せて、**其處(加)**に在るコトを表はすに用ゆる語、**即ち現金**さか、**現物さか**の如し、**げん(支)**、**圖くるき色**のコト、**天上**のコト、**おおくふ**かきコト、**極めて細**かきコト、**不思議なる動き**の**ごも**と、**ごだい**の**ご**、**げん(幻)**、**圖うつつ**、**まぼろし**、**げん(滅)**、**圖へる**コト、**へらす**コト、**げん(巖)**、**圖きびしき**コト、**おこ**そかなるコト、**極めて正しき**コト、**げん(源)**、**圖ごだい**、**みなも**と、**根本(加)**の**ご**、**川の水**などの**流れ**出る**其のもの**と、**間斷(支)**なく**流れ**ゆく**水の有様(加)**

けん 驟、波、彦、懸、晴、詭、駢、駢、道

けん (驟) 例は源々として流るなど、**げん(源)**、**圖馬の一種**、**かげうま**、**げん(波)**、**圖水の低(支)**に**流れ**行く**状(加)**を云ふ、**轉じて**涙(支)の**落(加)**る**状(支)**を云ふ、**木の葉**などに、**宿(支)**れる**露(加)**の**落る**状を云ふ、**げん(彦)**、**圖ひこ**、**即ち**男子(支)と云ふコトを、**賞(加)**めたゞえて云ふ語、**才德(支)兼備(加)**せる紳士(支)の**コト**を云ふ、**げん(懸)**、**圖善美(支)**なる**コト**、**慎(支)**み**深(加)**き**コト**、**丁寧(支)**なる、**げん(晴)**、**圖不時の災厄(支)**に**罹(加)**りたる人、**又**は**慶(加)**なりたる人を、**訪(支)ひ慰(加)**むる**コト**、**げん(詭)**、**圖(加)**に通ず、**山**や**崖**など**の高(支)**くして**けはしき**コトを云ふ、**又**は**高く**けはしき、**げん(駢)**、**圖俚言**、**即ち**こざわざ、**げん(駢)**、**圖虫の名**、**いもり**の**コト**、**形の大なる**スツボン**の**コト、**げん(道)**、**圖**高くして**非常**に**峻(支)**しき**山**の**コト**、**峻(支)**しく**時(加)**へてる**山**の**峰**、**山**や**峰**などの**峻しく**時へてる**状**を云ふ、**げん(駢)**、**圖器具の名**、**こしき**、**げん(道)**、**圖道(支)**に通ず、**むかふる**コト

けん けんぬ 駢、駢、六五二

この物この事など、**云ふ意**を表はす語、**例**令は**道般**など、**人**が**兩手**を**下に**突きて、**たどり**行く、**即ち**は**ふ**コトを云ふ、**けん(駢)**、**圖**しほの**コト**、**しほ**から**き**コト、**灰汁(支)**の**コト**、**けん(駢)**、**圖**厳に通ず、**いかめ**しき**コト**、**おこ**そかなる**コト**、**うやま**ひ、**ついで**しむ**コト**、**か**しこ**まつ**て**る**コトを云ふ、**けん(駢)**、**圖**消埃、**圖**物の**取り**別け**少**き**コト**を云ひ表はす語、**けん(駢)**、**圖**甚だ**愛(支)**する、**けん(駢)**、**圖**險、**圖**道などの**けわ**しくして**其の中(支)**の**さま**き**コト**、**けん(駢)**、**圖**物事の**あや**ふく**おそ**る**しき**コトを云ふ、**道路(支)**の**けわ**しき**コト**、**性質(支)**の**ね**じけた**る**コト、**けん(駢)**、**圖**検案、**圖**しらべ、**考え**容子(支)を**しら**べ**る**コト、**けん(駢)**、**圖**檢按、**圖**しらべ**る**コト、**けん(駢)**、**圖**原案、**圖**曾議に上りたる**最初**の**議案(支)**の**コト**を云ふ、**けん(駢)**、**圖**易、**圖**むつかしき**コト**、**さま**しき**コト**、**げは**しき**さ**、**平(支)**か、**けん(駢)**、**圖**健胃、**圖**胃の**膽**の**機能(支)**をたつしやにする**コト**、**けん(駢)**、**圖**權威力(支)の**強**き**コト**

威勢(支)の盛なるコト、

けんいち (縣有) 圖其縣の所有物、**けんいち** (賢友) 圖かしき友だち、**益友**(支) **爲**なる**朋友(支)**、**けんいち** (情憂) 圖うれひあんじる**コト**、**強く心配(支)**する**コト**、**けんいち** (街談) 圖名譽をか**はむ**して、**世の中**にえらばる**コト**、**けんいち** (見一) 圖殊算(支)の語にて、**二術(支)**以上の**わり算**の**コト**、**けんいち** (檢印) 圖買印(支)に對しての稱にして、**しるし**に**捺(支)**す**判**、**即ち**みこめ印の**コト**を云ふ、**けんいち** (見印) 圖檢印(支)に同じ、**けんいち** (牽引) 圖ひきつける、**引き**ませる**コト**を云ふ、**けんいち** (原因) 圖ごだい、**物事**の生じたる**原(支)**、**斯(支)**の如く**爲つた**と云ふ、**其の理由(支)**、**けんいち** (減員) 圖人數(支)をへらす**コト**、**けんいち** (減) 圖胃のはたらきを達者に**する**藥(支)の**コト**、**けんいち** (卷雲) 圖雲の形を云ひ表はす語、**刷毛(支)**の如く**細(支)**く、**幾條(支)**にもなりて**表(支)**はれる**雲**、**けんいち**、**けんいち**

けんいち (支雲) 圖黒き色の雲(支) **雲**の一名、

けんいち (眩暈) 圖めまひの**コト**、**けんいち** (幻影) 圖まぼろし、**うつつ**に**表(支)**はれる**かけ**、**けんいち** (献詠) 圖朝廷(支)に**又**は**神社佛**關などに、**和歌(支)**を**詠(支)**て**差し**上げる**コト**、**けんいち** (建營) 圖建設(支)に同じ、**けんいち** (卷棚) 圖冠(支)の紐(支)の一種にて、**其の内部**につけてあるもの、**けんいち** (支英) 圖冬(支)の**コト**、**けんいち** (眩暈) 圖光(支)り輝(支)やく**コト**を云ふ、**けんいち** (幻妖) 圖おはげ**げ**のもの、**けんいち** (險要) 圖土地の**要害(支)**、**堅固**(支)なる**コト**を云ふ、**けんいち** (顯要) 圖高貴なる**位置**、**けんいち** (權要) 圖權力のある**官吏**、**けんいち** (眩暈) 圖まぶしき**コト**、**まばゆ**き**コト**を云ふ、**けんいち** (檢疫) 圖傳染病(支)の流行を防ぐ**爲**めに、**醫士**及び**官吏**が**其の方**法を講(支)する**コト**、**けんいち** (現役) 圖目下**役目(支)**を現に勤めつつある**コト**、**けんいち**、**けんいち**

けんいち (檢閱) 圖文書の類を、あらため

けんいち (妍麗) 圖美しき**コト**あて**やかな**けんいち (檢疫) 圖傳染病流行の時に、**檢疫(支)**を爲す**役人**の**コト**を云ふ、**けんいち** (現役) 圖現(支)に**刑役(支)**に**服**しつづける**囚人**、**刑事被告**人**に對して**の稱語、**けんいち** (支翁) 圖道具の名にて、**植の頭**(支)を**鐵**にて製したる**大(支)**きな**る**物、**石**を割(支)に用ゆる物、**けんいち** (噴温) 圖あたたかき**コト**、**けんいち** (温器) 圖寒暖計(支)の**コト**、**けんいち** (懸河) 圖水の**流れ**の**早**き**川**の**コト**を云ふ、**けんいち** (權家) 圖勢(支)の**強**き**家**、**身分(支)ある**家柄(支)の**コト**、**けんいち** (縣下) 圖其の縣の**かん**く**わつ**内の**コト**を云ふ、**けんいち** (犬牙) 圖犬の**牙(支)** **物事**の、**く**ひ**ち**が**あ**たる**コト**を云ふ、**けんいち** (現價) 圖現在の**價(支)**、**其の時の**相場(支) **即ち**時價に**同じ**、**けんいち** (現下) 圖目下、**只今**、**けんいち**、**けんいち**

けんか

けんか(原價) 固も直、仕入れたる直段(直)の直段を云ふ。
 けんか(減價) 固直段(直)を安くす、安くしたる直段。
 けんか(詠詞) 固きびしく叱(ヒキ)る。
 けんか(絃歌) 固ニ味線などを弾(ヒキ)て、歌をうたふコト。
 けんか(狷介) 固がんこ(頑固)なる性質。我が意見を、どこまでも主張(ヒキ)して、人に従(ヒキ)はぬコト。
 けんか(硯海) 固硯(ヒキ)の海、即ち硯の水を入れ置くこと。
 けんか(懸界) 固けはしきかけ、けんか(懸界) 固さかひのしきり、けんか(見解) 固文書の意義(ヒキ)の解釋(ヒキ)するコト、自己の見識(ヒキ)を以て、物事を理解(ヒキ)するコト。
 けんか(原稿) 固原(ヒキ)なるべき書き物。したがき、草稿。
 けんか(現行) 固現在に行ひつつあるコト、目下行はれてるコト。
 けんか(健剛) 固身強(ヒキ)の、すこやかなるコト。精神のしつかりしてるコト。
 けんか(喧囂) 固騒(ヒキ)すしきコト、やかましきコト、うるさきコト。

けんか

けんか(堅剛) 固かたきコト、強(ヒキ)きコト、こばきコト。
 けんか(健康) 固身軀(ヒキ)の達者(ヒキ)なるコトを云ふ。
 けんか(堅甲) 固じょうぶなるよろひ。堅(ヒキ)きかいら(貝殼)。
 けんか(權衡) 固秤(ヒキ)の重(ヒキ)さ竿(ヒキ)の直(ヒキ)を云ふ。
 けんか(堅硬) 固かたきコト。
 けんか(兼行) 固二日かかる旅路(ヒキ)を一日にて歩み行く。二日分の仕事(ヒキ)を一日一夜でするコト。
 けんか(乾綱) 固國家の大なるおきて。大切なる國法。
 けんか(軒昂) 固さかんなるコト。ふるひおこるコトを云ふ。
 けんか(權豪) 固權勢(ヒキ)のすぐれてるコト、又は其人。
 けんか(言行) 固言葉と行ひ。轉じて云ふたコトを行(ヒキ)ふコト。
 けんか(懸隔) 固かけはなれるコト、遠(ヒキ)く隔(ヒキ)たつてるコト。
 けんか(劍客) 固劍術(ヒキ)つかひ、けんか(研駁) 固みがきしらべる。十分にあたらめるコト。

けんか

けんか(堅確) 固しつかりせるコト、じょうぶなるコト、たしか。
 けんか(見學) 固研學に同じ。智惠をみがくコトを云ふ。
 けんか(研學) 固學問をへんきようする學問に精を出す。
 けんか(蹇諤) 固正當(ヒキ)なる議論、けんか(減額) 固かさをへらすコトを云ふ、即ち額を減す。
 けんか(嚴格) 固きびしきコト。
 けんか(堅革) 固かたき、なめし皮。
 けんか(顯赫) 固著るしく明かなるコト、分明(ヒキ)なるコト。
 けんか(檢敷) 固しらべて明(ヒキ)かにするコトを云ふ。
 けんか(玄龜) 固毛色の黒き龜。
 けんか(嚴寒) 固きびしきさむさ。寒中のさむさ。
 けんか(支間) 固天。そら、大空。
 けんか(堅艦) 固堅牢なる軍艦。
 けんか(言行) 固一致(ヒキ)云ふコトと行ふコトが一致(ヒキ)するコト、即ち云ふた通りの行を爲す云ふコト。
 けんか(原稿) 固原稿をかか爲めに縦横(ヒキ)に引いてある紙。
 けんか(肩胛骨) 固左右の肩に在る

けんか

けんか(現行犯) 固現に行ひつゝあるか、又は行ひ終りたる際(ヒキ)に、發覺(ヒキ)したる犯罪。
 けんか(原稿料) 固著作(ヒキ)したる原稿の代金(ヒキ)。
 けんか(劍辭) 固紋所の名、かたばみの花辨(ヒキ)の間(ヒキ)に、劍(ヒキ)の先(ヒキ)を挿(ヒキ)みたる模様(ヒキ)を描きしもの、けんか(懸河辯) 固立板(ヒキ)に水を流(ヒキ)す如く、巧(ヒキ)に辯舌(ヒキ)コトを云ふ。
 けんか(現行法規) 固目下行はれつつある法律規則の直段を云ふ。
 けんか(健康診断) 固達者なるか病軀なるかを醫士が診察するコトを云ふ。
 けんか(嫌疑) 固いやがる、さらふ。
 けんか(嚴殺) 固おごそかなる。
 けんか(權宜) 固權勢のある官吏。
 けんか(驗氣) 固醫藥の効の現(ヒキ)はるコト。病氣のなほるコト。
 けんか(險危) 固あぶなきコト。
 けんか(絃妓) 固げいしやに同じ。
 けんか(元氣) 固精神の活動(ヒキ)の盛(ヒキ)けんか、けんき

けんか

けんか(勢) 固盛(ヒキ)なるコト。物事のどだいとなるべき勢の直段を云ふ、精力。
 けんか(原義) 固どだいの意義。
 けんか(建議) 固或る意義(ヒキ)を政府に申し出るコト。會社又は團體(ヒキ)などに、棟主(ヒキ)又は團員が希望を申し出るコト。
 けんか(嫌疑) 固物事のまぎらばしくして定(ヒキ)のつかぬコト。うたがひをかける、うたがはしき。
 けんか(街氣) 固みまびつてみせたがるコトを云ふ。
 けんか(原器) 固同じ、種類(ヒキ)の器物の標準(ヒキ)となるべきもののコトを云ふ。
 けんか(牽牛) 固ヒコ星の直段。
 けんか(權語) 固不正直(ヒキ)なるコト、いつはるコト。
 けんか(減給) 固給料(ヒキ)を減(ヒキ)すコト、給金(ヒキ)を少なくする。
 けんか(檢擧) 固法律の語、罪跡(ヒキ)を調(ヒキ)へ上げるコト。しらべて罪人を見つけ出すコト。
 けんか(嚴禁) 固げんじゆうに禁するコト。堅(ヒキ)くさめるコト。
 けんか(獻金) 固金(ヒキ)を朝廷(ヒキ)又は

けんか

けんか(獻上) 固政府などへ献上するコト。
 けんか(儉勤) 固つづまやかによくつづめるコトを云ふ。
 けんか(獻芹) 固天子に忠義を竭(ヒキ)し奉るコトを云ふ。
 けんか(兼勤) 固一つ以上の任務(ヒキ)を一人にてかたつこむ。
 けんか(現金) 固目下(ヒキ)自身の持つてゐるだけの金錢。掛拂(ヒキ)に對しての稱にて、商品と代金を其場(ヒキ)にて交換(ヒキ)するコト。報酬の多少に依りて、其れだけの仕事(ヒキ)をなすコト。相手の仕打の如何に依りて直ちに其の仕打に對する舉動(ヒキ)を表はすコト。
 けんか(現銀) 固現金(ヒキ)に同じ。
 けんか(檢鏡) 固顯微鏡(ヒキ)に照(ヒキ)して、檢(ヒキ)べるコトを云ふ。
 けんか(牽強) 固道理に合ぬコトを、無理にこじつけるコト。
 けんか(健脚) 固足の達者なるコト。能く道路(ヒキ)を歩むコト。
 けんか(減却) 固へらすコト、すくなくなるコト。
 けんか(研究) 固みがきかわる。
 けんか(元兇) 固甚だしき惡徒。惡徒の頭(ヒキ)の直段を云ふ。

けんき、けんく

けんきより(喰喝) 固口を上へ向けるコト
を云ふ。魚が口を水面に表(ひ)はすコトを云ふ。
けんきよく(蹠調) 固身体(お)をまげてちぢむるコト。
けんきりか(素牛花) 固朝顔(あ)。
けんきあん(建議案) 固建議すべき事實(ひ)の議案(ひ)。「たる人、
けんきしや(嫌疑者) 固うたがひのかかりけんきんきやく(現金客) 固掛客(あ)に對しての語、現金にて品物を買(ひ)て呉れる客。
けんきんしゆき(現金主義) 固永遠の利益を云ふ。に就きては、何等(あ)の考もなく、目前(あ)の利益にのみ心をかたむけるコト。
けんきんせいど(現金制度) 固商家にて取引賣買を、凡て現金にて爲す店則(あ)のコトを云ふ。
けんきんとりひき(現金取引) 固凡て現金にて商業の取引を爲す。
けんきんきやく(現金客) 固道理に副(あ)はぬコトを、副(あ)ふ様にこじつけるコト。
けんき(賢愚) 固馬鹿さ、かしこ、けんき(賢愚) 固めをかけて、さりあつ

けんく

かふ。厚くさりなすコト。
けんくわ(堅果) 固堅(あ)き實(ひ)の果物の(ひ)のこト、假令ば栗(あ)の實(ひ)、クルミなどの類。
けんくわ(現化) 固ゲンケに同じ、即ち神佛(あ)の形を變(あ)て、此の世に現(あ)はるるを云ふ、化身(あ)。
けんくわ(支關) 固支關(あ)の訛、けんくわ(殿料) 固重きつみ。きびしきごがめのコト。
けんくわ(倦臥) 固うみてる、つかれてれるコト。
けんくわ(堅臥) 固かたつくるしくして、官途(あ)へ仕(あ)ぬ人のコト。
けんくわ(懸軍) 固はなれた處に在る軍隊のこトを云ふ。
けんくわ(建勳) 固手柄(あ)をたてるコト功をたてるコト。
けんくわ(賢君) 固すぐれたる君主、けんくわ(嚴君) 固父のこト、けんくわ(嚴訓) 固きびしおしえのこト、けんくわ(元勳) 固國に莫大(あ)の功(あ)のありし人のこトを云ふ。
けんくわ(縣會) 固其の縣の歲入歳出其他の事を相談する議會。
けんくわ(言外) 固言葉(あ)のほか、

けんく、けんけ

けんくわん(縣官) 固其の縣に仕(あ)えてある官吏のこト。
けんくわん(權官) 固權力(あ)の多き官職、又は權力の多き官職に仕(あ)てる役人のこト。
けんくわん(顯官) 固位の高き官職、又は其の官に在る人、けんくわん(兼官) 固二つ以上の官職をかけるコトを云ふ。
けんくわん(殉快) 固キラキラ輝(あ)やいてある有様(あ)を云ふ。
けんくわん(現官) 固現在の役目、現在に仕(あ)てる官職のこト。
けんくわん(支關) 固家の正面(あ)の入口。禪寺(あ)の客殿に入る門のこト。ゆかしき道(あ)に入る端緒(あ)の始(あ)て物事(あ)の始。
けんくわんぼん(支關番) 固取次(あ)をなす書生を云ふ。
けんくわん(縣會議員) 固縣民より選出(あ)されて、其の縣の縣會に列する議員。
けんかしくぶつ(顯花植物) 固植物學上の語、凡て花を開き實(あ)を結び、而して種子(あ)を生ずる植物の總稱(あ)。
けんげ(見解) 固見解(あ)に同じ。

けんけ

けんけい(賢兄) 固同輩を呼ぶに云ふ語、重(あ)に手紙に用ゆ。
けんけい(建溪) 固葉茶(あ)の異名、けんけい(現形) 固現在せる形。形の現(あ)れ知れてるコト。
けんけい(減刑) 固科(あ)すべき刑罰(あ)より輕(あ)くするコト。
けんけい(嚴刑) 固きりばつ。おもきけいばつ。
けんけい(堅勁) 固かたくるしきコト。かたくして強きコト。
けんけい(兼職) 固仲の惡(あ)くなるコト。仲たがひのこトを云ふ。
けんけい(劍戟) 固つるきさほ、けんけい(劍擊) 固つるきを持ちて撃ち合ふコト。
けんげつ(弦月) 固弓張(あ)月、片割月(あ)のこト。
けんげつ(支月) 固陰曆(あ)の九月の別名、けんげふ(檢校) 固徳川時代に言人の物事に、秀(あ)たる人に與(あ)えられたる最上の官名、けんげふ(現況) 固目下のありさま、現在けんげふ(現形) 固現在(あ)の有様、目下の容子のこト、けんげふ(兼業) 固二つ以上の業務(あ)を

けんけ

かれるコトを云ふ。
けんげん(現業) 固現在(あ)に營(あ)なんてる商業。實際(あ)の仕事、けんげん(兼業) 固商法の手を縮(あ)めるコト。數(あ)多く營(あ)んでた、商業をへらすコト。
けんげん(涓涓) 固水のチヨロチヨロと流(あ)る状態(あ)を云ふ、けんげん(拳) 固丁寧(あ)なるさま、つしむさまに云ふ語。物をささげ持つさまに云ふ語。
けんげん(賢彦) 固かしこき人。秀でたる人のこトを云ふ。
けんげん(兼業) 固正直(あ)なるさま、すななる容子(あ)にぶきありさま。たかぶるさま、けんげん(案件) 固しなん、けんげん(權限) 固權利のはんゑ、けんげん(顯現) 固いちじるしくあらはれるコト、けんげん(權原) 固法律上の語、其の人が其れだけの權利を得たる原因(あ)のこトを云ふ、けんげん(献言) 固自己の意見を、上へ對して申し上るコト、けんげん(建言) 固政府に對(あ)して、自己

けんけ、けんこ

の意見を申し述(あ)べる。
けんげん(街言) 固えらばつて云ふ言葉、即ち自慢(あ)の言葉、けんげん(嚴訓) 固嚴貴(あ)に同じ、けんげん(元元) 固人民(あ)のこト、國民のこト、けんげん(建言書) 固建白(あ)すべき事實(あ)を認めたる文書、けんこ(堅固) 固かたきコト、じやうぶなるコト。精神のしつかりしてあるコト、けんこ(眷顧) 固なまげを掛(あ)るコト、ひいきにするコト、けんこ(嚴諭) 固けんじゆにまもるコトを云ふ、けんこ(拳固) 固にきりこふし、けんこ(言語) 固ことば、はなし、けんこ(險語) 固わかりにくき言葉。警語(あ)に同じ、けんこ(原語) 固もその言葉、即ち譯(あ)したる物又は寫したるものなごに對しての稱。外國語のこト、けんこ(鍛工) 固かたなかぢや、けんこ(献貢) 固朝廷に貢物(あ)を献上するコト。神社佛閣に供(あ)へ物をなすコト、けんこ(元功) 固元勳(あ)に同じ、

けんこ、けんさ
 けんこち(元后) 国皇后(カク)に同じ、
 けんこく(建國) 国國を建(ツ)るコト、國の
 基礎(キ)を定(サ)むるコト、
 けんこく(原告) 国法律の語にて、訴を起
 して裁判(サ)を求めたる人、
 けんこく(嚴酷) 固むこたらしきコト、
 けんこく(拳骨) 固にぎりこぶし、
 けんこん(倦困) 固つかれ苦しむ、
 けんごん(現今) 固只今、今の時、
 けんごん(言語學) 固言葉(ゴ)に關する
 規則、其の他言葉の生じたる根本(ゴ)の
 理論(リ)などを、研究(カ)する學問
 けんごん(原告人) 固訴(ゴ)を起
 したる方の人、即ち原告となれる人の
 コト、
 けんごらちふな(源五郎鮓) 固魚の名、近
 江の琵琶湖(ゴ)に産する大なる鮓(ゴ)
 其の大なる物は長さ二尺餘、巾七八寸
 からあると云ふ、首は小さく脊部は薄
 き銀色を呈し、腹は白色を呈す、味極
 (カ)めて善きを以て、頗る賞美さる、
 けんさ(検査) 固委(カ)しく調(サ)へ視る。
 けんざ(驗者) 固所(サ)などを爲す人の
 コト、即ちけんじや、

けんさ(權詐) 固だます、いつはる、
 けんさい(嫌疑) 固思み、きらふ、
 けんさい(賢才) 固智惠のすぐれてゐるコ
 ト、又た其の人、
 けんさい(賢宰) 固賢明なる宰相(ゴ)、
 けんさい(縣債) 固縣にて其縣會の決議を
 經て起す公債(ゴ)、
 けんさい(賢妻) 固かしこき妻、他人の妻
 女のコトを呼ぶ語、
 けんさい(街妻) 固てかけ、めかけ、
 けんさい(幻妻) 固關西地方の方言にて、
 人の妻をのしつて云ふ語、
 けんざい(顯在) 固あらはれてゐるコトを
 けんざい(現在) 固今、目前(ゴ)其
 の者と云ふ意を表はす語、即ち現在の
 兄弟(ゴ)など、
 けんざう(險相) 固つきかほつき、する
 けんざう(險相) 固つきかほつき、する
 けんざう(萱草) 固わすれ草の一名、

けんざう(現想) 固見たる物事に就て、生
 じて來る考(ゴ)のゴト、
 けんざう(建造) 固たてこしらゆ、
 けんざう(險相) 固つきかほつき、おそ
 るしき人相(ゴ)のゴト、
 けんざう(嚴霜) 固寒中のしも、
 けんざう(現象) 固現在にあらはれてゐるあ
 りさま、現在にあらはれる物の形狀(ゴ)
 けんざう(現像) 固現(カ)れたる凡ての形
 (ゴ)を云ふ、
 けんざう(寫真) 固寫真(ゴ)術に依りて、う
 つし取りたる物を云ふ、
 けんざう(理想) 固見たる物の形を云ふ
 けんざう(現想) 固見たる物に就て、生じ
 て來る考(ゴ)、
 けんざい(顯先) 固及(カ)の尖(カ)たる先
 (ゴ)のゴト、
 けんざく(獻策) 固謀(カ)をたてまつる
 コト、
 けんざく(建築) 固はかりコトをたつるコ
 ト、
 けんざく(工夫) 固しらべて其の狀(ゴ)を
 考へる、
 けんざつ(檢察) 固他人の推察(ゴ)と云ふ
 コトを敬(カ)ふて云ふ語、

けんさ

けんさ

けんざつ(減殺) 固すくなくする、へらす
 コト、
 けんざほ(間竿) 固土地の長さ計(カ)る
 竿(ゴ)、一くぎりを一間とせざるもの、
 けんざん(研鑽) 固物事の道理を十分にし
 らるるコト、即ち研究(カ)、
 けんざん(見參) 固面會(カ)する、
 けんざん(乾山) 固ケンザン燈、「き山、
 けんざん(嶺山) 固道のするどく、けわし
 けんざん(檢算) 固かぞへたる高を、再び
 けんざん(減算) 固わり算のゴト、
 けんざん(研鑽) 固學問及び藝術を、みか
 き、さばむるコトを云ふ、
 けんざん(建蓋) 固茶道の語、茶の湯の器
 具の名、天目(ゴ)の一種、
 けんざい(原裁判) 固控訴上告等の場
 合に於て、第一審(ゴ)の裁判又は控訴裁
 判のゴトを云ふ、
 けんざう(建造物) 固地上に建(カ)ら
 れたる家屋(ゴ)、倉庫(ゴ)などのコト
 を云ふ、
 けんざき(帆先船) 固船の一種にて、
 へさきの細く帆の如くに尖(カ)りたる、
 けんざん(乾山燒) 固陶器の名にて、

けんし(賢士) 固かしこき人、
 けんし(繭絲) 固まゆに爲れる糸、
 けんし(絹絲) 固きぬ糸、生糸(ゴ)、
 けんし(犬齒) 固きば(牙)、
 けんし(劍士) 固擊劍家のゴト、
 けんし(檢死) 固死體(ゴ)をあらためし
 けんし(檢視) 固事實(ゴ)を見届く爲めに
 差し向けられたる役人、
 けんし(檢視) 固物事を委しくしらべるコ
 ト、
 けんじ(謙辭) 固へりくだりて云ふ言葉(ゴ)
 けんじ(劍鯨) 固草薙(ゴ)と八咫瓊勾
 玉(ゴ)のゴトを云ふ、
 けんじ(元資) 固だいのもさ、はじめり、
 けんじ(健兒) 固強き人、たつしやなる人、
 けんじ(乾兒) 固子分てした、
 けんじ(嫌辭) 固いみこさば、
 けんし(元子) 固皇太子の御事を申す、
 けんし(元巳) 固陰曆の三月三日のゴト、

けんし(元始) 固物事のおこり、ごだい、も
 さ、はじめりのゴト、
 けんし(原始) 固物事の出來はじめのゴト
 けんし(原子) 固化學の語、元素を指(カ)
 らへたる分子(ゴ)、
 けんじ(現時) 固今の時、目下、
 けんし(幻師) 固魔法(ゴ)を使ふ人、
 けんし(嚴師) 固師匠のゴトを、貴(カ)とび
 て云ふ語、
 けんじ(檢事) 固官名、裁判所に在りて犯
 罪者の犯罪を、先づ檢べて、判事に訟(ゴ)
 を起し、判事に其の犯罪者の刑罰を
 求め合せて刑罰の執行を監督(カ)し、
 及び世の中の安寧(カ)を保つコトを司
 る役人、
 けんし(見識) 固其の人の考へ見込(カ)
 けんじつ(兼日) 固二日かかる事を一日に
 てしあげるコト、
 けんしつ(言質) 固やくそくせし言葉、
 けんしつ(原質) 固ごだいの性質、最初の
 性質のゴトを云ふ、
 けんしつ(原質) 固もごだいの、ごだいの
 性質(ゴ)のゴト、

けんさ

けんし

けんし

けんじつ(兼日) 図日敵を重(シ)ぬるコト、
 けんじつ(現實) 図現在にあらはれてある物のコト、
 けんじつ(實地) 図に在る物、又は實地の容子のコト、
 けんしや(賢者) 図かしこき人、
 けんしや(縣社) 図神社の格式の名、其の縣にて、幣帛(ハギ)を奉(マツ)る神社のコトを云ふ、
 けんしゆ(賢主) 図かしこき主人、
 けんしゆ(元首) 図人民の最上と云ふ義にて、天子の御事を申す、
 けんしゆ(黔首) 図人民のコト、
 けんしゆ(嚴守) 図けんじゆうに守(シ)つてるコト、
 けんしゆ(嚴重) 図重にそむかぬやうにするコト、
 けんしゆ(支球) 図おろ深き正理と云ふコトを云ひ現(マツ)はす語、
 けんしよ(嚴墨) 図きびしき墨、
 けんしよ(券書) 図證書又は手形(マツ)のコトを云ふ、
 けんしよ(原書) 図もこの本(マツ)ほんやくなごを爲したる其のどだい(マツ)の書物、
 けんしん(賢臣) 図賢良なる家來、
 けんしん(縣針) 図筆法(マツ)の名、縦(マツ)に下したる字畫の下の端(マツ)が、恰(マツ)も

けんしん(針の尖) 図如く尖(マツ)てるを云ふ、
 けんしん(檢診) 図病狀(マツ)を醫士が檢(シ)て見るコト、
 けんしん(檢査) 図法律の語、裁判所にて證書類の眞偽(マツ)を取り調(シ)ぶるコトを云ふ、
 けんしん(現身) 図現在の此の身軀(マツ)、
 けんしん(權臣) 図はぶりの甚しく利(マツ)く家來(マツ)のコト、
 けんしん(顯心) 図佛法語八つ地獄(マツ)の一の名、顯心地獄のコト、
 けんしん(欠伸) 図あくびするコト、
 けんじち(源氏打) 図鏡(マツ)の小札(マツ)を一枚(マツ)づつ、上下(マツ)に組(マツ)み合せて編みたる物を云ふ、
 けんじち(元始祭) 図國家の大祭の一、一月の三日に、行はれる年の始めの祭、
 けんじせ(檢事正) 図地方裁判所の檢事の長官、
 けんじつ(現實派) 図哲學の語、實際の物を基礎(マツ)として立てたる意見、説(マツ)のコトを云ふ、
 けんじふ(源氏節) 図俗曲(マツ)の一種、祭文(マツ)の變化(マツ)せるもの、
 けんじま(源氏豆) 図一種の菓子(マツ)、大豆に砂糖の衣(マツ)を掛(マツ)て、紅(マツ)

けんじち(健勝) 図身軀のたつしやなるコト、健康(マツ)のすぐれてるコト、
 けんじち(謙稱) 図へり下りて云ふ、さなへのコトを云ふ、
 けんじち(謙讓) 図ひかへ目にするコト、へりくだるコト、
 けんじち(顯職) 図賞(マツ)さき官職、位の高き役目のコトを云ふ、
 けんじち(減食) 図食物の量をへらすコト、物を少なく食ふコト、
 けんじち(儉蓄) 図節儉と吝嗇、
 けんじち(原子量) 図原子の重さのコトを云ふ、化學上水素(マツ)を一位として、其れに準(マツ)じて、他の原素が、何(マツ)は幾許(マツ)の、比例(マツ)を示したる重量(マツ)のコト、
 けんしん(驗震器) 図地震の強弱(マツ)及び其の性質(マツ)等をはかる器械の名、
 けんしん(見識) 図百動見識のあるやふに見せかける、えらばつてみせる、たかぶる、
 けんじち(檢事局) 図裁判所内に在りて、檢事の詰り居る局、
 けんじち(檢事長) 図控訴院の檢事の長官、
 けんじち(檢事總長) 図大審院(マツ)の檢事の長官の名、

けんし

けんし

けんし

けんじち(健勝) 図身軀のたつしやなるコト、健康(マツ)のすぐれてるコト、
 けんじち(謙稱) 図へり下りて云ふ、さなへのコトを云ふ、
 けんじち(謙讓) 図ひかへ目にするコト、へりくだるコト、
 けんじち(顯職) 図賞(マツ)さき官職、位の高き役目のコトを云ふ、
 けんじち(減食) 図食物の量をへらすコト、物を少なく食ふコト、
 けんじち(儉蓄) 図節儉と吝嗇、
 けんじち(原子量) 図原子の重さのコトを云ふ、化學上水素(マツ)を一位として、其れに準(マツ)じて、他の原素が、何(マツ)は幾許(マツ)の、比例(マツ)を示したる重量(マツ)のコト、
 けんしん(驗震器) 図地震の強弱(マツ)及び其の性質(マツ)等をはかる器械の名、
 けんしん(見識) 図百動見識のあるやふに見せかける、えらばつてみせる、たかぶる、
 けんじち(檢事局) 図裁判所内に在りて、檢事の詰り居る局、
 けんじち(檢事長) 図控訴院の檢事の長官、
 けんじち(檢事總長) 図大審院(マツ)の檢事の長官の名、

けんじち(健勝) 図身軀のたつしやなるコト、健康(マツ)のすぐれてるコト、
 けんじち(謙稱) 図へり下りて云ふ、さなへのコトを云ふ、
 けんじち(謙讓) 図ひかへ目にするコト、へりくだるコト、
 けんじち(顯職) 図賞(マツ)さき官職、位の高き役目のコトを云ふ、
 けんじち(減食) 図食物の量をへらすコト、物を少なく食ふコト、
 けんじち(儉蓄) 図節儉と吝嗇、
 けんじち(原子量) 図原子の重さのコトを云ふ、化學上水素(マツ)を一位として、其れに準(マツ)じて、他の原素が、何(マツ)は幾許(マツ)の、比例(マツ)を示したる重量(マツ)のコト、
 けんしん(驗震器) 図地震の強弱(マツ)及び其の性質(マツ)等をはかる器械の名、
 けんしん(見識) 図百動見識のあるやふに見せかける、えらばつてみせる、たかぶる、
 けんじち(檢事局) 図裁判所内に在りて、檢事の詰り居る局、
 けんじち(檢事長) 図控訴院の檢事の長官、
 けんじち(檢事總長) 図大審院(マツ)の檢事の長官の名、

けんじち(健勝) 図身軀のたつしやなるコト、健康(マツ)のすぐれてるコト、
 けんじち(謙稱) 図へり下りて云ふ、さなへのコトを云ふ、
 けんじち(謙讓) 図ひかへ目にするコト、へりくだるコト、
 けんじち(顯職) 図賞(マツ)さき官職、位の高き役目のコトを云ふ、
 けんじち(減食) 図食物の量をへらすコト、物を少なく食ふコト、
 けんじち(儉蓄) 図節儉と吝嗇、
 けんじち(原子量) 図原子の重さのコトを云ふ、化學上水素(マツ)を一位として、其れに準(マツ)じて、他の原素が、何(マツ)は幾許(マツ)の、比例(マツ)を示したる重量(マツ)のコト、
 けんしん(驗震器) 図地震の強弱(マツ)及び其の性質(マツ)等をはかる器械の名、
 けんしん(見識) 図百動見識のあるやふに見せかける、えらばつてみせる、たかぶる、
 けんじち(檢事局) 図裁判所内に在りて、檢事の詰り居る局、
 けんじち(檢事長) 図控訴院の檢事の長官、
 けんじち(檢事總長) 図大審院(マツ)の檢事の長官の名、

けんし

けんし

けんし

けんす、けんせ

けんすち(間敷) 一間以上の長さのコト

けんすち(現敷) 図現在のかず、
けんすち(支水石) 図磁石(磁石)

けんせい(賢聖) 図此の世、今の世、
けんせい(賢聖) 図飛び離(か) れてかしく
く正しき人のコトを云ふ、

けんせい(憲政) 図憲法を基礎(き) として
行ふ政治(せい) 。

けんせい(牽制) 図引きつけて、他の方面
に手を出し能(よ) はぬやふにするコト
を云ふ、

けんせい(建制) 図もうけつくる、
けんせい(堅請) 図むりにたのむ、
けんせい(堅脆) 図かたきコトと、もうき
コトを云ふ、

けんせい(研精) 図精(せい) を出す、
けんせい(權勢) 図つよいきほる、
けんせい(嚴制) 図けんじゆふなるおきて
のコトを云ふ、

けんせい(充實) 図虫の名、ハンミヨウの
コト、毒(どく) 虫なり、
けんせい(嚴正) 図取り分け正しきコト、
けんじゆふなるコト、

けんせい(現世) 図此の世、今の世、
けんせい(減税) 図租税(そ) を減(げ) すコ
トを云ふ、

けんせい(見世) 図器具の一、一本又は二
けんせ、けんた

けんせ

けんせち(言笑) 図物語をしながら、笑(わら) ぶコトを云ふ、
けんせち(減少) 図へらしてすくなくする
へつて少(すく) なる、
けんせち(顯赫) 図いちじるしきでがら
めだちたるいさほし、
けんせき(拳石) 図圓い小き石、
けんせき(堅石) 図其の質の別してかたき
石、假令(たと) ば青石(せい) の類、
けんせき(誣責) 図さがめしかるコト、
吏(し) の過失(と) があるをさがめ叱るコト、
けんせき(言責) 図云ひし事に就ての責任
意見(い) など為すべき責任あるコ
トを云ふ、
けんせき(嚴責) 図きびしく叱るコト、き
びしくせむるコト、
けんせき(原籍) 図本籍の科ト、
けんせき(支石) 図支水石(し) の略、
けんせつ(懸絶) 図甚だしく隔(か) たつて
るコト、かけはなれて、
けんせつ(建設) 図こしらへもうく、つく
りなふるコト、
けんせつ(原説) 図最初の意見(い) 、ごだ
いの説(せつ) のコト、
けんせつ(言説) 図云ふコト、其の人の意
見(い) のコト、

けんせ

けんせん(建溪) 図最もうらやましき、甚
だうらやましきコト、
けんせん(歎然) 圖不十分、不満足なる有
様を云ひ表はする語、
けんせん(喧然) 圖やかましきさま、かま
びすしきさまを云ふ、
けんせん(健全) 圖健康に同じ、
けんせん(儼然) 圖いかめしきさま、おこ
そかなる形(か) 。

けんせん(泣然) 圖涙(なみ) の下る状(じ) を
けんせん(源泉) 図水の湧き出るみなもこ
川の水源(すい) 。

けんせいせつ(原生説) 図學問上の語にて
地球上に現存せる、森羅萬象(ばん) の
物體(ぶたい) は、其の根原(こん) は一つであ
るが、幾百萬年(いく) を経(へ) た中に、斯(か) ば
多数の物に變じた云ふ學説(がく) のコトを
云ふ、
けんせいとう(憲政黨) 図政黨の名、
けんせんがく(健全學) 圖健康を保(たも) つ
コトを研究(けん) する學問、即ち衛生學
(えい) のコト、
けんせいちんどう(牽制運動) 圖戰術の語
にて、敵の勢力を削(く) り取るべく爲め
に他方面を攻(せ) るが如くにみせかけ

けんそ(儉素) 図つましきコト、けんやく
なるコト、
けんそ(嶮岨) 図けはしきコト、
けんそ(元素) 図ごだ、れもごおこり
原子(げん) に同じ、
けんそ(減租) 図年貢(ねん) を、へらすコト、
租税(そ) を下げるコト、
けんそ(倦怠) 図つかれて休息(き) す
るコトを云ふ、
けんそ(賢息) 図かしく息子(こ) 。

けんそ(檢束) 図取り締(ぢ) りて勝手(た) っ
に物事をなさしめざるコトを云ふ、
捕(と) へて自由(じゆ) をきかきぬ、
けんそ(眷屬) 図やから、一家族、
けんそ(原則) 図動かすべからざる規則
確定(けい) せる規則、
けんそ(還俗) 図俗にかへるを云ふ意に
て僧侶(そう) が俗人(じ) となりたるコトを云ふ、
けんそ(謙遜) 図へりくだる、
けんそ(玄孫) 図ひいまた、
けんそ(現存) 図現在に其の物のあるコ
トを云ふ、
けんそ(減損) 図へるコト少なくなるコ
けんたい(見臺) 図器具の一、一本又は二
けんそ、けんた

本(ほん) の短(み) かき柱を立て、其上に板(いた) を
斜(か) に置きたる物、書物(しょ) を載(の) せて
見る用に供す、
けんたい(倦怠) 図うみおこたる、
けんたい(謙退) 図へりくだるコト、
けんたい(兼帶) 図かけもちの科ト、
けんたい(兼題) 図即題(即) に對しての稱
にて、四五日前に出して置きて味(あじ) し
むる和歌の題、
けんたい(減退) 図けんじりぞくと云ふ
意にて少(すく) なるコト、
けんたい(原態) 図もとのかたち、最初の
ありさま、
けんたい(現態) 図現在のありさま、
けんたい(現代) 図此の時代、今の時代、
けんたい(獻替) 図君主に善きコトを云ひ
出行(い) 、惡(わる) きコトをしりぞけるコト、
けんたい(乾道) 図此の上もなき正しき道
即ち天道、君臣の大義、
けんたい(萱堂) 図北堂に同じ、他人の母
を敬(や) かもて云ふに用ゆ語、
けんたい(現當) 図佛法の語、現代さ未來
(り) のコトを云ふ、
けんたい(萱堂) 図人の母をうやもつて云
けんたい(劍道) 図擊劍(けん) に同じ、
けんたい(險道) 図けわしき道路、
けんた

けんちち(權道) 図はかりごと、
けんちち(縣道) 図國道の次(つ) に位する
道路の名にて、其の縣(けん) の縣廳(けん) 所在
地より、縣下の主要なる町村(ち) 、及
び隣縣(りん) へ達する道路、
けんたつ(顯達) 図いちじるしく發達(はつ) するコト、
けんたつ(高位高官) 図のぼる、
けんたつ(嚴達) 図きびしきおたつし、
けんたん(健談) 圖食物を多分に食ふコト
を云ふ、
けんたん(檢斷) 図しらべて斷定(だん) を下
けんたん(元旦) 図元日(げん) のコト、
けんたん(嚴探) 図きびしくさぐるコトを
云ふ、
けんたん(嚴談) 圖きびしき、かい合、
けんちちしや(劍道者) 圖劍術(けん) に達
してゐる人の科ト、
けんちちちち(見當違) 図かんがえぞこ
なひ、あてはづれ、轉じてやぶにらみ
の科トを云ふ、
けんちちしち(現代思想) 圖現時の社會
に於て、一般(いつ) に優(よ) れて、勢力のあ
る各人の考(こう) 、世の中の有様のか
たむき
けんちちしてち(現代思潮) 圖同上、
けんち(軒軒) 圖あがりさがり、まさりお
けんた、けんち

けんち

けんち(硯池) 硯すずりの、うみ、
 けんち(堅緻) 堅固(カチ)して、こまかきコトを云ふ。
 けんち(検地) 凡て土地の反別(カク)を、しらべはかるコト。
 けんち(軒柱) 図まざるさおさる、
 けんち(見地) 図みごころ(カ)みこみをつけたごころ。
 けんち(縣治) 図其の縣の政事(カ)を、
 けんち(堅持) 図我が意見を變(カ)ぜぬコト、精神の堅固なるコト。
 けんち(絹袖) 図又た絹袖とも書す、支那製の織物の名、柞蠶(カ)糸にて織りたる袖(カ)の如きもの。
 けんち(建築) 図家などを建(カ)てこしらえるコト。
 けんち(縣知事) 図官名にて、内務大臣の指揮(カ)命令を受け、其の縣内の行政(カ)事務を執る長官。
 けんち(献茶) 図抹茶(カ)をたてて献上するコト。
 けんち(賢女) 図智恵のある女。
 けんち(顯著) 図いちぢるしきコト、大にあらはれるコト。
 けんち(謙恕) 図へりくだりて、物事に

けんち、けんつ

けんち(原書) 図もその著作物、即ちほんやく物に對して云ふ語にて、原本(カ)原書(カ)に同じ。
 けんち(支猪) 図いのこのコト。
 けんち(堅陣) 図要害堅固なる陣屋(カ)險地に敷かれた陣屋。
 けんち(寒帳) 図帷(カ)をか上げ上るコト、又たかかげてある帷。
 けんち(現場) 図其の場(カ)其の場所のこト。
 けんち(巻糲) 図支那料理の名、牛蒡(カ)人参豆腐などを油にて焙(カ)めてすまし汁(カ)せし物、即ちけんちん汁のこトを云ふ。
 けんち(原住) 図現在に住まつてゐる住所のこトを云ふ。
 けんち(縣廳) 図縣の行政事務(カ)を取り扱(カ)ふ役所。
 けんち(建築學) 図建築の事に就きて、其の工夫智識及び學理(カ)などを研究(カ)する學問。
 けんち(建築學) 図建築物に同じ、たてもののこト。
 けんち(劍突) 図俗語にて口小口(カ)のこトを云ふ。

けんつ

けんつ(てつばち) 図附鐵砲(カ)圖武器の一種にて、歩兵の用ゆる小銃(カ)即ち小銃の尖(カ)に劍(カ)を附けたるもの。
 けんつ(檢定) 図取り調(カ)べて物事の可否(カ)を定(カ)めるコト。
 けんつ(獻呈) 図けんじようするコト、たてまつるコト。
 けんつ(賢弟) 図智恵のある弟(カ)我(カ)より年下(カ)の同輩(カ)を呼ぶに用ゆる語。
 けんつ(支鳥) 図鳥の名、つばめ。
 けんつ(元嫡) 図本妻のこト。
 けんつ(消滴) 図しづく(カ)あまだれ。
 けんつ(賢哲) 図智恵のある優(カ)れたる人のこト。
 けんつ(弦鐵) 図樹の隅(カ)より隅へ渡してある細き鐵(カ)の棒。
 けんつ(圖點) 図印(カ)としてつける圓點(カ)のこト、文章中に於て特に注意を引くべく爲めに、其の右の側(カ)につける標(カ)。
 けんつ(檢點) 図線(カ)を引く時に其の引き初めさなる點。
 けんつ(喧傳) 図やかましく、うわさするコトを云ふ。
 けんつ(檢定試驗) 図良不良(カ)を

けんさ

けんさ(健闘) 図すばしゆつこくたかふ、よくたかふコト。
 けんさ(嚴冬) 図つらき寒さ。
 けんさ(支冬) 図ふゆのこト。
 けんさ(軒騰) 図高くへ上る。
 けんさ(幻燈) 図うつつし藪。
 けんさ(舷頭) 図舟のふち、ふなべり。
 けんさ(嚴冬) 図寒中のこト(カ)きびしきさむさのこトを云ふ。
 けんさ(減等) 図等級を軽くするコト。
 けんさ(原動) 図器械(カ)などの動き始(カ)むるこト又は動く其の基礎(カ)の

けんさ、けんな

けんさ(言動) 図云ふこトを爲すこト、即ち言行のこトを云ふ。
 けんさ(減等) 図法律の語、罪人の罪(カ)を輕(カ)くするこト。
 けんさ(健徳) 図すぐれたる徳(カ)徳望のすぐれまされるこト。
 けんさ(賢徳) 図かしこき徳。
 けんさ(謙徳) 図へりくだるこト、即ち物事にえらばらぬゆかしき性質のこトを云ふ。
 けんさ(乾徳) 図天子の御高徳の事を申けんさ(見徳) 図みくじ(カ)事にのぞみて可否(カ)を判断(カ)してみるこト、例ば見徳をみるなど。
 けんさ(怪食) 図邪怪(カ)なるこト(カ)しわきこトを云ふ。
 けんさ(儉飽) 図蕎麥(カ)切(カ)。
 けんさ(絹綴) 図生糸(カ)の太(カ)き物にて織りたる絹織物、即ち袖(カ)の類を云ふ。
 けんさ(權内) 図權利を行ひ得らるるはんのこトを云ふ。
 けんさ(圈内) 図わくの内(カ)云ふ意にて範圍内(カ)のこトを云ふ。
 けんさ(險阻) 図險阻(カ)に同じ。

けんな、けんは

けんな(劍難) 図及物にて切らるる災(カ)のこト。
 けんな(嚴) 圖きびしき、おごそか。
 けんな(賢人) 図かしこき人、智恵(カ)のある人、さかしき人。
 けんな(堅忍) 図物事に、能く堪(カ)え忍(カ)ぶこトを云ふ。
 けんな(兼任) 図本官(カ)の外に、尙ほ官職を奉じてるこト。
 けんな(現任) 図目下その職に在るこトを云ふ、現在に仕へてる官職。
 けんな(建仁寺垣) 図京都の建仁寺にて、始(カ)めて作り出したるより此の名ありき云ふ、竹垣(カ)の一種、磨(カ)きたる竹を二つに割りて、其の皮の方を外(カ)になる様にして並(カ)べし垣(カ)なるこト。
 けんな(賢能) 図智恵があつて、物事の十分に出来るこト。
 けんな(支能) 図支那に同じ。
 けんな(劍香) 図東京地方の俗語にて、あぶなきこトを云ふ。
 けんな(犬馬) 図犬と馬と(カ)犬や馬の働(カ)と云ふ意より、轉じて自分が他人の爲めに、世話(カ)するこトを、へり下つ

けんは

けんは(兼取) 図あしなへ、ちんば、
けんは(現場) 図現在の場所、目の前、其の
物事のありたる場所。
けんば(支藩) 図大なる桶(け)の口にて、
竹を通(せ)し、火事場で水を運(か)ぶも
の、水を盛りて擔(か)ぎ行くもの、
けんばい(献盃) 図盃をさすコト、即ち酒
(け)をすすむるコト。
けんばち(健忘) 図能く物忘(け)をする
コト。甚だしく忘れる。
けんばち(銀録) 図銀(け)のきつさきのコ
トを云ふ。
けんばち(言貌) 図言葉(け)づかいと顔
(け)づきのコトを云ふ。
けんばく(建白) 図政府に對して自己の意
見を、認(め)めて差し出すコトを云ふ、
けんばく(呖陌) 図田甫の細き道、
けんばく(堅白) 図意見に反對するコトを
云ふ語。
けんばく(言駁) 図云ひ破る。
けんばつ(圍發) 図漢字の四隅(ま)に附け
てある圓(ま)印(ま)の、四聲を表はすもの、
けんばつ(嚴罰) 図をもきけいはつ、
けんばふ(憲法) 図おきてきそく、國家が
政事を行ふ方針(け)を定めたる根本の

けんは、けんひ

けんはふ(兼備) 図併(け)せ持つ、かれそなは
れる、即ち文武兼備など、
けんひ(元妃) 図皇后陛下の御事を申す、
けんひ(原被) 図法律の語にて、原告(け)と
被告(け)とのコト、
けんひ(嚴備) 図きびしきそなへ、けんじ
ゆうな備(け)す、
けんひ(支徴) 図おくゆかしきコト、
けんひ(倦疲) 図甚だしく身軀のつかれる

けんひ、けんふ

けんひ(媼美) 図うるはしく美しきコト、
美人のかほかたちの、うつくしきコト
を云ふ、
けんひ(原徴) 図極(け)めて小さき、
けんひ(疹癩) 図肩の甚だしくこりて強
(け)く痛むコトを云ふ、
けんひつ(健筆) 図文字を達者に書くコト
を云ふ、能筆(け)す、
けんひつ(減筆) 図田畑(け)等の筆數(け)を
を少(け)くするコト、
けんひん(献品) 図品物を献上するコト。
献上する品物のコト、 「る品物、
けんひん(現品) 図現在の品物、實際に在
けんひより(堅氷) 図あつく張りたる氷、
けんひより(懸氷) 図水の水(け)りてたれ
下つてゐるもの、つらら、
けんひきやう(顯微鏡) 図眼にて見る能
(け)はぬ細き物を見る眼鏡(け)のコ
トを云ふ、
けんひそち(原被双方) 図原告と被告
の双方のコトを云ふ、
けんふ(絹布) 図絹糸にて織(け)りたるも
の、即ち絹織物、
けんふ(賢婦) 図かしこき女、
けんふ(銀舞) 図歌の代(け)りに詩(け)を吟

六六六

じ、銀(け)を振て舞(け)コト、

けんふ(嚴父) 図父のコト、
けんふ(絳服) 図うつくしき衣物、晴れ
衣のコトを云ふ、
けんふく(元服) 図昔時、男子が十六歳に
なれば前髪(け)を取りて髪を一人前の
鬘(け)に結びし儀式のコトを云ふ、
けんぶつ(見物) 図見世物を見るコト、物
見(け)遊山(け)のコト、
けんぶつ(現物) 図現品に同じ、
けんぶん(原文) 図もこの文章、即ち翻譯
(け)などに對しての語、
けんぶんいつち(言文一致) 図文體の一種
物語の如くに綴(け)りし文章、
けんぶん(見聞) 図見るコト、聞くコト、
轉じて智惠(け)を發達さす意、
けんぶん(檢分) 図しらべみるコト、官吏
が立ち合て物事をあらためるコト、
けんぶん(言文) 図言葉と文章、 「器械、
けんぶち(驗風器) 図風の強弱をはかる
けんぶじん(賢夫人) 図かしこき奥方(け)の
コトを云ふ、 「ト、
けんぶじん(賢婦人) 図かしこき女子のコ
けんぶつじん(見物人) 図見世物を見る人
けんべい(權柄) 図いきはる、えらばる、
りきむ、
けんふ、けんへ

けんべい(現兵) 図其處に居合したる兵士

けんべい(源平) 図源氏と平氏のコト、轉
じて白と赤とのコト、又た轉じて二組
(け)に分れて勝敗を争(け)ふコトに云
ふ語、
けんべい(硯屏) 図硯(け)の前に立てて飾
(け)るをを防ぐ具にて、木又は金(け)にて作
られたる、小さき衝立(け)の如きもの
けんべい(憲兵) 図兵種の一、軍隊に對す
る警察事務を取り扱ふ兵士、
けんべん(權變) 図臨機應變(け)の處置
を爲すコトを云ふ、
けんべいつら(權柄面) 図えらばつてゐる面
(け)づきのコト、 「やな足、
けんべ(健歩) 図善く歩(け)くコト、たつし
けんべ(賦政) 図あせまみそのコト、轉じ
て小作人(け)のコト、 「語、
けんべ(賢母) 図人の母をやもふて云ふ
けんべ(嚴母) 図母のコト、 「語、
けんべ(原簿) 図もこの帳面、基礎(け)と
なるべき帳面のコト、臺帳、
けんぼち(權謀) 図正しからざるばかりに
さ、其の時に臨(け)みて、たつる策略(け)
(け)のコト、
けんへ、けんは

けんぼち(支謀) 図大なるばかりこと、ふ

けんぼち(見本) 図みほんのコト、 「本、
けんぼん(原本) 図だれもさ、もこの
けんぼん(献本) 図書物を献上するコト、
献上する書物、
けんぼん(絹本) 図生糸(け)にて織りたる
物、即ち絹地(け)のコトを云ふ、
けんぼち(權謀家) 図ばかりことなめぐ
らすにたくみなる人、
けんま(研磨) 図みがくコト、學問(け)に
精(け)を出すコト、
けんま(肩摩) 図肩(け)と肩とのすれ合ふ
コトにて、雜踏(け)、人込(け)になさぬ米、
けんまい(支米) 図白米(け)になさぬ米、
即ちくろ米のコト、
けんまい(現米) 図其の處に在る米、現在
の米、ふち米のコト、
けんは、けんま

六六七

けんま、けんめ

けんま(剣毒) 図おそろしき顔つき
けんま(肩摩) 図往來(けんま)の
けんめ(賢明) 図賢明なる評判、
けんめ(賢命) 図目上の人の命令のコト
けんめ(懸命) 図いのちがけ、
けんめ(賢命) 図きびしき命令、きびし
けんめ(賢明) 図すぐれてかしこきコト
けんめ(言明) 図言葉にて云ひ表(けんめ)し
けんめ(賢命) 図目上の人の命令のコト
けんめ(賢命) 図賢明なる評判、
けんめ(賢命) 図目上の人の命令のコト
けんめ(賢命) 図賢明なる評判、
けんめ(賢命) 図賢明なる評判、

けんめ、けんる

けんめ(減耗) 図へつて少(けんめ)なくなる
けんめ(賢命) 図賢命なる評判、
けんめ(賢命) 図賢命なる評判、
けんめ(賢命) 図賢命なる評判、
けんめ(賢命) 図賢命なる評判、
けんめ(賢命) 図賢命なる評判、
けんめ(賢命) 図賢命なる評判、

けんる、けんれ

けんら(賢郎) 図さかしき人、
けんら(元老) 図國家に大勳のある、年
けんら(元老) 図國家に大勳のある、年
けんら(元老) 図國家に大勳のある、年
けんら(元老) 図國家に大勳のある、年
けんら(元老) 図國家に大勳のある、年
けんら(元老) 図國家に大勳のある、年

けんれ、けんわ

けんれ(賢良) 図賢良なる評判、
けんれ(賢良) 図賢良なる評判、
けんれ(賢良) 図賢良なる評判、
けんれ(賢良) 図賢良なる評判、
けんれ(賢良) 図賢良なる評判、
けんれ(賢良) 図賢良なる評判、
けんれ(賢良) 図賢良なる評判、

けんわ、古、故、姑、話

けんわ(健腕) 図腕(けんわ)の働(けんわ)きの達
けんわ(健腕) 図腕(けんわ)の働(けんわ)きの達
けんわ(健腕) 図腕(けんわ)の働(けんわ)きの達
けんわ(健腕) 図腕(けんわ)の働(けんわ)きの達
けんわ(健腕) 図腕(けんわ)の働(けんわ)きの達
けんわ(健腕) 図腕(けんわ)の働(けんわ)きの達

けんわ、古、故、姑、話

けんわ(健腕) 図腕(けんわ)の働(けんわ)きの達
けんわ(健腕) 図腕(けんわ)の働(けんわ)きの達
けんわ(健腕) 図腕(けんわ)の働(けんわ)きの達
けんわ(健腕) 図腕(けんわ)の働(けんわ)きの達
けんわ(健腕) 図腕(けんわ)の働(けんわ)きの達
けんわ(健腕) 図腕(けんわ)の働(けんわ)きの達

こころが、こころき
 顔(物)のコトを云ふ、
 ころかん(攻陥)固敵城を攻めて、おとし
 入れるコト。城を攻め落す、
 ころかん(横杆)固てこはかりの棹(サ)の
 コトを云ふ、
 ころがん(厚顔)固あつかましきコト。面
 (サ)の皮のあつきコト、
 ころがん(鴻雁)固鳥の名、がん、
 ころがくし(工學士)固工科大学を卒業せ
 る者へ、授(サ)くる學位、
 ころかくる(甲殻類)固其の外皮が堅く
 して、かうらの如き形を爲したる魚類
 の總稱、假令ば蝦(サ)、蟹(サ)の類其れな
 り、
 ころかいじやう(公開狀)固他人に云ひ送
 るべき事柄を書面にして送らるに、世
 間(サ)の人々にも知らせるやふにして送
 るコトを云ふ、假令ば新聞紙に記載し
 て知らずさか、廣告をするなど、
 ころき(口器)固口の中に在る食物をこな
 す具、舌(サ)齒(サ)など、
 ころき(興起)固さかんに起るコト、心に
 感じて奮發(サ)するコト、
 ころき(口氣)固こころふんに同じ、即ち物
 の云ひやう。云ひぶり、
 ころき(後騎)固後(サ)より來る騎兵、後

こころき
 に在る騎馬の士、
 ころき(厚誼)固したしき交(サ)あつき
 情(サ)のこトを云ふ、
 ころき(合議)固二人以上の人が、相談(サ)
 して定めたる議論、
 ころき(公儀)固おもむき(サ)政府のこト
 ころき(洪基)固帝王の事業(サ)の、ごだ
 いのこトを云ふ、
 ころき(候騎)固騎馬の斥候、
 ころき(恒儀)固常の、しきたり、
 ころき(公議)固世の中の議論、即ち輿論
 (サ)のこトを云ふ、
 ころき(鴻義)固大なる義理。大なる意味
 (サ)のこト、
 ころき(恆求)固永(サ)き間、變(サ)らざ
 るこト。永くつゞく、
 ころき(購求)固かふ、もさむ、
 ころき(講究)固學問をばけみ、きわむ
 るこト。研究(サ)、
 ころき(溝渠)固みぞ、
 ころき(薨去)固三位以上の官位に在る
 人の死去のこトを云ふ、
 ころき(薨御)固親王方及び大臣などの
 死去を申す語、
 ころき(公許)固公(サ)の許(サ)、官府
 の許可(サ)のこト、

こころき
 ころきん(拘禁)固捕えて身軀の自由を束
 縛(サ)し置くコト、
 ころきん(公金)固官府其他公共團體など
 の所有に屬する金錢、
 ころきん(口吟)固詩歌などを唄ふコト、
 即ちくちずさみ、
 ころきやう(興行)固芝居相撲、其他凡て
 見世物を爲すコトを云ふ、
 ころきやう(後宮)固皇后、皇妃の、住はせ
 たも御殿(サ)、
 ころきやう(口供)固罪人の罪狀を書き取
 るコト。聞き取り、
 ころきよく(攻玉)固學問をして智慧を研
 き、德行を進(サ)むるコト、
 ころきせいど(合議制度)固二人以上の人
 が相談したる上にて、萬事を行ふた
 きてのこトを云ふ、
 ころきよりぶつ(公共物)固公衆の所有に
 屬(サ)する土地又は建物(サ)、
 ころきよろしん(公共心)固公衆の利害(サ)
 の爲めに、力(サ)を盡(サ)さんとする
 高尚(サ)なる心、
 ころきよりじぶ(公共事業)固公衆の利
 益を圖(サ)る爲めに、設置なす凡ての事
 業のこト、
 ころきせいたい(合議政體)固議會の決議

に依りて、國政を定むる政事の仕方(サ)
 のこトを云ふ、
 ころきやうぶつ(興行物)固芝居相撲見世
 物の類を云ふ、
 ころきやうげん(興行權)固或る物に就き
 て興行し能ふ權利のこト、故に、他人が
 其の物を興行せんとする場合には、一
 時其の權利を譲り受ればならぬ、
 ころきさいばん(合議裁判)固二人以上の
 判事が立ち會の上にて公判を爲し、互
 ひに意見を述べ合ふて、其の上にて判
 決を下す裁判のこト、我國現今の制度
 にては、區裁判所以上の裁判所は、皆合
 議裁判所なり、
 ころきよりくみあひ(公共組合)固公共心
 に富(サ)である人が、公衆の利益を圖
 (サ)らんとして、設(サ)けられたる組合、
 ころきよりだんたい(公共團體)固公共事
 業の爲めに、組織(サ)せし團體、即ち水
 利組合蠶業組合など、
 ころきより(厚遇)固手あつく、さりなしす
 るコトを云ふ、
 ころきわ(後禍)固或る事が原因を爲りて
 後に生じ來るわざわひ、
 ころきわ(紅花)固紅の如く、赤色を呈せ
 る花の總稱、

こころき
 ころくわ(篝火)固かがり火、
 ころくん(功勳)固手柄さ、いさほし、
 ころくん(紅裙)固美しき女(サ)藝妓(サ)の
 コトを云ふ語、
 ころくわい(公會)固をほやけに開く會議
 委しく云へば公衆の傍聴(サ)を許す
 會議(サ)公衆の會合(サ)、
 ころくわい(後悔)固爲したる事柄に就て
 其の非(サ)なる事を、後に至りて悟(サ)
 つて悔(サ)むコト、
 ころくわい(構外)固かまへ外、か、ひ外、
 區域外のこトを云ふ、
 ころくわい(口外)固口より外へ出すこト
 ふ意に、物事を他人に語り聞せるこト
 を云ふ、
 ころくわち(鴻荒)固大むかし、
 ころくわん(後患)固後々(サ)のうれひ、
 ころかん(合歡木)固木の名、れむの
 木のこトを云ふ、
 ころくわいしよ(公會所)固公衆の會合す
 る爲めに、設(サ)けたる建築物、
 ころくわい(公會堂)固公衆の會合に
 供(サ)する爲めの建造物(サ)、
 ころけい(口徑)固凡て筒の如き圓き形状
 (サ)を爲せる物の口の、さしわたしたし
 のこトを云ふ、

こころき
 ころけい(拘繫)固捕らえて、つなぎ置く
 コトを云ふ、
 ころけい(紅圍)固美人の圍(サ)、
 ころけい(公卿)固くげのこト、
 ころけい(虹霓)固にじに同じ、
 ころけい(後繼)固あつぎ又はあごをつ
 ぐ人のこトを云ふ、
 ころけい(後景)固あごのありさま(サ)後の
 方の風景(サ)背景、
 ころけい(肯綮)固筋肉の骨にくつついて
 る部を云ふ(サ)轉じて大切なる、肝要な
 るこトを云ふ、
 ころけい(攻撃)固せめてうつ(サ)人の議論
 をやり込めるこト、
 ころけい(鴻業)固非常なる大事業のこト
 ころけい(興業)固商工業の事業を起すこ
 トを云ふ、
 ころけい(工業)固種々の材料を用ひて、
 有用なる一の物事を製作(サ)する、凡
 ての仕事のこトを云ふ、
 ころけい(貢獻)固貢物(サ)を献上する
 コト(サ)心神を碎(サ)きて、忠實(サ)を
 盡すコトを云ふ、
 ころけい(公言)固匿(サ)し立せず、云ひ
 立つるこトを云ふ、
 ころけい(攻撃軍)固守備軍に對して

の稱にて、進んで敵を攻め立つ軍隊の
 コトを云ふ、
 とうげんじん(後見人) 図未成年者、又は
 治産の禁を受け居る者の一身を保護し
 て、其の人の財産を整理せる人のコト、
 とうげんぢやう(工業場) 図工業に従事す
 る所、職工の仕事や營(けい)なむ所のコト
 仕事場、
 とうげんていし(公權停止) 図或る罪科の
 爲めに、一定の期間内、公權を行(けい)ふ
 事を止(と)られるコト、
 とうげつをしほる(絞膏血) 図他人が心神
 を碎き勞動して得たる利益を、横合(ごう
 けい)より暴力を以て奪ひ取るコトを云ふ
 とうげんがつか(工業學校) 図工業に關
 する學理、及び技術(ぎじゆ)を教(けい)ゆる學
 校の稱、
 とうげいさくぶつ(工藝作物) 図其のまま
 にては、用ひにならず製造し初て用に
 立つ作物を云ふ、
 とうげいさくひん(工藝作品) 図工藝作物
 を用ひて製出されたる物、
 とうげせんしん(攻撃前進) 図軍隊語、
 今まで防備(ぼうえい)の位置(ち)に在りたる
 軍隊が、攻撃に轉(てん)進(しん)んで敵を攻め
 立(た)つるコト、

とうげんはくたつ(公權剝奪) 図重罪の刑
 に處せられたる者が、終身公權を行ふ
 事を禁(きん)せられたるコトを云ふ、
 とうげんかんたくじん(後見監督人) 図後
 見人を更に監督(かんとく)保護する位置(ち)
 に在る人のコト、
 とうご(口語) 図普通一般に使ふ言葉(ご)
 俗語(ご)のコト、
 とうこ(江湖) 図入り江(やま)湖(こ) ①世間(こ
 こ)世の中のコト、
 とうこう(口腔) 図口の中、
 とうこう(鴻溝) 図大なる溝(こう)、
 とうこう(公告) 図世間へ偏(へん)く告げ知
 らすコト、
 とうこう(鴻功) 図大なるてがら、
 とうこん(後恨) 図あさのうらみの、こつ
 てるうらみのコト、
 とうこん(後昆) 図子孫のコト、
 とうさ(拘鎖) 図捕へてつなぐ、
 とうさい(公裁) 図判事が正しく取りさば
 くコト、即ち裁判、
 とうさい(公債) 図政府又は府縣が公(こう)債
 なる費用に充(たく)ふる爲めに、國民より金
 錢を借り入るコト、
 とうさい(後妻) 図後(ご)そひ妻、
 とうさい(口才) 図辯才(べんさい)のコトにて、

巧(こう)みに饒舌(せうじゆ)せるコト、
 とうざり(洪蒼) 図大空(たいくう)碧空(せいこく)、
 とうざり(公葬) 図國家の難事に處して瘞
 (せ)れたる人、又は國家に殊勳(しゆこん)を立
 てたる人の葬儀を、國家の費用にて營
 (けい)むコト、
 とうざり(後裝) 図鐵砲又は大砲の後の下
 の方より彈藥(だんりやく)をつめ込む仕掛(しかけ)
 に爲つてるコトを云ふ、
 とうざり(構造) 図こしらへ方。たてかた
 つくりかたのコト、
 とうざり(構像) 図かんがへ思ふコト ①想
 像(ざう)のコト、
 とうざく(工作) 図こしらへるコト。つく
 るコト ①職工が種々の器具などを拵(こ
 ぎ)へるコト、
 とうざく(告朔) 図又たこくさくとも讀む
 昔時宮中に於て、行はせられたる儀式
 の一の名、月の第一日に、天皇が太極殿
 (たいごくでん)にお出ましあつて、前月中に在
 りし公の事を、告(つ)させらるる式
 とうざん(恆産) 図一定したる財産(ざいざん)の
 コトを云ふ、
 とうざらし(業曝) 図俗語、我の赤恥を世
 間の人々に知られるコト、
 とうざくせん(工作船) 図蒸汽船内に諸種

こうけい

こうけいこうざ

こうざ

六七八

の器械を具へ付けて、軍艦の修繕(しゆせん)
 軍艦内の兵器の修繕、又は水雷(すいらい)敷
 設(せ)つなどに従事する船、
 とうざくぶつ(工作物) 図工業に依りて出
 來上りたる種々の物品、
 とうざくぢやう(工作場) 図種々の器械及
 び器具(ぐ)を製造する所、
 とうざいしやうしよ(公債證書) 図政府よ
 り發行する公債の證據となるべき證書
 とうじ(麴) 図米(こ)を蒸(じゆ)して、上よりモ
 ヤシを撒(ま)りかけ、室(む)に入れて、醗
 酵(こう)させたるもの、麥(むぎ)の實(み)を
 新しくして製したる物を、麥麴(むぎ)とも云ふ、
 とうじ(小牛) 図又た犢(とら)の字をも書く、
 小き牛の子のコト、
 とうじ(候視) 図そつとみる。うかがひて
 見るコトを云ふ、
 とうじ(後肢) 図獸類のあさ足、
 とうじ(公示) 図書き記(き)して、廣く一般
 の人々に知すコト、
 とうじ(公使) 図外交官の職名大使の次ぎ
 即ち外國に駐(ち)まりて、我國を代表し
 て、條約(じやく)の規定に依り、凡ての事
 務を整理する官吏、
 とうじ(公私) 図公事と私事、官吏と個人
 とを云ふコト、

とうし(公子) 図華族の子息、即ちきんた
 ちのコトを云ふ、
 とうじ(公事) 図おほやけのコト ①官府の
 仕事(じ) ②訴訟(しゆん)の事、
 とうじ(工事) 図土木建築(とくちく)の仕事の
 コトを云ふ、
 とうじ(後嗣) 図あさこり、世つぎ、
 とうじ(口耳) 図口と耳(みみ) ①聞きたる
 事を、其のまま云ふコト、
 とうじ(後事) 図のちのコト ①死した
 る後の事、
 とうじ(合祀) 図神佛を合せてまつるコト
 ①一所にして祀(まつ)るコト、
 とうじ(厚酬) 図手厚き禮物、過分(かぶん)
 のむくひ、
 とうじ(惡嫌) 図あだ。かたき、
 とうじ(公式) 図一般に定まりたるおほ
 やけなる儀式 ①數學の語にて、一般に
 應用する計算(けいさん)の仕方(かた)のコトを
 云ふ ②國家の定めたる儀式のコト、
 とうじ(後室) 図身分ある人の後家(ごけ)
 のコトを云ふ、
 とうじ(膠漆) 図ニカワミ、ウルシのコ
 ト ①轉じて極(ごく)めて親密(しんみつ)なるコ
 トを云ふ、
 とうじつ(口實) 図云ひわけ、云ひまへ、

とうしふ(攻習) 図一心不乱に、學藝の稽
 古(きこ)を爲すコト、
 とうしや(巧者) 図物事(ぶつじ)技藝(ぎぎ)等に
 十分熟達(じゆつたつ)せる人、
 とうしや(叩謝) 図頭を下げて、謝(しゃ)する
 コトを云ふ、
 とうしゆ(公主) 図支那にて、皇族の姫君
 (ひめぎみ)のコトを云ふ、
 とうしゆ(攻守) 図攻(こう)するコトと、守(まも)
 り(まも)るコトと、
 とうじゆ(鴻儒) 図學問の優(う)れて出來
 る大學者のコトを云ふ、
 とうしち(叩首) 図頭を下に、すりつけて
 禮を爲すコトを云ふ、
 とうじゆ(口授) 図口(くち)すから教(けい)ゆる
 コトを云ふ、即ち口頭にて教ふコト、
 とうしよ(公署) 図官衙。役所、
 とうしよ(荀且) 図かりそめ、
 とうしん(紅唇) 図紅(べに)を付けて赤く染
 めたる唇(くちびる)のコト、
 とうしん(功臣) 図手柄(てがら)のある家來、
 とうしん(後進) 図先進に對しての稱、後
 より進み行くコト ①後より位置を得ん
 だて、學藝を勵むコト、又は其の人のコ
 ト、
 とうしん(恆心) 図つねの心。正しき心の
 コトを云ふ、

こうざん

こうざん

こうざん

六七九

こうし
 こうしん(後身) 図生(ワ)れ變(ハ)つて來りたる身云ふコト。
 こうじん(後塵) 図人が走り、馬が駈り、車か通りたりして、其の後に揚る塵(ワ)のト。
 こうじん(後人) 図後の世の人。
 こうじん(紅塵) 図雜沓(ワ)繁華(ハ)の爲めに、立ち登る塵(ワ)のト。轉じて都會のトを云ふ。
 こうじやち(口舌) 図言葉にて物事の取次を爲すコト。興行物に就て、其の事實(ワ)の大略(ワ)を、客に云ひ聞すコト。
 こうじやち(厚情) 図深きなまげ、懇(ワ)なる心のトを云ふ。
 こうじやち(攻城) 図城を攻める。
 こうじやち(興獎) 図はげまして、勉強させるコトを云ふ。
 こうじやち(工廠) 図工作を爲す役所。仕事場のトを云ふ。
 こうじやち(恒常) 図ふだん。つれ。あたりまへ。普通(ワ)。
 こうしやく(公爵) 図爵位の第一位に在るコト。
 こうしやく(侯爵) 図爵位の第二位に在る名稱。
 こうしやく(公衆) 図天下の人々、世間一般の人々のト。
 こうしよち(公證) 図官府又は公共團體に於て爲したる證據。個人の爲したる證據にあらすして、公(ワ)に認めたる證據。
 こうしよち(工匠) 図大工(ワ)建具屋などの職のト。
 こうしよち(紅晶) 図紅色(ハ)を呈せる水晶、即ち緋水晶のト。
 こうしよち(洪鐘) 図特別に大なる釣鐘(ワ)のトを云ふ。
 こうしよち(紅色) 図染色の名、桃色。
 こうじよく(垢辱) 図はづかしめ。
 こうしよく(公職) 図官府の職務、其他凡ておほやけの職務のト。
 こうしんしよ(興信所) 図商業者の爲めに取引先の人(ハ)の財産の有無(ハ)、信用の如何等を、極めて秘密に且つ確實に、調べ併せて報知するを業とせる所。
 こうしくわん(公使館) 図公使が其の事務を執(ワ)る館(ワ)のト。
 こうじやち(口上言) 図興行物にて、口上を客に云ふ役の人。
 こうじやち(攻城砲) 図最大最強(ワ)の大砲にて、城壁(ワ)要塞(ワ)などを破壊(ワ)する爲めに用ゆる、大砲のトを云ふ。
 こうじやち(口上看板) 図興行物の荒筋(ワ)を記して、興行所の表に掲げ出す看板のト。
 こうじよつしげん(口述試験) 図問題を、文章に認めず、直ちに言葉にて答ふる試験のト。
 こうしよち(公證人) 図公吏の名、金錢の貸借(ワ)契約、遺言(ワ)等に關する、民事上の件に就きて、其の人の依頼に依り、公正證書を作成する人。
 こうしよち(公證役場) 図公證人が公正證書を作成する事務を扱ふ役場。
 こうしくわいしや(合資會社) 図二人以上の人が出資して、設立せる會社のト。但し其の社員は無限責任社員と有限責任社員より成り立つものとす。
 こうしよち(攻守同盟) 図國と國とが、商工業(ワ)其他諸種の利益の關係上(ワ)よりして、同盟を結び、共同盟國の一國が、同盟外の國と、萬一戦端を開きたる場合には、一方の同盟國は、其の國を助けて、敵國と同じく開戦する云ふ盟(ワ)のト。
 こうす(働) 圖働造(ワ)をする。
 こうす(働) 圖働從三位以上の位のある人の死する。

こうし

こうし

こうす

働

六八〇

こうする(洪水) 図大水のト。
 こうせい(公正) 圖極(ハ)めて正(ハ)しきコト。嚴格(ワ)なるコト。
 こうせい(攻勢) 圖攻め立つる勢(ハ)の。攻めんとする勢。
 こうせい(恆星) 圖一定の位置に在りて、動かざる星の稱。
 こうせい(控制) 圖おさへこめる。さりしまる。氣をつける。
 こうせい(構成) 圖組(ハ)み立てるコト。しらへるコトを云ふ。
 こうせい(後世) 圖のちの世(ハ)。
 こうせい(哄笑) 圖大口(ハ)を開きて笑ふコト。馬鹿笑ひのトを云ふ。
 こうせい(垢笑) 圖馬鹿にして笑ふ。あざけるコトを云ふ。
 こうせい(功績) 圖てがら、いさほし。
 こうせい(口跡) 圖言葉(ハ)づかひ。話(ハ)しつぶり。こわい。
 こうせい(口舌) 圖しゃべるコト。
 こうせい(巻読) 圖世上のうばさ。
 こうせい(功拙) 圖上手(ハ)下手(ハ)。
 こうせい(公設) 圖官府又は市町村より、設立したる物、即ちおほやけに設立せし物のトを云ふ。
 こうせん(後先) 圖あせむ。ちかむ。
 こうせん(公選) 圖をはやけの選舉、一般の人々より選舉される。
 こうせん(口錢) 圖凡て賣買(ハ)の世話をして、受取る手数料。
 こうせん(浩然) 圖おちつき拂(ハ)つてる状態に云ふ話。廣々(ハ)としたる状態に云ふ語。
 こうせん(公然) 圖物事を匿(ハ)し立てせぬコト。物事の世の中に知れ渡りたるコトを云ふ。
 こうせん(紅) 圖赤色を帯びたる口唇(ハ)のト。
 こうせん(攻戰) 圖攻(ハ)て戦ふ。敵城を攻めるコト。此方(ハ)より敵を攻めつけるコト。
 こうせん(簞笥) 圖魚を捕ふる具、籠(ハ)の一種、ふせいのコト。
 こうせい(合成金) 圖二種以上の金屬が合して、一の金屬と成りたるもの、假令ばアルミニウム(ハ)の類の如きを云ふ。
 こうせい(紅石英) 圖礦物の名、石英(ハ)の紅色(ハ)を爲せし物。
 こうせん(ひみつ) 圖公然秘密。圖其の事實(ハ)は内證(ハ)にしてあるやうなれども、已(ハ)に世間へ知れ渡(ハ)つてゐる云ふコト。
 こうそ(貢租) 圖みづぎのもの、租税(ハ)の、素をよくす。智より先に徳を研げよと云ふ故事。
 こうそ(控訴) 圖始めの裁判に不服を云ひ出でて、再度(ハ)の裁判を上級裁判所へ願ひ出るコト。
 こうそ(公訴) 圖法律語、私訴に對する稱にて、檢事(ハ)が犯罪人の裁判を判事に求(ハ)むる手續(ハ)のトを云ふ語にて、公訴あるにあらざれば、裁判所は犯罪人の裁判を爲すコトを得ざるものとす。
 こうそ(拘束) 圖拘禁(ハ)に同じ。
 こうそ(控憲) 圖物事のせわしきコト。差し追(ハ)れるコト。
 こうそ(冠賊) 圖あだ。ぞくぞく。
 こうそ(公則) 圖國家又は官府、又は公共團體等にて、定めたる公(ハ)けなる規則のトを云ふ。
 こうそ(紅染) 圖紅色(ハ)に染むるコト又は染めたる物。
 こうそ(髮剃) 圖俗人(ハ)が佛道(ハ)に入る證據(ハ)として、僧侶が其の人の髮を切るまねを爲す、一種の儀式。僧侶が佛門の徒弟(ハ)と爲りし者の、髮

こうす

こうせ

こうそ

六八一

こうそ、こうた

を刺(さ)り、又は死者の髪を剃るコトを云ふ。
 ころそいん(控訴院) 地方裁判所の上位に在る裁判所にて、地方裁判所の判決に對し、不服ある者の控訴を受けて、其を更に審理(しんり)して判決する裁判所のコトを云ふ。
 ころそまかん(控訴期間) 國法律上の規定語にて、民事の訴訟に在りては、其の判決文の送達ありし日より、一ヶ月間、刑事に在りては判決の言渡(ごんた)ありし日より、五日間内とす。故に此の期間内に控訴を爲さざる時は、其の判決は確定す。
 ころた(小唄) 短(みづか)き俗歌。「こた、ころた(興替) 國榮(か)えるさ、衰(やぶ)ふころた(後退) 國後の方へ引き下る。習ひし學藝などを忘れる。
 ころた(厚待) 國でいれいなるさりあつかひのコトを云ふ。
 ころた(後代) 國後の世。
 ころた(洪大) 國素晴(すは)しく大なるコト。非常に大きなコト。
 ころた(浩蕩) 國廣々(ひろ)とした容子を云ひ表はす語。
 ころた(公道) 國正(ただ)しき道理。私有

こうた

に屬(ぞ)せざる一般の道路。
 ころた(洪濤) 國大なる波。あら波のコトを云ふ。
 ころた(勾當) 國第一番の位に在る内侍の科ト。眞言宗にて寺院の雜務(ざむ)を執れる人を云ふ。
 ころた(強盜) 國亂暴(らんぼう)なる所爲をなして、他人の財物(ざいぶつ)を取る悪人のコトを云ふ。
 ころた(公盜) 國官府又は吏員などの、自己の取り扱ふ職權を濫用(らんよう)して、自己の利益を圖(か)る、佞姦(べいげん)の徒を嘲(あざ)りて云ふ語。
 ころた(革葺) 國又たカワ葺とも云ふ、山中の日照(に)のよき場所に在る、落葉(らく)の中に生ず、大小種々あるも、其傘(かさ)は芳香(かほ)を放つ、之を乾かせば染革(ぞ)の如き黒色(くろ)に變ず、食用となるも、味苦(あじ)ければ食はぬ方よし。
 ころた(口達) 國官省(くわんしやう)より言葉にて、物事を云ひ開すコト。
 ころた(政奪) 國攻め奪ひ取る。
 ころた(小説) 國話曲(わが)の中の主眼なる、名文句を取りて、一つの曲(うた)と爲したるもの、稱。

こうた、こうち

ころた(浩歎) 國甚だしく歎(なげ)くコトを云ふ。
 ころた(口談) 國物語を爲すコト、話(わ)をするコト。
 ころた(口端) 國口のはた、
 ころた(後段) 國一番後(ご)の段。後(ご)のくだりのコト。
 ころた(巧智) 國才智のたくみなるコト。智恵の勝(か)れてある人、
 ころた(拘置) 國罪人などを捕えて、留(とど)め置くコト。
 ころた(工緻) 國細かき細工(さいず)。
 ころた(小路) 國狭(せま)き道路。
 ころた(碁打) 國碁(碁)を好む人、碁碁に達して人な云ふ。
 ころた(甲蟲) 國翅(つば)の堅くして、こらの如く爲つてる虫類のコトを云ふ。
 ころた(卸飯) 國こぼせ、又たぼたんのコトを云ふ。
 ころた(紅茶) 國一種の茶にて、支那に産する物、之(ち)を煎(い)すれば、紅色の汁を出す、砂糖を入れて之を用ゆる、味よし。
 ころた(口陳) 國言葉(ことば)にて、申し述(た)るコト。
 ころた(後陣) 國本隊の後の方に在る陣

六八二

こうち、こうた

所(しよ) ころづめの軍隊。
 ころちん(垢塵) 國こもくあか、
 ころちやち(工場) 國工業場に同じ、
 ころちゆち(口中) 國口のなか、
 ころちよく(誦尊) 國恥をかくコト、はづかしめを受(う)くるコト。
 ころちくばり(業突張) 國俗語にて道理に合の強情(こつじやう)を張る人。我れの恥を世間へ撒き散(ま)す。業病にて死に切れぬコト。
 ころち(公廷) 國裁判所にて、罪人を取り調(しら)べる處、即ち公判廷。
 ころち(後庭) 國宮中の奥殿、
 ころち(拘泥) 國か、はるコト、なづむコトを云ふ。
 ころち(工程) 國仕事(しごと)のほどあひのコトを云ふ。
 ころち(公定) 國一般の人々が、一樣に守るべき規定のコト。
 ころち(後凋) 國最後にしぼむコト。我れ一人忠節(ちゆうせつ)を守(まも)つてゐるコトを云ふ。
 ころち(紅潮) 國女子の顔の赤くなるコト。太陽の光りの爲めに、赤く見ゆる海の色、
 ころち(公田) 國官府又は公共團體の所

こうち、こうた

有する田地(ち)のコト、
 ころち(功田) 國昔時朝廷より功勞ありし人に賜はりし田地の稱、
 ころち(公轉) 國天文学の語、太陽を始め其の他の天体が、自己の軌道(きだう)を一週するコト。
 ころち(後天) 國生れてから後に其の人の一身に、受け得たる善惡凡ての事柄のコトを云ふ、假令ば學藝に達し技術に長じたるも後天、又た負傷(おひ)等の爲めに、不具(ふぐ)と爲り、或は悪感化を受け、悪人と爲りたるも亦た後天なり、
 ころち(後天的) 國後天に依りて、物事の出来上りたる状(じやう)を云ひ表はす語。
 ころち(甲鐵艦) 國敵艦と對抗(たいかう)するに十分なる武器の備へある軍艦、戰艦艦のコト。
 ころち(公定相場) 國取引所にて定めたる相場のコト、
 ころち(後圖) 國あまの考へ。後の爲めのはかりごとのコト、
 ころち(鴻圖) 國大なる、ばかりご、
 ころち(訴訟) 國のしり怒(いら)る、
 ころち(叩頭) 國頭を下げて、禮を爲すコトを云ふ、

こうち、こうた

ころち(購得) 國求(もと)めて、自分の所有物となすコトを云ふ。
 ころち(購讀) 國書籍又は新聞などを求(もと)めて讀むコト、
 ころち(公德) 國世間一般の人々に對して、行ふ徳義(とくぎ)のコト、
 ころち(功德) 國てがらさ、徳行さ、
 ころち(紅暎) 國紅の色を呈せる朝日(あ)の日のコトを云ふ、
 ころち(購讀者) 國書籍新聞雜誌等を求めて讀む人、
 ころち(口頭試験) 國くちさきのころち(口頭契約) 國口やくそくのコトを云ふ、
 ころち(口頭辯論) 國公判廷に於て、辯論を爲し、又は事實を申し立つるコトを云ふ、
 ころち(構内) 國區域内かまへ内、
 ころち(後難) 國後々のわざわひ、未來(こ)の難義のコト、
 ころち(後任) 國前の人の職務を受け次ぐ、又は受け次ぎたる人、
 ころち(公認) 國おほやけに認(し)められるコト、假令ば官府や世間より認められるコトを云ふ、
 ころち(紅熱) 國物体が高度(たうど)の熱

六八三

こらね、こらば

(ア)を受けて、赤色に爲りたるコトを云ふ、

こらねつ(口熱) 口の中の病氣の爲めに、齒齦(ア)などに熱(ア)を有ちて、齒の痛(ア)む病氣、

こらねん(後年) 図すえの年、

こらのち(功能) 図しるし。ききめ、

こらば(詬罵) 図あざけりはずかしむ、ののしりみくびる、

こらは(紅葩) 図赤色を呈せる花、

こらば(工場) 図職工(ア)の仕事(ア)を爲す所。種々の製造場、

こらば(後背) 図うしろ、せなか、

こらば(後輩) 図我より年の若き人のコト。我より學問技藝等の拙(ア)なき人のコトを云ふ、

こらば(紅梅) 図梅の一種、其の花の紅色を呈せる物の稱、

こらば(公賣) 図一般の人々に、現物を示して入札して賣るコト、

こらば(興廢) 図おこるさすたるさ。盛になるさ、おさるふるさのコトを云ふ、

こらば(勾配) 図阪(ア)になつて其の度合のコト。俗語にて、氣轉(ア)目尖(ア)と云ふ意、

こらば(後方) 図後(ア)の方、あごの方、

こらば(口傳) 口口すぎの出来るほどの給料を云ふコト、

こらば(公報) 図官省より國民一般に知らせる事柄。府縣知事が其の管轄(ア)内の住民に通知する公文書、即ち官報の如き物。官吏が職務上關して官府へ發する通知書のコトを云ふ、

こらば(孔方) 図錢(ア)の別名、

こらば(後房) 図女のある部屋(ア)、

こらば(侯伯) 図大名(ア)のコト、

こらば(浩博) 図學問などに精通せるコト。ひろきコトを云ふ、

こらば(紅白) 図赤色と白色と、

こらば(攻伐) 図攻め、うつ、

こらば(公法) 図國家の定めたる法律、即ち國法のコト、

こらば(後半) 図前後に分れたるもの後の半分のコトを云ふ、

こらば(公判) 図豫審(ア)に對する稱にて、法律に觸(ア)たる人の罪狀を、判事が傍聽(ア)を許(ア)して、取調(ア)べるコトを云ふ、

こらば(紅梅色) 図染色の名、紫(ア)がかりたる桃色(ア)のコト、

こらば(紅梅燒) 図一種の菓子、小麦粉と米の粉とを等分に合し水と玉子

こらば(紅帽) 図赤色の帽子、

こらば(紅毛) 図昔時オランダ人を、あざけりて呼びたる語、

こらば(口沫) 図口より出るあわ、

こらば(公民) 図國法を遵守し、租税を納めて働き、生活を爲しつある人民。公民權を有せる人々、

こらば(公民權) 図市町村の住民中にて、公民たる權利のコト、此の權利を得る者は、一家を構(ア)へたる戸主にして、年齢満二十五歳以上の男子にて、二ヶ年以上其の市町村内に住し、直接國稅又は地租を、二圓以上納(ア)めても、のたらざるべからず、

こらば(公務) 図官府の事務(ア)、即ちおほやけの務(ア)、

こらば(小梅) 図小き圓形の實(ア)を結ぶ庭梅(ア)、支那梅(ア)、

こらば(公明) 図正直(ア)にして、明瞭(ア)なるコト、即ち私なくよこしまならざるコト、

こらば(功名) 図手柄(ア)を立てて、善き名を揚(ア)るコトを云ふ、

こらば(台名詞) 図文法上の語にて、

こらば

こらふ、こらふ

こらふ、こらふ

こらふ、こらふ

ち傳説(ア)のコト、

こら(後備) 図本隊の後(ア)にある軍隊即ちあそそなへ。後備役の略、

こら(厚庇) 図親切に世話をなすコト。手あつくかばふコト、

こら(后妃) 図君主の、きさき、

こら(咖啡) 図果實(ア)の一種、熱帶地方に産する木の實(ア)、之を搗(ア)り碎きて、煎(ア)じて用ゆる一種の飲料、苦味あり香氣あり、

こら(後便) 図後(ア)よりの便(ア)、

次(ア)のたよりのコト、

こら(後備兵) 図後備兵のコト、豫備役を終りてより、更に十ヶ年間、服する兵員の名、

こら(業病) 図實(ア)の悪しくして、長引き、人に嫌(ア)はる病氣、

こら(後備軍) 図後備役に編入されてある兵員を以て、編成なしたる軍隊のコト。本隊の後に扣へたる軍隊の稱、

こら(公布) 図政府より國民全軀へふれ知らせるコト、おふれ、

こら(公武) 図公卿と武家(ア)、

こら(興復) 図再び盛大になるコト、再興のコトを云ふ、

こら(口吻) 図物の云ひつぶり。くちこらふ、こらふ

さきのコトを云ふ、

こら(紅粉) 図紅(ア)と白粉(ア)のコト。轉じて化粧(ア)をするコト、

こら(公憤) 図私憤に對しての稱にて、公(ア)なる事に就きて、憤(ア)るコト。假令は輿論(ア)の公憤などの類、

こら(公文) 図官府より發する公(ア)なる文書のコト、

こら(興奮劑) 図衰(ア)えたる精力を奮(ア)ひ起(ア)すの、力のある藥のコト、

こら(公文書) 図官府より發する凡ての書類、

こら(公文式) 図官府より發する公文書類の一定の格式、

こら(公平) 図え、ひいきなきコト、偏頗(ア)なきコト、極(ア)めて正しきコトを云ふ、

こら(買米) 図みつぎの米(ア)、

こら(公評) 図世間(ア)の評判、正しき評判、

こら(口邊) 図口のほそり、

こら(公邊) 図おもてむき。官省のこらへん(後編) 圖書物の前編に對して後の卷(ア)、下編のコト、

こら(紅帽) 図赤色の帽子、

こら(候補者) 図或る地位、又は其位置を得ずとする人、又は地位を望(ア)みつつある人、

こら(紅毛) 図昔時オランダ人を、あざけりて呼びたる語、

こら(口沫) 図口より出るあわ、

こら(公民) 図國法を遵守し、租税を納めて働き、生活を爲しつある人民。公民權を有せる人々、

こら(公民權) 図市町村の住民中にて、公民たる權利のコト、此の權利を得る者は、一家を構(ア)へたる戸主にして、年齢満二十五歳以上の男子にて、二ヶ年以上其の市町村内に住し、直接國稅又は地租を、二圓以上納(ア)めても、のたらざるべからず、

こら(公務) 図官府の事務(ア)、即ちおほやけの務(ア)、

こら(小梅) 図小き圓形の實(ア)を結ぶ庭梅(ア)、支那梅(ア)、

こら(公明) 図正直(ア)にして、明瞭(ア)なるコト、即ち私なくよこしまならざるコト、

こら(功名) 図手柄(ア)を立てて、善き名を揚(ア)るコトを云ふ、

こら(台名詞) 図文法上の語にて、

こらめ、こらめ

二個以上の名詞より成り立てる名詞の
コトを云ふ、假令ば谷川さか、麻繩さか
の類、

こらめいむわいしや(合名會社) 二人以
上の人が、出資して一事業を営むべく
設立せる會社にて、其の合資會社と異
(は)なる點は、其の出資者たる社員は、
各無限責任たらざるべからず、

こらもち(鴻蒙) 國物事の入り亂れて、判
然せざるコトを云ふ、大古(おほいに)の有
様(さま)を云ふ、

こらもち(鴻毛) 國この鳥の毛、轉じて
殊(こと)に輕(かろ)んずる物事のコトを云ふ
假令ば死は鴻毛の如くなごの類、

こらもち(蝙蝠) 國鼠(ねずみ)に似たる小獸に
て、林の左右に手足の間(ま)より、薄
き堅固なる膜(まくら)を生ず、此の膜を廣
(ひろ)げて、手にて支(た)えつつ鳥の如く、
自由に空中を飛ぶ、全身に毛を生じ、足
(あし)の爪(つめ)は曲(まが)りて、鉤(かぎ)の如き
狀を呈す、樹(き)などに止る時に、此の
爪の鉤にて、林を支(た)ふるものなりと
云ふ、

こらもち(叩問) 國十分に問ひ正(ただ)すコ
トを云ふ、

こらもち(肛間) 國尻(しり)の穴(あな)を、

こらや、こらや

こらや(粉屋) 國こなやの科ト、
こらや(口約) 國口上にて、約束を爲す
コト、即ち口やくそく、

こらや(公約) 國私約に對しての稱にて
公然と取り結ぶ約束(やくそく)、

こらや(後約) 國後々(おのづか)の約束、
こらよ(公餘) 國公務(こうむ)の餘暇(あま)り、
こらより(公用) 國表立ちたる用事、官省
などの用事の科ト、

こらより(公用人) 國昔時大名に仕へ
て、其の藩の公(こう)なる用事を専ら執
(と)りし人の科ト、

こららい(後來) 國今より後、行くすえの
コトを云ふ、

こららい(後樂) 國後々を樂しむと云ふ意
にて、國家の前途(しん)に就て、力を盡し
思案する科ト、

こららん(勾欄) 國折れ曲(まが)りたる、即ち
鍵(かぎ)の手なりに、造(つく)りたる欄干
(らん)の科トを云ふ、

こらり(功利) 國てがらと利徳(りとく)、
こらり(公吏) 國官吏に在らずして、國の
公(こう)なる事務を執る役人、即ち公務
員(こうむいん)の科ト、即ち役所(やくしょ)の吏員(しごん)な
ご、

こらり(公理) 國おほやけなる理論、即ち

こらり、こらり

如何なることあるも、彼れ是れと云ひ
能はぬ理屈(りくつ)正しき理論、

こらり(小賣) 國物品(ぶつ)を問屋(もんや)より
買ひ入れて、少しづつ賣り捌(さ)くコト
を云ふ、

こらり(合理) 國道理に適ふたる理屈、即
ち正しき理屈の科ト、

こらり(興隆) 國莫大なる利益、
(こうりょう)になりたるコトを云ふ、

こらり(拘留) 國捕へて自由を束縛し置
くコト、
こらり(判事) 國又は豫審判事の令狀に依
りて、犯罪者を留置(りゅうせい)するコトを云
ふ、

こらり(公立) 國政府又は公共團體が設
けて、是れを持ちこたへ行くコト、假令
ば公立病院など、

こらりて(合理的) 國其の事柄(ことづか)が道
理に叶(かな)ふてると云ふ意を表はすに
用ゆる語、

こらりや(弘量) 國度量の廣さ、
こらりや(公領) 國政府の領地、即ち官
有地の科トを云ふ、

こらりや(餽餼) 國兵糧の科ト、
こらりや(功略) 國攻めて城又は土地を
陥(おと)れ取るコト、

こらりせつ(合理説) 國道理に合せて、組
み立たる一つの説、

こらりより(口糧) 國兵糧(へいりやう)、
こらりより(合力) 國互ひに力を合せて助
け合ふコト、
こらりより(合力) 國互ひに力を合せて、一つ
の働(はたら)きを起すコト、
こらりより(力) 國力に爲ると云
ふ意より、施(ほ)す、めぐむと云ふコト

こらりより(拘留) 國警察犯所罰令に
依りて、拘留處分を受けたるものを、留
置する處の科ト、

よこらりより(拘留狀) 國判事又は豫
審判事が、拘留狀を發したる刑事被告
人を、訊問したる上にて、其の罪狀が
禁錮以上の科刑に當るものと思考せし
時に於て、發する令狀の科トを云ふ、

こらるる(紅涙) 國切(きり)なる涙、美人の
涙の科トを云ふ、

こらるる(後累) 國あさあさのわづらひ、
後に生ずる憂(うれ)ひ、

こられい(恒例) 國常のきしき、常のしき
たりの科トを云ふ、

こられつ(功烈) 國すぐれたるいさほし。
莫大なるがらの科ト、

こられん(後聯) 國漢詩の一體なる、律詩
の五六の句の科トを云ふ、一般に五六
の二句は、對句(たいご)となれるもの、

こらり、こらり

こられん(拘攣) 國ひきつけるコト、筋肉
の引きつるコトを云ふ、

こらろ(攻路) 國攻(せ)めて行く道(みち)、
こらろ(紅爐) 國ベニの爐と云ふ意、即ち
火の盛んに燃(も)つてる爐(いり)、

こらろ(洪浪) 國荒く大なるなみ、
こららち(功勞) 國てがらと、骨をり、
こららち(紅樓) 國藝妓や遊女などの住る
居る家、即ち青樓(せいろう)、

こらろく(厚祿) 國あつさろく、ゆたかな
る手當、又は俸給(ほうきやう)、

こらろん(公論) 國よこしまならぬ議論、
天下の輿論(いんろん)、

こらろん(口論) 國口喧嘩(くちげん)、
議論(ぎろん)の科トを云ふ、

こらわ(媾和) 國和(わ)を講ずるコト、即ち
仲なをり、わはくの科ト、

こらわい(垢穢) 國よこれてきたなくなり
たるコトを云ふ、

(一) (え)

こえ(肥) 國こえて大きくなるコト、
其の土地を善して、作物の生熟(せいじく)を十分
ならしむる爲めに施す材料、即ちこや
し肥料、大便、

こえ、こえ 肥

六八六

(一) (おを)

こをけ(小桶) 國桶の小きき物、
こをとこ(小男) 國丈(ぢやう)の低(ひか)き男、
年の若き下男の科ト、
こをどり(小躍) 國をどり上つて、嬉(うれ)し
がるコトを云ふ、

こえ、こえ 聲、越

六八七

こたせ、こか

こをところとる(子捕子捕) 囿子供の遊戯の一種、一人の親(じ)と鬼(おに)とを定め、親の後に三四人の子供が、順々に帯をつかまへて、其の最後なる子供を、鬼(おに)が捕へんとする遊戯のこを云ふ、
 こおひい(柳非) 囿木の實(じ)の名、こひいに同じ、其條を見よ、
 こおろし(子墮) 囿薬を用ひ、又は器具(け)を用ひて、鉢内に在る子をおろすこを云ふ、
 こおろし(子墮) 囿薬を用ひ、又は器具(け)を用ひて、鉢内に在る子をおろすこを云ふ、
 こおろし(子墮) 囿薬を用ひ、又は器具(け)を用ひて、鉢内に在る子をおろすこを云ふ、
 こをん(吳言) 囿漢字の字音の一にて、支那の南方地方にて發する音、假令ば行(ぎ)をギヨウと云ひ、黄(わう)をわうと云ふが如きはなり、
 こをん(古音) 囿昔し用ひたる漢字の音、こをん(小女) 囿少女、年(ね)の若き下女、子守女、小間使(こまぢ)、丈(ぢ)の低き女のこを云ふ、

(いんか)

こか(胡笳) 囿悲(ひ)しき音色(しき)を發する一種の笛(ふえ)、昔時支那の胡人(こ)が吹きしより此名あり、あしのはぶえの

こか、こかい

こか(古歌) 囿昔し人の味(あじ)たる和歌(わ)のこを云ふ、
 こか(古栴) 囿木の名、熱帯地方に産する木にて、四季其の葉を落(お)す、夏期に花を開きて、秋に實を結ぶ、其の實(じ)より、コカインと稱する麻酔薬(ま)を製す、云ふ、古(こ)き木の枝のこを云ふ、
 こか(古雅) 囿昔し風にて風流なる趣きのあるこを云ふ、
 こか(格下) 囿手紙にて其の宛名(あて)の左脇(わき)に書く語にて、おそば、あなたと云ふ意を表はす語、
 こか(楹) 囿楹(えい)又は楹(えい)の大なる物の稱、大楹、
 こかい(湖海) 囿湖(うみ)と海(うみ)、
 こかい(沙蠶) 囿海濱の白砂(しろ)中に棲む一種の虫にて、其の形はミミズの如くにして、長さ二寸内外、鉢扁平にして色赤く、鉢の兩側に無數の短かき足を具ふ、魚を釣る餌(え)に用らるるもの、
 こかい(孤介) 囿一本立のこ。單獨(ひとり)のこを云ふ、
 こかい(誤解) 囿考へ異(ちが)ひ、思ひ違ひのこを云ふ、

こかい、こかく

こかい(五戒) 囿佛教の語、五つの戒と云ふこ、即ち偷盜戒、妄語戒、邪淫戒、殺生戒、飲酒戒のこ、
 こかい(小買) 囿大買(お)に對しての稱にて、品物を少しづつ買ひ入れるこを云ふ、
 こかい(子養者) 囿子供の時より養育して大きく爲したる人、
 こかい(胡考) 囿年を老(お)たる人のこを云ふ、即ち老人の稱、
 こかい(五更) 囿時の名、昔時の寅の刻のこにて、現今の午前四時、
 こかい(枯稿) 囿樹木の枯(こ)るこ、
 こかい(元氣の衰) 囿るへるこ、
 こかい(呼號) 囿大聲を發して、よびさけぶこを云ふ、
 こかい(御幸) 囿太上天皇の、みゆきあそばさる、御事を申す語、
 こかい(小格子) 囿格子戸の小さき物、俗語にて小店(こ)に同じ、
 こかい(小垣) 囿高からざる垣根、
 こかい(小蠟) 囿いそがきの一名、
 こかい(古格) 囿昔より傳はつて、格式(か)のこを云ふ、
 こかい(顧客) 囿得意(い)のお客、
 こかい(孤客) 囿一人で旅(たび)する、一人で

六八八

旅へ出てる人(ひとり)の客、
 こかく(古樂) 囿昔時に用ひられた音楽のこを云ふ、
 こかく(古格) 囿昔より傳はつて、格式(か)のこ、古(こ)の例(れい)、
 こかく(古學) 囿古代の學問、古代の學藝を研究する學問、
 こかく(語學) 囿言語の意味(い)、用ひ方等に就て研究する學問の稱、
 こかく(語格) 囿言葉(ことば)を文章にて、表はす一定の規則のこ、
 こかく(五角) 囿五つの角(かど)を有せる形状、又はその物の稱、
 こかく(五角) 囿優劣(う)のなきこ、即ち對等(たいとう)のこを云ふ、
 こかく(木隱) 囿立木の陰(かげ)にかゝる木かげにかゝる、
 こかく(木隱) 囿立木の陰(かげ)に身を潜(ひそ)むるこを云ふ、
 こかく(語學) 囿外國語に精通(た)せる人、
 こかく(木陸) 囿立木(た)のかけ、
 こかく(小籠) 囿又は小籠(こ)も書く、かこの小さきもの、
 こかく(麩) 囿大麥(あ)を炒(い)けて白(しろ)にて挽きて粉(こな)なしたる物、即ち麥(あ)が

こかく、こかし

しのこを云ふ、
 こかし(焦) 囿こがすこ、こがしたるもの、くすべたるもの、
 こかし(小頭) 囿一群(ぐん)を更(か)に幾個(いく)かに分ちたる、其の一部分の長、假令ば消防(ぼう)の小頭(こ)など、
 こかし(倒) 囿倒(た)をす、俗語にて衣類などを買(か)に入れる、秘(ひ)と賣り飛ばす、
 こがす(焦) 囿火(か)を物にあてて黒く色を變じす、心(こころ)を碎(くだ)く、熱心に思ふ、即ち思を焦すなど、
 こがす(蠶淨) 囿蠶(か)の糞(ふ)の、
 こがす(粉屑) 囿穀類の粉(こな)となりたる物を云ふ、
 こがせ(小風) 囿靜かに吹く風、
 こがた(小形) 囿形の小さきこ、又た小さき物のこを云ふ、
 こがた(小刀) 囿刀(か)の如き形をして、小さき刀物(か)、紙切庖刀(し)のこを云ふ、
 こかつ(涸湯) 囿水(みづ)なごの、かばきて無くなるこ、水のかばき切る、
 こかつ(枯湯) 囿かわきて生氣(いき)がなくなるこ、所持せる金銭物品(かね)なごの少(すく)なくなりたるを云ふ、

こかし、こかつ

こかい(御家内) 囿他家の家族(か)のこを敬(うや)みて云ふ語、人の妻女のこを敬(うや)みて云ふ語、
 こかい(黄金) 囿わん(ごん)のこにて、金屬中第一位を占むる貴き物なり、實(じ)軟(か)らかにして、重量殊(じゆ)に重く、水の十九倍(じゅう)の目方あり、色は純黄色(じゆ)にして、光(あ)りあり、傾る美(う)し、其の質の軟なるに依り、思ふままに細工(こ)し得らる、又は單に金(ご)とも云ふ、
 こかい(黄金) 囿鮮(あ)やかなる黄色(き)、山吹色(やまぶ)のこ、
 こかい(黄金草) 囿山吹(やまぶ)の一名、
 こかい(黄金蟲) 囿稻(い)大なる楕圓形(だ)の虫にて、六つの足を有し、甲(か)は黄金色(き)を帯びたる光(あ)りある、綠色を呈す、花及び作物(は)の根を損する害虫(かい)なり、
 こかい(黄金裝) 囿黄金を用ひて飾(か)を施したる器具、
 こかい(天竺桂) 囿木の名、桂(けい)の一種、夏に花咲せて秋に實(じ)を結ぶ、葉は四季落ちず、其の實を製して蠟(ろう)を取る、
 こかい(小爲替) 囿郵便局にて、取扱(とり)を

こかい、こかは

六八九

こがは、こがら

こがは(子飼)の一名、五圓以下の爲替(カ)の取扱(カ)の名稱。
 こがはせしよろしよ(小爲替證書)五圓までの金額(カ)を郵便爲替にて、送(カ)る時に、現金と引換證として郵便局より發する證書。
 こがひ(子飼)又た子養とも書く、子供を養ひそだつるコト。子供の時分より世話を爲すコト。
 こがひ(蠶飼)蠶養蠶のコト。
 こがへり(子轉)胎内に在る胎兒(カ)が臨月(カ)に及(カ)んで、頭を下(カ)に爲すコトを云ふ。
 こがほり(御家寶)一種の菓子、糯米(カ)を蒸(カ)して乾(カ)したる物を、蜜(カ)にて練(カ)て、圓(カ)棒(カ)をなしたる物、下等の菓子なり。
 こがめ(小瓶)圓小(カ)さ(カ)壺(カ)の稱。
 こがめ(小鵝)圓鵝の子(カ)に(カ)。
 こがも(小鴨)圓鳥の名、鴨の一種にて形小(カ)さ(カ)く脊部は黒(カ)灰色を呈し、一面(カ)に薄赤(カ)き斑(カ)の條(カ)あり、腹部は淡紅色(カ)にして、亦た一面に黒色の斑點(カ)あるもの、其肉は普通の鴨より甘し。
 こがら(子柄)圓子供(カ)の容子(カ)子供(カ)の

こがら、こが

顔容(カ)のコトを云ふ。
 こがら(小雀)圓鳥の名、山がらに似たる小鳥にて、軀は一面に白く尾(カ)翅(カ)は黒色を呈し、常に山中の木に棲ひて、木の實及び虫を食ふ、其の鳴き聲美なるに依り、人は之を愛し飼ふ。
 こがらし(木枯)圓秋(カ)の末(カ)より冬の初(カ)へけて吹きすさむ風。
 こがらす(小鳥)圓鳥の子(カ)銘刀(カ)の名平家の寶刀(カ)なり。
 こがる(焦)圓動火にあたりてくすばる(カ)戀ひし(カ)墓(カ)ふ。
 こがれじは(焦死)圓叶(カ)はね戀(カ)に心を苦しめ病氣となつて死ぬコトを云ふ思の餘り死す。
 こかん(五感)圓視(カ)聽(カ)味(カ)臭(カ)觸(カ)の五つの感じの稱。「カ」を云ふ。
 こかん(返寒)圓寒さの殊にはげしきコト

こがら、こが

儀式(カ)のコトを云ふ。
 こが(狐疑)圓うたがひて決せぬコト、うたがひてためらふコト。
 こが(誤記)圓かきそこなふコト、あやまつたコトを記されてあるコトを云ふ。
 こが(碁器)圓碁石を入れる器具、コゲに同じ、其の條を見よ。
 こが(語氣)圓言葉(カ)の勢ひ、物のいひやう。話しつぷりのコト。
 こが(御器)圓梳(カ)の一名。
 こが(五氣)圓溫、涼、寒、暑、濕の五つの氣のコトを云ふ。
 こが(五畿)圓畿内五ヶ國のコト、即ち山城、大和、河内、和泉、攝津。
 こが(鼓弓)圓樂器の名、形三味線に似て、糸を弾(カ)きて、音を發しさせるもの。
 こが(故舊)圓ふるきなじみ。昔し友達(カ)のコトを云ふ。
 こが(小菊)圓草の名、菊の一種にて、細かき花の咲く菊(カ)紙の名、半紙の半分ほどの軟(カ)らかき紙。
 こが(五畿内)圓畿内五ヶ國のコト、尙ほ五畿(カ)の條を見よ。
 こが(呼吸)圓息(カ)のコト。さあひ(カ)こが(小氣味)圓心持(カ)み、

六九〇

こがら、こが

こが(故郷)圓ふるさとのコト。
 こが(御形)圓草の名、はこくさ(カ)のコトを云ふ。
 こが(五行)圓支那の科學の語、火、木、土、金、水の五つを云ふ。
 こが(沽却)圓賣り拂ふコト、即ち賣却(カ)の稱。
 こが(胡弓)圓西洋より渡りたる一種の樂器、三味線に似て小さく、弓形の弦(カ)にて彈(カ)くもの。
 こが(故墟)圓古に城の在りし場所、城あとのコトを云ふ。
 こが(枯魚)圓干して固(カ)めし魚、即ち干物(カ)のコトを云ふ。
 こが(小切)圓小さく切れたる物。細(カ)かく切りたる物の稱。
 こが(孤衾)圓獨(カ)りにて眠るコト、添(カ)寢(カ)に對しての語。
 こが(古金)圓古代に於て通用したる金銀貨(カ)のコト。
 こが(胡琴)圓樂器の一種、昔時胡國より傳來せしものにして、清樂(カ)に用ゆる、月琴(カ)の如きものなりと云ふ。
 こが(五金)圓五種の大切なる金屬と云ふ意にて、即ち金(カ)銀(カ)銅(カ)鐵(カ)錫(カ)の稱。

こがら、こが

こが(小金雞)圓雞人形の極(カ)めて小さき物のコトを云ふ。
 (カ)の稱。
 こが(國)圓くにの稱。
 こが(谷)圓山と山との間(カ)に、即ちたに大きな洞(カ)竹の節(カ)に在る溝(カ)きはまる。極度に達す假ば進退谷(カ)る。東より吹く風即ちこち(カ)そだつ養ふ。
 こが(鵝)圓鳥の名、白鳥(カ)おほざり(カ)白鳥より轉じて純白なるコト。大きいコトを云ふ。圓(カ)に在る黒星(カ)確かな事。
 こが(克)圓打ち勝(カ)つコト。堪(カ)へ忍ぶコト。よくする。なし能(カ)ふ。かち氣のコトを云ふ。
 こが(黒)圓くろきコト。くろき色(カ)くらし(カ)ろくあり。
 こが(告)圓知らす。つける。申(カ)す。教(カ)へるコトを云ふ。
 こが(特)圓牛や馬などをに入れて置く檻(カ)のコトを云ふ。
 こが(穀)圓上等の絹織物の名、即ちちりめん(カ)の稱。

こがら、こが

こが(轂)圓車のこしきのコト。轉じて車(カ)のコトを云ふ。
 こが(穀)圓木の名、楮(カ)のコト。
 こが(惑)圓又たわくさも讀む、まごふ。まごはす。まごひの稱。
 こが(榭)圓木の名、かしの稱。
 こが(斛)圓樹目(カ)の名、一斗(カ)の十倍を一斛と云ふ。一斛を量(カ)り得らる一升(カ)の名。升(カ)。
 こが(穀)圓三斗を量(カ)り得らる、樹(カ)に樹(カ)玉(カ)にて作(カ)られたる杯(カ)の稱。無くなるコト、盡(カ)るコト。少(カ)くなるコト、薄(カ)きコト。死するを怖(カ)れ思(カ)む狀(カ)を云ひ表はす語。
 こが(剋)圓殺(カ)すコト。克に通ず、かつあさふ。よくす。かちき(カ)ける。切(カ)りて細かくす。確(カ)と約束す、堅く契(カ)ふコト。
 こが(穀)圓五穀のコト、即ち米、麥、粟、黍、豆の稱。幸福なるコト。生(カ)る。そだつ。養(カ)ふ。谷(カ)に通ず、たに又は大きな洞穴(カ)又た童子(カ)のコトをも云ふ。
 こが(剋)圓きさむ。ほる。えぐる。ほりものをなす。甚(カ)たしきコト。きびしき

六九一

六九二
 審調書、判決書など、
 かくあくはん(極悪人) 此の上なしの悪
 かくる(國威) 國のいこふ、其の國のい
 きほひのこトを云ふ、
 かくる(黒衣) 黒色無地の衣服、僧の着
 る黒の衣(モノ)、
 かくい(極意) 國典(モノ)の手、即ち其の人が
 最も得意とする事柄(モノ)、
 かくい(國有) 國家の所有物(モノ)、假
 令、國有鐵道など、
 かくいん(黒印) 黒色の肉、即ち黒肉に
 て捺したる印形のこト、
 かくいん(刻印) 彫影(モノ)にて作りたる印形
 (モノ)のこトを云ふ、
 かくいん(極印) 國昔時金銀貨幣に、之(モノ)
 を發行せし所の印(モノ)、又は其の價格
 (モノ)等を打ちつけたる、印(モノ)のこト
 を云ふ、
 かくり(御供) 國神佛に供(モノ)する物品、
 即ちおく物のこトを云ふ、
 かくり(虚空) 國あそる即ち天空(モノ)の
 こトを云ふ、
 かくり(穀雨) 國曆(モノ)の語、二十四氣の一
 こくりん(黒雲) 國黒き雲、あま雲、
 かくりん(國運) 國家の運勢(モノ)、
 かくらざり(虚空蔵) 國佛の名にて、其の
 像(モノ)は、蓮華(モノ)に立ちて、左の手に
 寶珠(モノ)を、如意(モノ)を持ち、右の手
 に降魔劍(モノ)を持せ給ふ、慈悲と智恵とを
 守(モノ)せ給ふ佛なり、
 かくらじよ(御供所) 國神社寺院に在りて
 神佛に供(モノ)える、物品(モノ)を調(モノ)の
 ふる所のこトを云ふ、
 かくらす(御供水) 國神佛に供(モノ)え申
 す水のこト、即ちおこうずる、
 かくらまい(御供米) 國神佛(モノ)に供(モノ)
 える米のこト、
 かくらもの(虚空者) 國精神が抜(モノ)殺(モノ)
 となつてゐる者さ云ふ意より、轉じて無
 暗に無法な事を爲す、大馬鹿者のこト
 を云ふ、
 かくらい(黑影) 國くろきかけ、影法師
 (モノ)のこト、
 かくえい(黑影) 國かげばふし、
 かくえん(國益) 國國家の利益、
 かくえん(黒烟) 國くろきけむり、
 かくえん(黒鉛) 國黒きなまり鉛筆(モノ)の
 材料となるもの、
 かくえん(國遠) 國遠方の國へ、追ひやら
 るるこトを云ふ、
 かくねん(國恩) 國自國の恩義、
 かくねん(國音) 國其の國の言葉(モノ)のな

六九三
 かくか(國歌) 國其の國の、おほやけなる
 儀式に歌(モノ)ふべし、定(モノ)め給(モノ)ひた
 る歌、
 かくか(殿下) 國天子のあます處、即ち宮
 城のある處、一國の首都、
 かくか(國交) 國國とのまじはり、國
 と國とのよしみ、
 かくが(國號) 國其の國のさなへ名のこ
 トを云ふ、
 かくが(國學) 國其の國の學藝、特に和
 文學のこトを云ふ、
 かくかん(極寒) 國非常な寒さ、
 かくかん(國漢) 國我が國語と漢語とのこ
 トを云ふ、和學と漢學、
 かくか(國家學) 國國家の發達を圖る
 べき方法、及び國家の組立(モノ)等に就
 きて研究する學問、
 かくき(國忌) 國國喪に同じ、
 かくき(克己) 國自己の慾情に、自己の精
 神にて打ちかつこト、がまん、
 かくき(國器) 國智能(モノ)のすぐれてある
 こト、能く國を治むる智力のある人の
 こトを云ふ、
 かくき(哭泣) 國聲を張り上げて、泣き
 叫(モノ)ぶこト、
 かくき(國禁) 國其の國の法律にて、禁
 止(モノ)なしたるこト、
 かくきん(黒金) 國石炭(モノ)の別名、
 かくきん(酷虐) 國むたたらしく苦(モノ)
 しめるさん、こなるこト、
 かくきん(刻苦) 國甚だ苦しむこト、強き
 るしみのこト、
 かくくん(國君) 國一國の君主、
 かくくん(國訓) 國漢字の意義を、國語に
 て云ひ現(モノ)はするこト、
 かくくわい(國會) 國廣く全國より議員を
 選出して、國家の法律行政に就て、協
 議する大會議、即ち帝國議會のこトを
 云ふ、
 かくくわい(國會) 國會議員、國國民より
 選出されて、國會を編成する議員(モノ)
 即ち衆議院議員のこト、
 かくけい(極刑) 國酷刑に同じ、死刑、
 かくけい(酷刑) 國酷刑なる刑罰、
 かくけい(國教) 國其の國の教へ、其の國
 の宗教(モノ)、
 かくげき(穀擊) 國人込(モノ)にて雜沓(モノ)
 混雜(モノ)を極むるこト、
 かくげつ(極月) 國十二月のこト、即ち師
 かくけん(國權) 國國家の權利及び勢力(モノ)
 のこトを云ふ、
 かくけん(國憲) 國其の國の基礎(モノ)の法
 律、憲法(モノ)のこト、
 かくけん(黒圈) 國黒き輪の點、
 かくげん(刻限) 國一定したる時間、
 かくこ(國庫) 國國家の所有に屬する金錢
 を入れある庫(モノ)、
 かくこ(國語) 國其の國の言葉(モノ)、
 かくこ(國交) 國外國との交際、
 かくこ(極極) 國如何にも、きわめて、
 かくこ(國庫) 國國庫の所有金、
 かくこ(庫庫) 國庫支辨、國國庫金にて、
 其の費用を辨(モノ)するこト、
 かくこ(國債) 國國庫債券、國公債證書の
 類を云ふ、
 かくこ(國債) 國國家の借金、即ち公債
 のこト、
 かくさい(國宰) 國内閣諸大臣のこトを云
 う、
 かくさい(國財) 國其の國の國民の財産を
 一ト纏(モノ)にせし稱、
 かくさい(國際) 國國際(モノ)に同じ、
 かくさい(國財) 國國家の所有に屬(モノ)す
 る財産、
 かくさい(國祭) 國全國國民の等しく行ふ大

祭のゴト、即ち神武天皇祭春秋の皇靈
 祭等の大祭のゴト、
 こくさち(國葬)國國家より費用を支出し
 て、營(葬)む葬式、
 こくさち(國喪)國國民全林が喪(も)に服
 するゴトを云ふ、
 こくさん(國産)國其の國の産物、
 こくさいしき(極彩色)國十分綿密(めんみつ)に
 美しく彩色を施すゴト、
 こくさいくわいぎ(國際會議)國二國以上
 の國際國より、各全權委員を派遣して、
 國際に關する意見を議するゴト、
 こくさいしよけん(國債證券)國公債證
 書のゴトを云ふ、
 こくさいでうやく(國際條約)國國と國と
 の權利義務通商等の件に就きての規定
 のゴト、
 こくさいばりえき(國際貿易)國條約を取
 り交(か)したる國と國との國民が、互ひ
 に自國の製産品を、賣買するゴト、即ち
 外國貿易、
 こくじ(國事)國其の國の仕事、國家政事
 (こくじ)のゴト、
 こくし(黒子)國皮膚(くわ)に生ずる小さき、
 黒き痣(し)、即ちほくろのゴト、
 こくし(國士)國其の國で、殊に優(すぐ)れて

こくし、こくし
 學識(がくし)智力のある人、
 こくし(國司)國昔時の官者にて、一々國
 のつかさ、即ち現制(げんせい)の知事の如き
 職、
 こくし(黒痣)國皮膚(くわ)に生ずる黒色の
 あざのゴト、
 こくし(國史)國其の國の歴史(れきし)、國の歴
 史のゴト、
 こくじ(國字)國其の國にて、一般に用ら
 れる文字、
 こくじ(國璽)國其の國の印(いん)として用
 ゆる印形のゴト、
 こくじ(告示)國官府より、一般の心得を
 なるべきやうに告げ知らせるゴト、一
 般に示し知らすゴト、
 こくじ(酷似)國最も能く似(に)たる、
 こくし(國燻)國國のあたがたき、
 こくし(獄舎)國監獄のゴト、
 こくし(獄守)國一國を領分としてゐた
 大名(だいみょう)のゴト、
 こくし(國手)國學術共に熟達(じゆく)せ
 る醫士、即ち名醫、
 こくし(酷暑)國極暑に同じ、
 こくし(極暑)國暑さの烈(れつ)しきゴト

こくし、こくし
 土用のゴト、
 こくし(國書)國政府と政府との間に往
 復する公文書、其の國の歴史又は國文
 學の書籍を云ふ、
 こくし(極心)國一心不亂(いっしんぷらん)になつ
 て物事を爲すゴト、
 こくし(刻深)國刻峻(こくしん)に同じ、
 こくし(黒人)國熱帶地方の人種にて、
 林色の黒き人、くろんぼ、
 こくし(國人)國其の國の人民、
 こくし(國事犯)國政治に不平を抱き
 て時の政府を轉覆(てんぷく)して、國政を改
 善せん企(こころ)する犯罪のゴトを云ふ、
 こくし(黒死病)國激烈なる傳染病
 の一種、即ちペストのゴト、
 こくし(極上)國飛切(こくしやう)の上等、
 こくし(濃漿)國鯉(こくしやう)のゴト、鯉
 の味増汁(あじ)、
 こくし(刻峻)國法律のきびしくして
 むごきゴトを云ふ、
 こくし(獄訟)國訴訟のゴト、
 こくし(黒色)國黒き色のゴト、
 こくし(國辱)國國の面目(めんぼく)に關す
 る國の恥(はにか)むなるゴト、
 こくし(國類)國類(こくしゆ)なる美
 人のゴトを云ふ、

こくしよくじんしゆ(黒色人種)國黒人種
 に同じ、
 こくじんしゆ(黒人種)國身林の色の黒き
 人種、熱帶(ねつたい)地方の人、
 こくじたんてい(國事探偵)國國事犯に就
 (つ)て爲す探偵のゴト、又は其の人、
 こくす(哭)國動聲を上げて泣く、かなし
 みて泣く、
 こくす(刺)國刺きざむ、けづる、ほる、
 こくす(國粹)國外國人の得て、似(に)し
 得られぬ、其國の優(すぐ)てゐる、及び
 其國民の勝(か)れてゐる氣風(きふう)の、云ふ、
 こくず(極)國最も上等、云ふゴト、
 こくず(粉)國粉(こな)の部分、「ゴト、
 こくず(粉)國粉(こな)をなしたる藥の
 こくず(粉)國粉(こな)をなしたる藥の
 國粹の衰(おとろ)えざるやうに、心掛(こころが)け
 て、保護(ごほ)し行くゴト、
 こくせ(國是)國國中の人が悉く感服する
 善き政治(ぜんせい)のゴト、
 こくせい(酷政)國むごたらしきまつりこ
 せ、あしき政治、
 こくせい(國婿)國君主の姫君に配偶せし
 男子のゴトを云ふ、
 こくせい(哭聲)國なき叫(こゑ)ぶ聲、
 こくせち(國勢)國其の國の現代の容子(ようし)其

こくし、こくし
 國の勢(せい)の、
 こくせい(國製)國外國製に對する稱にて
 自國にて製造せるゴト、
 こくせい(國政)國其の國の政治、
 こくせい(國稅)國國庫の收入となるべき
 租稅の事、即ち地租、營業稅、所得稅、酒
 稅、通行稅など、
 こくせい(酷稅)國重き租稅、
 こくせい(極)國極(こく)めて上等に製し
 たるゴトを云ふ、
 こくせい(黒)國墨(すみ)にて引きたるす
 こくせい(酷)國容貌(がう)姿(すがた)等の
 極(こく)て善く似(に)るゴト、
 こくせい(刺)國山などのけはしき狀
 (け)を云ひ表はす語、
 こくせい(克捷)國大勝利のゴト、
 こくせい(國稅品)國國稅を金錢の代
 りに、品物にて納(な)むる其の品のゴト
 現今にては、小笠原島、伊豆七島、及び
 琉球群島に行はる、
 こくそ(告訴)國法律、犯罪に依りて、損
 害を受(う)たる人が、其の事を官府へ申
 し出るゴトを云ふ、
 こくそ(刺)國鐵(てつ)を縫ふ麻糸、
 こくそ(國俗)國其の國民古來の風俗(ふうぶく)
 のゴト、

こくし、こくし
 こくそ(獄則)國監獄内にて用ひらるる
 規則(こくそ)、
 こくそ(國賊)國君主又は國家に仇(かた)
 を爲す大惡人のゴト、
 こくそ(小具足)國鐵(てつ)の胴(たね)だけ
 を省(は)きて、着(き)せざるゴトを云ふ
 ●罪人を捕ふる手、捕繩(とら)むなどの
 類のゴトを云ふ、
 こくそ(獄卒)國監獄の最下級の吏員即
 ち看守(くわんしゆ)押丁(おしぢやう)、
 こくたい(國體)國其の國の成り立ち、く
 にから、國の體面(たいめん)、
 こくた(國道)國東京より各府縣、及び
 師團所在地へ、通する本街道(ほんがう)のゴ
 トを云ふ、
 こくた(獄道)國此の上もなき悪しき人
 ●俗語にて放蕩(はうたう)もの道樂(だうがく)もの
 意(い)け者のゴト、
 こくた(獄道者)國放蕩者(はうたう)道
 樂者(だうがく)なまげ者、
 こくた(石高)國米又は麥の石數(いしがた)の
 ゴトを云ふ、●昔時大小名が領(りやう)して
 ゐた知行高(ちかぎやう)、
 こくた(告達)國政府より國民へ告げ知
 らせるゴトを云ふ、
 こくたん(黒檀)國木の名、熱帶地方に産

こくた、こくち
 する大木にて、其の木質は極めて緻密にて、頗る堅く、色純黒にして一種の光澤あり、種々の細工物、床柱等に用ひらる。
 こくたん(黒炭) 炭石炭の一種にて、色は純黒にて、一種の光澤あり、高熱を發して燃ふるに依り燃料に用らるもの。
 こくち(告知) 國物事を告知知らせるコト
 こくちきり(小口切) 國物を小口より次第次第に切り行くコト
 こくちとち(小口取) 國物の性質又は種類に依りて、部門分(科)に爲すコトを云ふ。
 こくちばん(告知版) 國又は告知板とも書す、自分の思ふ事を人に告知知さんとする事柄(給)を記して置く黒板の科汽車の停車場、電車の停留所などに備へたるもの。
 こくちぼり(小口彫) 國切りたる木材の切り口へ、彫物(彫)を爲すコト、又は爲したる物。
 こくちゆり(黒丑) 國朝顔の漢名。
 こくちゆり(獄中) 國牢屋の中(中)。
 こくちたり(小口當座) 國銀行の當座預金の一種にて、一口の金高五圓以上の

こくつ、こくち
 預金のコトを云ふ。
 こくつ(木屑) 國木の切りくづ。
 こくつけ(刻附) 國刻限(限)を記すコト、又は記したる書附(附)。
 こくつふし(殺漬) 國何事をもなます、プラブラ遊(遊)び居る人物を嘲(嘲)て云ふ語。
 こくつてい(國定) 國國民全株に用ひますべく、國家が定めたるコト。
 こくつてつ(格付) 國人株の自由を束縛(縛)して置くコトを云ふ。
 こくつてん(黒甜) 國ひるね(晝睡)。
 こくつてん(國典) 國國家の大禮、及び種々の儀式、國の法律儀式等を國文にて、記されたる物を云ふ。「ほし、こくつてん(黒點) 國黒き色の點、即ちくるこくつていけち(わ)わしよ(國定教科書) 國文部省に於て、著作したる小學校用の教科書のコトを云ふ。
 こくつていせいりつ(國定稅率) 國其の國にて法律を以て定めたる、輸出(出)及び輸入の貨物に、課(課)する税金の等級額のコト。
 こくと(國都) 國其の國の第一の都(都)。
 こくと(天子のおはします土地) 即ち天子のおはします土地。
 こくと(國土) 國其の國の土地。

こくさ、こくは
 こくと(國幣) 國國家の所有に屬する金錢のコトを云ふ。
 こくと(黒土) 國黒き色の、土、植物栽培(植)用の土、色薄黒く、水分少なく輕きもの。
 こくと(黒奴) 國色の黒き人をあざけて云ふ。黒人種クロンボ。
 こくとち(黒頭) 國黒き毛髪の生じてる頭(頭)と云ふ意にて、壯年の人のコトを云ふ。
 こくとない(國內) 國其の國の區域内。
 こくとない(獄内) 國牢屋の内。
 こくとない(極内) 國此の上もなき、秘密(秘)なるコトを云ふ。
 こくとん(國難) 國國家に生じたる困難なるコト、即ち戦争(争)など。
 こくとく(黒肉) 國黒き色の印肉(肉)。
 こくとねつ(酷熱) 國きびしきあつさ、甚だしき暑氣。
 こくとねつ(極熱) 國非常にあつきコト。
 こくとばり(國防) 國自國を防ぎて、安全を圖(圖)る方法のコト。
 こくとばり(國寶) 國其の國の寶物、全國の古社寺に現存(存)する古書畫古器物の永遠に保存(保)すべき價値(價)ある物を、政府が保護して保全(全)せる物品

のこト、
 こくはく(告白) 國告(告)げ知らす。匿(匿)さすに申し述(述)ぶるコト。
 こくばく(黒白) 國黒色と白色。善(善)と惡(惡)のこトを云ふ。
 こくはつ(告發) 國法律の語、犯罪者の爲に直接(接)に損害を蒙りたる人の外なる人が、其の犯罪者を司法官府へ訴へ知らすコト。
 こくばん(黒板) 國黒く塗(塗)たる板、白墨(墨)にて文字などを書きて、教ゆるに用ゆる具。
 こくはりがく(國法學) 國國家の組立(立)及び國家の有する權利に就て研究(研)する學問の科ト。
 こくひ(國費) 國其の國の事に就ての費用(費)、即ち歳出の科ト。
 こくひ(極秘) 國秘密中の秘密、此上もなき大きな秘密。
 こくひ(極微) 國取分け小なきコト、極(極)めて少なきコト。
 こくひ(小首) 國首を少しくかたむけて思案(案)する時に云ふ語。
 こくひん(極品) 國最上等の品物。
 こくひん(極貧) 國此の上なしの貧乏(乏)の科ト。

こくひ、こくは
 こくひやち(酷評) 國あしきしなだめ。不當(當)のひひやう。
 こくひやく(黒白) 國黒色と白色。
 こくふう(谷風) 國谷間(間)より吹きくる風、東風の科トを云ふ。
 こくふう(國風) 國其の國の風俗、其の土地の風俗、國々にて流行(行)る俗(俗)の科ト。
 こくふう(克服) 國敵を敗(敗)りて降服(降)せるコト。
 こくふう(克復) 國以前(前)の通りの状態(態)になるコトを云ふ。
 こくぶん(國文) 國我國の言語(言)を用ひ綴(綴)りたる文章。
 こくぶんじ(國分寺) 國勅令に依りて、一國に必らず一ヶ寺づつの寺院を建立(立)せしめられたる、其の寺院の名。
 こくぶんがく(國文學) 國我國の文學に就て研究する學問。
 こくべつ(告別) 國暇(暇)を爲すコト、別を告げるコトを云ふ。
 こくへいしや(國弊社) 國神社の社格のつにて、官弊社の次(次)に位(位)する神社、即ち弊帛(帛)を國庫より奉納(奉)する神社(社)。
 こくぼ(國母) 國皇后陛下の御事を申す。

こくほ、こくみ
 こくほん(刻本) 國版木(木)印刷(刷)したる書籍(書)。
 こくほん(國本) 國其の國の存在(存)を維持(持)する基礎(基)の科ト。
 こくめん(國民) 國籍(籍)を其の國に置き、其の國の保護を受け、其の國の法律命令(令)を遵守(守)する人民の科トを云ふ。
 こくめんぎむ(國民義務) 國國民が國家に盡すべき義務、此れに二あり、一は租稅(税)を納(納)むる義務、二は兵役に服(服)する義務なり。
 こくめんぐん(國民軍) 國國民兵に依りて成立したる軍隊(隊)。
 こくめんへい(國民兵) 國國民兵役に在る者が、國家の事變(變)に際し、召集(集)されたるものを云ふ。
 こくめんへいえき(國民兵役) 國後備兵役(後)を終りたる者、満十七歳以上四十歳以下の男子にして、兵役に服(服)せざる者の服する兵役の科トにて、國家に事變の在りたる時に、常備兵後備兵豫備兵を用ひ盡くして、尙ほ兵員に不足を生じたる時に、召集(集)して軍務に従事(事)せるもの。
 こくめんせいしん(國民精神) 國國民たる

こくみ、こくも

べき本来の精神、委(び)しく云へば國家の爲めに、力を盡(つ)して發達を圖(と)る精神、

こくみんけうい(國民教育)國國民に國民たるべき品性を、會得(えい)させ、且つ備へさせる爲の教育の科ト●小學校の教育の科ト、

こくむ(國務)國其の國の政治、

こくむきやう(國務卿)國こくむだいじんと同じ次を見よ、

こくむだいいん(國務大臣)國國家の大政に參與(さん)する大臣即ち内閣諸大臣の科トを云ふ、

こくめい(國名)國國の名●國のほまれ、

こくもち(黒餅)國一種の紋所の名、唯だ圓き輪のみを描(か)きし物、

こくもり(石盛)國五穀類の出來高(たか)を調べて、田畑の直打(ぢく)を定め、年貢(ねい)の高を定(さ)むる科ト、

こくもん(獄門)國牢獄の門●死刑に處したる罪人の首を、さらし置く刑罰(けい)の科ト、

こくもんくび(獄門首)國獄門臺に曝(は)されたる罪人の首、

こくもんざい(獄門臺)國獄門に處(ち)せられたる罪人の首を載る臺、

こくや、こくれ

こくや(黒夜)國やみ夜の科ト、

こくより(國用)國國家の費用、

こくらち(國老)國大名に仕(つか)てる、國家老(らう)の科ト、

こくらん(極樂)國佛語にて、阿彌陀如來(あみだ)の住(す)ひ給ふ、安樂なる場所と云ふ意●不自由なく安泰(あん)なる境遇(きん)を云ふ、

こくらん(國亂)國其の國の政事の亂(らん)れる科ト●内亂の科ト、

こくらをり(小倉織)國木綿織物の一種にて、太き糸にて地合を厚く織りたるもの、帶地に用ゆ、豐前の小倉市より織り出すもの、

こくらはかま(小倉袴)國小倉織の木綿にて仕立(しだ)たる袴(はかま)、

こくらくせかい(極樂世界)國極樂淨土(ごくらくせうと)を云ふ科ト、

こくり(國利)國其の國の凡て利益(りやく)となる科ト、

こくり(酷吏)國官權(くわん)を鼻にかけて、むこたらしく取り扱ふ官吏、

こくり(獄吏)國罪人を取り扱ふ役人、即ち監獄の官吏、

こくら(木暮)國大木の蔭(かげ)のうすくらき所を云ふ、

こくれ、こくわ

こくれつ(酷烈)國甚だきびしき科ト、

こくらん(國論)國其の國、上下一般の議論、即ち輿論、

こくら(木鐵)國金屬(こく)を用ひず、木のみで作(つく)りたる鐵(てつ)、

こくら(國王)國王號(わう)を稱(せ)へて國の君主、

こくら(後光)國佛の身鉢より、四方に發散(はつ)せるを云ふ、想像上(さうざう)の光の科ト●凡て圓形又は半圓形に爲りて四方に放射せる、光線(くわんせん)の科トを云ふ、●又其の形を爲せるもの、稱、例ば車の後光など、

こくら(五月)國一年の中で五番目に當る月又たサツキとも讀む、

こくらん(五官)國人林中の五個の機能(きん)の科トを云ふ即ち視官聽官嗅官味官觸官の五つ明(めい)り易く云へば眼耳鼻口皮膚(び)の科ト、

こくらせつ(五月節句)國又た端午(たん)とも云ふ五月五日の節句にて男子の發達成長を祝ふ式なりと云ふ、

こくら(五月)國五月の節句に飾(か)り立てる幟(しほ)の科ト、

こくら(五月人形)國五月の節句に飾る武者人形及び軍人人形の科ト

トを云ふ、

こく(古訓)國文字の古(ふる)のよみ方、

こく(孤軍)國一本立にて援(えん)のなき軍隊の科ト假令ば孤軍奮闘など、

(一) (二) (三)

こけ(苦)國草の一種、古き樹の幹(こ)又は濕地(しつ)常に水にぬれてる石などに生ずる細かき小き草の如きもの、其の種類種々あり、盆栽などに賞美して用ゆ●三河、尾張、美濃地方にて松茸(まけ)の科トを云ふ方語、

こけ(白痴)國おろかなる科ト。たわけの科ト。馬鹿の科ト、又はおろかなる人の科トを云ふ、

こけ(鱧)國魚の皮(かわ)の表面に在る細かき硬(かた)きもの、稱、即ちうるこの科トを云ふ、

こけ(焦)國こげたる科ト。こけて黒(くろ)くなりたるもの、稱、

こけ(虚假)國おろかなる科ト。おろかなるもの●智惠(ち)の足らぬ科ト、又は其の人●總て馬鹿氣たる科トを云ふ、

こけ(碁笥)國碁石(い)を入れて置く木製の圓き器具(き)の科トを云ふ、

こく、こけ、こけ、こけ

こけ(五家)國眞宗(しんそう)の五つの重(かさ)だちたる寺院の稱、即ち東西本願寺、専修寺、純徳寺、佛光寺の科ト、

こけ(後家)國夫(う)を失ひたる妻、又は妻を失ひたる夫、即ちやもめ、やまの科トを云ふ、

こけ(固形)國流形(りゅう)に對しての稱にて、一つの形を爲してある物の科トを云ふ語、

こけ(估計)國れうち(價格)、

こけ(五刑)國支那の五つの刑罰の科ト即ち、入墨(いぼ)、劓(え)、剕(か)、宮刑、首斬、

こけ(罅隙)國物と物との間(ま)ち、即ちすきまの科ト。かけてる科ト、

こけ(苦衣)國世をさけたる人の着る衣物と云ふ意にて、隱者(いん)の科ト、

こけ(焦茶)國染色の名、茶色の、こけ色の科トを云ふ、

こけ(固結)國しつかりと結(むす)ばれたる科ト●かたくかたまりたる科トを云ふ語、

こけ(虎穴)國虎の住居と云ふ意より危険(けん)なる場所を云ふ、

こけ(後家人)國幕府時代に於ける直參(ちさん)の武家の科トを云ふ、

こけ、こけ、こけ

こけのした(苦下)國墓所(ぼ)の科ト、

こけのまくら(苦枕)國隱者(いん)の寢所、

こけ(苦)國俗語(じくご)に同じ、

こけ(柿)國薄くへぎれる木●屋根板(い)の科トを云ふ、

こけらぶき(柿茸)國薄(う)き板にて張りたる屋根の科トを云ふ、

こけ(焦)國自動黒く焼ける、

こけ(轉)國自動又た倒の字を書く、ころがる、たなれる、

こけ(沽券)國賣るべき直段の高が認めある札(し)●轉じて其の人の直打(ぢく)器量(きりやう)の科トを云ふ、假令ば大ぬに沽券を下けたなど、

こけ(孤級)國只一人で級を振りつ、敵地へ入る科トを云ふ、

こけ(誇衒)國ほまれをよそふ科ト。ほこりたかぶる科ト、

こけ(古言)國古(ふる)の人の使ひたる言語。ふるきことばの科ト、

こけ(古語)國古(ふる)のことわざ、

こけ(語原)國一つの言葉(ことば)の成り立つもこの科トを云ふ、

こけ(誤見)國見そこなひ●誤(あ)まりたる考への科トを云ふ、

こけ(御見)國お目にかゝるさこの敬

こけの、こけ、こけ、こけ

こけん、こけん

語。面會の敬語、
とけんざん(御見參) 面會の敬語、即ち
おめにかゝるコト、
とけんもじ(御見文字) 御見參(とけん)に
同じ前條を見よ。

(一五九)

こと(戸々) 窓家々さ人口さ、
こと(呱呱) 剛嬰兒(けい)の泣く聲のコト、
こと(古語) 窓昔し云ふたる語、即ちむか
しの言葉のコト、
こと(五結) 窓眞言宗の高僧の持てる獨結
(ご)の一種、其の兩端(ご)の五つに裂
けてる物、
こと(午後) 窓正午より夕方(ご)まで、午
(ご)の十二時より夜の十二時までの稱、
こと(糊口) 窓生計(ご)即ちなりはひ、
くらしむきのコトを云ふ、
こと(股肱) 窓大切にする家來(ご)、力
(ご)にする人のコト、
こと(戸口) 窓家の數さ人の數(ご)、
こと(虎口) 窓虎(ご)のあこき云ふこ
とにて、即ち危険(ご)なる場所(ご)を
云ふコト、

こけん、こけん

こと(のしん) 窓股肱(ご)窓最も力にしてる
家來、又た力にされてる家來、
こと(え) 窓小聲(ご)窓音聲(ご)の低(ご)きコト
やさしき聲、
こと(え) 窓凍死(ご)窓寒氣の爲めに死する
こと(故國) 窓生(ご)れ故郷(ご)、即ちふ
るさこ、
こと(五穀) 窓穀類のコト、
こと(豆) 窓(ご)の五つを云ふ、
こと(護國) 窓國をまもるコト、
こと(後刻) 窓今より後(ご)、のちほどの
コト、
こと(凝) 窓岩などの集りて時(ご)へて
る状を云ふ、
こと(小腰) 窓腰を一寸(ご)かめたる
コトを云ふ、
こと(小御所) 窓昔時宮中に在りし御
殿の一、將軍が參内せし時に、裝束(ご)
をしなければす所、
こと(心地) 窓心もち、心の容子、
こと(小言) 窓ひさりてブツ／＼と怒つ
たらしく云ふてるコト、
こと(聞) 窓聞すコト、
こと(居) 窓其の人の居ぬ處
で、其の人のコトを悪く云ふコト、

こけん、こけん

こと(戸毎) 窓家々、かごなみ、
こと(九重) 窓天子の住るしたもふ所
のコト、即ち宮中、
こと(九重) 窓(ご)なつて
るコトを云ふ、
こと(九重座) 窓(ご)の八幡座の
コトを云ふ、
こと(九重人) 窓宮中に奉仕する
四位以上の人々のコト、即ち大宮人
の稱、
こと(個別) 窓各自(ご)に離
(ご)れ離(ご)れになつてる、
こと(小米) 窓又た粉米さも書く、米粒
(ご)の幾個(ご)にも碎(ご)けし物、
こと(粉米) 窓粉米(ご)窓牡丹雪(ご)に對
しての稱にて、粉米の如き、細かき雪の
コトを云ふ、
こと(粉米空木) 窓空木(ご)の一
種にて、粉米の如き、白き細(ご)かき花
の咲くもの、
こと(此許) 窓このさる。このおり
からさ、云ふ意を表はす語、
こと(孕子) 窓子の体内にやどりある
コト、即ち妊娠(ご)のコト、
こと(凍) 窓凍寒冷(ご)の爲めに、身
の自由(ご)がきかぬ、
こと(此邊) 窓此のあたり、此のほざり

こと(凝)

こと(凝) 窓こゝるるコト、
こと(凝) 窓自動寒氣の爲めに、物がた
くしまる、
こと(心) 窓精神(ご)窓かんがへ、物事
の道理(ご)、即ち意味(ご)窓是非(ご)を
判斷(ご)する力(ご)、
こと(心意氣) 窓氣まへ、氣だて、
戀(ご)ふ心地(ご)を云ふ、
こと(心置) 窓心を配(ご)るコト、氣
を付けるコトを云ふ、
こと(心掛) 窓(ご)す萬事に氣
をつけ居る、
こと(心掛) 窓氣をつけるコト、萬
事に注意するコト、
こと(志) 窓心底(ご)窓心に思ふ事
柄(ご)立てたる目的(ご)窓我が心に思ふ
コトだけを人に爲し表(ご)はすコト、
こと(志) 窓自動心に思ふ、目的(ご)
を立てるのみこみをつける、
こと(心添) 窓人の爲めに氣をつけ
てやるコト、
こと(心丈) 窓意中に思ふてゐるだ
けを云ふコト、
こと(心立) 窓自動思ひたる物事をな
しはじむ。思を起す、

こけん、こけん

こけん、こけん

こけん

こと(心立) 窓氣だて、氣まへ、
こと(心付) 窓自動氣がつく考が浮び
来る、
こと(心付) 窓氣を付けて、人に金
錢物品等を與(ご)ふるコト、
こと(心長) 窓氣の長きコト、
こと(心無氣) 窓すげなきさま、關
係(ご)なき体を云ふ、
こと(心儘) 窓思ひ通り、勝手氣儘
(ご)のコト、
こと(心持) 窓氣持(ご)、氣分(ご)
心に感ずる容子のコト、
こと(心安) 窓精神のおだやかなる
コト、
こと(快) 窓氣分さわやかなり、精
神(ご)がかなり、
こと(心好) 窓馬鹿正直、
こと(心好) 窓又は其の人、
こと(心當) 窓心に思ひあたるコ
ト、
こと(心當) 窓思案(ご)のつく
コトを云ふ、
こと(心有氣) 窓仔細(ご)あるら
しき状(ご)窓心を寄(ご)てる容子、
こと(心得) 窓顔(ご)窓知つてるやうな
顔(ご)のつきのコト、
こと(心劣) 窓性根のをさりたる

こと(心覺) 窓忘(ご)れぬ爲めの
印(ご)として置くコトを云ふ、
こと(心掛) 窓氣にかかると、
(ご)にらるるコト、
こと(心構) 窓あらかじめ用心す
るコト、
こと(心競) 窓意地(ご)を張り合
ふコトを云ふ、
こと(心配) 窓物事を案(ご)じる
コト、
こと(心配) 窓まれ事に付きて骨を折る
コトを云ふ、
こと(心苦) 窓心に苦しく感ずる
なり、
こと(心騒) 窓胸のドキドキする
胸さわぎ、
こと(心障) 窓氣にかかると、
心に濟(ご)ぬコト、
こと(心静) 窓心のおだやかなる
コト、安心なるコト、
こと(心便) 窓其れさなく力(ご)
にしてるコト、
こと(心遣) 窓萬事に心を配(ご)

るコト●人の爲めに心配するコト●心
を碎(砕)くコト、
ところづくし(心盡)困力を盡すコト、世
話をしてやるコト、
ところのをね(心鬼)困薄情(心薄)にして
情(情)の毒(毒)もなき奴(奴)のコトを鬼
にたとへて云ふ語、
ところのくも(心雲)困心に雲がかかつて
る云ふ意にて、迷(迷)ぶる、耽(耽)つ
てるコト、
ところのこり(心殘)困思ひ切(切)の悪き
コト、残念(残念)に思ふコト、みれんな
るコト、
ところのそこ(心底)困思ふて誠(誠)の
コト、匪(匪)し立のなきコト、
ところのこま(心胸)困戀(戀)にあらがれ
て精神の狂(狂)ぶる云ふ語、
ところのやみ(心闇)困心狂(狂)ぶて、精神
の亂(亂)れるコト、
ところばかり(心許)困我が心のほど云
ふ意にて僅(僅)かばかりのコト、
ところばらし(心晴)困精神の鬱氣(鬱氣)を
晴す、即ちきばらしのコト、
ところまかせ(心任)困思ふまま、勝手、
ところやすめ(心休)困一時の慰安、氣や
すめのコトを云ふ、

ところえちがる(心得違)困考へそ、なひ
思ひちがる、注意(注意)の足らぬ、
ところなつかし(心慥)困なつかしく思ふ
なり、なつかしくあり、
ところはずかし(心羞)困心に羞(羞)るコ
ト、體裁(體裁)わるく思ふ、
ところやすだて(心安立)困れんころ、な
るより、五(五)ひに遠慮(遠慮)のなきコト
を云ふ、
ところん(古今)困今と、むかし、
ところん(五言)困漢詩の一、五言絶句のコ
トを云ふ、
ところんどつぼ(古今獨歩)困物事の非常に
優(優)れたるコト●非常に優(優)れたる
人のコトを云ふ、

(イ)イ)イ)

とさい(氣厚)困白きうるはしき齒の行儀
(行儀)よく生え列(列)んでるコト●美人
の美しき齒のコト、
とさい(巨細)困大さ小●粗(粗)と密(密)●
凡ての、こらす、こまこま、
とさい(小才)困一寸(寸)の智慧(智慧)のある
こと、例ば小才(小才)、
とさい(御在)困ある。ある云ふコトの
敬語、おます、おゐる、
とさい(枯柴)困かれたるしばのコト●か
らしたるしばのコト、
とさい(後妻)困のち添(添)の妻(妻)、
とさい(五彩)困五色の色彩(色彩)、
とさい(五菜)困五つの野菜(野菜)●即ちニラ
ニンニク、ワサビ、ネギ、ラッキョ、
とさい(御祭)困夏期の土用(土用)の中頃(中頃)
●より、凡そ七八日間吹く東北の風の
コトを云ふ、
とさい(鼓譟)困大鼓や鐘を叩(叩)きて騒
(騒)ぎまはるコトを云ふ、
とさい(故造)困わざと拵(拵)らへたコト
●つくりこみのコト、
とさい(護送)困見張(見張)をなしつつ送る
コト●罪人を送るコト、
とさい(吾曹)困我れ等。我がさもがらの
コト即ち我輩(我輩)。

とさち(五葬)困五つの葬り方云ふ意に
て即ち土葬火葬水葬野葬林葬のコトを
云ふ、
とさち(五臟)困体内に在る五つの臟腑の
コト即ち心肺(心肺)肝(肝)脾(脾)及び胃(胃)
の五つを云ふ、
とさかし(小賢)困かしこぶる。りかうぶ
る●わるがしこし、
とさかぬ(小肴)困一寸(寸)したさかな●
小さき魚類のコト、
とさく(小作)困他人の所有地を相當の料
金を出して借り受けて農事を爲すコト
下作(下作)のコト、
とさくら(小櫻)困櫻の一種、その花の細
(細)かくして色の淡(淡)き物、
とさくらかは(小櫻皮)困色革(色革)の一種
藍色(藍色)に染めたる革の中へ、櫻の花
形を小さく飛々(飛々)に現(現)はしたる
もの、
とさくらおどし(小櫻絨)困小櫻皮にてお
どしたるよるひ、
とさつ(小札)困昔時通用せし十錢二十錢
五十錢などの紙幣(紙幣)、
とさつ(故殺)困殺す考はなかりしに一時
の怒りなどにて前後(前後)の分別(分別)な
く殺せしコトを云ふ、

とさつ(誤殺)困人違(人違)にて殺すコト
●あやまつて殺すコト、
とさつまふし(小薩摩節)困一種の俗曲の
名、大さつま節より分(分)れたるもの
なり、
とさね(小札)困札(札)に同じ其の條を見
とさのま(御座間)困貴人の居室、
とさぶね(御座船)困貴人の乗(乗)てゐら
れる船のコトを云ふ、
とさむしろ(薩摩)困さ、
とさむらひ(小侍)困身軀(身軀)の小さき武
士●昔時諸家に奉公せし身分のひきき
武士のコト、
とさめ(小雨)困静(静)かに降る雨即ちぬ
か雨。さあめのコトを云ふ、
とさら(小皿)困小さき皿、てしまふ皿の
コトを云ふ、
とさる(小猿)困猿の子、子供の猿、
とさる(小猿)困型の小さき猿、
とさん(故參)困古より召使(召使)されて
る奉公人(奉公人)、古より仕(仕)へてる家
來(來)のコト、
とさん(故山)困ふるさと、故郷(故郷)、
とさん(午餐)困午(午)の御膳(御膳)、
とさん(五山)困我國の五つの尼寺(尼寺)の
稱、護念寺(護念寺)檀林寺(檀林寺)惠林寺(惠林寺)

とさんちく(五三竹)困根の部に寄るにつ
れて、節(節)の極(極)めて短(短)くなる
竹の稱、
とさんのまり(五三桐)困紋所(紋所)の名桐の花
と葉(葉)を、三つ取り合せて描(描)きた
る紋(紋)のコトを云ふ、

(イ)イ)イ)

とし(輿)困肩(肩)にて擔(擔)ぎ行く乗物の
コトを云ふ、
とし(濃)困染色(染色)の善くしみてあり●
毛(毛)のむらがり生(生)じてあり●水氣(水氣)
少くして實質(實質)多くあり、假令(假令)ば酒が濃
しな●●ひつこし、しげし、
とし(腰)困腹(腹)の下の細くなつてる部
分●凡て長く立つてゐる物を、人の身に
喻(喻)えて、丁度(丁度)腰に當る邊(邊)の部分
のコトを云ふ、假令(假令)ば、あの樹は腰を折
(折)てるな●●山の麓(麓)の少しく上
の部分(部分)を云ふ●刀(刀)などな數(數)ふ

二〇四

二〇五

二〇六

二〇七

る語
とし(散子) 圍雙六(ハツシ)に用ゆるさいころ
のこトを云ふ。
とし(虎視) 圍鏡(ハシ)き眼球(マナ)にて物の
容子を眺めてるこト。大望(マシ)を抱き
て事の機會に乗せんと形勢を窺(カシ)ひ
居るこト。
とし(古史) 圍古の歴史(シ)。
とし(虎子) 圍さらの子。傾川を爲す具。
即ちおまるのこト。
とし(故紙) 圍古き紙。ほうご。
とし(誇示) 圍たかぶつてみせるこト。え
らばるこト。
とし(鼓師) 圍太鼓や鼓(ウツ)を打つ師匠(シ)
のこトを云ふ。「を云ふ」
とし(枯死) 圍樹木(キ)雑草のかれるこト
とし(互市) 圍こうえき。即ち貿易(マシ)の
こトを云ふ。
とし(五師) 圍僧侶の職名(シ)。
とし(願禱) 圍かへりみるこト。ふりかへ
つてみるこトを云ふ。
とし(吾子) 圍自分さ同等の位置の人を呼
ぶに用ゆる敬語にて、即ちきみ、あなた
ごへん。
とし(五時) 圍一時より數へて第五番目に
當る時刻のこト。

とし(越)(接尾) 或る語の下に附け加えて
物を越して爲すこト云ふ意を表はすに用
ゆる語。
とし(古詩) 圍漢詩(シ)の一體。絶句(クワ)
律詩(リ)の如く、句數(クワ)に制限なく
句毎に韻(ウツ)なふものみにて、文字の平
仄(ヘツ)に關係なき詩。
とし(古趾) 圍古(カ)ありたる建物の跡
(シ)古の建物の基礎(シ)石のこト。昔
のしるあとのこト。
とし(古事) 圍古(カ)ありたる事蹟。
とし(古時) 圍むかし。いにしへ。
とし(故事) 圍古(カ)より傳(ウツ)はり來れ
る關係因縁(シ)のある事柄(コト)。
とし(居士) 圍學識(シ)ありても官に仕へ
ず、野に在る人が自分の事を稱して云
ふ語。假令ば拙堂居士など。佛家にて
身分ありし男子の法名の下に附ける語
とし(兀子) 圍腰を掛る具。細長くして四
本足のある臺(シ)即ち床几(シ)の類の
こトを云ふ。
とし(午時) 圍午(ウツ)の刻。即ち午前と午後
の十二時のこト。
とし(估恃) 圍たよりにしたのみにするこ
ト。轉じて父と母と。
とし(固辭) 圍かたく斷(コト)はる、強(カク)て

辭退(シ)するこト。
とし(孤兒) 圍父母に離れたる子。即ちか
なしのこト。
とし(巾子) 圍冠(カ)の名所(マシ)即ち冠の
頂(ウツ)の所に高く突き出てる部分。
髪(カ)の髪(シ)を挿し入る處。
とし(五指) 圍五本の指(シ)。
とし(語次) 圍語(シ)のついで。言葉(コト)
ついでに云ふこト。
とし(あげ) 圍肩物(カ)に對しての稱
にて、衣服の腰の部に爲し置く、あけ
のこトを云ふ。
とし(あて) 圍腰(カ)の冷(シ)め爲めに其
の部へ當て、巻き付け置くもの、多くは
毛織物(カ)又は布(カ)に綿(ウ)を入れ
て製す。
とし(あん) 圍筒(カ)たる小豆(マシ)の
皮を去りて、製す上等の筒(シ)。
とし(いた) 圍腰(カ)の部の痛み。
とし(いた) 圍腰板(カ)の響(シ)の部に當る
所、縫(シ)ひ込んで置く厚紙(カ)のこ
ト。障子や垣(カ)屏(カ)などの下の方の
部分(カ)に、打ち付けてある板(カ)のこ
トを云ふ。
とし(いれ) 圍身分高き人の娘が嫁
(シ)に行く事を云ふ。

こし

こし

こし

七〇四

とし(あん) 圍孤兒院(カ)圍寄(カ)邊(カ)なき孤兒
(シ)を引き取つて世話(シ)するこト。
とし(五臭) 圍五つの臭(シ)のこト。即
ち檀、香、腥、焦、朽の五。
とし(いと) 圍小舅(カ)圍件れ添ふ夫の、兄弟(シ)
のこトを云ふ。
とし(いとめ) 圍小姑(カ)圍件れ添ふ夫の、女の
姉妹(シ)のこト。
とし(をし) 圍腰推(カ)しりをし。
とし(をし) 圍腰帯(カ)圍婦人が衣服をからげる
べく爲めに、帯の下に、細き腰紐(シ)
のこト。
とし(をし) 圍腰折(カ)圍老人さ爲つて腰のゆが
みしを云ふ。樹木の幹(カ)などの下の
方のまがつてるこトを云ふ。下手(カ)
な詩歌及び文章のこトを嘲(シ)けつて
云ふ。
とし(かし) 圍奥(カ)圍奥になひかく人(シ)駕
(カ)をかく人のこト。
とし(をし) 圍腰折(カ)圍上の句と下の句
のつり合つてゐぬ歌(シ)轉じて拙(シ)な
き歌のこト。
とし(かし) 圍腰掛(カ)圍腰ををろして休息する
臺即ち床几(カ)の類(シ)轉じて凡て間(カ)に
合せに爲すこトを云ふ。假令ば善き事
のあるまで腰掛(カ)に此れでもしやう

か類、
とし(かた) 圍來(カ)方(カ)圍すぎ去り來りしこトを
云ふ。即ちか、このこト。
とし(かた) 圍巾(カ)形(カ)圍門のまびらの双方の
開かぬやうに、まびらの中央(カ)に當
る地面に挿(シ)し入れ置く杭(シ)のこト
を云ふ。
とし(かた) 圍車輪の中央に在る、太き圓
きもの、其の周圍(シ)より矢(シ)が出て
る即ち五光(カ)の心(シ)。
とし(かた) 圍圓形の蒸籠(シ)。
とし(かた) 圍むかしの儀式いにしえの
かた。昔のしきたり。
とし(かた) 圍五色(カ)圍五つの染色即ち黑白赤黄
青のこトを云ふ。
とし(かた) 圍食物を他人に頼(シ)み乞
ふて生きてる劣等の人。
とし(かた) 圍腰巾着(カ)圍腰へブラ下げ
て歩くきんちやく。轉じて常に其の人
に付き添ふて人。
とし(かた) 圍腰車(カ)圍相撲(カ)などにて、
腰がうきて相手の、つきに、こたゆる能
はざるさまを云ふ。
とし(かた) 圍白帶下(カ)圍病名子宮病の一種にて
白き鼻汁(カ)の如き物の産道(カ)より
流れ出る病氣。

とし(かた) 圍動(カ)すれくれる。悪くすれ
る。根性(カ)がゆがむ。
とし(かた) 圍腰衣(カ)圍僧侶が腰に巻く袴の
如き物の稱。
とし(かた) 圍腰提(カ)圍帯(カ)にブラ下げて持
ち歩く煙草入(カ)のこト。
とし(かた) 圍腰挿(カ)圍腰へ挿して持ち運ぶも
の。矢立(カ)のこト。
とし(かた) 圍腰挿(カ)圍腰板のある紙障
子のこトを云ふ。
とし(かた) 圍後生(カ)圍死したる後の安樂(カ)を
云ふこト。即ち後生願ひなど。他人に
向つて物事を切(シ)に頼(シ)むこトを云
ふ。
とし(かた) 圍小姓(カ)圍位高く身分重き人の側
(カ)に仕へて小用を辨(シ)する少年のこ
トを云ふ語。
とし(かた) 圍貴人の乗物(カ)の側
(カ)に付き従ふこト。又は其の人、
とし(かた) 圍漢方(カ)の病名、舌(カ)に生ず
る一程の腫物(カ)舌痛(カ)の如きも
のを云ふ。
とし(かた) 圍奥臺(カ)圍奥を下へ置く時に載せ
る臺、低(カ)き床几(カ)の如き形をなせ
るもの。
とし(かた) 圍腰高(カ)圍物の腰に當る部の高き

こし

こし

こし

七〇五

コトを云ふ。腕(ウデ)の腰の部の高く作(ツクリ)られてあるもの、即ちたかつきの類(ルイ)としち(越路)固北海道(ツルカ)の古(コ)の類(ルイ)名稱なりと云ふ。
としつ(固執)固自己の考を固守して、他に心を移(ウツ)さぬコト。
としつ(痼疾)固頑固(ツツ)なる病氣(ヤミ)を云ふ。
としつ(故實)固昔時に用ひられたる法律(ホウ)及び諸種の儀式(ケイシ)。
としつ(腰付)固歩く時の腰の容子を云ふ。腰のかつこ。
としつ(牽強)固道理に叶(カ)はぬコトを、叶(カ)ふやうに無理に云ひまくるコトを云ふ。
としなげ(腰投)固相手の鉢を自分の腰にて支(サ)え、鉢をかはして投げつけるコトを云ふ。
としは(小敷)固細(コ)かき被(カ)ひ。
としは(小柴)固細(コ)し、

としは(腰張)固壁(カ)の下の方へ紙を貼り、又は唐紙(カラミ)の下へ別の紙を貼るコトを云ふ、又は其の物。
としは(腰文)固矢文(ヤ)の物。
としは(小潮)固満潮(ミツシホ)の量(リキ)の、殊に低(ヒカ)き時の事を云ふ、即ち陰曆の七八日頃、二十四五日頃の潮(シホ)の物に云ふ。
としは(小四方)固三方(サウ)の一種にて、脚(タ)の四方共に圓(マ)き穴(アナ)のあるものを云ふ。
としは(腰細)固腰の周圍(ウヅマ)の細(ホソ)キコトを云ふ。美人の腰の形容(ケイヨウ)して云ふ語。
としは(腰骨)固腰の部にある骨(ハネ)の物。轉じて忍耐力(ニシヤク)あるコトを云ふ語。
としは(小島)固形の小さき島。
としは(腰巻)固下腹(ゲ)より足(タ)へかけて、巻(マ)き附けて置く布(ヌ)の、即ちゆまきのコト。土藏(ツツ)の下部の周圍に、土を一段餘計(ヨリ)に塗(マ)り付けあるものを云ふ。
としは(腰袋)固袋(フクロ)にて作りたる物、腰の周圍に巻き付るもの。
としは(腰裳)固古の禮服の一種にて、腰

につけるもの袴(ハカマ)の一種。
としは(腰元)固腰の周圍(ウヅマ)の物に云ふ。貴人のお側(サ)に仕(シ)めて小用(コヨウ)を辨(シ)する女中のコト。
としは(古社)固古くからある神社、古くに建(タ)られたる神社。
としは(誤寫)固まちがって寫(カ)すコト、即ちうし損(ウシヒ)ひ。
としは(管者)固盲目(メクラ)めくら。
としは(五車)固故事にて、書物を澤山に持(テ)てること云ふコト。
としは(古松)固年代を経(シ)たる松の老木のコト。
としは(古城)固古くからある城(シロ)の、
としは(呼稱)固腰かけの物、
としは(呼稱)固よび、さなへる、さなへるの物に云ふ。
としは(誇稱)固えらばつて云ふ。物事を實際(ジツ)より大きく云ふ。
としは(孤城)固人里(ヒト)より離(カ)れた處に築(ツキ)かれたる城。敵(テキ)に圍(ツク)まれて一本立(ヒトツツ)となりたる城の物に云ふ。
としは(五情)固喜、怒、哀、樂、欲、の五つの情を云ふ。
としは(小箱)固知らざるに知つてる風

(ウ)を爲すコト、えらばり、たがるコト、生意氣(シヤウキ)。
としは(詔釋)固言葉(コトバ)の意義を解き明したるコト。
としは(五爵)固五等爵の物にて、公侯伯子男の物。
としは(基將)固圍碁(イ)と將碁(カ)の物に云ふ。
としは(五常樂)固雅樂(カ)の曲(キョク)の名稱。
としは(小上藤)固昔時大臣參議(シヤウシヤウ)などの高官の娘の宮中に入りて、女官となりし人の物に云ふに用ひし語。
としは(孤城落日)固勢(セ)ひ盡きて、助なく陥(クワ)つて居る城の物に云ふ。
としは(腰湯)固腰まで湯(ユ)に入れてぬくめるコト。
としは(古主)固ふるき主人舊(コ)く仕へたる主人の物に云ふ。
としは(古酒)固新酒に對しての稱にて、去年つくりたる酒。
としは(戸主)固一家を整理(ツクリ)する主人公(シヤウシヤウ)の物。
としは(固守)固かたく守るコト。

としは(御酒)固酒の敬語。
としは(扈從)固貴人のお側(サ)に附(ツ)き從(ツ)ふコト、又は附(ツ)き從(ツ)ふ人。
としは(腰結)固貴人の袴(ハカマ)を着(キ)させらる、時に其の紐(ヒモ)を結(ムス)ぶ役(シヨク)の人の物に云ふ。
としは(孤峻)固山の峰(ミネ)のきばだつてけはしく峻(ツツ)へたる状(シヤウ)に云ふ語。
としは(御守殿)固徳川時代(トクヱン)に三位以上の位(イ)を有(ユ)る大名へ嫁入(カ)りたる將軍の娘の稱、又は其の娘のある御殿の物。御守殿(ミモリ)に仕(シ)へたる女中の稱。
としは(御朱印船)固昔時將軍家より許されたる船として朱印(シヨウイン)の捺(シ)れたる海外貿易船の物。
としは(古書)固ふるき書物。古の事を記したる文書(モンシ)。
としは(御所)固宮中(ミヤナカ)の物。隱居(インコ)せし將軍の物に云ふ。
としは(胡椒)固さうがらしの物。熱帯地方(ネッパル)に産する草の名、其の種(タネ)を乾(ヒ)かしたる物を云ふ、色は赤黒くして味は辛(カ)い。
としは(故障)固さわり、じやま、さしつかへの物に云ふ。

としは(五讀)固双方(ツツ)互(タ)ひにゆづり合ふコトに云ふ。
としは(五常)固人の守るべき五つの道。即ち仁、義、禮、智、信の物。
としは(誤植)固活版の文字を間違(まちが)えて植(ウ)たる物。
としは(古色)固古き有様、古びれる容子の物に云ふ。
としは(御所殿)固刀の名きくさく又はきくつくりの物。
としは(御所車)固昔時身分の高き人の乗りし牛車(ウシクルマ)。
としは(御書所)固昔時の職名、皇室の御藏書(ミツツキ)を保管する役。又は其の役所の稱。
としは(摺)固物をさしぬるコト。つくり爲すコト。鉢裁(ハチザイ)をかざるコト。欺(ウソ)きまそほふ。
としは(摺)固摺(シ)のへる、つくる。まねする。鉢裁(ハチザイ)をかざる。よくみせる。目前(マタマタ)だけを、ていさいます。
としは(鑷)固刀の鞘(サヤ)の柄(ツグ)又は鑷(ハサミ)などの柄(ツグ)の端(ハシ)の物に云ふ。
としは(小後)固物事の終り。

としは(こし)

としは(こし)

としは(こし)

としは(こし)

こじる(括) 固動れじてまげる

こじりぬく 固く取り取る

こじん(古人) 固むかしの人

こじん(故人) 固死したる人

こじん(個人) 固官職(シヨウ)などに關係(ケツ)なき我れ一身云ふ意味

こじん(護身) 固自己(ジ)の身の廻(マワ)を守り防ぐコト

こしん(五辛) 固五つの辛味(カラ)ある野菜(ヤサ)云ふコトにて、ニラ、ニンニク、ラッキョ、ネギ、ハジカミの稱

こしん(孤臣) 固主君をうしなひたる家來主君に離(わか)れたる臣下のコトを云ふ

こしん(湖心) 固湖水(ウミ)の中央(ナカ)の部(ハ)の部(ハ)の部(ハ)を云ふ

こじん(吾人) 固自分(ワラシ)我々(ワレ)わがこもがらのコトを云ふ

こじん(胡人) 固えびすの人

こしん(護身符) 固守(マモ)り札

こしん(御神造) 固中流(ナカ)の人の妻女をうやまひて呼ぶ語

こしん(護身刀) 固我が身を保護する刀(ヤタガヒ)

こしんとら(御神燈) 固神にさぐる燈明

こす(鼓) 固動つらみや、太鼓(ウタ)などを打ち鳴らす

こす(越) 固動(コ)ゆに同じ

こす(濾) 固動又た濾の文字をも用ゆ、物を細(コ)かき隙間(マ)より通して、實(コ)と滓(ヌ)をこらして選(チ)り分る

こす(期) 固勸(カ)あらんこ前より心に電悟(カ)する

こす(吳須) 固繪具(カ)の名、漆器(カ)類に青き模様(カ)を表はす時に用ゆる物

こす(支那製) 固陶器の名にて青色又は、赤色を帯びたる物、一に吳須焼とも云ふ

こす(ゴス) 固黒青色の砂(カ)の如き鑛物(カ)を原料として、焼(カ)きたるものなりと云ふ

こす(湖心) 固みづうみ

こす(鼓吹) 固勢(カ)をつけて奮發(カ)するコト

こす(音楽) 固自分の意見を述べ、て人々の賛成(カ)を求むべく骨を折るコト

こす(午後) 固ひるれるコト、即ちひるれ

こす(戸敷) 固家のかす

こす(箇數) 固一つづつの數(カ)

こす(語數) 固文句の數、言葉の數

こす(檜) 固立木(カ)の頂上、即ち木の上のはし

こす(杵) 固木にて作りし勘(カ)

こす(小杉) 固小さき杉の木

こす(小薄) 固細き薄の部(ハ)の部(ハ)の部(ハ)を云ふ

こす(濃墨) 固濃(コ)く摺(カ)し墨汁

こす(粉炭) 固炭の粉になつた物

こす(擦) 固こするコト

こす(擦) 固動物と物をすり合す

こす(後世) 固のちの世の部(ハ)の部(ハ)の部(ハ)を云ふ

こす(御前) 固昔時身分ある婦人の名の下に、附け加へたる語

こす(賢女) 固盲目(カ)の婦人が、三味線(カ)などを彈で、人家の軒(カ)に立て鐘

こせい(個性) 固人々別々に具はつる性質(カ)の部(ハ)の部(ハ)を云ふ

こせい(悟性) 固物事の道理をささり得る智識(カ)の部(ハ)の部(ハ)を云ふ

こせい(願省) 固我れと我が身をかへりみるコトを云ふ語

こせい(小勢) 固人數(カ)の少なき

こせい(故樓) 固古(カ)き住宅、以前の住居(カ)の部(ハ)の部(ハ)を云ふ

こせい(孤栖) 固世を棄てたる人が山林中などに住むるコト

こせい(五聖) 固支那の昔の五人の聖人、即ち神農、堯、舜、禹、湯の五人

こせい(語勢) 固言葉の容子、即ち語氣(カ)の部(ハ)の部(ハ)を云ふ

こせい(語聲) 固話し(カ)の聲、言葉(カ)の部(ハ)の部(ハ)を云ふ

こせい(五星) 固五つの星、即ち木、火、土、金、水の五つの星

こせい(互生) 固草木の葉の生(カ)方、即ちたがひちがひになつて、生(カ)てるコトを云ふ

こせい(古跡) 固昔時に物事のありたる場所のあと、舊蹟(カ)の部(ハ)の部(ハ)を云ふ

こせい(古昔) 固むかしのコト、ふるきコト

こせい(戸籍) 固戸數(カ)及び其の家の人々の身分の部(ハ)の部(ハ)を云ふ

こせい(五絶) 固漢詩の五言絶句(カ)の部(ハ)の部(ハ)を云ふ

こせい(五節會) 固五つの節會の部(ハ)の部(ハ)を云ふ

こせい(五節句) 固五つの節句の部(ハ)の部(ハ)を云ふ

こせい(五攝家) 固昔時の五つの攝家の部(ハ)の部(ハ)を云ふ

こせい(近衛) 固一條、二條、鷹司(カ)の部(ハ)の部(ハ)を云ふ

こせい(後攻) 固本隊の後に在りて、イザ

こせん(古銭) 固昔時に通用なしたる一二文錢(カ)の部(ハ)の部(ハ)を云ふ

こせん(活洗) 固陰曆の三月の別名

こせん(互選) 固仲間の人々が仲間の人を互(カ)に投票して、選ぶコト

こせん(午前) 固朝(カ)より十二時まで又た夜(カ)の十二時より盡(カ)の十二時までの部(ハ)の部(ハ)を云ふ

こせん(御前) 固位の高き人のコトを云ふに用ゆる語

こせん(御前) 固天皇(カ)の御座所(カ)の部(ハ)の部(ハ)を云ふ

こせん(御膳) 固三度の食事の部(ハ)の部(ハ)を云ふ

こせん(御選座) 固神の鎮座(カ)の部(ハ)の部(ハ)を云ふ

こせん(御選座) 固神の鎮座(カ)の部(ハ)の部(ハ)を云ふ

こせん(御選座) 固神の鎮座(カ)の部(ハ)の部(ハ)を云ふ

こせん(御選座) 固神の鎮座(カ)の部(ハ)の部(ハ)を云ふ

こせん(御選座) 固神の鎮座(カ)の部(ハ)の部(ハ)を云ふ

こせん(御選座) 固神の鎮座(カ)の部(ハ)の部(ハ)を云ふ

こせん(御選座) 固神の鎮座(カ)の部(ハ)の部(ハ)を云ふ

こせい(古昔)

こせい(後攻)

こせん(古銭)

七〇九

こせん、こそて 刮、操、擧
こせんぢやち(古戰場)固以前に戦争をなしたる其の場所の稱。

(一六三)

こそ(去年)固昨年、前年、
こそち(鼓譟)固樂器をならして、騒(ワ)ぐコトを云ふ。
こそち(呼譟)固よびたつるコト、聲を立て、騒ぐコト。
こそち(小僧)固年のゆかぬ僧侶(丁稚(チヂ))の科ト凡て年のゆかぬ男子をあさけつて云ふ語。
こそく(姑息)固其の場のがれ、一時の間合せの科ト。
こそく(古俗)固昔の風俗、古(コ)のしきりの科ト。
こそく(刮)固こまかくけづる、
こそく(擦)固(腕)の下や咽喉などに手をそえて、一種の感(カ)を起(オ)させる。
こそく(御息災)固他人の平穩無事を敬ふて云ふ語。
こそつて(擧)固のこらす、こそここく、こそで(小袖)固絹(ニ)の綿入の綿稱(小)さき袖の衣物。

こそて、こそん

こそでまく(小袖褌)固昔(コ)男女が花見を爲す時に、着用の小袖を脱ぎ、袖へ紐(ヒ)を通(ト)して、褌の代用となせし物の稱。
こそでわた(小袖綿)固綿の衣物に入れる上等綿の科ト。
こそめ(濃染)固こく染めたる色。
こそめ(粉染)固粉の繪具を用ひて、染(シ)たる物。
こそめ(濃染草)固ほき(萩)、
こそめつき(木染月)固秋に入りて木の葉の色を染め初む頃と云ふ意にて、陰曆の八月の別名。
こそりば(小反刀)固形(コ)の小さき薙刀(ハ)の科トを云ふ。
こそる(擧)固動のこらすそるふ、皆なあつまる、十分にこい、なふ。
こそる(擧)固動(コ)く一まじめにする殘らず引きつれる。
こそん(小村)固邊鄙(ヘン)な土地に在る村里(ム)の科トを云ふ。
こそん(孤村)固片田舎のさびしき村(コ)片田舎の科トを云ふ。

(一六四)

こたひ

こたひ(固體)固物理学上の語、液體(コ)氣體に對しての稱、凡て形を具(シ)へて固くかたまつてゐる物體。
こたひ(個體)固別々になつてゐる物、一つ一つに分れてゐる物。
こたひ(故態)固以前のすがた、もそのまの科トを云ふ。
こたひ(古體)固むかしの有様、むかしのひきたりの科ト。
こたひ(古代)固むかしの世(コ)ふるめかしかき事から、
こたひ(五體)固頭と手と足と胴との稱にて身軀と云ふコト。
こたひ(誇大)固一寸(コ)とした事を、矢(ヤ)鰐(コ)に大きく云ひ立てる(コ)自慢(コ)するコト、たかぶるコト。
こたひ(小調)固調の小さき物。
こたひ(小太鼓)固太鼓(コ)に對する稱、ワタ型(コ)に爲つてゐる臺(コ)の上(コ)に載せ、下に置きて打く小形の物。
こたひ(五大洲)固ヨーロッパ、アジア、アフリカ、南アメリカ、北アメリカの地球上の五個の大陸。
こたひ(御大層)固俗語、小さな物事を大袈裟(コ)に云ふコト。
こたひ(五大力)固和船の一種、荷物

こたひ(古刀)固ふるき刀、
こたひ(胡桃)固木の名くるみの科ト、
こたひ(孤島)固海洋中の離(リ)れ島(コ)、
こたひ(古道)固古(コ)よりある道路、
こたひ(小道)固狭(コ)き道、細き道路、
こたひ(悟道)固佛法の道をささる、
こたひ(虎鞆)固虎(コ)の皮にて作りたる、刀を入れる袋(コ)、
こたひ(小道具)固細々しき道具類(コ)芝居にて舞臺の道具建(コ)に用ゆる道具以外の物、即ち役者が舞臺で用ゆる細かき道具、
こたひ(小道具方)固芝居にて小道具のみを取り扱(カ)ふ道具方の科ト、
こたひ(五島鰐)固鰐の最上等にて五島沖にて漁る鳥賊(コ)にて製せしもの、
こたひ(小高)固こもりき高し、少し

こたひ、こたか

こたか、こたひ

く高(カ)し、

こたか(木高)固樹木の高く峙(シ)てるさまを云ふ、
こたか(小鷹狩)固秋季に於て、鷹狩を爲すコト、小鷹狩(コ)の科ト、
こたか(小鷹紙)固小判の積紙(コ)の科トを云ふ、
こたか(古澤)固年数を經たる、其のまごの色つやの科トを云ふ、
こたか(御託)固物事をひつこく云ふコトくだなまくコト、
こたか(木匠)固大工(コ)や指物師などの職人の科トを云ふ、
こたか(五濁惡世)固佛語にて風俗の惡しく爲りて、衰(シ)えたる世の中と云ふ意、
こたか(小出)固便利の爲めに、多くある中より、少しく別に取り出して置くコトを云ふ、
こたか(木立)固樹木の立ち並んでゐるコト林(コ)の科ト、
こたか(子達)固子供衆(コ)、
こたか(小刀)固細く短かき刀、
こたか(御達)固婦人方(コ)、
こたか(火燧)固又た炬燵とも書く、寒中に火を入れて、足を暖(カ)む用を爲す

こたひ、こたふ

七二

もの、木製と土製とあり、

こたひ(誤脱)固文字を書き損(コ)れたるコト(コ)文章中の文字を氣附(コ)すしてぬかしたるコト、
こたひ(混擾)固又た混雜とも書く、物事の入り亂(カ)れるコト、
こたひ(混亂)固もめて物事の治(コ)まらぬ、もめる、
こたひ(炬燵)固炬燵の上に置きて、布圍(コ)を掛(カ)る爲めの用を爲す、木にて作(コ)りたる物、
こたひ(小楯)固問(コ)に合せの楯、假令ば有合ふ古木を、小楯とせしなど、
こたひ(蠶棚)固平籠(コ)などに入れたる蠶を載せて置く棚、
こたひ(子種)固子なるべき元子(コ)、精出(コ)の科トを云ふ、
こたひ(蠶種)固かひこの玉子、
こたひ(粉煙草)固刻(コ)み煙草の、こすれて粉となつた物、
こたひ(小束)固小形(コ)にたばねたる物小さくなせし束(コ)、
こたひ(答)固返事する。あいさつする(コ)むくゆる(コ)ひやく、
こたひ(御多分)固物の多きコトを、敬(コ)ふて云ふ語、

こたふ、こたん 堪、應

とたふんれん(御多分連) 固良否(カシ)に拘はらず、多数の人の意氣に、同意する連中のコトを云ふ、

とたへる(堪) 固動もちこたへてる(も)もちささへてる(も)たもつてる、しんぼうしてゐる、

とたへる(應) 固動かんじる(も)むくゆ(も)しるしある(も)其の通りにす即ち應(カシ)す、

とたま(小玉) 固小玉(カシ) 昔の銀貨の名小粒の銀のコト、

とたま(木靈) 固山びこのコト(樹木の精神(カシ)のコトを云ふ、

とたませ(混合) 固種々(カシ)の物を混(カシ)りて一つになすコト、

とたま(小玉) 固銀を豆粒(カシ)ほどの大きに爲したる物、徳川時代の通用銀の稱、

とたん(後段) 固おわりの段、つぎの段、

とたん(後談) 固後(カシ)の話(も)あさまわりの物語り、

とたん(小單筒) 固小形(カシ)の單筒、

とたん(小旦那) 固俗語にて、若旦那(カシ)の、コト、

(カバ)ち

こち、こちの 籠

こち(籠) 固魚の名、大き五六寸より、二尺内外あり、鉢扁平にして、頭(カシ)大きく口廣く、尾に至りて細く爲る、脊は濃き灰色にて、腹は淡黄色を呈す味美なり、

こち(東風) 固東の方より、吹き來れる風のコトを云ふ、

こち(故智) 固古の人の爲したるはかりこと。ふるきかんがえ、

こち(此方) 固この方、こちら、

こち(護持) 固まもりゆくコト(祈禱(カシ)のコトを云ふ、

こち(胡竹) 固竹にて作りたる笛(カシ)笛を作るに用ゆる竹のコト、

こち(五畜) 固五種の家畜類を云ふことにて即ち鶏(カシ)羊(カシ)牛(カシ)馬(カシ)豚(カシ)の、コトを云ふ、

こち(御馳走) 固馳走の、敬(カシ)ふて云ふ語、

こち(御馳走) 固御馳走政略(カシ)固自己(カシ)の希望(カシ)を他人に承知さすべく爲めに御馳走(カシ)をして其の機嫌(カシ)を取るコト、

こち(護持僧) 固高位高官の人の爲めに佛に祈願(カシ)を爲すを職(カシ)とせざる僧侶(カシ)の、コト、

こち(此方) 固俗語にて妻が伴

こち(添ふ夫) 固(カシ)の、コトを云ふに用ゆる語、

こち(古茶) 固新茶に對しての稱にて、去年製したる茶の、コト、

こち(粉茶) 固葉茶の粉となりたる物の稱。茶の粉(カシ)、

こち(此方) 固われ(我)こなた、

こち(戸長) 固町長又は村長のコトを云ふ、

こち(伍長) 固五人を一組(カシ)となしたる其の頭(カシ)即ち五人組(カシ)の長のコトを云ふ、

こち(誇張) 固物事を實際(カシ)より、大きくなし、又は云ふコト、

こち(固着) 固物が物に固(カシ)くついているコト(其の土地に於て他へ行ぬコト、即ち土着(カシ)、

こち(戸長) 固(カシ)役場の、コト、

こち(壺中) 固壺(カシ)の中、

こち(個中) 固此の内(カシ)、範圍内(カシ)の、コトを云ふ語、

こち(孤忠) 固忠義(カシ)なる者は、我れ一人だけと云ふ意、我の忠義を扶(カシ)くる者なしと云ふコト、

こち(孤注) 固のすかせるか最後(カシ)

の勝敗(カシ)を決(カシ)するコト、賭事(カシ)に就て云ふ語、

とち(古注) 固古代の人が爲したる書物の注釋(カシ)、

とち(五重塔) 固五つ屋根を重(カシ)ねて作りたる塔、

とち(小女郎) 固小娘(カシ)、

とち(此方) 固このほう、こなた、

とち(後陣) 固本隊の後方に、控へたる軍隊、豫備隊の、コト、

とち(五塵) 固佛法の語にて、色(カシ)聲(カシ)香(カシ)味(カシ)及び香(カシ)の五つの、感(カシ)、味(カシ)及び香(カシ)の五つの、慎む(カシ)コトを云ふ、

(カバ)ち

とち(忽) 固たちまち(も)にわか(も)きふ(も)ゆる(も)かせにする(も)なくなる(も)つきる(も)ほる(も)うしなふ、

とち(物) 固夜明(カシ)の、コト、

とち(鷗) 固鳥の名、くまだか、

とち(机) 固おちつかぬ、おだやかならぬ危(カシ)ふき状(カシ)、

とち(兀) 固はげたる状(カシ)高きかたち(カシ)なる状(カシ)あやふし、

とち(屹) 固物事に精(カシ)を出すコト(骨(カシ)を折りて働きて疲(カシ)れたる容子のコトを云ふ、

とち(惚) 固思を寄せる、即ちほる。ほれる(も)ぼんやりせる。くらし、

とち(措) 固にごすコト(擲(カシ)るコト(カシ)精を出す。はたらく、

とち(帆) 固山の高く峙(カシ)へたる状(カシ)秃山(カシ)の容子を云ふ、

とち(汨) 固沈(カシ)める。投げ込む(も)つうすみだれる(も)波(カシ)の聲、

とち(拍) 固たをす、ころがす、

とち(笏) 固位高き人が、和装(カシ)の禮服(カシ)を着(カシ)し時に用ゆる、木製の細長き物即ちしゃく、

とち(忽) 固小數の名、一絲の十分の一、即ち一の十萬分の一の、コト、

とち(骨) 固身軀の基礎(カシ)を作つてる、ほれの、コトを云ふ、

とち(牛頭) 固佛法の語地獄にある獄卒の、コトを云ふ、

とち(骨上) 固火葬(カシ)に行ひたる人の、骨(カシ)を拾(カシ)ひ上ぐるコト、

とち(忽焉) 固つかぬま、たちまち、にわかなるコトを云ふ語、

とち(骨桶) 固死者の焼(カシ)きる骨を入れる小箱、

とち(國家) 固其の國と公私の人民と云ふコトで即ちくにをなしてゐるコトを云ふ、

とち(小柄) 固脇差(カシ)の鞘(カシ)の上部に縦(カシ)に箆(カシ)めこまれある小刀(カシ)の如きもの、稱、

とち(刻下) 固今の時、即ちいま、近頃(カシ)、此のころの、コト、

とち(小使) 固細々(カシ)せる用事に、召し使(カシ)はれる男の、コト、

とち(乞巧) 固こじきの、コト、

とち(小遣) 固細々せる物を、買ふべく用ゆる金銭の、コト、

とち(骨格) 固ほれぐみ、骨の組み立の容子(も)身軀のありさま、

とち(骨柄) 固身軀の容子、身軀の組み立て工合の、コト、

とち(國旗) 固其國を代表する印(カシ)として、特定(カシ)されたる旗、我國にては日の丸の印(カシ)のもの、

とち(國基) 固國家のいしづえ、

とち(小机) 固小き机(カシ)、

とち(小作) 固作(カシ)り方の小きなるコト(形(カシ)の小なる、コト、

とち(小附) 固重き荷物の上に附け添へたる小きき荷物(カシ)の重(カシ)な

こち、こちの 籠

こち、こちの 籠

こち、こちの 籠

るコトを云ふ、
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト

とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト

とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト
とつばい(滑稽) 図おどけ、たばむるコト

いっし、いっし

いっし、いっし

いっし、いっし

七十四

俗語にて取るに足らざる人をあざけつて云ふ語、
とつばい(骨牌) 図かるたのコト、
とつばい(骨盤) 図左右の臀部(お尻)を指して云ふ、大なる骨を云ふ、
とつばい(骨拾) 図火葬(お焼)に附したる人の遺骨(お骨)を拾ひ取るコト、
とつばい(小粒) 図昔の銀貨の名にて、一朱銀又は二朱銀のコト、丸く細かき粒のコト、丈(お)の低き人を嘲(あざ)けて云ふ語、
とつばい(子壺) 図子宮の一名、
とつばい(小寝) 図女子が一寸(お)寝をからけてるを云ふ、
とつばい(骨膜) 図骨の周囲(お)を包んでる薄き皮のコト、
とつばい(骨膜炎) 図骨を取巻いてる皮に熱を以て痛む病氣、
とつばい(後詰) 図本隊の後に控へてる軍勢(お)を、即ち豫備軍隊(お)のコトを云ふ、
とつばい(小面) 図顔の事を鄙(あ)しみて云ふ語、假令ば小面がにくぬ、
とつばい(小面情) 図人の舉動(お)の癡(お)に觸(お)るコトを嘲(あ)けて云ふ語、

とつばい(骨立) 図骨の立つてるやうすこと云ふ意にて、非常(お)に瘡(お)てる事を云ひ表はす語、
とつばい(兀立) 図禿山(お)などの高く峙(お)へてる状を云ふ、
(いばりて)
とつばい(鏡) 図道具の一種鏡を玉子形に平(お)らに延して、其の面(お)を滑(お)にし、其れに鏡の細き柄(お)を附け、其の持つ所に木を柄(お)たる物、用ひ道に依りて、大小種多あり、左官が壁(お)を塗るに用ゆる物、衣服の裁縫(お)に用ゆる物、二種あり、
とつばい(持手) 図すぐれて物事の出来る人、
とつばい(籠手) 図草(お)にて作りたる物にて、手より腕(お)へ柄(お)る一種の手袋(お)の如き物、弓を射る時、擊劍(お)を使ふ時に用ゆ、
とつばい(後手) 図敵(お)に先(お)を越されて、受身(お)と爲るコトを云ふ、
とつばい(固定) 図其の處にあつて動(お)かぬコト、居すばりのコト、「呼ぶ語、
とつばい(御亭) 図俗語、他人の亭主(お)をこていしゆ(御亭主) 図町家(お)の主人を

呼ぶ語、他人の妻に向つて夫(お)を呼ぶに用ゆ語、
とつばい(固定) 図固定資本(お) 図流通資本に對しての稱にて、土地家屋田畑器械等の不動産を云ふ、「同じ、
とつばい(語調) 図言葉の調子即ち語氣(お)、
とつばい(五條) 図五個の條(お)のコト、僧侶の用ゆる法衣の一種五巾(お)の布(お)にて製したる袈裟(お)衣(お)のコト、
とつばい(五調子) 図音楽(お)の調子(お)の五つの區別のコトを云ふ、
とつばい(小朝拜) 図昔時宮中に行はれたる儀式の名、朝拜を略して行はる、時に用ひらる儀式にて、御所のお庭にて拜する禮、
とつばい(故徹) 図しきたり。もさ。あさかた。先徹(お)のコト、
とつばい(胡蝶) 図ちようちようの科ト、
とつばい(胡蝶舞) 図舞(お)を云ふ、
とつばい(胡蝶夢) 図故事にて人生の

いっし、いっし

いっし、いっし

いっし、いっし

七十五

ことば、ことば、言、事

果敢(カウ)なきコトを云ひ表はす語、
ことばむすび(胡蝶結) 図紐(ヒモ)の結び方
の一種にて、蝶の翅(ウエ)を廣(ひろ)げたる
如き状(カタチ)に、輪(ワ)を二つ相交(まじ)りて並
(なら)べたる如く結びし物。
ことば(古點) 図古の人(カ)が、施(ホ)したる
漢文の訓點(クニ)のコト。
ことば(古典) 図古の事柄(カ)を記したる
書物(カ)古の儀式(カ)作法(カ)。
ことば(語典) 図國語(カ)字典(カ)節用(カ)字
典(カ)などのコトを云ふ。
ことば(誤傳) 図云(カ)ひ傳(カ)えたる事柄(カ)
のまちがつてるコト。
ことば(いし) (御殿醫者) 図昔時(カ)幕府(カ)
又は大小(カ)に抱(カ)られてゐた醫者(カ)
の、コト。
ことば(ち) (御殿女中) 図宮中(カ)に仕
(カ)へてる官安(カ)華族(カ)方(カ)の
典(カ)の用事を爲す女中(カ)の、コトを云
ふ。
(一) (カ)

ことば、ことば、琴

こと(故部) 図もこのみ、
こと(琴) 図樂器(カ)の一種、桐(カ)の板にて、
内(カ)を空(カ)にせし細長(カ)き薄き箱の
如き物を作り、其の表面に普通、絃(ヒ)
を十三條(カ)張りて、爪(カ)を箝(カ)て
彈(カ)する物。
こと(糊塗) 図物事を胡麻化(カ)して置く
コト、テキパキ事を爲ぬ。
こと(あげ) (言擧) 図或る物事を、特(カ)に取
り立てて、彼れ是れと云ふ。
こと(さ) (琴絃) 図琴の糸。
こと(い) (言忌) 図或る言葉(カ)をいやが
りて、云はぬコト、假令(カ)ば死の字を忌
(カ)むかの類。
こと(孤燈) 図暗中(カ)に只だ一つ點
(カ)つてる燈光(カ)の、コト。
こと(小) 図つづみのコト。
こと(心藏) 図動(カ)心(カ)の類、
こと(古) (梧桐) 図木の名、あをきり、
こと(御) (御燈) 図神佛(カ)に供(カ)ふる、みあか
しのコトを云ふ。
こと(返) (言承) 図承知(カ)したと云ふコトの
返事(カ)の、コトを云ふ。
こと(た) (琴歌) 図優美(カ)なる俗謡(カ)の

ことば、ことば

の一種、琴の調(カ)に合して、唄(カ)ふ
唱歌(カ)の、コト。
こと(御) (御前) 図おたがひ、
こと(後) (後藤影) 図刀(カ)の編(カ)に
在る金物(カ)に、爲したる影物(カ)の
仕方(カ)の名、美濃(カ)の國の後藤(カ)の
(カ)と云ふ人の、始めて影(カ)しより此
名ありと云ふ。
こと(後) (後藤者) 図後藤影(カ)の仕方(カ)
に依りて、影(カ)りたる金物。
こと(食) (食言) 図約束(カ)を守らぬ。云ふ
た通りにせぬコト。
こと(異) (異方) 図他の所のコト。
こと(事) (事柄) 図事の次第、物事の容子
(カ)。
こと(事) (事切) 図一つの物事が終りにな
るコト。人の生命(カ)の切れるコト、
即ち死去(カ)の、コト。
こと(五) (五徳) 図火鉢(カ)の灰(カ)の中に入れ
て、土瓶(カ)鍋(カ)などを載せる具、鐵
又は陶器にて作られたる、輪形(カ)に
三本足、又は四本足の附けられあるも
の、稱。
こと(鼓) (鼓獨) 図みなしこ、ひまりもの
コト。轉じて助けのなき人、
こと(言) (言種) 図云ひぐさ。

こと(英) (英國) 図外國(カ)の、コト。
こと(事) (事毎) 図事のあるたび。事(カ)又
た事の、コトを云ふ。
こと(集) (集所) 図圍碁(カ)の集會所。
こと(悉) (悉) 圖在(カ)ん限り、みんな、
の、こらす、くわしく。
こと(事) (事細) 図物事の委しきコトを
云ふ。めんみつたるコト。
こと(異) (異様) 圖ことなりたる容子。ち
がひたる有様(カ)。
こと(殊) (殊更) 圖さくべつ、わざと
とりわけて、格別(カ)に。
こと(殊) (殊更) 圖取り分けて、特別(カ)
の、に、わざとに、格段(カ)に。
こと(如) (如) 圖物事を互ひに比(カ)べて相
似たりと云ふ意を表(カ)はすに用ゆ
る語。
こと(今) (今年) 本年、この年、
こと(琴) (琴師) 圖琴を製造する人、又は琴
を修繕する人。
こと(事) (事知) 圖種々の物事を能く知つ
てるコト、又は其の人、
こと(今) (今年) 圖其年に取り入れた
る米、即ち新米(カ)。
こと(今) (今年) 圖其年に芽(カ)を出
して、發育(カ)する竹、若竹(カ)の、コト

を云ふ、
こと(事) (事少) 圖爲すべき用事の少
(カ)なきコトを云ふ。
こと(無) (無言) 圖無駄口(カ)を利(カ)
かぬコトを云ふ。
こと(事) (事殺) 圖圖はぶく。りやくす。け
すり去る。
こと(琴) (琴柱) 圖琴の絲(カ)を張(カ)せる爲
めに、弦(カ)と胴(カ)との間、狹(カ)む柱、形、馬
の蹄(カ)の如きもの。
こと(琴) (琴柱) 圖一種の道具、樞(カ)
の細き棒の尖に、鐵にて琴柱の如き形
を爲せる物の付きあるもの、即ちサス
マタの、コト。
こと(託) (託) 圖或る事に寄(カ)せてする
即ちことつけ。甲(カ)の人の言葉を、乙の
人に傳(カ)えるコト。
こと(託) (託) 圖圖ことづける。
こと(言) (言傳) 圖人を以て他人に物事を
傳へ知らす。人の話に依りて或る物事
を知るコト。
こと(琴) (琴爪) 圖琴糸をほちく爲めに、
右の指(カ)へ箝(カ)る象牙(カ)など
の、爪の形になつてる具。
こと(言) (言問) 圖話(カ)をしかけるコト
。物事をたづぬるコト、

こと(無) (事無) 圖かわりたるコトなし。
おだやかなり。難(カ)しからぬなり。
やすらかなり。
こと(異) (異) 圖同じでない。めづらし
き。すくねる。合點(カ)のゆかざる
不思議なる。
こと(異) (異) 圖ことなつてるコト、ちが
つてるコト。
こと(殊) (殊) 圖かくだんに、とりわけて、
こと(毎) (毎) 或る語に添へて、然り、
何れも、各(カ)と云ふ意を表はすに用
ゆる語。
こと(異) (異) 圖圖わける。ちがふ。常
(カ)ならぬ待遇(カ)をなす。
こと(言) (言葉) 圖言語、ことば、
こと(言) (言葉) 圖若き男の、コトを云
ふ、わかさのばら、
こと(殊) (殊) 圖思ひ掛なく思いもよ
らぬ、意外(カ)外、
こと(言) (言葉) 圖口にて物事を云ひ表はす
語、言語(カ)物語り。文字を以て云はんと
する事を、表(カ)はしたるもの、コトを
云ふ。
こと(事) (事始) 圖物事を爲し始(カ)む
るコトを云ふ。

ことばじり(言葉尻) 言葉の終り 一人の云ひ損(云)れたる事柄(事)。
 ことばぢぢ(言葉質) 他人の云ひたる事を、證據(証)となすコト。言葉(言)を以て、證據(証)立(た)つるコト。
 ことばあひて(言葉相手) 話を爲す相手方(方)の云ひ、
 ことばがへし(言葉返) 口返答(返)を爲すコトを云ふ。
 ことばすくぬ(言葉少) 口數(数)を餘計(計)に利ぬコト無駄事(事)を饒舌(舌)ぬコトを云ふ。
 ことばちがへ(言葉違) 云ひし事を其の通(通)にせぬコト、約束に違(違)ふるコトを云ふ。
 ことばづかひ(言葉道) 物の云ひやう、話(話)の仕方(方)の云ひ、
 ことばとがめ(言葉告) 云ひ損(損)ないをさがめだてするコト。
 ことばのはな(言葉花) 美しくしき文句(句)の事(事)をみやびて云ふ。
 ことばのはやし(言葉林) 言葉の數(数)の非常(常)に多きコト。字音(音)などのコトを云ふ。
 ことばのたかひ(言葉賊) 議論するコト

ことばふ、ことば 壽、答、諺
 ト、口喧嘩(喧)をするコト。
 ことばふき(壽) 固いふコト。生命ながきコト。めでたきコト。
 ことばひ(特牛) 男牛の口、即ちこつこひ牛の口を云ふ。
 ことばやち(五斗俵) 米を五斗入れる俵(俵)の口を云ふ。
 ことばふ(答) 固他の問に對して返事する。むくゆる。かんする。
 ことばき(言祝) 口上(上)にて祝を述べ(述)るコトを云ふ。
 ことばも(子供) 年のゆかぬ人間の總稱(稱)。即ち小兒(兒)遊里(里)にて抱(抱)えてる藝妓(妓)の稱。
 ことばいしや(子供醫者) 専ら子供の病氣(病)を治(治)す醫者、小兒科醫。
 ことばやち(異様) 固はりたるありさま、異(異)なりたる容子(容子)。
 ことばゆく(事行) 固らちがあく。ささなふ話(話)がまざる。
 ことばせ(言寄) 固云ひよるコト。
 ことばせつば(言寄妻) 固惚(惚)てる女の口、思ひを掛ける女。
 ことばり(小鳥) 固雀(雀)燕(燕)などの、棘(棘)の小さき鳥の總稱(稱)。
 ことばわざ(諺) 固世間一般に云ひやす諭(諭)

ことばわ、ことばす 斷、理、粉 七一八
 (詞)の言葉の口、
 ことわり(斷) 固聞き入れぬ、承知せぬ。前以て申し入れて置くコト。あやまるコト。
 ことわり(理) 固物事(事)の道理(理)をわけて、すじみち。
 ことわる(理) 固是非善惡の區別、判斷をなす。物の道理を知る。
 ことわる(斷) 固わびする。あらかじめ知らせ置く。聞き入れぬ、承諾(諾)せぬ。
 (一)な
 ことば(粉) 固(粉)の口、
 ことば(小名) 固土地(地)の小字(字)。
 ことばい(御内儀) 固他人の妻女を、うやまひて呼ぶ語。
 ことばから(二合牛) 固一升の四半分を云ふ意にて、即ち二合五分。
 ことば(粉) 固物の殊に細かく、碎(碎)けたる有様を云ふ。
 ことば(小梨) 固あなな、
 ことば(小梨) 固果物の名、林檎(檎)の一名、
 ことば(細碎) 固こなすコト、
 ことば(細碎) 固物を細かく碎きつぶす

ことば(米) 米や麥の實を穂(穂)より取りはなす。
 ことば(米) 此方彼方(方)固此處(處)にも彼處(處)にも、即ち處々(々)方々(々)此の人(人)も彼(彼)人も。
 ことば(粉挽) 固米麥豆の類を、石臼(臼)にて挽くコト、又た挽く人。
 ことば(粉屋) 固穀類(穀)の粉をなしたる物を商ふ家。
 ことば(消化) 固動(動)こなれる。
 ことば(消化) 固食したる食物が、胃腸(腸)の機能(能)でさけるコト。
 ことば(御難) 固災難の敬語。
 ことば(五男) 固第五番目に生れたる男の餅の名、九月の十二日に高祖日蓮上人(上人)に供(供)する餠餅。
 (一)な
 ことば(小荷駄) 固馬に積む荷物。
 ことば(小荷駄馬) 固荷物を脊に載せ

ことば(後日) 固其の日より後(後)の日。
 ことば(小庭) 固せまき庭。
 ことば(誤認) 固認識(識)を誤(誤)るコト、即ち見込(見込)違(違)う。
 ことば(小人數) 固人數(数)の少なきコト。
 (一)ぬ
 ことば(小糠) 固ぬかの口、即ち米のかす。
 ことば(小脱) 固芝居にて用ゆる鬘(鬘)の一種、惡徒の下役になる者の、かぶるものなりを云ふ。
 ことば(捏) 固無理(理)を云ふてすれく。凡て粉(粉)をなしたる物を、水にて練りかためる。
 (一)ね
 ことば(小猫) 固子供の猫。
 ことば(捏返) 固まぜあへる。雨上りの道路の悪しきコト。
 ことば(捏取) 固餅を十分に搗(搗)き、せべく爲に、餅をこれ返すコト、又た其の俗に云ふ水取(水取)。

ことば(小寝巻) 固綿(綿)の入れ方の少なき寝衣(衣)抱巻(巻)の小なき物の稱。
 ことば(木練柿) 固柿(柿)の實(實)の枝附(附)のまま取り、陰干(干)になせし物。
 ことば(死) 固動俗語にて死する。
 ことば(固) 固動(動)こなるに同じ。
 ことば(願念) 固分別(別)するコト。後先(先)の事を考(考)ふるコト。
 ことば(御念) 固他人の念慮(慮)即ち心づかひを敬(敬)ふて云ふ語。
 (一)の
 この系(近衛) 固近衛師團(師團)、又は近衛兵の略語。
 このきみ(此君) 固竹の異名。
 このく(木暮) 固樹木の下の小ぐらきコト、又は其のくらき處。
 このころ(此頃) 固近ごろ。昨今(今)。
 このしたやみ(木下闇) 固樹木の葉のおひ繁(繁)つて、其の下のくらくなつて居るコトを云ふ。
 このてかしは(兒手柏) 固樹の名、檜(檜)の一種、其の葉が恰も手を廣げてる如き状(状)を呈せるより此の名あり。なまこへの別名。
 これま、このて 死 七一八

こひ、こひけ 鯉、戀、媚

こひ(鯉) 魚の名、淡水(水)に棲(す)む魚にて、其の大なる者は、三四尺に達す、脊の色は黒く腹部は淡黄色を呈して、頭(かしら)より尾に至るまでに、一條(いっすじょう)の鱗(うろこ)三十六枚あり、味(あじ)最も上品淡水魚の王とす、
こひ(戀) 恋したばしく思ふ心、
こひ(媚) 恋こぶるコト、こひへつらふコトを云ふ、
こひ(喉痺) 喉病氣の名にて、咽喉の腫(は)て塞(ふ)がる病氣、
こひ(古碑) 古(いにしへ)より在る石碑、古き石ぶみのコト、
こひ(語尾) 國文法上の語にて、動詞の言葉尻(ことづ)り、假令ば歩め、歩む、遊べ、遊ぶなどの類、
こひか(戀歌) 戀(こひ)の心をよみ表(あらわ)したる和歌、
こひき(木挽) 國材木(こけ)を薄く板(いた)などに、挽き切るコト、其の職人、
こひをち(鯉口) 國衣服の仕立方の一種にて、筒袖(つつそで)の如くに仕立てたる物、刀(かたな)の鞘(さや)の口(くち)と鏢(ぼ)を合する部分(ぶぶん)を云ふ、
こひび(小髭) 鬚(ひげ)少しく生(は)てる、少しくよりなき髭(ひげ)のコト、

こひこ、こひひ 希

こひこ(鯉汁) 魚一種の料理、赤と白の味噌(みそ)等を等分に合して仕立たる汁(じゆ)の中へ、鯉(こひ)を輪切(りんぎ)にして、入れたるもの、
こひぎ(小膝) 國膝(ひざ)のコト、
こひし(戀) 恋こひしがるコト、したひこがるコト、
こひし(戀) 恋こひしがる、こひしくありしたはしくあり、
こひぢ(戀路) 恋したひこがるる心の向ふまじろ、假令ば戀路(こひぢ)のやみ、
こひぢや(媚茶) 國茶(ちや)のやみ、
こひつ(古筆) 國筆(ひし)の筆、古人の書きたる筆跡(ひし)の筆、
こひつ(小櫃) 國二合ほどの飯(い)を入れるおひつ、小さき飯櫃(い)を云ふ、
こひつじ(小羊) 國羊の子、
こひつみ(古筆見) 國古書(こ)を鑑定するコト、又は其の人、
こひと(小人) 國丈(たけ)の低(ひか)き人、昔時(むかし)武家(ぶけ)にて、小用歩(こようぶ)きに走り廻(まわ)る、身分(身分)の鄙(ひ)しき人、
こひぬが(希) 國切(き)のぞむ、ひたすらにたのむ、れがひのぞむらくは、なにぞぞ、
こひひと(戀人) 國慕(こ)ひ焦(こ)るる人、

こひや、こひふ 瘡、乞、請 七三三

意中の情人(こひや)のコト、
こひやち(小兵) 國軍人又は軍隊の弱(よ)きコト、小(こ)さき人のコト、
こひゆち(誤謬) 國まちがひ、あやまり、こひる(媚) 國へつらふ、機嫌(きげん)をさる、せじをつかふ、
こひん(小鬢) 國鬢(びん)の毛の端(は)り、
こひん(小塚) 國小形(こひん)のびん、
(一六九)

る、他人の機嫌(きげん)をさる、體裁(たいざい)をかざる、姿(すがた)をやさしくして、つやつぱくみせる、
こふ(誇負) 國こまんとするコト、ほこるコトを云ふ、
こふ(昆布) 國海草(かぶ)の一種にて、即ちコンプのコト、
こふ(國府) 國こくぶのコト、
こふ(孤負) 國こむくたがふ、
こふ(誇負) 國こまんとする、
こふ(酒耐) 國水の少なくなりたる其の處に泳(およ)ぶ(耐)のコト、
こふ(五分) 國五分(ごぶん)を五分ほどの長さに切りたるものを云ふ、
こふ(鼓舞) 國精神を引き立つるコト、氣を振(ふる)ひ起すコト、
こふ(調符) 國神佛の守護(しゆご)し給ふコト、まもりのコト、
こふ(古風) 國むかしの容子(ようし)、むかしのこふ(護符) 國神佛の靈驗(れんげん)がこもつてること云ふ其のお札(お札)を云ふ、
こふ(鼓腹) 國腹に食物の満(み)たるに依り、腹を鼓(つ)くとして打つこと云ふ意より、轉じて不自由(ふじゆう)なく暢氣(ちやうき)に暮(く)してること云ふ意、
こふ(子福) 國子供(こども)の澤山(たくさん)あるコト

子福者(こふか)のコト、
こふかし(木深) 國木の群(ぐん)りて生(は)ひ繁(さか)つてゐる状(じやう)を云ふ、
こふく(吳服) 國絹織物(きんぬ)の總稱、
こふし(拳) 國指(さし)を五本(ごほん)も握(にぎ)りたるコトを云ふ、
こふしん(小普請) 國譜代の旗本の役に就(つ)く者、普請(うづま)の人足を負擔(おんが)するコトを云ひし、徳川幕府(とくがわ)の職名なり、
こふだ(小札) 國細かき木札、
こふつ(古佛) 國古に作られたる佛(ほとけ)の像(ざう)を云ふ、
こふつ(後佛) 國佛の名、ミロク佛のコトを云ふ語、
こふつ(古物) 國凡て古(ふる)くなりし物、古作(こさく)の製作品、
こふね(小船) 國型(かた)の小さき船、
こふり(小振) 國其物の普通(ふつ)よりは、稍(ち)や小さきこと云ふコト、
こふり(小降) 國雨などの少しく降つてくるコトを云ふ、
こふん(古墳) 國古代の墓(かぶ)り、
こふん(古文) 國古代に書かれたる文章(ぶんしょう)のコトを云ふ、
こふん(誤聞) 國聞きそない、
こふん(胡粉) 國貝殼(かい)を焼きて碎(くだ)す

きて、挽(ひ)きて粉(こな)なしたる物、彩色(しき)に用ゆるもの、
(一七〇)

こふ、こふく

こふか、こふん 拳

こふき、こふん

こへん(御邊) 圖武家にて同輩の人を呼ぶに用ゆる敬語。

(イ) (イ) (イ)

こぼ(鉗縛) 圖布(イ)などに寄りたる皺(イ)を延(イ)す具、即ちひのし、
こぼく(古朴) 圖しつばくなるコト、
こぼく(古木) 圖多くの年数を經たる木、
こぼく(枯木) 圖かれたる樹木、
こぼし(建水) 圖又た風水さも書く、水をすつる器物、
こぼす(零) 圖動もらす、あふらせてすてる愚痴を云ひならべる、
こぼち(毀) 圖こぼつコト、
こぼつ(毀) 圖動くす、こぼす、さりのけこぼぬ(小骨) 圖魚類の肉(イ)の中に、交(イ)つてゐる小骨、
こぼり(郡) 圖一國を幾個(イ)かに分ちたる一大部分の土地にて、其の區域内に町あり、
こぼり(水) 圖水が、寒(イ)の爲めに凝(イ)りたる物の稱、
こぼり(氷) 圖盛夏の頃に、氷を賣る家のコトを云ふ、
こぼりいし(氷石) 圖白水晶(イ)の一名

こぼり

其の狀(イ)がつらもの如きより、この名ありと云ふ、
こぼりみづ(水水) 圖水に氷をかき混(イ)たる物、夏季に其冷(イ)たきを、賞美して飲むもの、
こぼりもち(水餅) 圖寒中に搗きたる餅を干(イ)し固(イ)めた物、即ちかき餅のコトを云ふ、
こぼりおろし(水卸) 圖極上等の白砂糖の名、即ち水砂糖を碎(イ)きて、粉(イ)こなしたる物、又の名をザラメと云ふ、
こぼりさとり(水砂糖) 圖菓子的一種、水砂糖に水を少しく加えて十分に煮き、玉子の蛋白(イ)を入れて、灰汁(イ)を去り、油を敷きたる器物の中へ入れて、固(イ)まらしたるもの、
こぼりすべり(水滑) 圖張りたる氷の上を横(イ)に載りて走り行く遊戯(イ)のコトを云ふ、
こぼりとりふ(水豆腐) 圖寒中に豆腐を屋外に曝(イ)して凍(イ)らせたもの、又の名高野豆腐、
こぼりぶきやう(郡奉行) 圖昔時の武家の役名、一郡の取締(イ)を爲す役、現今の郡長に同じ、
こぼりこんやく(水昆莩) 圖寒中に昆莩

こぼる、こま 凍、狗、駒 七三四

を屋外(イ)に曝(イ)して、凍(イ)らせたもの、
こぼる(零) 圖動あふれて外へ自然に出る不意に利益を得る、
こぼる(凍) 圖動水などが氷となる、
こぼれ(零) 圖こぼれるコト、又はこぼれたるもの、
こぼれさびわひ(饒俵) 圖思ひ掛なき幸ひ的(イ)にせざる利益、
こぼる(零) 圖昆虫(イ)の名、全株黒褐色(イ)にして、きりきりすに似たる小虫、尾の端(イ)に二個の小きき角(イ)の如き物あり、夏より秋へかけて陰處(イ)を好んで棲(イ)む、
こぼん(古木) 圖ふる本、
こぼん(小本) 圖形(イ)の小きき書物、
こぼん(子煩悩) 圖子供(イ)を非常に可愛(イ)がる、性質(イ)の人を云ふ、
(イ) (イ) (イ)

こま(組む)に用ゆる細長き薄き板(イ)將某(イ)をさすに用ゆる王將金銀等の名ある具(イ)凡て物(イ)物との間に挿み入れる小きき木のコト(イ)馬の總稱、
こま(木間) 圖立木と立木の間、
こま(小間) 圖小きき部屋(イ)物と物との隙間(イ)一ヶ月に一圓の地代の上る賣地の區域の稱、
こま(編樂) 圖子供の好んで用ゆる一種の玩具、小きく圓くして、扁平(イ)作りたる木製の物の中心(イ)に、細き鐵製の針(イ)の如き物を通したるもの、此の心(イ)に糸を巻き附けて投(イ)つ糸を引き取ればグルグルと廻(イ)るもの、
こま(胡麻) 圖草の名、葉(イ)は細長き楕圓形(イ)にして、莖(イ)は鈍(イ)き方形を爲して、高さ二尺餘に達す、夏季に於て葉間に一個乃至三四個づつの小きき花を咲す、花は白色にして、上部に黄色又は紫色の暈(イ)を帯ぶ、花落ちて後に、細き莢(イ)を生ず、秋に至りて其の中に小きき實(イ)を結ぶ、實(イ)に白赤黒の三種ありて、食料となる、又た實には油を多量に含(イ)むを以て、其より油を取る即ちこまのあぶら、
こま(護摩) 圖佛教の語、眞言宗にて専ら

行はるる一法にて、惡魔妖魔を焼き拂ふて、安心立命の徳を得るに云ふ意より、水を燃(イ)して、佛(イ)に祈を上るコトを云ふ、
こま(古米) 圖前年(イ)に取りたる米、新米に對しての稱、
こま(ぬ) 圖昔時高麗(イ)の國より渡りたる犬、其の形は狼(イ)に似たり、後世其の形を石又は木に刻(イ)して、神社の前に据えたり、
こま(虚妄) 圖實際に在らざるもの、作(イ)りこま(イ)轉じて、うそ、いつわりのコトを云ふ、
こま(誤覚) 圖巧(イ)みに欺(イ)むくコト(イ)目前(イ)の鉢裁(イ)をかざり、つくらふコト、
こま(誤覚) 圖動目の前の鉢裁をつくらふ、あざむく、だます、
こま(胸方) 圖馬方(イ)のコト、
こま(護摩) 圖こまを燃(イ)に用ゆる木のコトを云ふ、
こま(護摩) 圖醫學上の語、耳のズート奥(イ)に張(イ)れてある、極めて薄き皮の稱、此の皮に聽神經が分布(イ)してゐて、其の皮が搖(イ)ぶれて音聲を知るもの、

こま(木枕) 圖木で作りし枕、
こま(小枕) 圖木にて作れる枕(イ)木製の枕の上に、頭をのせる爲めに布(イ)にて製したる、袋の小きき物の中へ、蓆(イ)などを入れたるもの、之を木枕(イ)の上に載せて用ゆる女子の髪を結ぶに用ゆる、かまじの根に在る木、
こま(胸下駄) 圖下駄の一種、くりぬきたる臺(イ)の上に、疊(イ)の置かれてあるもの、
こま(細細) 圖極めて細かき狀を云ひ表はす語(イ)くわしきさま、
こま(細把) 圖農家で用ゆる一種の器具の名、落葉などをかき集むるに用ゆるさからび、竹にて造られたる箇の細かき、熊手の如きもの、又たの名を木の葉さらへと云ふ、
こま(胡麻) 圖鹽の内へ胡麻の實(イ)の炒(イ)たる物を混(イ)し物(イ)轉じて黒と白と交(イ)りしもの、
こま(胡麻) 圖頭(イ)白毛の出来し頭のコトを云ふ、
こま(胡麻) 圖へつらうコト。おべつかを云ふコト、
こま(小股) 圖狭(イ)く、股(イ)を開きたるコト、又た其のもの、假令ば小股で歩

こまた、こまの 拱

こまぢり(護摩堂) 護摩を燃(カ)に充(ル)ら
 れてある寺院内の堂、
 こまぢけ(胡麻竹) 圓其の幹(カ)に黒き斑
 點(カ)の在る竹の科ト、
 こまらん(護摩壇) 圓寺院内の護摩堂に在
 るゴマを燃(カ)に用ゆる一段高き處の
 稱、一般に三角形をせるものなり、
 こまつ(小松) 圓若(カ)き松、
 こまづかひ(小間使) 圓主人の傍に在りて
 細々せる用事を爲す女の召し使ひのこ
 トを云ふ、
 こまつばら(小松原) 圓小松の澤山(カ)に
 生へてある野原の科ト、
 こまつり(木祭) 圓樵夫(カ)が木を伐(カ)
 るに先(カ)だちて、山の神を祭る科トを
 云ふ、
 こまどり(小間取) 圓人数を甲乙の二組に
 別ちて、技藝(カ)などを闘(カ)かはす時
 に、甲の組に一人乙の組に一人き、順々
 に入り違へて組み合す科トを云ふ語、
 こまぬく(拱) 圓腕を組み(カ)何等(カ)の
 仕事をもせず腕(カ)としてある、
 こまのはい(胡麻灰) 圓道中にて旅人(カ)の
 の如くに見せかけて、旅人を欺(カ)き
 て、金錢を取る盜賊の稱、

こまひ、こまる 栗困

こまひ(栗) 圓壁(カ)の基礎(カ)となる物
 にて、竹を割(カ)て組み合せたるもの
 たる木の端(カ)の軒(カ)に出てある木の
 コトを云ふ、
 こまぶた(護摩札) 圓護符(カ)の科ト、其の
 條を見られよ、
 こまへ(小前) 圓身分のいやしき人、身代
 のなき人、
 こまむすび(小間結) 圓紐(カ)などを直結
 (カ)にして、強く固(カ)くならず結び方の
 コトを云ふ、
 こまめ(鱒) 圓乾魚(カ)の一種、即ちひし
 こを、其のまま干(カ)したる物、
 こまもの(小間物) 圓婦人の用ゆる化粧品
 (カ)及び化粧具の總稱、
 こまよけ(胸除) 圓馬の暴れはれるのを防
 (カ)ぐ爲めに門前(カ)などに拵(カ)へ
 られる木製の低き柵(カ)、
 こまよせ(胸寄) 圓胸除(カ)に同じ、
 こまりの(困者) 圓手に合ぬ人、もてあ
 ましもの、科トを云ふ、
 こまる(困) 圓動もてあます。なんぎする
 くるしむなやむ(カ)仕末(カ)にくるし
 む。途方に暮(カ)る、

こみ、こみち 込芥、埃 七二六

(い)み

こみ(小身) 圓刀(カ)の内身(カ)、
 こみ(五味) 圓五種の味(カ)即ち甘(カ)辛(カ)
 鹹(カ)酸(カ)苦(カ)の五つ、
 こみ(込) 圓二種以上の物を集(カ)めて一
 つとしたる物、多く品物の賣買の時に
 云ふ(カ)差しこみて来る病氣の科ト、
 こみ(芥) 圓埃(カ)に同じ、
 こみ(埃) 圓俗語にて、ちり、ほこり、
 こみ(込) 圓上(カ)自動へごを吐く、のぼせ
 上げる、
 こみあひ(込合) 圓こみあふ科ト、
 こみあふ(込合) 圓動多くの人々が入り乱
 (カ)れて、混雜(カ)をきわめる(カ)多くの
 人が入(カ)れぬ所へ無理に入る、
 こみち(込馬) 圓後へさがりて、歩き出
 さぬ馬。進みゆかぬ馬、
 こみせ(小店) 圓小き店(カ)俗語にて下等
 の遊女屋の科トを云ふ、
 こみため(芥溜) 圓芥を捨てる、大きな箱、
 又は芥を捨(カ)る一定の場所、即ちはき
 だめ、
 こみち(小道) 圓巾(カ)のせまき道路、
 こみち(小路) 小道に同じ、

(い)む

こみぢん(粉微塵) 圓碎(カ)けて、粉(カ)や
 塵(カ)の如く細(カ)かく爲る科ト、
 こみとり(芥取) 掃(カ)よせたる芥を、集
 (カ)め取りて捨(カ)る器具、
 こみや(込矢) 圓小銃(カ)の附屬品(カ)
 にて、細き長き鐵(カ)の棒、小銃(カ)の
 底に彈藥(カ)を詰(カ)め込む用を爲す
 もの、

こみ(込) 自動又た籠の字を用ゆ、つまり、
 人の多くあつまる(カ)入りこむ、こもつ
 てる、
 こむ(込) 圓動又た籠の字を用ゆ、つめる
 入りこませる、無理に入れる(カ)集(カ)ま
 らせる(カ)精神を一心に注ぐ、こりかた
 まる、
 こむ(護謨) 圓種々の用に供せらる粘着力
 (カ)及び弾力(カ)等を具へたる舶
 來品にて、南洋地方の種々の樹(カ)より
 出る液(カ)を以て、製したるもの、其の
 取りたる樹の異(カ)なるに従つて、白、
 赤、黒等の色を呈す、用途廣き必要品な
 り、
 こむいん(護謨印) 圓彈力(カ)の強(カ)き
 こみち、こむい 込

こむ(込) ゴムを材料として、製したる印判の科
 トを云ふ、
 こむかつば(護謨合羽) 圓雨具(カ)の一種
 布(カ)にゴムを敷きたる物にて作りし
 合羽、
 こむぎ(小麥) 圓麥の一種にて、重要な
 農作物、普通の麥より苗(カ)種(カ)共に
 小さく、其の穂に多くはせ(カ)なし、又
 は中にはせのある種類あり、其の實(カ)
 は搗(カ)て挽きて粉とし、パン、醬油(カ)
 (カ)菓子を製する原料となり、其の葉
 (カ)は、即ち麥稈(カ)にて、種々の物を
 製せらる、
 こむぎこ(小麥粉) 圓小麥の實を、白にて
 挽(カ)て、粉せし物、一名をうどん粉
 と云ふ、
 こむぐし(護謨櫛) 圓彈力の強き護謨に、
 硫黃(カ)を吸(カ)ひ込(カ)せて、製した
 る物を材料として、製せし櫛、
 こむくわん(護謨管) 圓白黒赤等のゴムを
 用ひ、作りたる小き管(カ)、
 こむすめ(小娘) 圓七八歳より、十二三歳
 までの少女の科トを云ふ、
 こむそち(虚無僧) 圓普化宗(カ)の僧侶
 の名にて、深編笠(カ)を被(カ)り、尺八
 (カ)を吹(カ)きて、人の軒(カ)に立ちつ
 こむか、こむそ

こむい、こむわ 纏、腓 七二七

こめ、こめく、米
を巻きつけたる物、上等の車輪、假令は
ゴム輪の人力車など、

(一)こめ

こめ(米) 籾第一の食料品にて、稻(いね)に生
じたる實(み)。
こめい(願命) 願主又は貴人が死後の事
を云ひ付けられたる命令のコトを云ふ。
●深く信頼して、云ひつけられたる命
令のコトを云ふ。
こめあび(米揚) 籾米あげいかきのコトを
云ふ、即ち洗ひし米を盛るさる。
こめい(故名) 籾以前(い)の名。
こめい(願命) 籾ありがたき仰(おほ)せ●貴
人(き)の遺言(い)を云ふ。
こめいち(米市) 籾米の相場を立てる場所
のコトを云ふ。
こめちり(米賣) 籾米を賣買する人即ち米
商人(こ)のコト。
こめかし(米斬) 籾米をさぐ。米を洗ふコ
ト●米さき桶の略。
こめかみ(願命) 籾眼の外側(が)の、少し
く上の部分を云ふ。
こめぢら(米藏) 籾米を收(と)めて置く倉
庫のコト。

こめさ、こも、糞、糞

こめさけ(米裂) 籾砕(お)けたる米、即ち小
米(こ)のコト。
こめぎ(米雑魚) 籾メダカのコト。
こめつき(米搗) 籾米をつきて、白米と
なすコト、又は搗く人。
こめつ(米粒) 籾稻の實(み)、即ち米。
こめとぎ(米磨) 籾白米を洗ふて糠(ぬ)を
去るコトを云ふ。
こめびつ(米櫃) 籾白米を入れて置く箱、
即ちゲビツ●轉じて生活費用を働き出
す一家中の大切なる人のコトを云ふ。
こめふみ(米踏) 籾米踏(お)に同じ。
こめむし(米蟲) 籾夏季に至りて米に生ず
る小さき虫、一名をこくじと云ふ。
こめや(米屋) 籾米を賣る家。
こめろ(小女郎) 籾年のゆかぬ娘をあざけ
つて云ふ語。
こめん(御免) 籾官府の許可(お)を受けし
コト●ゆるされよと云ふ敬語(けいご)●免
官になつたコト。

(二)こも

こも(籠) 籾籠(かご)を圓形に編みて作りた
る入れ物●草の名マコモ。
こも(籠) 籾籠(かご)にて粗雑に織りたる蓆

こもく、こもの、芥

こもく(下等)のこも。
こもく(芥) 籾ほこり、こみ。
こもく(五目) 籾二種以上の種類の異(い)
なりし物が、一所になつてゐるコト、又は
其の物●こもく鮮(あ)の略語。ばらすし
の略語。
こもくならべ(五目並) 籾一種の遊戯(あ)●
若盤の上に、石を縦横(た)又は斜(た)に
早く五目並(あ)べたる者を勝たすあ
そび。
こもとも(交交) 籾かはるがはる。たがひ
ちがひに云ふ意を表す語。
こもたれ(蕪垂) 籾又た蕪垂とも書く入口
に格子(あ)や障子(あ)の代(あ)りに蕪
(あ)を垂れて置くコト轉じて鄙(あ)しき
住宅のコト。
こもて(手持) 籾子供のあるコト●子供を
腹(あ)に持つてゐるコト●親が子を持つ
と云ふ意より轉じて大なる者さ小なる
者さが並(あ)んでゐるコト。
こもちつき(小望月) 籾陰曆の十四日の月
のコトを云ふ。
こもつ(御物) 籾宮廷(あ)の御藏品(あ)。
こもつの(蕪角) 籾まこもの根に生じたる
新芽(あ)のコト。
こもの(小物) 籾凡て細かき物。

こもの、こもん、籠

こもの(小者) 籾めしつかひ、下女、下男の
コトを云ふ。
こもほり(蕪張) 籾小屋の周圍(あ)に板の
代(あ)りに敷いて、圍(あ)を爲すコト、
又は爲したる物。
こもまき(蕪巻) 籾蕪にて巻きたる物。
こもり(籠) 籾こもつてゐるコト。
こもり(子守) 籾子供(あ)の身にあやまち
のなきやう、守(あ)するコト又は其の人
のコトを云ふ。
こもり(木守) 籾木材(あ)の番人。
こもり(籠堂) 籾神社佛閣内に在る、
信者の祈願をこむべく爲めに、參籠す
る堂のコトを云ふ。
こもり(籠棚) 籾四十八棚の一にて、
發戸(あ)の附きたる棚、重に小鳥など
を籠に入れて飾り置く棚。
こもり(子守) 籾子供(あ)の守(あ)を
なす少女(あ)のコト。
こもり(籠) 籾籠(あ)にゐて外へ出ぬ
●圍(あ)まれて出られぬ即ちつゝまれ
てる、假令は煙がこもる●城にひそん
であて敵を防ぐ●神社佛閣に泊(あ)り
こんで祈願(あ)をなす。
こもん(願問) 籾相談するコト●後橋(あ)
びとなつて相談相手になる人。

こもん、こもや

こもん(小紋) 籾模様の名、織物(あ)の表
面に染(あ)出したる、小さき型(あ)のコ
ト。
こもん(願問) 籾天皇陛下の御下
問に對し奉つて、協議をなす役人のコ
ト、例ば宮中顧問官。
こもん(御門跡) 籾法皇のあませ給ひ
し、寺院の稱●京都の御室(あ)の仁和
寺のコトを云ふ●眞宗本願寺のコトを
敬ひて云ふ語。
(三)こも

こも(小屋) 籾間に合せて建(あ)られたる
粗末な、小さき家●芝居(あ)や見世物
などを、臨時に興行(あ)する爲めに建
(あ)たる板間の家。
こも(籠屋) 籾籠(あ)を飼ふ室。
こも(後夜) 籾徳川時代には、夕刻より夜
半までの稱なりしが、現今では夜の十
二時より夜明(あ)までのコトを云ふ。
こも(午後) 籾夜の午の刻のコトにて、ま
よなかの午前の零時。
こも(小楊枝) 籾齒の間に、ばさまれ
る垢(あ)を去るに用ゆる短かき細き楊
枝(あ)つまやうじのコト。
(四)こも

こやく、こゆ、肥

こやく(子役) 籾子供(あ)のつこめ●芝居
にて子役を勤むる役者。
こやく(小役人) 籾位置の低き役人。
こやく(肥料) 籾こえ太(あ)るやふになすコ
ト●植物作物の成熟(あ)をよくなすべ
く與ふる材料、即ち肥料。
こやく(肥) 籾こえ太(あ)るやうにする
●俗語にて、他人の利益となるやうに
してやるを云ふ。
こやく(子安貝) 籾貝の一種、形桃の
種(あ)に似たる物にて、其の介殼(あ)に
美しき文(あ)あるもの、昔時産婦が此の
貝を捕りて、安産を祈りたるより此の
名あり。
こやく(小山) 籾低(あ)く小さき山。
こやく(小歌) 籾雨が少しの間やんでゐる
コトを云ふ。
こやく(小屋者) 籾非人糞多(あ)のこ
トを云ふ●轉じて最下等の労働者のコ
トを云ふ。
(五)こゆ

こゆ(越)百動物の上を通つて行く、即ち山などをこゆる。物をまたげて行く。ひるでてる。まさる。すぐれてる。へる。ふる。すぐる。

とゆ(肥)百動物筋肉がふさる。土地が作物を能く生長さすやふになる。

とゆ(超)百動物趣に同じ。

とゆ(小指)五本の指の中にて一番に少なき指を云ふ。妻(ツメ)のこつを云ふ。隠語。

とゆ(小弓)小弓、揚弓(ユウキウ)。

(イハナ)

とよ(雇傭)雇人をやまひ込むコト。やまはれるコト。

とよ(小用)小用便のこつ。細々したる用事のこつを云ふ。

とよ(誤用)用ひ方を、あやまる、あやまつて用ゆるコト。

とよ(互用)用まじえ用ゆ、かわるがわるに用ゆるコト。

とよ(御用)御用事と云ふ事を敬(マツ)ひて云ふ語。政府の用事のこつを云ふ。警吏が官命に依りて犯罪者を捕縛するコト。

こよ(小用)

こよ(小用)小用便のこつ。細々したる用事を奉ずる人。

こよ(誤用)用ひ方を、あやまる、あやまつて用ゆるコト。

こよ(御用)御用事と云ふ事を敬(マツ)ひて云ふ語。政府の用事のこつを云ふ。警吏が官命に依りて犯罪者を捕縛するコト。

こよ(五欲)五欲の語、五つの欲情と云ふ。

こよ(小用)

こよ(小用)小用便のこつ。細々したる用事を奉ずる人。

こよ(誤用)用ひ方を、あやまる、あやまつて用ゆるコト。

こよ(御用)御用事と云ふ事を敬(マツ)ひて云ふ語。政府の用事のこつを云ふ。警吏が官命に依りて犯罪者を捕縛するコト。

こよ(五欲)五欲の語、五つの欲情と云ふ。

(イハナ)

こら(子夏)伊勢の太神宮に於て神饌(シメ)を供(マツ)し奉る御殿に仕へし少女。大神宮の神樂殿のこつ。

こらい(古来)馴むかしから。

こら(虎狼)図さらさおほかみ。轉じて猛悪(マウ)なる。殘酷(ザンコウ)なる。

こら(敬老)図さしより。老人。

こら(五郎丸)図袴地に用ゆる麻(マ)の織物(オリ)の名、越中國より産出す夏向の用に供するもの。

こら(娛樂)図心を樂(マツ)しますコト、精神の保養(マツ)となるコト。

こらしめ(懲)図こりさするコト。こりさせて、いましむるコト。

こらす(凝)圖動あつまりかたまるやうにする。心血(シンケツ)をそがしむ。

こらす(懲)圖こらかす。

こら(堪)圖動がまんする、たえしのぶしんぼうする。

こら(胡蘿蔔)圖野菜(ヤサイ)の名、にんじんに同じ。

こら(堪)圖自動辛抱する、我慢(ママン)する、たえしのぶ。

こらん(御覽)圖見ると云ふ事を、敬(マツ)ひて云ふ語。

こら、こらん 懲、凝、堪

こり(柄)接尾の数字の下に附け加へて、荷物(モノ)の数をかぞふる語。

こり(桐)圖箱に入れ上より筵(むしろ)などに包みて、解(ト)ぬ様に結(ムス)びし荷物(モノ)のこつを云ふ。

こり(凝)圖かたまるコト、かたまりたる物、かたまりのこつ。

こり(行李)圖旅行などの時に、衣類を入れて持ち行く籠(カゴ)の如きもの、種類多くあり。

こり(狐狸)圖きつれきたぬき。轉じて狡(カウ)なる人物の稱。

こり(垢離)圖身體(カラダ)に附著(ツケ)せる垢を落し去ると云ふ意にて、神佛に祈願を籠(カゴ)る爲めに、水をあびるコト。

こり(石伏魚)圖魚の名、いしぶみ。

こり(古流)圖古代の流儀(ハダシ)の古(コ)くよりの、しきたり。生花(ナマハナ)の一流(いちりゅう)茶の湯の一派にて、千家(せんか)の古法(こぽう)のこつを云ふ。

こりかたまり(凝固)圖一つの物事に、心を注(ツ)ぎて、無中(ムチュウ)になる。假令(たとへば)日蓮宗のこりかたまり。

こり、こりが 柄

こり(五力)圖佛法にて云ふ五つの力即ち信(シン)念(ネン)定(テイ)精進(セイジン)及び慧(エ)の五つを云ふ。

こり(小側口)圖小才(コサイ)のさく人、こり(懲)圖こりわけて懲りたる、甚だしく懲りたる容子。

こり(凝性)圖熱心(ネツシン)に物事を爲す性質。熱心に工夫(クワフ)して物事を爲さんとする質(ハチ)。

こり(股栗)圖怖(オソ)れて身ぶるひするコト。甚だしく、おそる。

こり(孤立)圖一本立即ち扶(タシ)なく獨立のこつ。野中(ノナカ)などに、家や木の只だ一つあるを云ふ。

こり(五里霧中)圖物事の漠(ワカ)らなして、取り止めのつかぬコトに云ふ語。甚だしく迷(マヨ)るコト。

こり(願慮)圖深く思案する。後々の事を十分に考(カウ)ふる。

こり(古陵)圖古代のみまさき。

こり(御領)圖君主の領分(リョウブン)のこつを敬(マツ)ひて云ふ語。

こり(吳綾)圖支那製のあやの絹織物の稱。

こり(御兩所)圖おふたかた、二人と云ふコトの敬語。

こり、こりよ

こりんこる 懸

こりん(火鈴) 函鐘(カ)の一種手に持ちて打ち振りつゝ鳴(カ)すもの形小さきつり鐘の如きもの。
 こりん(五厘) 函一厘を五つ寄せたるもの即ち一錢の半分のみか。
 こりん(五倫) 函君臣(カ)、父子(カ)、夫婦(カ)、兄弟(カ)、朋友(カ)の五つの人生に於ける、特に親(カ)しき大切な關係の中のコトを云ふ。
 こりん(五輪) 函佛法の語、地(カ)、水(カ)、火(カ)、風(カ)、空(カ)の五體の稱。
 こりんたる(五輪塔) 函佛法の語にて、石塔の一種、地水火風空の五體にかたどりて、五つの異なりたる形の石を積みしもの、下は四角、次は圓形、次は三角形、次は半月形にて、最上頂を、如意珠(カ)の形になせしものなり。
 こりんとう(小鈴糖) 函一種の菓子(カ)の名、圓き小さき金米糖(カ)の如きものにて、其の中のカラになしあるもの。

(イハレ)

こる(懸) 函失策(カ)を悟(カ)り悔(カ)ひて、將來をいましむる。
 こる(凝) 函動物集(カ)まりて一處に寄る

こる、これう 括、此

こる(一生懸命) 函(カ)に事をなす。風變(カ)りの工夫をする。
 こる(括) 函動又た桐の字をも書く行李を作るに云ふ意にて荷括(カ)をなす。荷作(カ)をする。
 こる(古壘) 函昔より在るさりで古き城(カ)のコトを云ふ。
 こるめ(孕女) 函腹(カ)に子を有(カ)てる婦人のコト、即ち妊婦(カ)。

(イハレ)

こる(此) 函是(カ)之(カ)などの文字を用ひ最も近き處の物事を指すに用ゆる代名詞。
 こる(古禮) 函昔時に於て行はれたる儀式のコト。
 こる(古例) 函古きためし古代のしきたりのコトを云ふ。
 こる(御靈屋) 函貴人の靈魂(カ)を祀りある場所、即ちおたまの御屋。
 こる(古曆) 函ふるき曆。昔のこまみ。
 こる(御靈) 函みたま。恨みある人に崇(カ)むるをなす靈魂(カ)、即ち怨靈(カ)のコトを云ふ。
 こる(御料) 函使ひ用ゆること云ふコトを云ふ。

これう、これら

これう、これら 七三三

(イハレ)

はす代名詞、
 こら(虎列刺) 函劇烈なる一種の傳染病吐き病(カ)しする病氣。
 こら(御簾) 函中國地方の方言にて、身分ある人の妻女のコト。
 こら(胡蝶) 函論語より出たる故事にて萬人に秀(カ)たる器量有せる人。轉じて大政治家のコト。
 こら(御簾) 函貴人の妻女を敬ふて云ふ語。特に公卿(カ)の妻女のコトを云ふ語。

こら(固陋) 函一方のみかたよるコト見識の一方に偏(カ)する。
 こら(吳縞) 函支那の織物の名、ゴロフクリンのこと。
 こら(五郎丸) 函夏向の袴地(カ)の名にて、越中地方より産する麻(カ)の織物。
 こら(胡蘆柿) 函又た柿柿とも書く、柿を製したる一種の食品、即ちしぶき柿の皮を剥(カ)きて、陰干(カ)になせし物、味甘くして美なり。
 こら(轉) 函動(カ)る、こらす、こらがる(轉) 函動たをれる、こける、よこなる、れる。
 こら(殺手) 函人又は鳥獸(カ)を殺したる人。
 こら(殺) 函動物の呼吸を止む、傷(カ)つけて生命を奪(カ)ふ。質(カ)に入れて金を借る。
 こら(石) 函山や野原(カ)などに轉(カ)がつてる石を云ふ。
 こら(破落漢) 函又た無賴漢とも書く一定の住所なく、又た一定の職業もなく、諸所をぶらつき歩いて、人に迷惑(カ)をかけつつ、暮(カ)し行く惡漢。
 こら(轉) 函衣物を着(カ)たる、其のま

まにて(轉) 函(カ)るコト。
 こら(轉) 函(カ)るばすコト。重き物を運(カ)に用ゆる具、即ち圓き棒(カ)の類にて、其の上に重き物を載(カ)せて、轉(カ)がすを云ふ。
 こら(轉) 函(カ)かして廻(カ)しながらやる。立てる物を横にたなす。賣春婦に情を通す。
 こら(轉) 函(カ)にたなす。
 こら(轉) 函(カ)横になるコト。
 こら(轉) 函(カ)いんばい(淫賣)の俗語。
 こら(轉) 函(カ)たれ、假寐(カ)のコト。
 こら(轉) 函(カ)種類、普通の牡蠣は岩石(カ)に附着(カ)してあるが、此は海中にコロコロ轉(カ)けてゐるより此名あり。
 こら(轉) 函(カ)たをれる。横になつてころがりまはる。いんばいする。
 こら(轉) 函(カ)もなくまける、無難作(カ)に負ける。
 こら(衣) 函凡て身身に纏(カ)ふ衣服。僧侶の着る法衣。天ぶらにつける小麥粉の練(カ)たる物。

これら、こらう 頃

こらう、こらね 轉、殺

こらば、こらも 衣